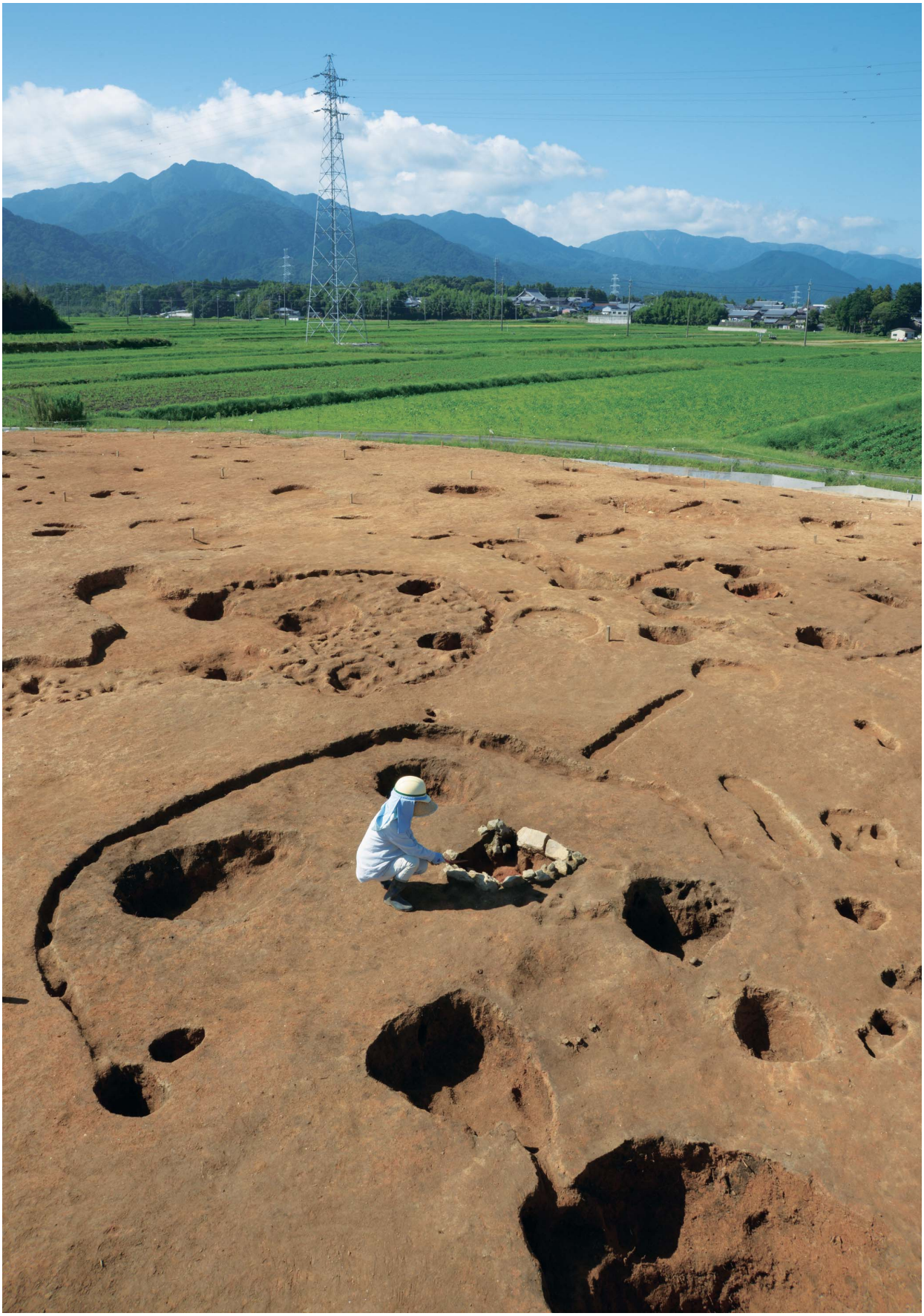
三重県埋蔵文化財調査報告３２３－１１

鈴山遺跡（第２・３次）発掘調査報告

～三重郡菰野町～

２０１８（平成30）年12月

三重県埋蔵文化財センター



ＳＨ108完掘状況（南東から）

ＳＢ85完掘状況（東から）

西調査区完掘状況（北東から）

ＳＨ50・ＳＦ51～54・96～99完掘状況（南東から）

出土遺物（報告番号28）

出土遺物（石器集合）

序

三重県埋蔵文化財センターでは、平成20年度から、新名神高速道路の四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ間の路線内に存在する、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。対象となる埋蔵文化財は22遺跡、発掘調査対象面積は、延べ34万㎡に及びます。

当センターとしては、供用開始の予定に間に合わせるため、発掘調査を円滑に進めるよう、担当職員を増員するなどの対応も行ってきました。

現地での調査を最優先に取り組むことを主眼に、年間５万㎡を超える面積の発掘調査を行ったこともありましたが、ようやく発掘調査も終了し、本格的に報告書作成に取り組みはじめました。ここに三重郡菰野町に所在する鈴山遺跡の発掘調査成果を、とりまとめることが出来ました。

今から約１万年前、縄文時代早期の煙道付炉穴や集石炉が確認され、人々が生活を始めたことが分かりました。また、約4～5,000年前、縄文時代中期の竪穴住居や掘立柱建物なども確認され、当時の土器や石器も数多く見つかりました、特に、中期の掘立柱建物は、三重県内で最も古い時期のものと考えられ、この地域の歴史に新たな１ページが加わることとなりました。

最後になりますが、現地調査に限らず、その成果をまとめるにあたり、ご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所をはじめとする各関係機関、菰野町教育委員会、地元自治会、発掘調査区の近隣に居住の方々に、心からのお礼を申し上げます。

平成30年12月

三重県埋蔵文化財センター
所長　野原　宏司

例　　言

1　本書は、三重県三重郡菰野町大字音羽に所在する鈴山（すずやま）遺跡（第２・３次）の発掘調査報告書である。

2　本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う緊急発掘調査である。

3　発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

4　発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ』の３冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。

5　調査は下記の体制で実施した。

委託者	中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
受託者	三重県教育委員会
調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター

なお、詳細については『Ⅰ前言』に記載したとおりである。

6　本書の執筆は三重県埋蔵文化財センター職員が行い、文責については目次及び文末に記載した。遺物の写真撮影は中村法道・萩原義彦が行い、編集は泉賢治・萩原義彦が行なった。

7　本書で示す方位は、世界測地系第Ⅵ系による座標北である。

8　本書で表記する土色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖（30版）』（日本色研事業株式会社1967年初版）に拠った。

9　発掘調査に際しては、地元の方をはじめ、菰野町教育委員会、菰野町音羽自治会、三重県企業庁、石井寛（元公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）、石田由紀子（奈良文化財研究所）、久保勝正（三重県立名張高等学校）、髙橋健太郎（豊田市教育委員会郷土資料館）、田村陽一、津村善博（三重県総合博物館）、山田猛の各氏からのご教示やご協力をいただいた（順不同、敬称略）。

10　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

11　本書で使用した地図は、国土地理院発行の１：25,000の地形図「御在所山」「四日市西部」「菰野」「伊船」、三重県市町共有デジタル地図（平成19年測図）を用いた。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した。（承認番号：平成30年４月５日付　三総合地第１号）

12　本書で用いた遺構表示略記号は、以下のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＦ：煙道付炉穴・集石炉・被熱痕跡　　ＳＨ：竪穴住居
ＳＫ：土坑・陥穴　　ＳＺ：不明遺構　　Ｐ：ピット・柱穴

凡　　例

［表類］

1　遺構一覧表における遺構番号は第２次から第３次調査までの通し番号である。

2　地区名については、第２次から第３次調査を全て含めて記載している。

3　遺物観察表は、各遺物実測図の番号に対応する。これは、器種・材質如何を問わず通し番号である。
ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号を振っていない。従ってこの番号の遺物が全てではない。

4　実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの３桁は用紙番号で、後ろ側の２桁は用紙内での実測した順序の番号である。

5　調整・技法については、遺物製作時になされていることを記載し、順序を示すものでない。

6　備考は、その遺構・遺物の特記事項について記載している。

7　本書では、以下のように遺物の表記漢字について統一している。

碗・埦・鋺　→　椀　　坏　→　杯

［写真図版］

1　写真図版は、遺構・遺物ごとにまとめている。

2　出土遺物実測図の報告番号と遺物写真番号は対応している。

3　遺物の写真図版の個々の縮尺は、不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　前言……（服部芳人）……　1

1　調査の経緯と経過……　1

2　調査の経過……　1

Ⅱ　位置と環境……（泉賢治）……　5

1　地理的環境……　5

2　歴史的環境……　5

Ⅲ　層序と遺構　……（泉賢治・中村法道）……　9

1　層序　……　9

2　遺構……　16

Ⅳ　遺物　……（中村法道）……　51

1　土器等……　51

2　石器……　81

Ⅴ　自然科学分析……（株式会社パレオ・ラボ）……103

1　放射性炭素年代測定……　103

2　樹種同定……　111

3　産地同定……　114

Ⅵ　結語……（中村法道）……119

1　縄文時代早期……　119

2　縄文時代中期……　121

巻　頭　図　版

巻頭写真図版１　ＳＨ108完掘状況（南東から）
巻頭写真図版２　ＳＢ85完掘状況（東から）
巻頭写真図版３　西調査区完掘状況（北東から）　ＳＨ50・ＳＦ51～54・96～99完掘状況（南東から）
巻頭写真図版４　出土遺物（報告番号28）　出土遺物（石器集合）

図　版　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 7
第２図　遺跡地形図 …… 8
第３図　調査区配置図 …… 8
第４図　西調査区南北土層断面図 …… 9
第５図　西調査区東西土層断面図 …… 10
第６図　東調査区土層断面図 …… 11
第７図　遺構平面図 …… 12
第８図　遺構平面図１ …… 13・14
第９図　遺構平面図２ …… 15
第10図　煙道付炉穴部分名称図 …… 16
第11図　ＳＦ52・53・54・99実測図 …… 17
第12図　ＳＦ51・96・97・98実測図 …… 19
第13図　ＳＦ60・71・91・102実測図…… 20
第14図　ＳＨ36・94実測図・炉 …… 22
第15図　ＳＨ50実測図・炉 …… 23
第16図　ＳＨ50遺物出土状況図 …… 24
第17図　ＳＨ63・72実測図・炉 …… 26
第18図　ＳＨ84実測図・炉 …… 27
第19図　ＳＨ84遺物出土状況図上層 …… 28
第20図　ＳＨ84遺物出土状況図下層 …… 29
第21図　ＳＨ106実測図 …… 30
第22図　ＳＨ106遺物出土状況図 …… 31
第23図　ＳＨ107実測図 …… 32
第24図　ＳＨ107遺物出土状況図 …… 33
第25図　ＳＨ108実測図 …… 34
第26図　ＳＨ108石囲炉実測図 …… 35
第27図　ＳＨ93・109実測図 …… 36
第28図　ＳＨ95・110実測図 …… 37
第29図　ＳＢ85・86実測図 …… 38
第30図　ＳＢ87・88実測図 …… 39
第31図　ＳＢ89・105実測図 …… 40
第32図　ＳＫ31・49・59・61・68・82・83・114実測図 …… 42
第33図　ＳＫ１・２実測図 …… 44
第34図　ＳＦ47・55・ＳＺ92実測図 …… 45
第35図　縄文土器実測図（１） …… 52
第36図　縄文土器実測図（２） …… 54
第37図　縄文土器実測図（３） …… 56
第38図　縄文土器実測図（４） …… 58
第39図　縄文土器実測図（５） …… 59
第40図　縄文土器実測図（６） …… 60
第41図　縄文土器実測図（７） …… 61
第42図　縄文土器実測図（８） …… 62
第43図　縄文土器実測図（９） …… 64
第44図　縄文土器実測図（10） …… 66
第45図　縄文土器実測図（11） …… 68
第46図　縄文土器等実測図（12） …… 70
第47図　石鏃分類図 …… 81
第48図　石器実測図（１） …… 83
第49図　石器実測図（２） …… 84
第50図　石器実測図（３） …… 85
第51図　石器実測図（４） …… 86
第52図　石器実測図（５） …… 87
第53図　石器実測図（６） …… 88
第54図　石器実測図（７） …… 90
第55図　石器実測図（８） …… 91
第56図　石器実測図（９） …… 92
第57図　石器実測図（10） …… 93
第58図　石器実測図（11） …… 94
第59図　石器実測図（12） …… 95
第60図　石器実測図（13） …… 96
第61図　石器実測図（14） …… 97
第62図　縄文時代早期の遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較 ……105
第63図　縄文時代中期の遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較 ……105

第64図　暦年較正結果（１）　……106
第65図　暦年較正結果（２）　……107
第66図　出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真　…113
第67図　黒曜石産地分布図（東日本）　……114
第68図　黒曜石産地推定判別図（１）　……117
第69図　黒曜石産地推定判別図（２）　……117
第70図　煙道付炉穴の燃焼坑から煙出坑をみた方角　……119
第71図　早期の主要遺構全体図　……120
第72図　切目石錘の重量　……121
第73図　竪穴住居の主柱の平均柱間　……123
第74図　中期の主要遺構全体図　……124

表　目　次

第１表　遺構一覧表（１）　…… 47
第２表　遺構一覧表（２）　…… 48
第３表　遺構一覧表（３）　…… 49
第４表　煙道付炉穴一覧表　…… 49
第５表　掘立柱建物一覧表　…… 50
第６表　「中富式・神明式」編年表　…… 51
第７表　縄文土器観察表（１）　…… 71
第８表　縄文土器観察表（２）　…… 72
第９表　縄文土器観察表（３）　…… 73
第10表　縄文土器観察表（４）　…… 74
第11表　縄文土器観察表（５）　…… 75
第12表　縄文土器観察表（６）　…… 76
第13表　縄文土器観察表（７）　…… 77
第14表　縄文土器観察表（８）　…… 78
第15表　縄文土器観察表（９）　…… 79
第16表　縄文土器観察表（10）　…… 80
第17表　石器観察表（１）　…… 98
第18表　石器観察表（２）　…… 99
第19表　石器観察表（３）　……100
第20表　石器観察表（４）　……101
第21表　石器出土一覧表　……102
第22表　測定試料および処理（１）　……108
第23表　測定試料および処理（２）　……109
第24表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果　……110
第25表　出土炭化材の樹種同定結果一覧　……112
第26表　分析対象となる黒曜石製石器　……114
第27表　東日本黒曜石産地の判別群　……115
第28表　分析No. 16の半定量分析結果　……115
第29表　測定値および産地推定結果　……116
第30表　煙道付炉穴出土遺跡一覧表　……119
第31表　竪穴住居一覧表　……123

写　真　目　次

写真１　第２次調査現地説明会風景　…… ３
写真２　第３次調査現地説明会風景　…… ４
写真３　分析試料写真　……118

写 真 図 版 目 次

写真図版扉　西調査区遠景（北から）　……127
写真図版１　西調査区完掘状況（真上から）　…128
東調査区完掘状況（真上から）　…128
写真図版２　ＳＦ51礫出土状況（東から）　……129
ＳＦ53礫出土状況（東から）　……129
写真図版３　ＳＦ51・96・97・98完掘状況（南東から）　……130
ＳＦ60完掘状況（北西から）　……130
写真図版４　ＳＦ52・53・54・99完掘状況（北西から）　……131
ＳＦ52・54完掘状況・ＳＦ53・99半裁状況（南西から）　……131
写真図版５　ＳＨ36・94完掘状況（南東から）　…132
ＳＨ50遺物出土状況（北から）　…132
写真図版６　ＳＨ50完掘状況（東から）　……133
ＳＨ72完掘状況（東から）　……133

写真図版７　ＳＨ84遺物出土状況（北から）　…134
ＳＨ84完掘状況（南東から）　……134
写真図版８　ＳＨ93完掘状況（東から）　……135
ＳＨ95完掘状況（東から）　……135
写真図版９　ＳＨ106完掘状況（東から）……136
ＳＨ107礫出土状況（南西から）…136
写真図版10　ＳＨ107完掘状況（南西から）……137
ＳＨ108完掘状況（南から）……137
写真図版11　ＳＨ108石囲炉完掘状況(北から)…138
ＳＨ106遺物出土状況（北から）…138
ＳＺ92遺物出土状況（東から）　…138
ＳＨ106炉周辺遺物出土状況
（南西から）　……138
ＳＨ108石囲炉掘削状況（南西から）…138
写真図版12　ＳＢ89・105・ＳＨ63完掘状況
（西から）　……139
写真図版13　ＳＢ87完掘状況（東から）　……140
ＳＢ85・86・87完掘状況
（南東から）　……140
写真図版14　ＳＢ88完掘状況（西から）　……141
ＳＢ85・86柱穴（ＳＫ18）礫出土
状況（南から）…… 141
ＳＢ85柱穴（ＳＫ20）遺物出土
状況(南東から）……141
ＳＢ89柱穴（ＳＫ56）柱痕跡完掘
状況（南から）　……141
ＳＢ89柱穴（ＳＫ69）遺物出土
状況（北から）　……141
写真図版15　ＳＫ１礫出土状況（東から）　……142
ＳＫ２完掘状況（南東から）　……142
写真図版16　ＳＫ31完掘状況（南から）　……143
ＳＫ49完掘状況（東から）　……143
ＳＫ59完掘状況（南東から）　……143
ＳＫ61完掘状況（北西から）　……143
ＳＫ68完掘状況（南から）　……143
ＳＫ82完掘状況（西から）　……143
ＳＫ83完掘状況（南東から）　……143
ＳＫ113完掘状況（北東から）……143
写真図版17　出土遺物（１）　……144
写真図版18　出土遺物（２）　……145
写真図版19　出土遺物（３）　……146
写真図版20　出土遺物（４）　……147
写真図版21　出土遺物（５）　……148
写真図版22　出土遺物（６）　……149
写真図版23　出土遺物（７）　……150
写真図版24　出土遺物（８）　……151
写真図版25　出土遺物（９）　……152
写真図版26　出土遺物（10）　……153
写真図版27　出土遺物（11）　……154
写真図版28　出土遺物（12）　……155
写真図版29　出土遺物（13）　……156
写真図版30　出土遺物（14）　……157
写真図版31　出土遺物（15）　……158
写真図版32　出土遺物（16）　……159
写真図版33　出土遺物（17）　……160
写真図版34　出土遺物（18）　……161
写真図版35　出土遺物（19）　……162

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と経過

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175㎞の高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年（2009）年２月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書①には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』(2011年)

2　調査の経過

（１）調査経過の概要

鈴山遺跡は、三重郡菰野町大字音羽に所在する縄文時代の遺跡である。平成19年２月に新名神高速道路の計画路線内の分布調査を行った結果、石鏃や剥片が採集されたため、新たに登録された遺跡（菰野町遺跡番号136）である。

発掘調査前の現況は、大半が雑木林や竹林の山林で、一部畑地となっていた。石鏃や剥片は、畑地で採集されたが、北東方向に延びる丘陵の先端部分を中心にして、地形などから判断して、東西約250ｍ、南北約80ｍ、約20,000㎡が遺跡範囲であると考えられている。

今回、新名神高速道路の菰野ＩＣのループが、鈴山遺跡の所在する丘陵周辺に計画されることとなった。そのため、用地買収や伐採などの発掘調査の諸条件が整った平成25年度から、二次調査の必要の有無確認の一次調査を実施してきた。以下に、平成28年度にかけて行われた年度ごとの概要を記述することとする。

平成25年度

鈴山遺跡の発掘調査に関して、初めて議題に上がったのは、平成24年10月の定例会である。その際、用地買収が済み、引渡しも終了しているため、平成25年度に一次調査を依頼されていた。そこで、年度末の定例会では、平成25年５月以降に伐採作業が終了する予定であったため、８月～９月にかけて、980㎡の一次調査の計画を行った。

年度が改まり、盆明けにようやく伐採作業が終了したため、調査坑を15本設定して、一次調査を行った。その結果、縄文時代の土坑・焼土・竪穴住居と思われる遺構を確認するとともに、縄文土器が多数見つかった。そのため、事業地内面積8,000㎡の内、概ね西側の6,500㎡を二次調査の対象と判断した。

この結果を９月の定例会で報告したが、新名神高速道路全体の工事計画との調整から、四日市工事区管内の発掘調査を優先させるため、二次調査の発掘調査の実施時期は、平成27年度以降に依頼されることとなった。

平成26年度

年度内に４回実施された定例会において、発掘調査の時期などの議題が上がった。道路建設工事の進捗や他の発掘調査面積などとの調整の結果、平成27年度内に6,500㎡の発掘調査を終了させることが決まり、当初の計画に盛り込むこととなった。なお、年度末の定例会で、ループの外（東側）に新たな調整池の建設計画があることが初めて提示された。

平成27年度

年度が改まり、５月から第２次調査を開始した。12月まで行った結果、縄文時代早期の煙道付炉穴・集石炉の他、中期の竪穴住居・掘立柱建物・陥穴などを確認し、多数の土器・石器も出土した。

また、普及啓発活動の一環として、現地説明会を

11月７日（土）に行い、310名の参加があった。

年度内に行われた定例会では、ループの外（東側）での新調整池の計画に伴う発掘調査が議論になった。年度初めには、各種申請・用地買収・伐採などとの調整から、翌年の平成28年度後半に一次調査の実施を依頼された。また、その結果次第ではあるが、最大面積1,600㎡の二次調査は、平成29年度に行う事となった。

しかし、年度末の第３回定例会で、新調整池の工事は道路建設や周辺の用排水工事と一体で行う必要性があるため、一次調査を平成28年度早々に実施し、二次調査を平成28年度内に前倒して調査することを依頼された。協議の結果、一次調査はネクスコの労務提供という形で行い、二次調査はその他の遺跡の調査との調整もあるが、一次調査終了後、年度内に終了する計画を立てることとした。

平成28年度

年度早々の４月11日～14日まで、ネクスコの労務提供で一次調査を実施した。調査坑を３本設定して遺構の有無の確認を行った結果、縄文時代の遺構（竪穴住居？）や縄文土器を確認したため、二次調査が必要と判断された。一次調査後、速やかに二次調査に向けての準備を行い、６月から第３次調査を開始した。調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居５棟、陥穴２基を確認した。

なお、普及啓発活動の一環として、現地説明会を９月17日（土）に行い、234名の参加があった。

（２）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成25年度

・一次調査

担当：服部芳人　　（調査研究３課）
業者：西武緑化株式会社（土工委託）
期間：平成25年７月30日～平成25年９月30日
面積：980㎡

平成27年度

・第２次調査

担当：中村法道・西脇智広　　（調査研究３課）
業者：株式会社アート（調査補助委託）
期間：平成27年５月27日～平成27年12月７日
面積：6,256㎡

平成28年度

・一次調査

担当：中村法道・泉賢治・村上央（調査研究３課）
労務提供：中日本高速道路株式会社名古屋支社
　　四日市工事事務所
期間：平成28年４月11日～平成28年４月14日
面積：174㎡

・第３次調査

担当：中村法道・泉賢治　　（調査研究３課）
業者：丸文工業株式会社（土工委託）
期間：平成28年６月７日～平成28年９月27日
面積：1,653㎡

（調査日誌抄）

・第２次調査

平成27年

６月12日（金）　重機による掘削開始。調査区内の南北及び東西畦の北から南西方向に向かって掘削。

６月15～19日（月～金）　引き続き重機による表土掘削。各所で縄文土器が出土。円形の竪穴住居とみられる遺構も確認。

６月22～25日（月～木）　引き続き表土掘削。調査区の畦の断面図作成。竪穴住居かと思われる遺構もさらに確認。

６月29～30日（月・火）　重機掘削。縄文土器が含まれる小土坑も確認。

７月２～３日（木・金）　引き続き重機掘削。風倒木の痕跡とみられる箇所から縄文土器出土。縄文土器は、中期とみられ、集落跡と判断。

７月６・９・10日（月・木・金）　引き続き重機掘削。調査区の東側を中心に行う。縄文時代の遺構が希薄なため、集落の中心から離れているとみられる。

７月13～15日（月～水）　引き続き重機掘削。調査区内に設定した畦の断面図作成。午後から台風対策実施。

７月21～24日（火～金）　引き続き表土掘削。包含層掘削を実施しながら、ふるいがけも実施。縄文土器をはじめ石鏃も出土。

７月27～31日（月～金）　重機による表土掘削を継続。竪穴住居状の遺構も確認した。

８月３～７日（月～金）　表土掘削を実施しながら

包含層掘削。調査区北部において掘立柱建物１棟を確認した。

８月10・11日（月・火）　調査区内の東西畦の掘削。竪穴住居かと判断していたＳＫ１は土坑と判明。

８月18～21日（火～金）　表土掘削終了。遺構検出と包含層掘削。検出した各遺構を掘削。縄文土器が出土。土坑と考えていたものは全て掘立柱建物の柱穴と判明。柱痕跡はほとんど確認できず。

８月24～28日（月～金）　遺構検出と掘削。作業しながらふるいがけも実施。サヌカイトの石鏃も出土。

８月31～９月４日（月～金）　竪穴住居ＳＨ50掘削。縄文土器が多い。中期と判断される。掘立柱建物もさらに確認した。

９月７～11日（月～金）　遺構の中に陥穴とみられる土坑も確認した。中にはかなり深いものも見受けられる。

９月14～18日（月～金）　各所で見られた被熱痕跡を残す土坑は、竪穴住居の炉跡と判断する。

９月28日～10月２日（月～金）　前週１週間雨が続き作業が止まっていたが作業再開。遺構検出で風倒木を確認。縄文土器が含まれる。

10月12～16日（月～金）　各遺構の半裁状況の実測を行いながら個別遺構掘削。

10月５～９日（月～金）　残っている竪穴住居や掘立柱建物の掘削を行う。また完掘した遺構の個別写真撮影も実施。

10月19～23日（月～金）　竪穴住居には、壁周溝があることが判明した（ＳＨ50）。

10月26日～11月６日（月～金）　各遺構の掘削をしつつ、実測・写真撮影。調査区全体の清掃にとりかかる。現地説明会のため。

11月７日（土）　現地説明会を実施、参加者310名で盛況な説明会となった。

11月10～13日（火～金）　各遺構の最終掘削。炉跡周辺のピット探し。

11月16～20日（月～金）　各遺構の掘削及び断面図作成。

11月24～25日（火・水）　各遺構の断ち割り及び個別遺構実測。

12月１・３日（火・木）　千種小学校児童遺跡見学。２・５年生約100名。

12月17日（木）　現地引渡。

写真１　第２次調査現地説明会風景

・第３次調査

６月24日（金）　現地作業開始。表土掘削。

６月28日～７月１日（火～金）　表土掘削。竪穴住居らしい遺構を確認。縄文土器をはじめ石器出土。

７月４～８日（月～金）　引き続き表土掘削。南北及び東西の土層畦の実測確認。

７月11～13日（月～水）　表土掘削終了。土層畦実測。

７月20～22日（水～金）　遺構の検出開始。風倒木から縄文土器が出土。

７月25～29日（月～金）　遺構検出。風倒木と判断される撹乱より石器・縄文土器出土。竪穴住居も確認。

８月１～５日（月～金）　竪穴住居ＳＨ106・107の遺構掘削開始、同時に竪穴住居の埋土についてふるいがけを行う。縄文土器だけでなく切目石錘・石鏃出土。中期後半以降とみられる。

８月８～10日（月～水）　引き続き遺構検出及び掘削。竪穴住居内において石皿確認。主柱穴や壁周溝も検出。

８月17～19日（水～金）　遺構検出及び掘削。遺物出土状況の写真撮影及び実測。

８月22～26日（月～金）　各遺構掘削。竪穴住居内において被熱痕跡を確認、炉跡とみられる。

８月29～31・９月１～２日（月～金）　竪穴の主柱穴の土層断面図作成。ＳＨ108の石囲炉の写真撮影など実測に追われる。

９月５～９日（月～金）　各遺構の写真撮影及び実測。現地説明会に向けての準備。

９月10日（土）　空中写真測量実施。

９月14～16日（水～金）　現地で１/20平面図の実測。３課職員総出で実測を行う。

９月17日（土）　現地説明会を実施。234名の参加者があり、盛況の内に終了。

９月26・27日（月・火）　１/20の平面図実測。

９月27日（火）　実測終了後現地引き渡し。

写真２　第３次調査現地説明会風景

（３）文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知）

・平成23年８月９日付け、中高名支四工第798号

（中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

◎文化財保護法第99条第１項（発掘調査の着手報告）

・平成27年６月５日付け、教埋第87号

（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成27年度・第２次】

・平成28年６月24日付け、教埋第104号

（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成28年度・第３次】

◎文化財保護法第100条第２項（文化財の発見・認定通知）

・平成28年１月15日付け、教委第12-4440号

（三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて）　【平成27年度・第２次】

・平成28年10月４日付け、教委第12-4421号

（三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて）　【平成28年度・第３次】

（服部）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

鈴山遺跡（1）は、三重郡菰野町大字音羽に所在し、海蔵川の支流竹谷川の上流南岸、鈴鹿山脈東麓の隆起扇状地の標高90m付近に位置する。

菰野町は伊勢平野の北西部に位置し、西は鈴鹿山脈を分水嶺として滋賀県甲賀市・東近江市に接し、鈴鹿山脈東麓に位置する。町内には御在所山（1212m）がそびえる。北は、いなべ市と接し、濃尾平野の西端部、三重・岐阜県境でもある養老山地を東に望む。この最南端の主峰多度山(403m)には多度大社が鎮座する。

鈴鹿山脈の釈迦ヶ岳に源を発し、鈴鹿国定公園に含まれる朝明渓谷を刻みつつ丘陵地に出る朝明川は、東と南は四日市市と接する。南は茶畑等が営まれる微高地が続く。また南には御在所山に源を発し四日市市を潤し伊勢湾へと注ぐ三滝川が流れる。

調査前の現況は山林もしくは畑であったが、地元の人の話では、戦後暫くまでは、一面畑地として利用されていたという。

2　歴史的環境

（1）旧石器時代

現在菰野町内では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。一方、菰野町に隣接する四日市市の北部の山田町宮蔵遺跡では、チャート製のナイフ形石器が、また、四日市市西山町の西山小割遺跡では、チャート製の石核、チャートの剥片が採集されている。今後の調査によって、菰野町域でも鈴鹿山脈山麓部において旧石器時代に人々の暮らしが営まれていたことが明らかになる可能性がある。

（2）縄文時代

菰野町内の縄文時代の遺跡については、本格的な発掘調査は少ない。

大字小島の六谷遺跡（2）では、昭和58年の発掘調査で縄文時代の土坑が確認され、大字潤田の大久保遺跡（3）では、平成26年の発掘調査で、注口土器の注口部や縁帯文土器、突帯文土器などの縄文時代後期後葉から晩期の遺物が出土した。

一方、大字千種、大字杉谷、大字竹成、大字永井などの高原や小高い丘では土器や石器などの遺物が表面採集されている。大字杉谷の観音寺境内地からは、黒灰色で表面に押型文がある縄文早期の植物繊維を含む土器が見つかっている。

大字杉谷の七ツ塚古墳群の西側の採石場からは、石匙、石斧が見つかっている。そのほか、大字杉谷などの尾高高原では石鏃や縄文時代の環状石斧の破片が見つかっている。大字竹成と大字永井が接する所にある高原遺跡（4）では、環状石斧の一種と考えられている三頭石斧が見つかっている。大字千草の西江野Ａ・Ｂ遺跡（5）では、縄文時代草創期に矢の柄を削って整えるために砥石として使われていた矢柄研磨器が見つかっている。

土器、石器の採集の様子からも、菰野町の縄文時代の生活の様子をうかがい知ることができる。

（3）弥生時代

菰野町では弥生時代の遺跡が本格的に発掘されたことはないが、大字杉谷は、弥生時代の遺物が出土する地区として知られている。大字杉谷の高塚と呼ばれる山林から灰色の石斧が、同じく大字杉谷の採石場付近から石斧、たたき石、石包丁が見つかっている。このことは、この付近が縄文・弥生時代の複合遺跡であることを物語っている。大字杉谷では高杯の破片や薄茶色と赤土色の壺の破片などが見つかっている。

（4）古墳時代

菰野町で確認されている古墳は円墳が多く、方墳、前方後円墳は現在確認されていない。後期の６世紀末から７世紀前半に造営された高塚古墳群（6）、黒石原古墳群（7）、七ツ塚古墳群（8）などの群集墳が大字杉谷の朝明川両岸の上流部に集中している。大字大強原の飛塚古墳（9）は、高さ３m、直径32mの円墳である。菰野町域に現存する独立墓として最大級のものであり、柳ケ塚、首人塚とも呼ばれる。この地域に勢力のあった豪族の墓、もしくは成務天皇時代の県主の墳墓とも言われている。平成

24年の発掘調査では、外面が赤い顔料で塗られた家形埴輪の破片が出土した。また、ずんぐりとした筒状部と壺のような口縁部を持ち、表面と口縁部の内面が赤く塗られた円筒埴輪も出土した。これらの出土品から、この古墳は、この地の有力な人物の墓であったと考えられている。現在、飛塚古墳は現状のまま保存されている。

（５）飛鳥・奈良・平安時代

大字池底・大字潤田に広がる椋ノ木遺跡（10）では、７世紀中ごろの煙道付きカマド跡を有する竪穴住居５棟が見つかった。大字小島の六谷遺跡（２）では、竪穴住居と掘立柱建物群が見つかり、奈良時代前半の集落跡と考えられている。

大字田光の下江平遺跡（11）では、「五十戸□」「倭家」等の墨書土器が竪穴住居から出土している。「五十戸□」については、飛鳥・藤原・平安京などの官衙遺跡の出土品に多いことから、律令国家形成時における国郡里制と深く関わる資料と考えられている。また、整然と配置された８世紀中頃の掘立柱建物群が見つかっており、律令国家における地方行政組織に関する遺構と考えられ、「五十戸□」との関連から里長クラスの在地豪族層の居宅の可能性も考えられている。

（６）平安時代後期から中・近世

菰野町域は、平安後期から伊勢神宮の神領地として寄進されてきた。鎌倉時代に伊勢神宮の神領地を記した『神鳳鈔』によると、本遺跡の周辺には潤田御厨があったという記録がある。

中世の遺跡としては、大字杉谷に杉谷中世墓跡（12）があり、鎌倉・室町時代の宝篋印塔や五輪塔が合わせて200基近く残っている。また、火葬穴が10基ほど確認されている。杉谷中世墓跡の南には杉谷城跡（13）が、そのほか千草城跡（14）、向城城跡（15）、金ケ原城跡（16）などの中世城館が大字千草に点在している。

慶長５年(1600年)には、徳川氏の家臣となった土方雄氏が菰野城（17）に入り、菰野藩を立藩し、城下町として発展した。菰野小学校の敷地となっている菰野城では発掘調査が行われており、角櫓下の石積などの近世の遺構が見つかっている。

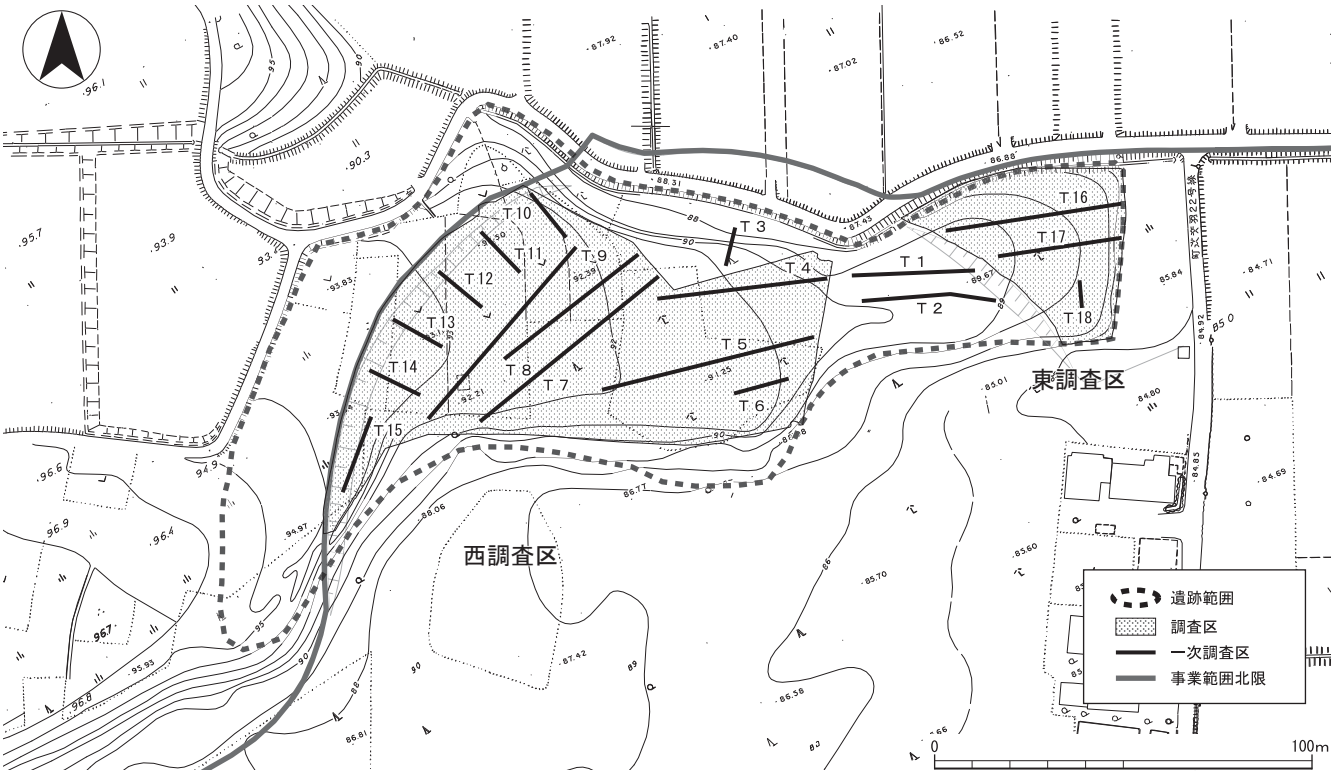
当遺跡の東には、徳川３代将軍家光が、諸国に巡見使を派遣するために整備した街道である巡見道が通り、現在はその多くが国道306号として利用されている。（泉）

【参考文献】

・菰野町教育委員会『菰野町史　上巻』(1987年)
・四日市市『四日市市史　第二巻資料編考古Ⅰ』(1988年)
・三重県『三重県史　資料編考古２』(2008年)
・三重県教育委員会「六谷遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1984年)
・三重県埋蔵文化財センター『飛塚古墳発掘調査報告』(2015年)
・三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第２次）発掘調査報告』(2016年)
・三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第３次）発掘調査報告』(2017年)
・菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告Ⅰ』(1987年)
・菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ』(1988年)
・三重県埋蔵文化財センター(「椋ノ木遺跡（第２次）現地説明会資料」)『菰野のあけぼの　第１号』(2014年)
・三重県教育委員会『三重の中世城館』(1976年)

第１図　遺跡位置図（１：50,000）

第２図　遺跡地形図（１：5,000）（網目は遺跡範囲）



第３図　調査区配置図（１：2,000）

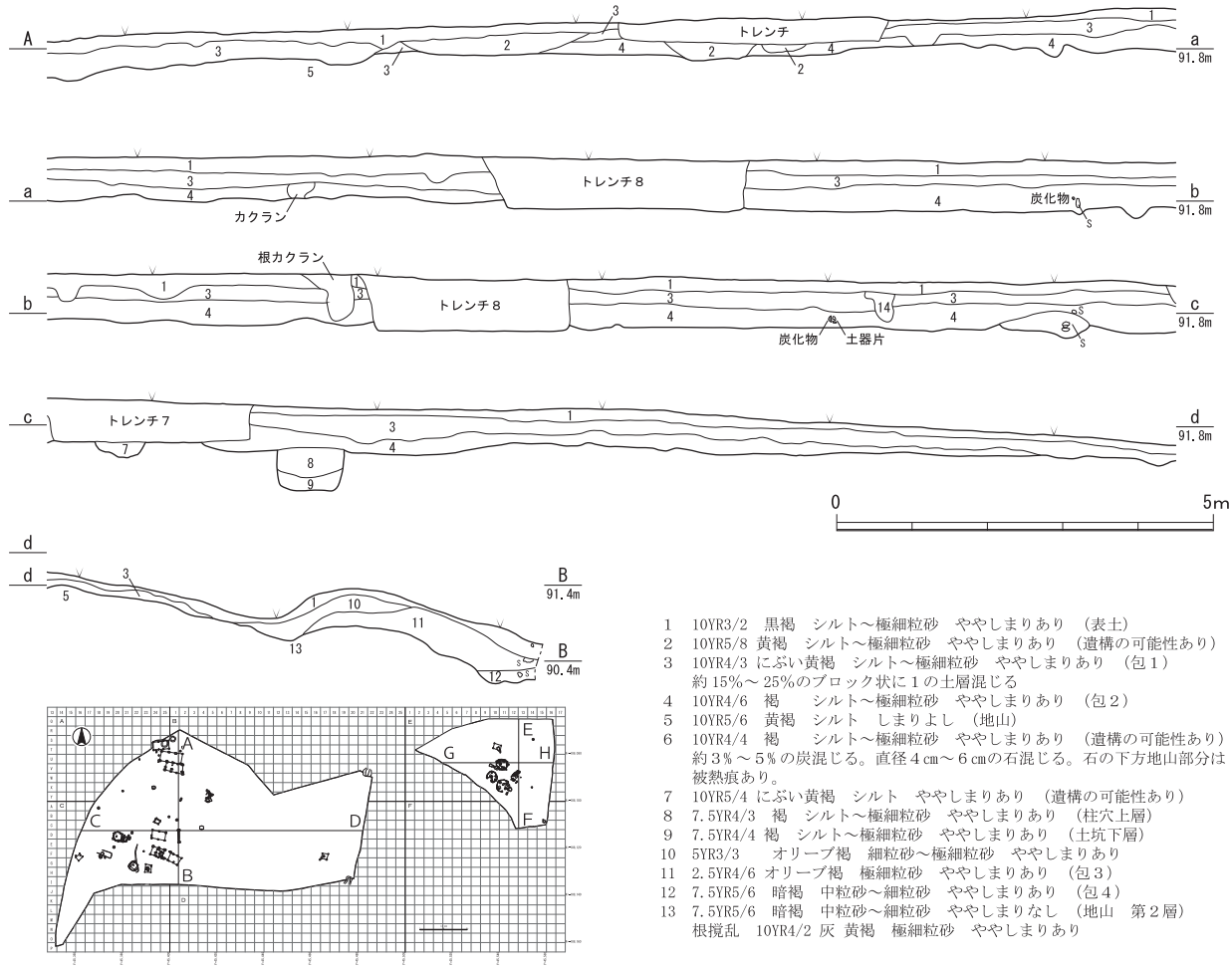
Ⅲ　層序と遺構

1　層序

遺跡が広がる範囲は、山林および畑地であり、調査に及んだ範囲はすべて林であった。標高は86～92mで、付近の畑地との比高は１～４m程である。東西2,164m、南北1,000mの範囲でトレンチ調査を実施した。その結果、遺構が見られない中央を調査から除外し、東西二つの調査区に分割し、東調査区1,563㎡、西調査区6,300㎡の発掘調査を行った。

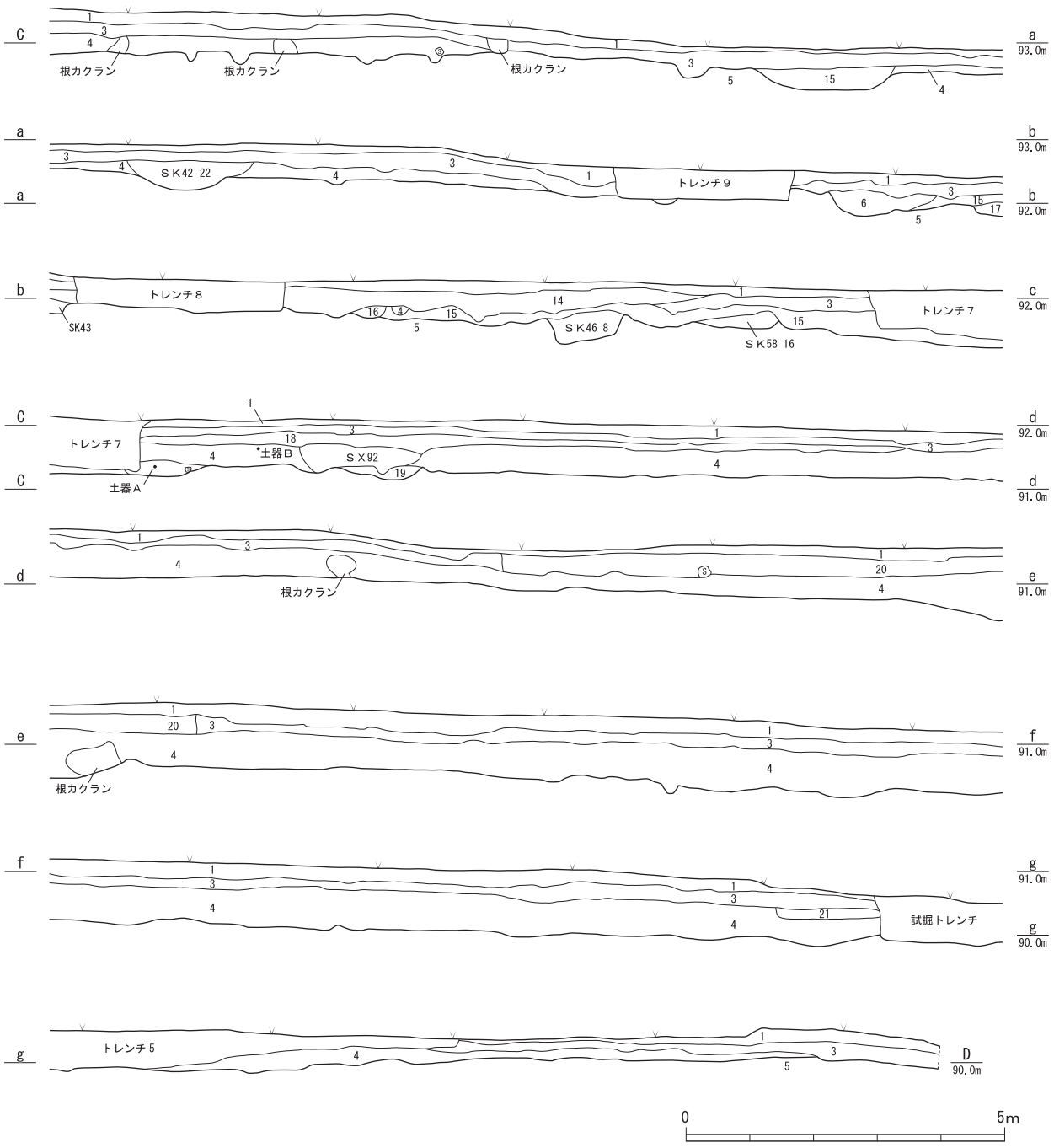
調査区の土層断面は、各調査区の中央を通る、東西および南北方向に設定し、壁面を設けて層位の調査を行った。西調査区（第４図・第５図）では南北Ａ－Ｂ（西面）と東西Ｃ－Ｄ（南面）を、東調査区（第６図）では南北Ｅ－Ｆ（西面）と東西Ｇ－Ｈ（南面）である。東・西調査区の基本層序はおおむね同様といえ、上から第１層：表土・耕作土、第２層：にぶい黄褐色土、第３層：褐色土、第４層：黄褐色土（地山）の４層である。縄文時代の遺構検出面は、第３層の最下部で、包含層はほぼ無いと見られる。しかし、第３層中程から土器が微量に見られたり、遺構の上面とみられるラインが検出されたりもした。明確な層として現れないにしても、遺物包含層ないし遺構検出面が存在した可能性がある。遺構検出は、第４層上面ラインで行った。

表土及び遺構検出面直前まではバックホウで掘削し、平均４㎝程を人力で掘削して遺構を検出した。遺物はほぼ遺構から検出した。第４層（地山）において１m程の深掘を部分的に試みたが、第４層の地山が続き、縄文時代中期以前の遺物包含層は見られなかった。（泉）



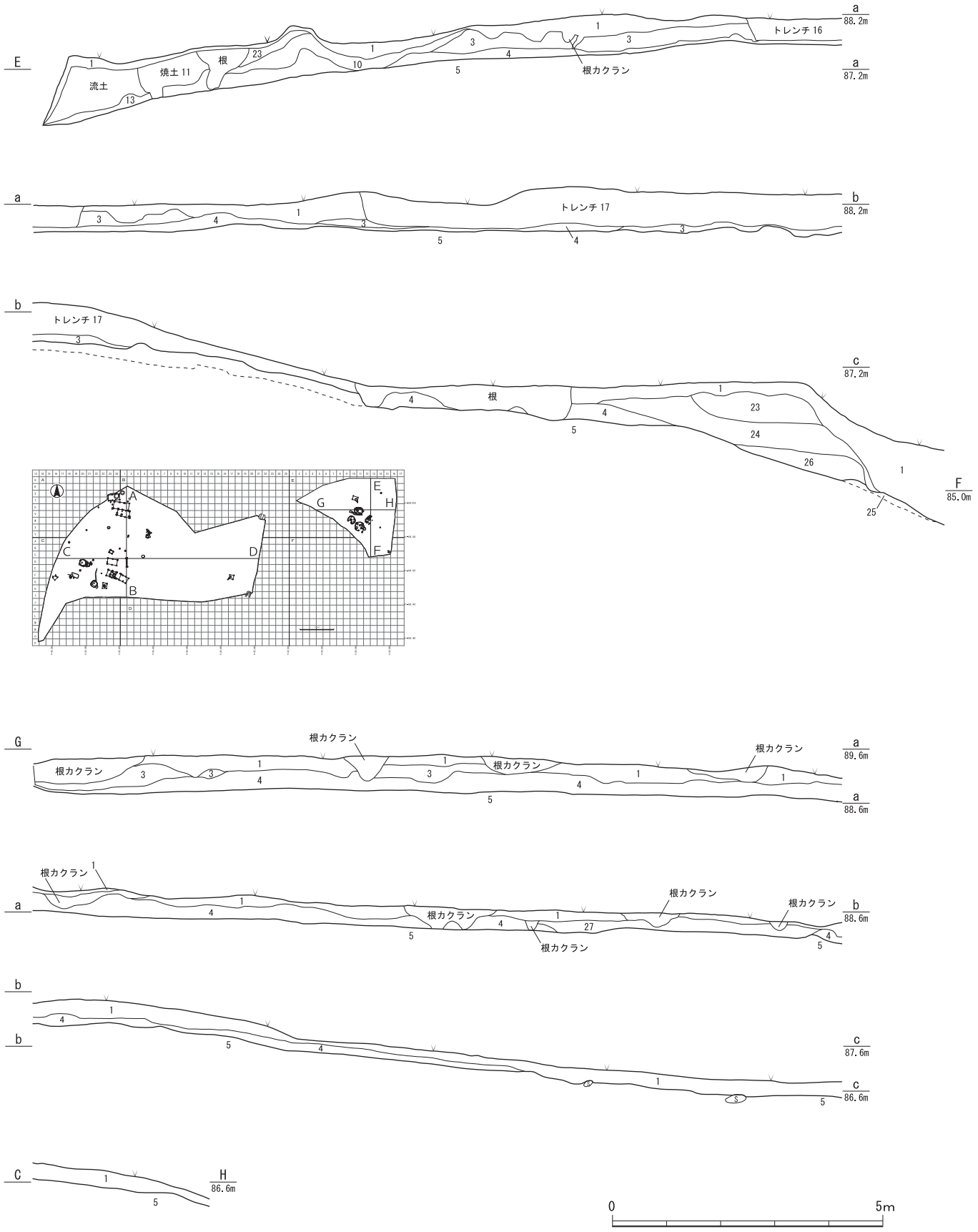
1　10YR3/2　黒褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（表土）
2　10YR5/8 黄褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（遺構の可能性あり）
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（包１）
　約 15%～ 25%のブロック状に１の土層混じる
4　10YR4/6　褐　　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（包２）
5　10YR5/6　黄褐　シルト　しまりよし　（地山）
6　10YR4/4　褐　　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（遺構の可能性あり）
　約３%～５%の炭混じる。直径４㎝～６㎝の石混じる。石の下方地山部分は被熱痕あり。
7　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト　ややしまりあり　（遺構の可能性あり）
8　7.5YR4/3　褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（柱穴上層）
9　7.5YR4/4 褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（土坑下層）
10　5YR3/3　　オリーブ褐　細粒砂～極細粒砂　ややしまりあり
11　2.5YR4/6 オリーブ褐　極細粒砂　ややしまりあり　（包３）
12　7.5YR5/6　暗褐　中粒砂～細粒砂　ややしまりあり　（包４）
13　7.5YR5/6　暗褐　中粒砂～細粒砂　ややしまりなし　（地山　第２層）
　根撹乱　10YR4/2 灰 黄褐　極細粒砂　ややしまりあり

第４図　西調査区南北土層断面図（１：100）



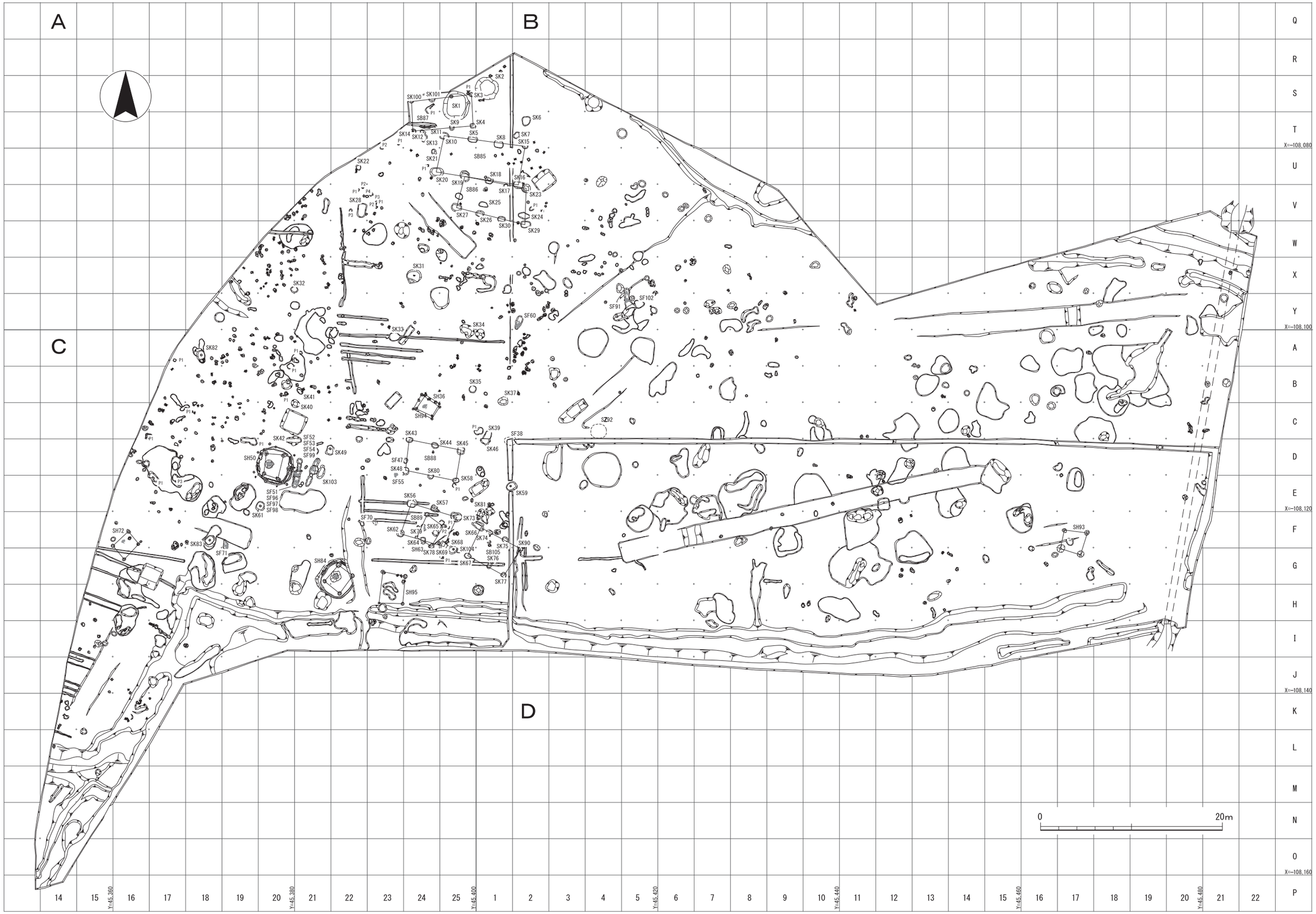
14　2.5YR3/3 暗オリーブ褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
　※層中にビニール紐状のものがあるため、現代の撹乱層の可能性あり
15　10YR4/4 褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
16　10YR2/3 黒褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（遺構）
17　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（遺構）
18　7.5YR4/6　褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
19　7.5YR5/6 暗褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
　（遺構にともなう焼土か）
20　2.5Y3/1 黒褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり　（撹乱）
21　2.5Y3/2　黒褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
　※層中に約７％の炭化物含む　（遺構か？）
22　10YR3/4 暗褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
23　10YR3/3　暗褐　中粒砂～細粒砂　（流土１）
24　10YR5/6　黄褐　中粒砂～細粒砂　（流土２）
25　7.5YR6/8 橙　細粒砂～極細粒砂　ややしまりあり
　層中に10cm 大の礫含む　（地山２層）
26　10YR2/3　黒褐　細粒砂～極細粒砂　しまりあり
　直径２～3cm の礫含む　（黒ボク多い層）
27　10YR3/4　暗褐　シルト～極細粒砂　ややしまりあり
　土器片及び直径５～7cm 大の石（石器？）含む
根撹乱　10YR4/2　灰黄褐　極細粒砂　ややしまりあり
　直径２～3mm の小石含む

第５図　西調査区東西土層断面図（１：100）

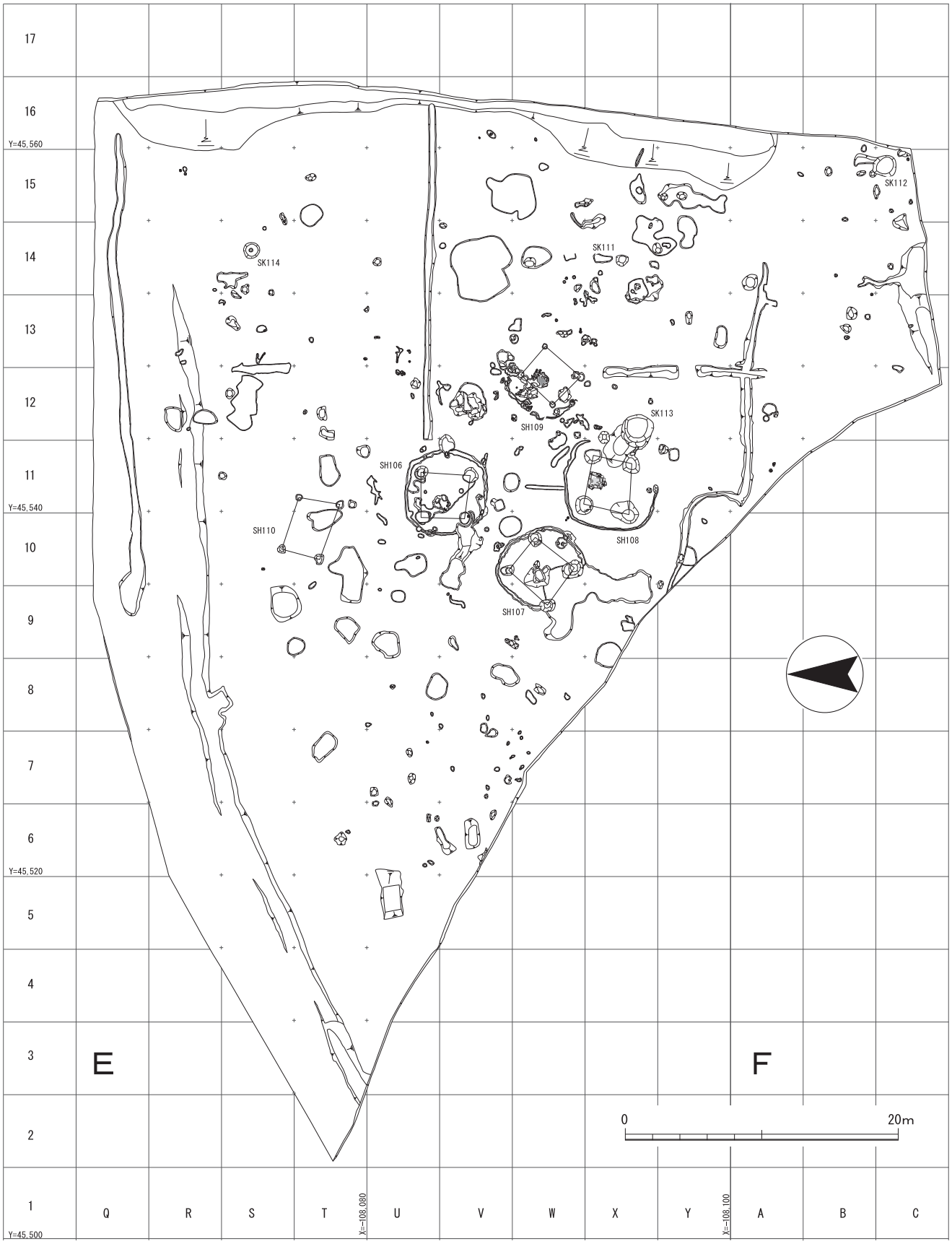


第６図　東調査区土層断面図（１：100）

第７図　遺構平面図（１：800）



第８図　遺構平面図１（１：400）



第９図　遺構平面図２（１：400）

2 遺構

縄文時代早期と中期の遺構を検出した。早期は、煙道付炉穴10基（ＳＦ52・54・60・71・91・96～99・102）と集石炉２基（ＳＦ51・53）である。中期は、竪穴住居13棟（ＳＨ36・50・63・72・84・93～95・106～110）と、掘立柱建物６棟（ＳＢ85～89・105）、陥穴９基（ＳＫ31・49・59・61・68・82・83・113・114）、土坑は大型土坑２基のほかに２基（ＳＫ１・２・13・ＳＺ92）である。

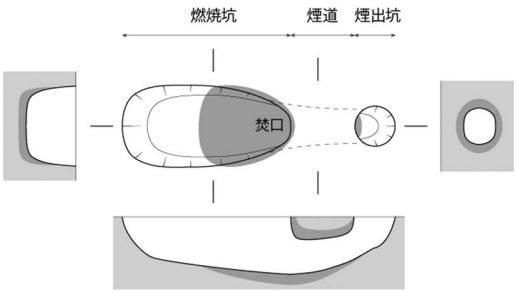
なお、竪穴住居や掘立柱建物に構造材としての棟があったとは必ずしも考えないが、便宜上「棟」を数詞として使用する。

（１）縄文時代早期

Ａ 煙道付炉穴（第４表）

煙道付炉穴は、西調査区の中央部と南西部に偏在していた。重複がなく単体の例２基（ＳＦ60・71）、２基の重複例１ヶ所（ＳＦ91・102）、３基の重複例２ヶ所（ＳＦ52・54・96～99）を検出した。

いずれも上部が後世に削平されていて、本来の平面形は不明である。しかし、前傾（オーバーハング）した壁や全体形および焼土の様子から、煙道付炉穴と判断した。なお、煙道付炉穴の部分名称は第10図のとおりとする。また、煙道付炉穴の方位は、燃焼坑から煙出坑を見た方角とした。



第10図　煙道付炉穴部分名称図

ＳＦ52（第11図）　西調査区の南西部で検出した。残存部は燃焼坑から煙道の一部のみで、残存長0.92ｍ、幅0.56ｍ、深さ0.16ｍを測り、燃焼坑から煙道へ向けて浅くなる。方位はN-22°-Ｅを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土下層から焼土ブロックを多く検出した。煙道天井部が崩落したものと推定する。燃焼坑の一部は、煙道付炉穴ＳＦ99や集石炉ＳＦ53と重複関係にある。ＳＦ52が古く、次にＳＦ99、ＳＦ53へと新しくなる。埋土から押型文土器片（１）を検出した。当遺跡から出土した土器の中では、早期前半と比定できる唯一の遺物である。

ＳＦ54（第11図）　西調査区の南西部で検出した。残存長1.46ｍ、幅0.58ｍ、深さ0.22ｍを測り、燃焼坑から煙道へ向けて浅くなる。方位はN-22°-Ｅを示し、ＳＦ52やＳＦ99とほぼ同一方向である。燃焼坑の底面には見られないが、側壁には厚さ２㎝程の被熱層が形成され、赤褐色に変色して硬化している。埋土の下層からは、径１㎜程の炭化物や径１㎝程の焼土ブロックを検出した。煙道天井部が崩落したものが含まれると推定する。煙出坑の一部が集石炉ＳＦ53と重複関係にある。ＳＦ54が古くＳＦ53が新しいと推定される。埋土から土器の細片を検出したが、所属時期などは不明である。

ＳＦ60（第13図）　西調査区の中央部で検出した。平面は燃焼坑から煙道へ向けて幅が狭くなる。残存部は、長さ1.56ｍ、幅0.72ｍ、深さ0.1ｍを測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干深くなる。方位はＳ-21°-Ｗを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。煙道入口付近の埋土から径２㎝程の炭化物や焼土ブロックを検出した。

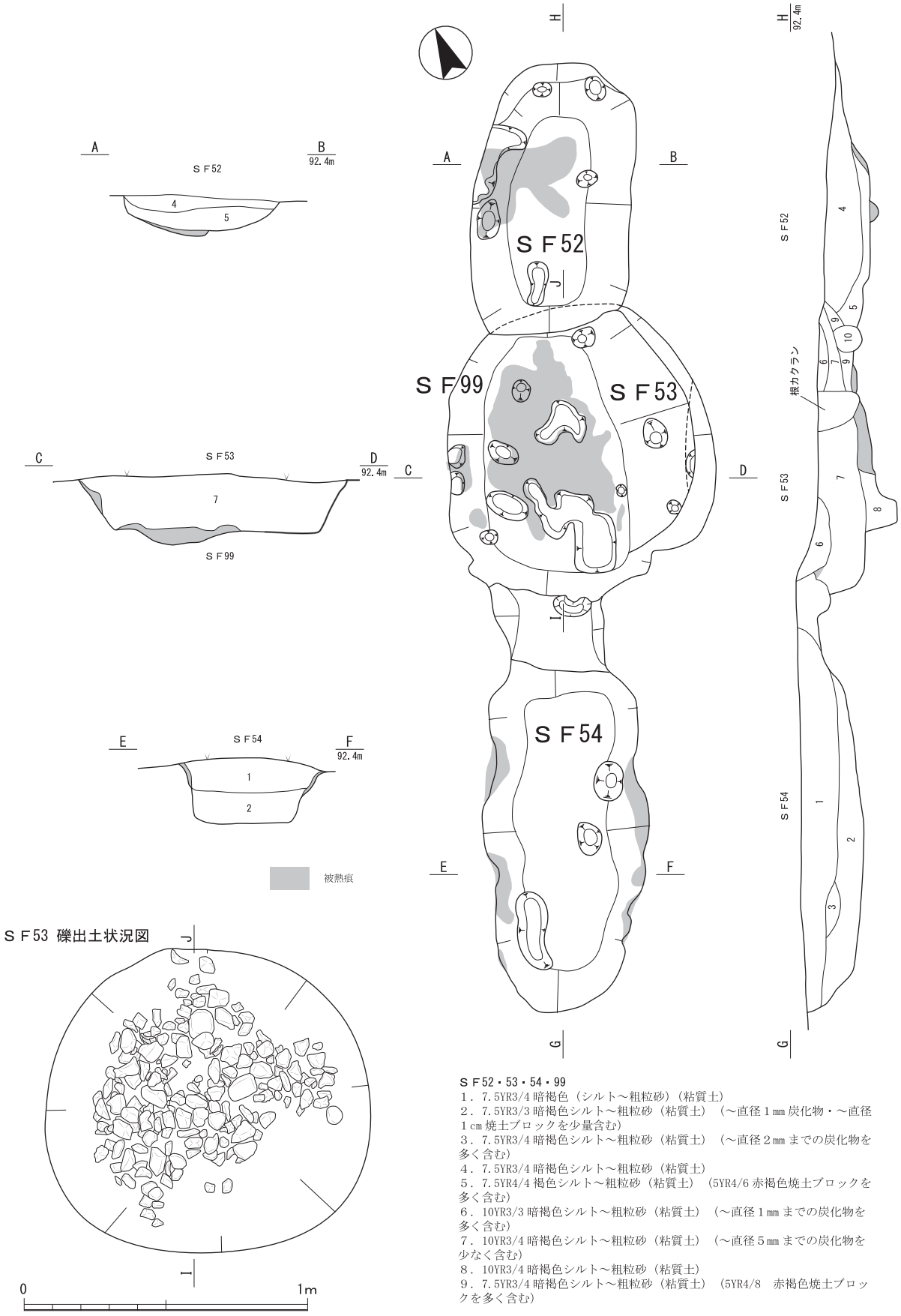
遺物は検出できなかったが、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では9650±30を、暦年較正年代では、9650±32を示している。

ＳＦ71（第13図）　西調査区の南西部で検出した。平面は燃焼坑から煙道へ向けて幅が狭くなる。残存部は、長さ1.1ｍ、幅0.62ｍ、深さ0.1ｍを測る。方位はＮ-５°-Ｗを示す。底面や側壁の半分以上に被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土からは焼土ブロックを検出した。

通常、人が入って作業する燃焼坑の端部には被熱は認められない。しかし、本遺構の南端には被熱が認められることから、燃焼坑の大部分が削平されていると推定する。遺物は検出できなかった。

ＳＦ91（第13図）　西調査区の中央部で検出した。

残存部は、長さ0.85ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.05ｍを



ＳＦ52・53・54・99
1．7.5YR3/4 暗褐色（シルト～粗粒砂）（粘質土）
2．7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（～直径１mm 炭化物・～直径１cm 焼土ブロックを少量含む）
3．7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（～直径２mm までの炭化物を多く含む）
4．7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）
5．7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（5YR4/6 赤褐色焼土ブロックを多く含む）
6．10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（～直径１mm までの炭化物を多く含む）
7．10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（～直径５mm までの炭化物を少なく含む）
8．10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）
9．7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（5YR4/8　赤褐色焼土ブロックを多く含む）

第11図　ＳＦ52・53・54・99実測図（１：20）

測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干深くなる。方位はS－5°－Eを測る。煙道前半部の底面に厚さ５㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。煙出坑の一部が煙道付炉穴ＳＦ102と重複関係にある。ＳＦ91が古くＳＦ102が新しいと推定される。埋土からは、径１㎝までの炭化物を微量と焼土ブロックを多量検出した。

遺物は検出できなかったが、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、9585±30を暦年較正年代では9587±32を示している。

ＳＦ96（第12図）　西調査区の南西部で検出した。

残存部は、長さ0.85m、幅0.45m、深さ0.06mを測る。方位はN－８°－Eを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて厚さ４㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土から少量の径３㎜までの炭化物と焼土ブロックを認めた。

煙出坑の一部を煙道付炉穴ＳＦ97と、燃焼坑の一部を集石炉ＳＦ51と重複し、一直線に並ぶ。ＳＦ96が古くＳＦ51が新しいと推定するが、ＳＦ96とＳＦ97の新旧は判然としない。

遺物は検出できなかった。

ＳＦ97（第12図）　西調査区の南西部で検出した。

平面は燃焼坑から煙道へ向けて幅が狭くなる。残存部は、長さ0.85m、幅0.76m、深さ0.11mを測る。方位はN-14°－Eをとる。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて、厚さ10㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。燃焼坑の一部を煙道付炉穴ＳＦ98と、煙出坑の一部を煙道付炉穴ＳＦ96と重複している。ＳＦ97が古くＳＦ98が新しいと推定する。

埋土から縄文中期の土器を検出したが、混入と思われる。また、埋土から径３㎜までの炭化物を少量と焼土ブロックを少量検出した。埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、9555±30を示している。

ＳＦ98（第12図）　西調査区の南西部で検出した。

残存部は、長さ1.25m、幅0.7m、深さ0.26mを測り、燃焼坑の底面はほぼ平坦であるが煙道へ向けて若干浅くなる。方位はN-14°－Eを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にまで厚さ５㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土から径３㎜までの炭化物を少量と焼土ブロックを少量検出した。煙出坑の一部分が煙道付炉穴ＳＦ97の燃焼坑と重複関係にある。

ＳＦ99（第11図）　西調査区の南西部で検出した。

燃焼坑から煙道にかけて底部（床面）のみの検出であるため、本来の形状は不明である。残存部は長さ1.03m、幅0.58m、深さ0.23mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干浅くなる。方位はN-22°－Eを示す。煙道前半部の底面に厚さ５㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。煙道の上部が、集石炉ＳＦ53と重複関係にある。ＳＦ53との境界は判然としない。しかし、燃焼坑は底部から側壁へ立ち上がっており、ＳＦ99のものと推定される。また、被熱跡はすべてＳＦ99の範囲内であり、集石炉ＳＦ53のものではないと思われる。

遺物は検出できなかった。

ＳＦ102（第13図）　西調査区の中央部で検出した。

南部は撹乱により失われている。残存部は、長さ1.1m、幅0.76m、深さ0.2mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干浅くなる。方位はN-25°－Wを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて厚さ５㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土から径１㎝までの炭化物を微量と焼土ブロックを多量検出した。煙出坑の一部が煙道付炉穴ＳＦ91と重複関係にある。

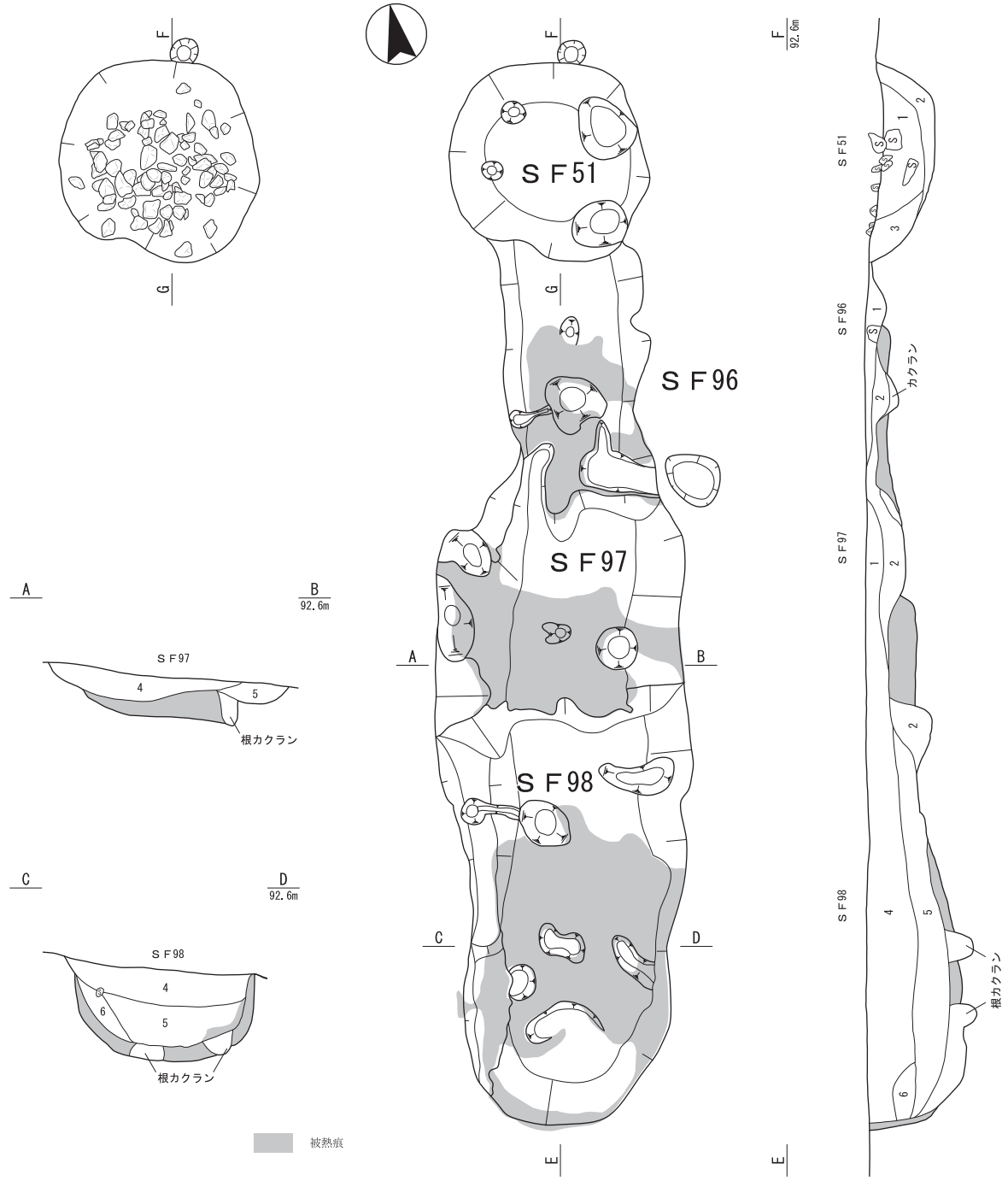
遺物は検出できなかった。

Ｂ　集石炉

２基検出したが、共に煙道付炉穴と重複している。煙道付炉穴跡の窪みを利用して、真上に構築した可能性がある。

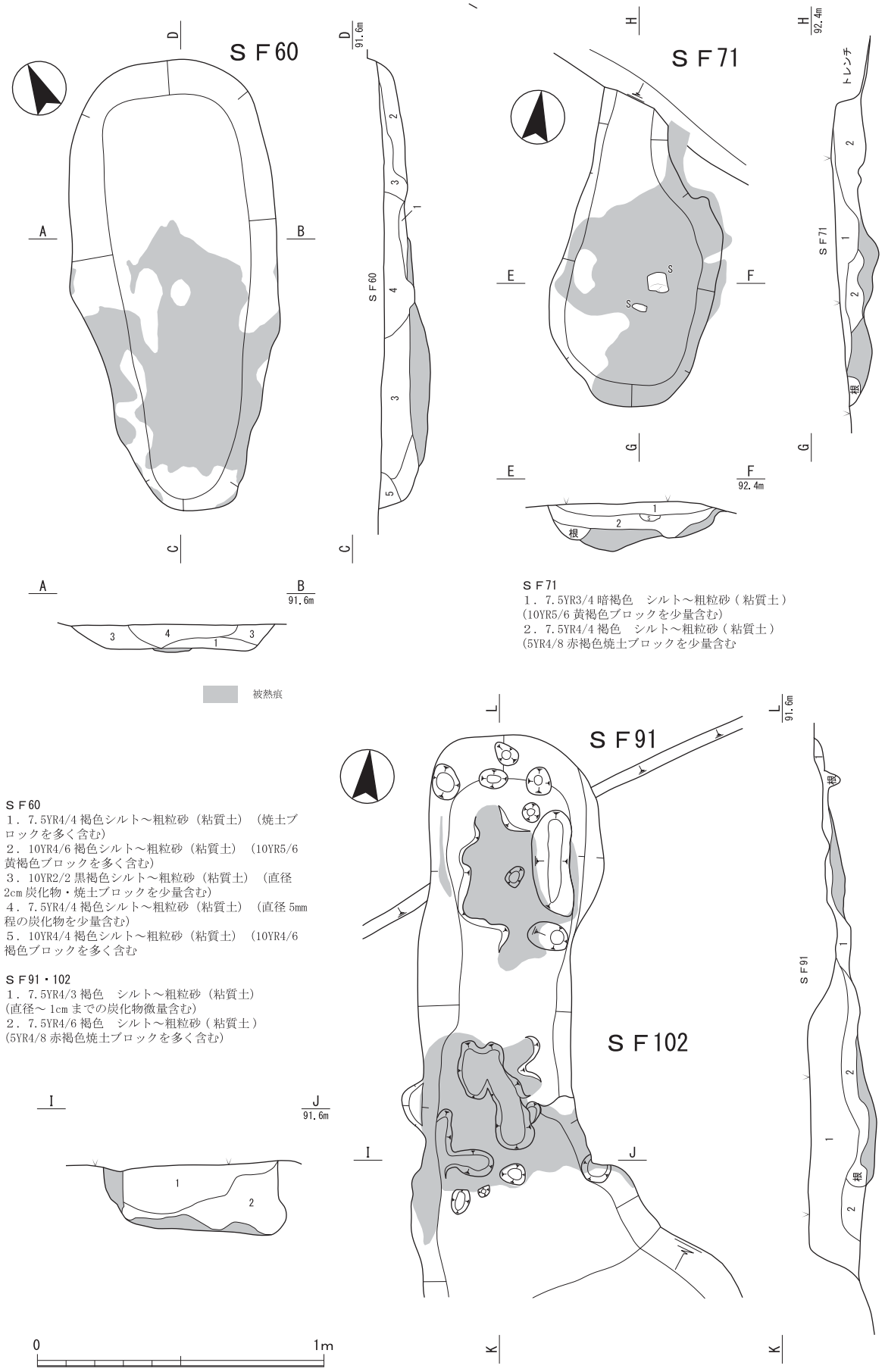
ＳＦ51（第12図）　西調査区の南西部で検出した。

後世の削平のため上部が失われているが、平面はおおむね円形を呈し、残存部は、径0.62m、深さ0.16mを測る。埋土は暗褐色を呈し、上位で径５～７㎝を中心とした礫を密集した状態で検出した。また埋土中位では礫がまばらに広がる様子を確認した。礫の石材は花崗岩やチャートの他、ホルンフェルスや斑レイ岩、流紋岩などで、遺跡周辺から調達できるものを使用していることがわかる。底面や礫に被熱跡は見られない。ただし、埋土には径１㎝までの



S F51
1．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（直径～ 5mm までの炭化物を微量含む）
2．7.5YR3/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
3．10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
S F96・97・98
1．7.5YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（～直径 2mm まで炭化物を微量含む）
2．7.5YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（～直径 3mm まで炭化物を少量含む）
(5YR5/6 明赤褐色焼土ブロック少量含む)
3．焼土ブロック（5YR5/6 明赤褐色ブロック）
4．10YR5/6 赤褐色ブロック　5YR5/6 赤褐色ブロック
5．２をベース（焼土を多く含む）
6．7.5YR4/6 褐色 シルト～粗粒砂（粘質土）

第12図　ＳＦ51・96・97・98実測図（１：20）



ＳＦ60
１．7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（焼土ブロックを多く含む）
２．10YR4/6 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（10YR5/6 黄褐色ブロックを多く含む）
３．10YR2/2 黒褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（直径 2cm 炭化物・焼土ブロックを少量含む）
４．7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（直径 5mm 程の炭化物を少量含む）
５．10YR4/4 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（10YR4/6 褐色ブロックを多く含む

ＳＦ91・102
１．7.5YR4/3 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（直径～ 1cm までの炭化物微量含む）
２．7.5YR4/6 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（5YR4/8 赤褐色焼土ブロックを多く含む）

ＳＦ71
１．7.5YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（10YR5/6 黄褐色ブロックを少量含む）
２．7.5YR4/4 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（5YR4/8 赤褐色焼土ブロックを少量含む

第13図　ＳＦ60・71・91・102実測図（１：20）

炭化物が認められることから、炉と推定する。ＳＦ96の燃焼坑と重複関係にある。ＳＦ96を利用して構築したものと推定される。底面１㎝上の埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では9635±30を、暦年較正年代では9637±30を示している。

埋土から土器細片を検出したが、所属時期は不明である。

ＳＦ53（第11図）　西調査区の南西部で検出した。

後世の削平のため上部が失われているが、平面はおおむね円形を呈し、残存部は、径0.95m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色を呈し、５㎜程の炭化物が少量認められた。ただし、明らかな層位は認められない。埋土上位で径４～６㎝を中心とした礫を密集した状態で検出した。また埋土中位から下位にかけて礫がまばらに広がる様子を確認した。礫の中には被熱により赤変しているものが見られる。石材は花崗岩やチャートの他、ホルンフェルスや斑レイ岩、流紋岩などがある。

北側のＳＦ52と南側のＳＦ54、底面下のＳＦ99、計３基の煙道付炉穴を切っている。３基のくぼみを利用して、ＳＦ99の真上に構築したものと思われる。したがって、ＳＦ99はＳＦ53の下にすっぽり隠れている。断面からＳＦ99との境界を観察するが判然としない。ただし、礫が含まれる範囲はＳＦ53と判断した。土坑底面の被熱跡はＳＦ99の範囲と推定され、ＳＦ53のものではない。

埋土から縄文中期の土器片を検出したが、混入と思われる。壁面近くの埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では9535±30を示している。

（２）縄文時代中期

遺構は東西両調査区に広がり、西調査区は標高の高い西部に、東調査区は中央部に遺構が集中している。

Ａ 竪穴住居

壁周溝が残るもの６棟（ＳＨ50・84・106・107・108・109）、柱穴と屋内炉のみが確認できるもの３棟（ＳＨ63・72・93）、柱穴のみが確認できたもの４棟（ＳＨ36・94・95・110）を検出した。

柱穴は大小のものを検出したが、いずれも掘形・柱痕跡・抜取穴を検出できず、「柱穴」とした。

出土土器は、ほとんどが中期後半に属する。

ＳＨ36・94（第14図）　西調査区の西部中央で検出した。掘込や周溝は認められず平面形は不明であるが、主柱穴をそれぞれ４個確認した。

ＳＨ36の柱間は南北の両面が1.8m、東面が1.5m、西面が1.8mを測る。また、ＳＨ94の主柱穴の柱間は南北の両面が2.4m、東西の両面が1.8mであり、他の竪穴住居と規模を比較しても違和感はない。２棟に、屋内炉と思われる被熱跡を１ヶ所確認した。炉の作り替えは認められないことから、２棟の重複ではなく、建て替えであると推定した。新旧は不明である。

遺物は確認できなかった。

ＳＨ50（第15・16図）　西調査区の南西部で検出した。平面は略隅丸方形に近い。規模は4.1m四方である。残存最大深は0.26mを測る。

４つの主柱穴は周溝に近く、柱穴から側壁までは0.28m程を測る。柱間は北面が1.9m、南面が1.7m、東面が2.7m、西面が2.3mを測る。周溝は、最大幅0.8m、最大深0.16mである。周溝の北側は一重であるがその他の部分は二重に廻っている。また、周溝の外側には径0.2～0.25m、深さ0.1～0.15mの小穴を８基確認した。垂木穴であろうか。

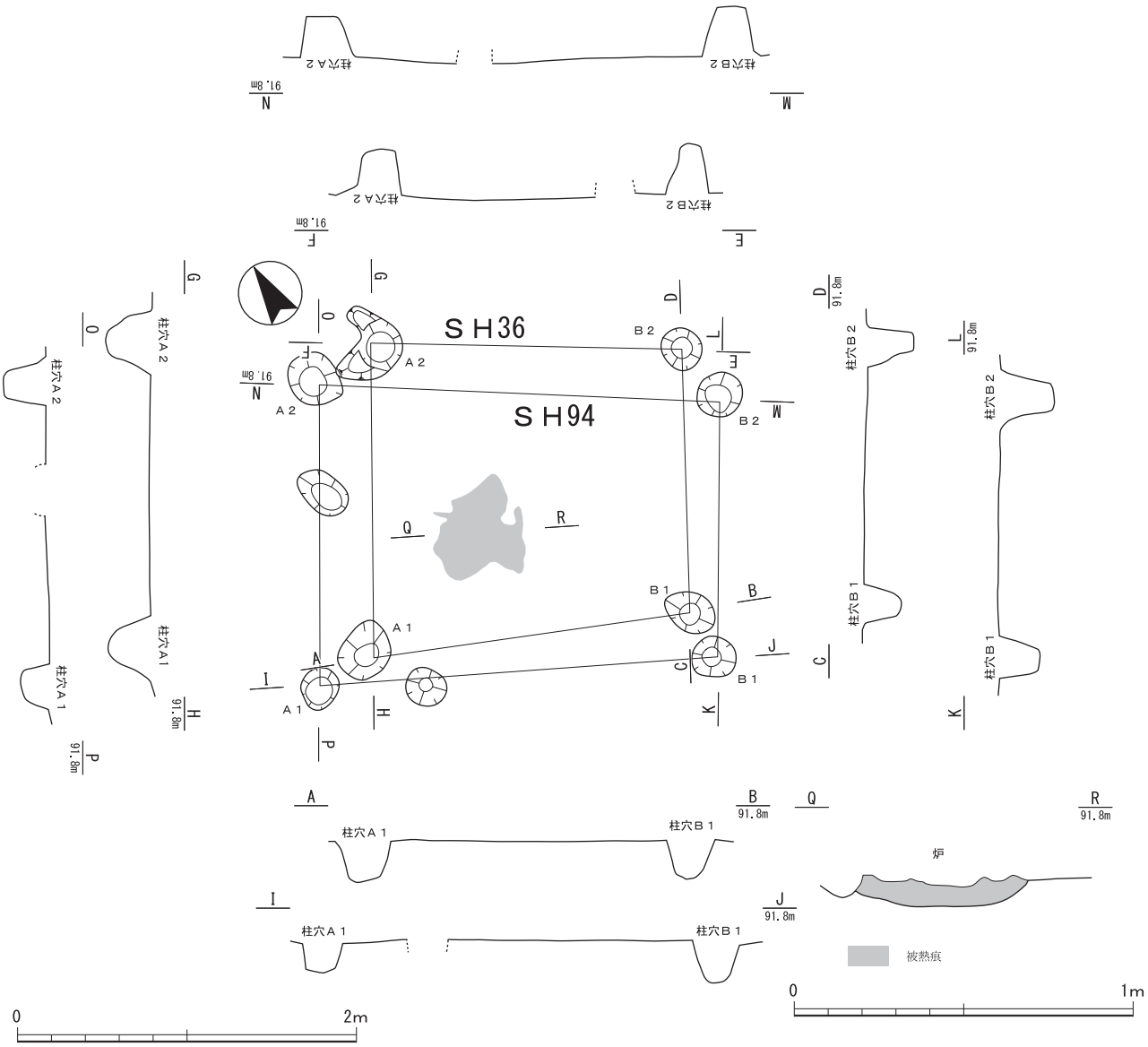
中央からやや西寄りに屋内炉を確認した。焼土周囲の掘込は、石囲の痕跡の可能性がある。なお、床面には小さな凸凹を多数確認した。詳細は不明である。

周溝は二重であるが炉の作り替えはないことから、建て替えが行われたと推定した。周溝の新旧は、土層の観察から内側の方が外側より新しく、建て替えに際して縮小された可能性が高い。

柱間が西面より東面の方が広く、屋内炉はやや西寄りである。また、壁周溝の東辺中央付近で小穴を２基検出した。このような特徴から、入口は東側である可能性が高いと判断した。

埋土には、上層から下層まで中期の咲畑貝塚Ｉ群Ａ類系（２期）[1]から後期初頭までの土器（２～83）が混在していたが、層位に応じて土器の型式が変わるわけではない。量的には後葉の４古～５新期に属するものが多い。石器類や剥片及び砕片も多数出土した。

ＳＨ63（第17図）　西調査区の南西部で検出した。



第14図　ＳＨ36・94実測図（１：40）**・炉**（１：20）

掘込や周溝は不明であるが、径0.5m程、深さ0.5m程の４つの主柱穴を検出した。柱間は南北面が2.1m、東西面が2.7mを測る。中央から西寄りには、径0.7m、深さ0.28mの屋内炉を確認した。掘立柱建物ＳＢ89と重複するが、新旧は不明である。中央より西寄りに屋内炉を有し、東への傾斜地形でもあることから、出入口は東側と推定した。

埋土から中期の土器を検出したが、細片のため掲載できなかった。

ＳＨ72（第17図）　西調査区の南西端部で検出した。

掘込や周溝は不明であるが、深さ0.3m程の４つの主柱穴を検出した。柱間は、南北が二面共2.3m、東西が二面共1.8mである。中央からやや北寄りに屋内炉を確認した。中央から北側に屋内炉を有し、南側への傾斜地形でもあることから、出入口は南東側と推定した。遺物は確認できなかった。

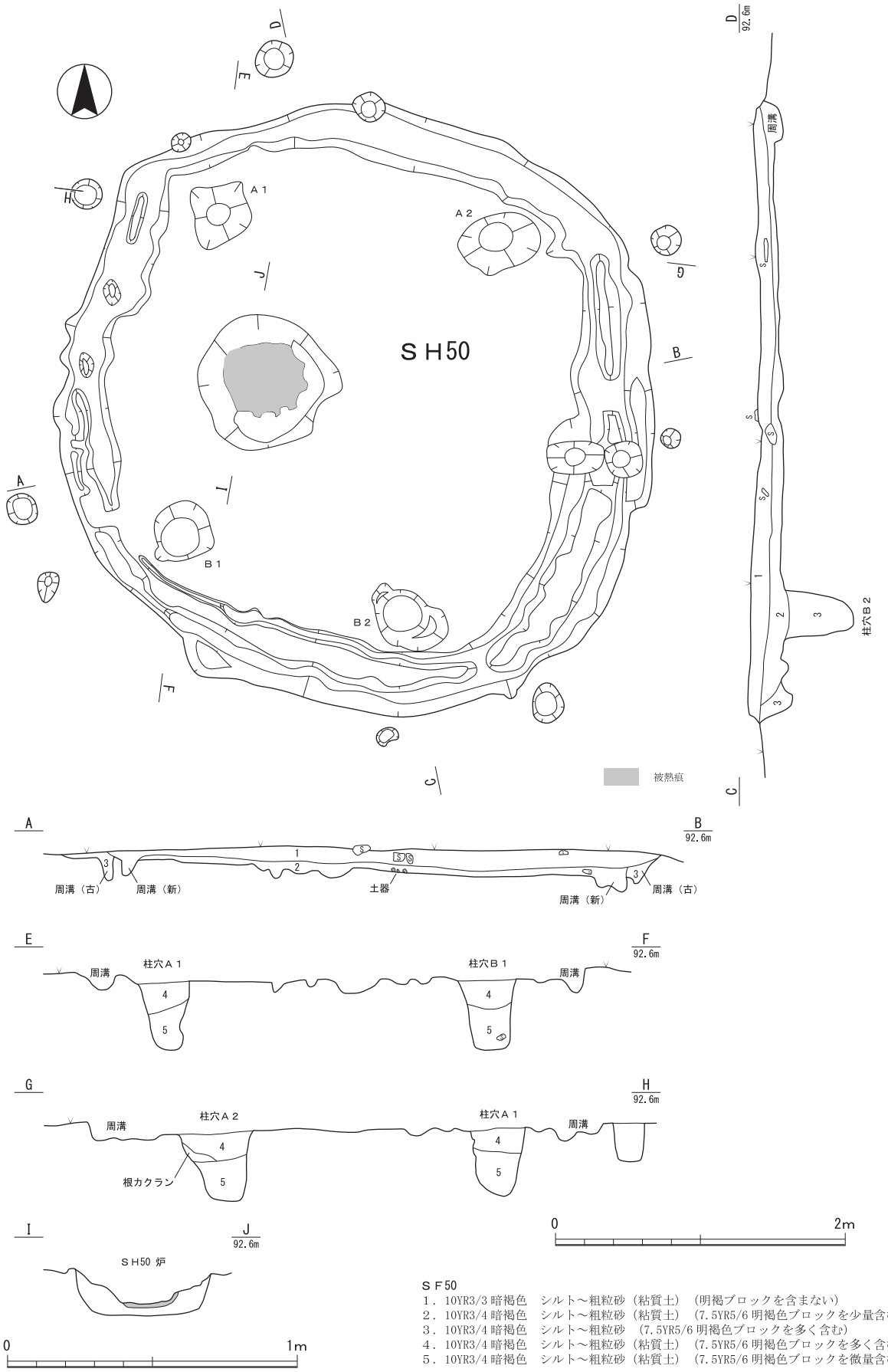
ＳＨ84（第18･19･20図）　西調査区の南西部で検出した。平面は略隅丸方形に近いが、やや東西に長い。北東部は、後世の撹乱溝により失われている。規模は、東西4.2m、南北3.9mで、残存最大深は0.45mを測る。４つの主柱穴を四隅で検出した。柱間は南北が二面共2.4m、東西が二面共2.1mである。柱穴から側壁までは0.4m程を測る。

周溝の南半は幅0.4mであるのに対し、北半では幅0.8mを測り、北辺中央で二分されるような形状である。周溝の北西辺で径0.1m前後の小穴を３基検出した。これらはおおむね0.85m間隔で並ぶ。

中央からやや北西寄りでは、屋内炉を検出した。

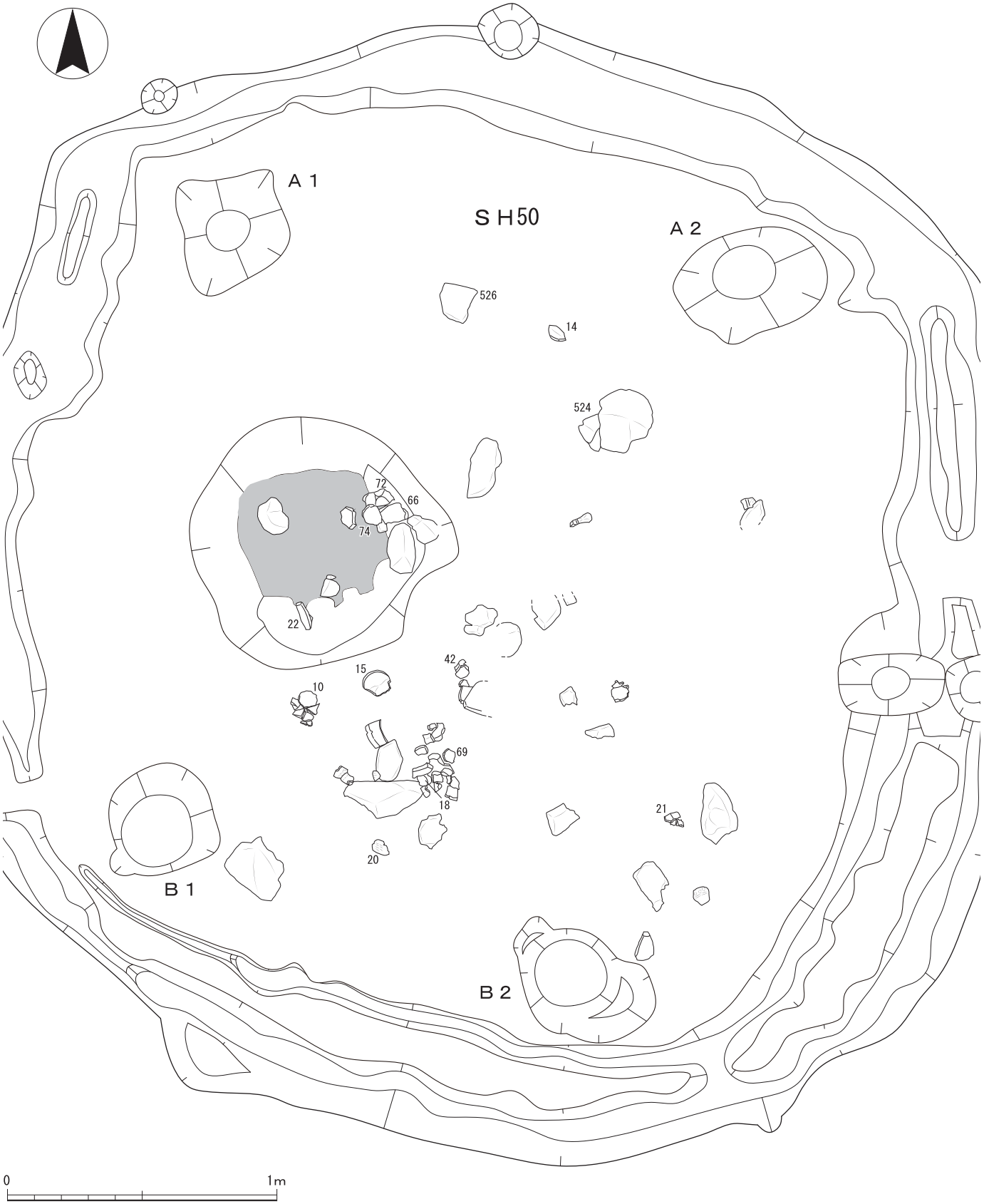
焼土の周りには掘込があり、炉の囲いに適した礫も残存したことから、石囲炉の可能性が高い。また、床面には小さな凹凸を多数確認した。

出土した遺物の量は全遺構中で最多であり、中期



ＳＦ50
1．10YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（明褐ブロックを含まない）
2．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを少量含む）
3．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
4．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
5．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを微量含む

第15図　ＳＨ50実測図（１：40）・炉（１：20）



第16図　ＳＨ50遺物出土状況図（１：20）

後葉を中心とした土器（84～211）と、打製石斧や石鏃・切目石錘・剥片・砕片などの石器類を検出した。

北半側の壁周溝が二重になっていることから、建て替えによる住居の拡大または縮小した可能性がある。また、片側の柱間を広くする特徴はもたないが、中央より北西側に屋内炉を有し、東への傾斜地形でもあることから、出入口は南東側と推定した。

ＳＨ93（第27図）　西調査区の南東部で検出した。

掘込や周溝は認められなかったが、深さ0.6m程の４つの主柱穴と炉を検出した。柱間は北面が2.6m、南面が2.3m、東面が2.5m、西面2.1mである。中央からやや西寄りに屋内炉を確認した。炉の北側は撹乱されて消失している。柱間が西側より東側の方が広く、屋内炉が中央よりやや西に寄ることと、東への傾斜地形でもあることから、出入口は東側と推定した。

炉跡から中期後葉（３期以降）の土器（212）を検出した。

ＳＨ95（第28図）　西調査区の南西部で検出した。

掘込や周溝は認められなかったが、径0.4m程、深さ0.4m程の４つの主柱穴を検出した。柱間は南北の両面が、2.4m、東面が3.0m、西面が3.4mである。柱間は、他の竪穴住居のものより大きくて不定形であるため、他の遺構の可能性も残る。しかし、柱穴の配置や大きさおよび埋土は他の竪穴住居と同様であり、竪穴住居と推定した。

遺物は検出していない。

ＳＨ106（第21･22図）　東調査区の中央部で検出した。平面は略隅丸方形に近い。規模は、長径3.8m、短径3.7mを測る。最大径が0.8mを測る柱穴を四隅で検出した。柱間は南北の両面が2.4m、東面が2.7m、西面が2.4mであり、柱穴から側壁までは0.6m程を測る。南西部は後世の撹乱により失われているが、最大幅0.2mの壁周溝が廻る。周溝の東辺中央付近では、小穴や径１m程の土坑を検出した。また、周溝の外側には径0.3m程の小穴を３基確認したが、垂木穴の可能性もあろう。中央からやや西寄りに屋内炉を有し、焼土厚は最大５cmを測る。炉付近からは、石囲炉に使用された可能性のある人頭大の礫を検出した。柱間が西側より東側の方が広く、屋内炉は中央より西寄りであることから、出入口は東側と推定した。

炉周辺や柱穴から中期後葉の神明式の土器を中心に多数を検出した（213～238）。また柱穴Ｂ２付近からは、自然面を残すサヌカイトの大型剥片（492）を確認した。

ＳＨ107（第23･24図）　東調査区の中央部、ＳＨ106の南西近くで検出した。平面は略隅丸方形に近い。南西部は後世の撹乱のため失われているが、残存規模は東西4.6m、南北4.3m以上を測る。柱穴は径0.7m程を測り、四隅で検出した。柱間は南北の両面が2.4m、東西の両面が2.8mである。最大幅0.24mの周溝を確認した。屋内炉を中央よりやや北西寄りで確認し、南東側には径0.7m程の土坑や小穴を検出した。

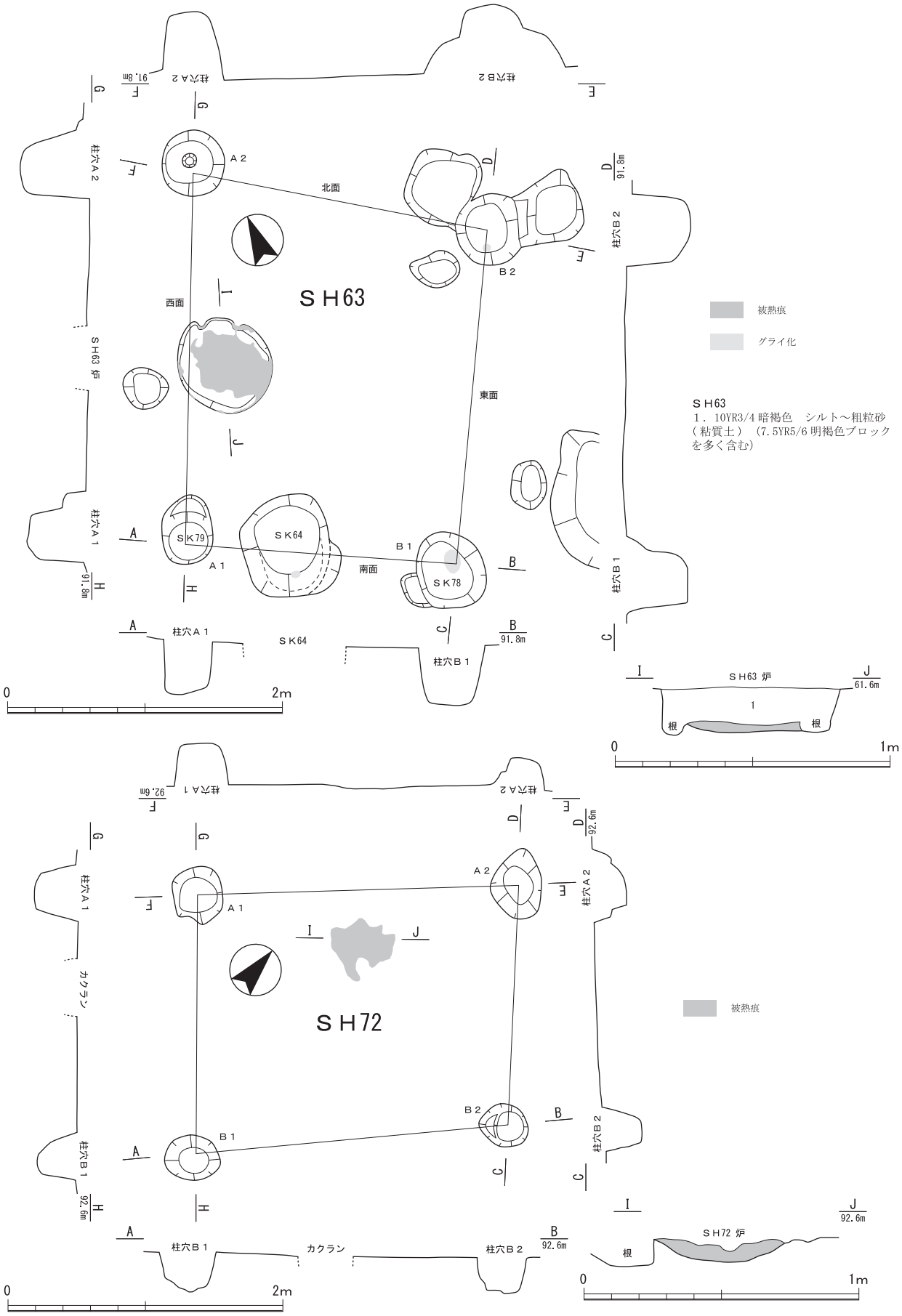
一面の柱間を広くする特徴はもたないが、中央を外し、北西側に屋内炉を有することから、出入口は南東側と推定した。

出土遺物には、中期後葉の神明式を中心とした多数の土器（239～266）と、石器類や剥片・砕片がある。また、石囲炉に使用された可能性のある礫も多数検出した。

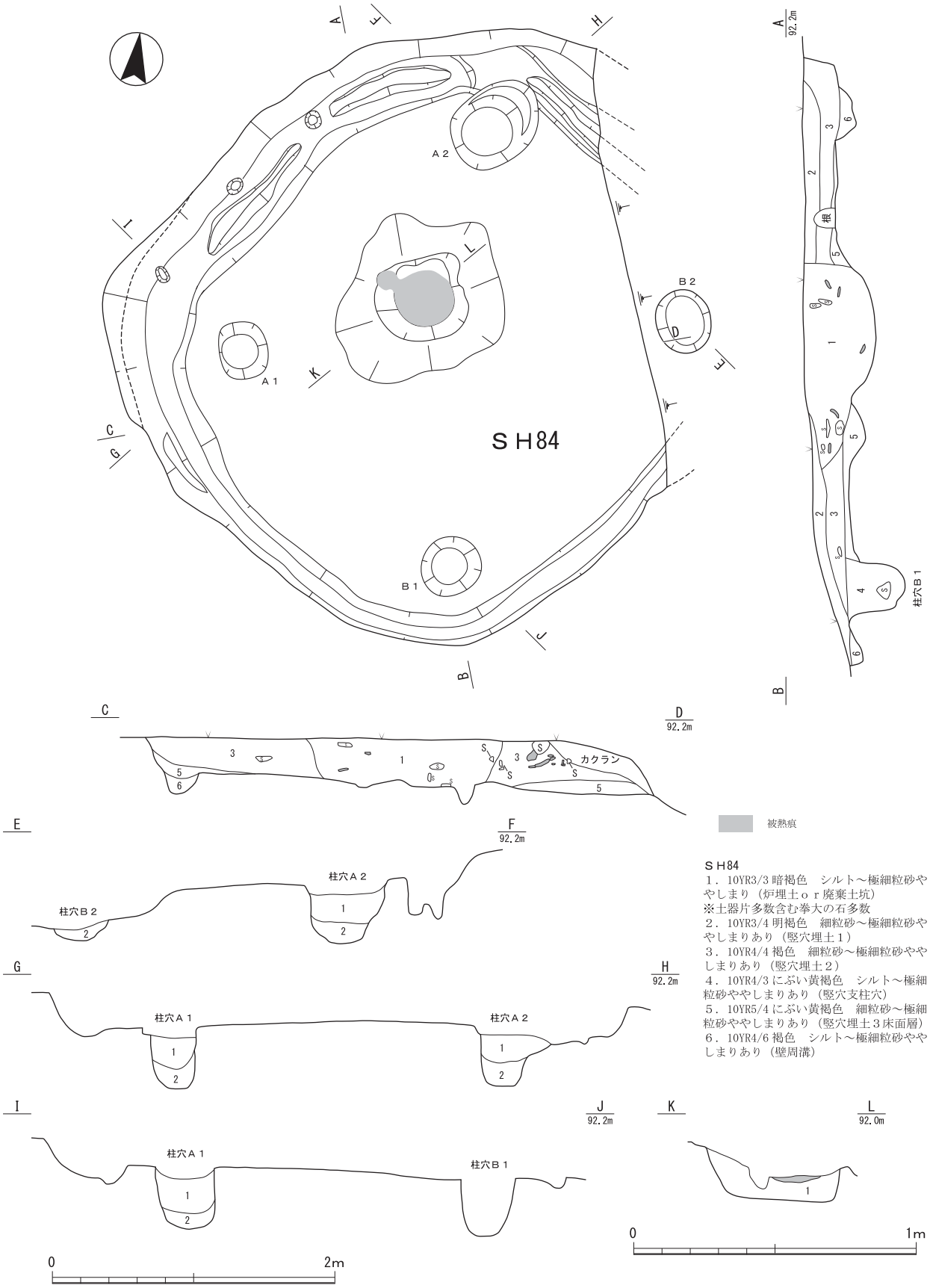
ＳＨ108（第25･26図）　東調査区の中央部、ＳＨ106の南近くで検出した。東部は部分的に削平されていて平面が略隅丸方形に近い。規模は、東西4.8m以上、南北5.2mを測る。柱穴は最大径1.2mを測り、四隅で検出した。柱間は北面が2.7m、南面が3.0m、東西の両面が2.4mで、柱穴から側壁までは0.8m程を測る。幅0.16m程の周溝が廻る。周溝の南辺中央では、径0.48mの小穴を検出した。

0.9m四方の石囲炉を、中央からやや北寄りで確認した。炉の北辺（奥部）には、縦0.13m、横0.6mの平らな面をもつ整った形状の礫を配している。川原石だが、被熱によって割れている。炉の西辺の一部は、後世の撹乱により礫が遺存しなかった。炉の底面は被熱により赤変硬化し、焼土厚は最大４cm程を測る。また、炉を囲む礫と地山との間には、厚さ２cm程の裏込を確認した。柱間は北側より南側の方が広く、石囲炉は中央を外して北側に寄ることから、出入口は南側であると推定した。

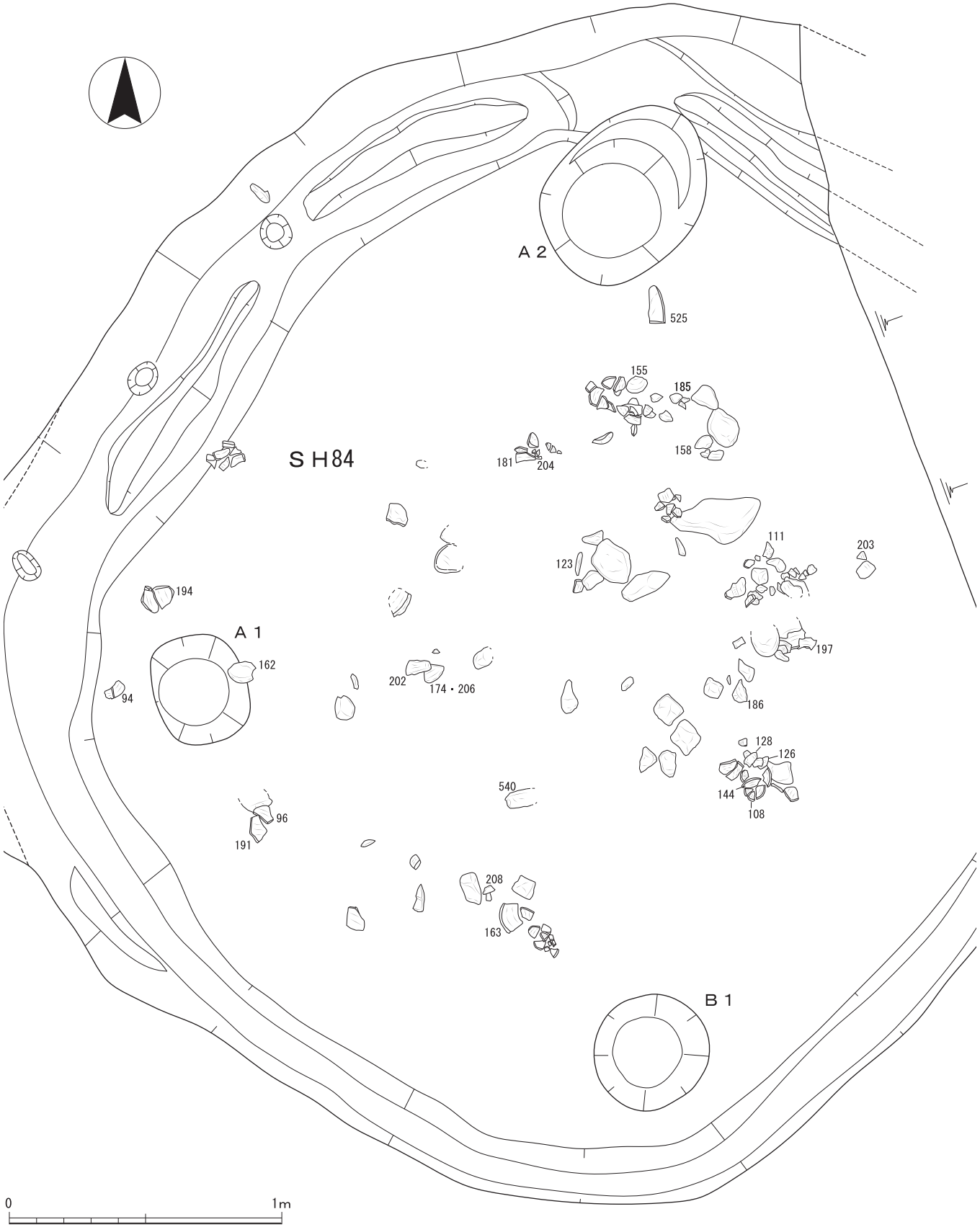
出土遺物には、中期後葉の土器（267～276）



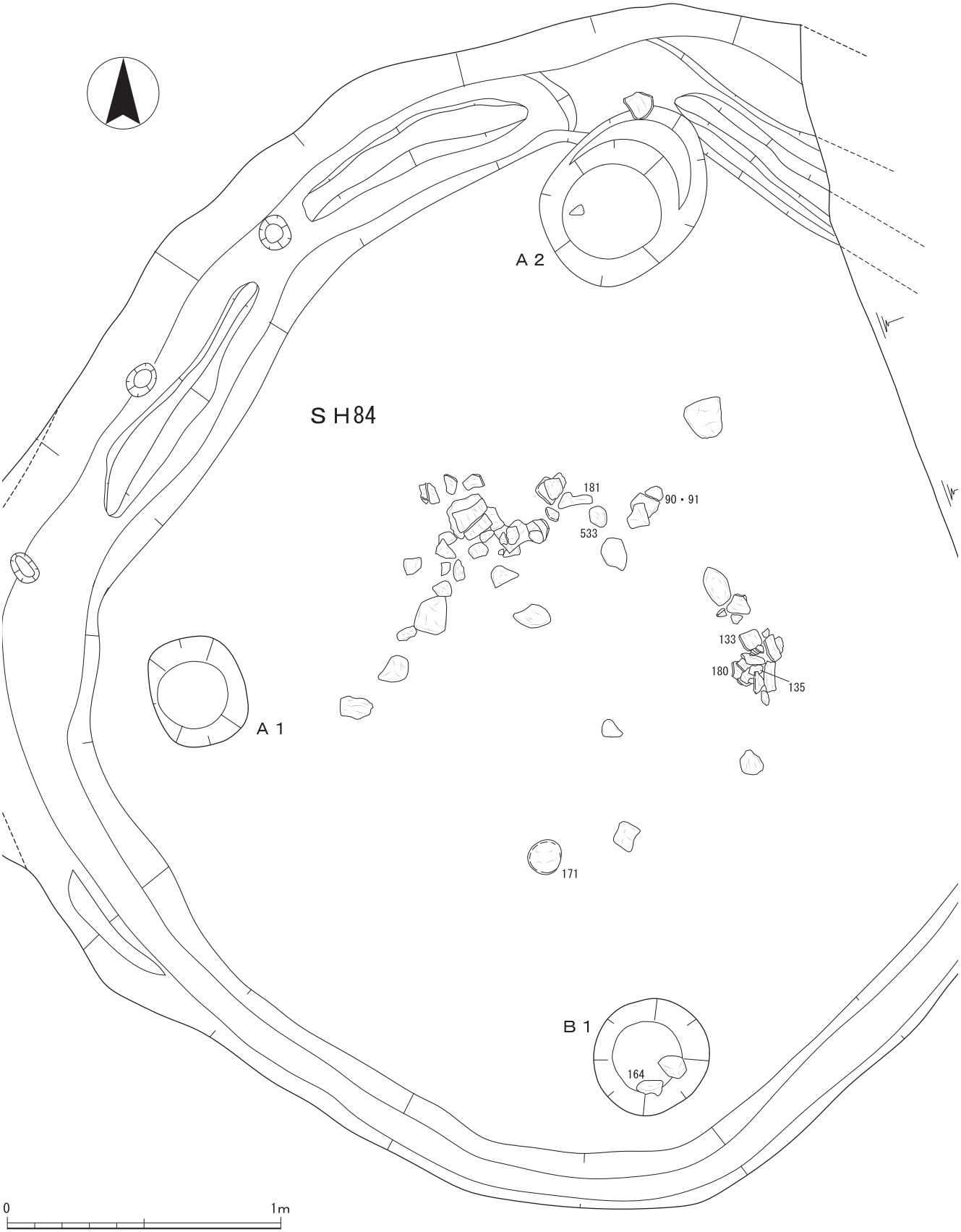
第17図　ＳＨ63・72実測図（１：40）・炉（１：20）



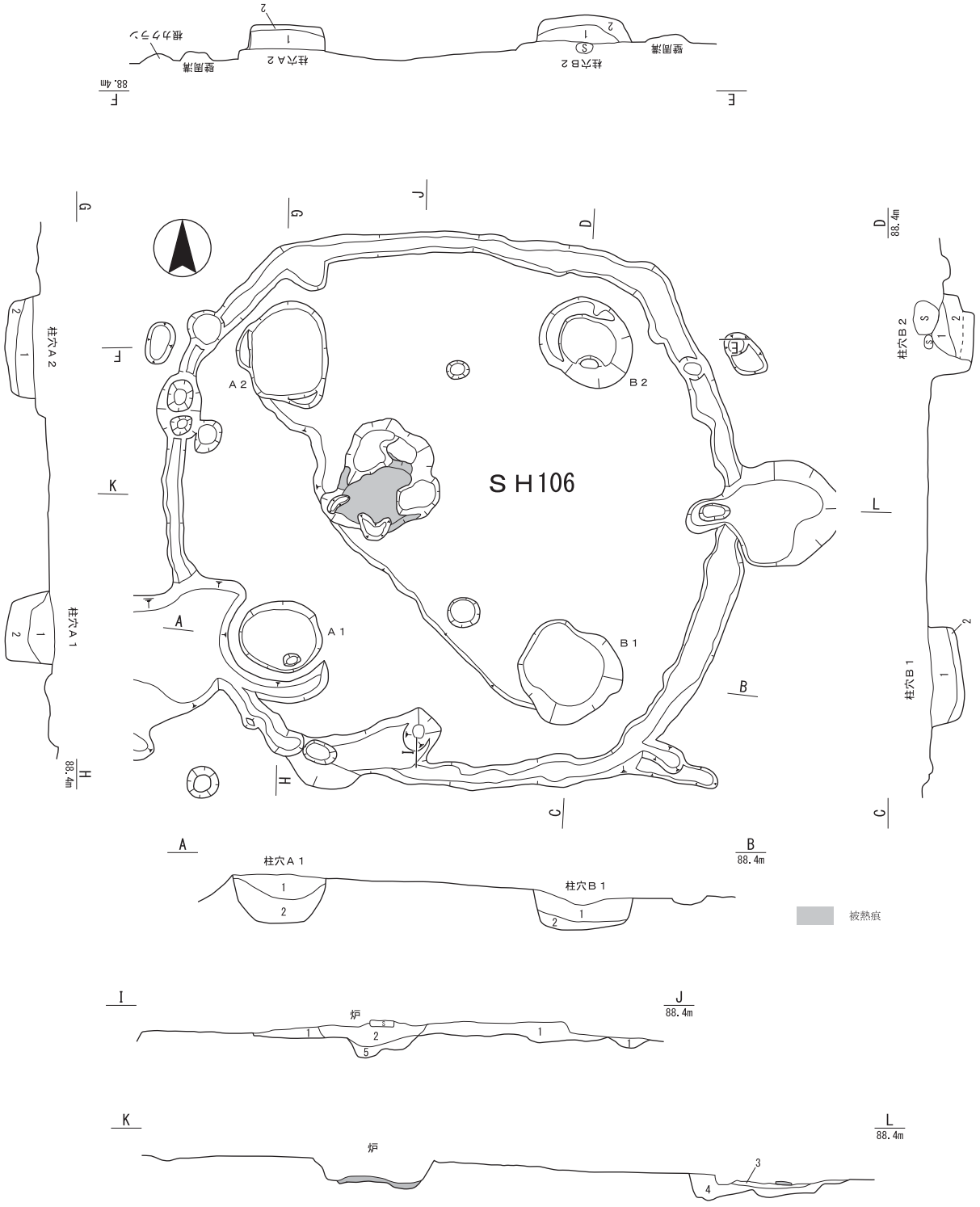
第18図　ＳＨ84実測図（１：40）**・炉**（１：20）



第19図　ＳＨ84遺物出土状況図上層（１：20）



第20図　ＳＨ84遺物出土状況図下層（１：20）



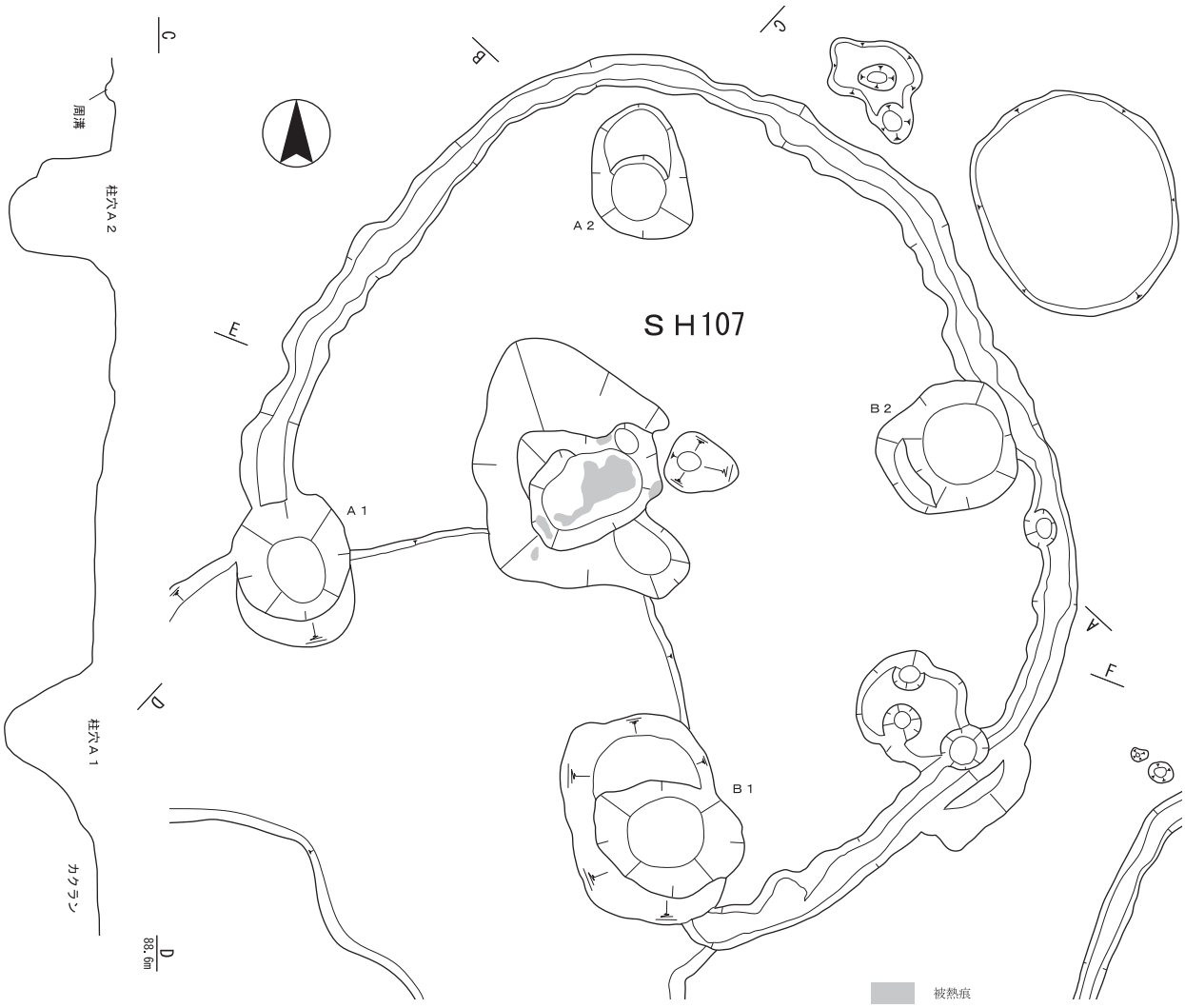
ＳＨ106
1．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
2．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR4/6 褐色ブロックを多く含む）
3．7.5YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（7.5YR4/6 褐色ブロックを多く含む）
4．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（7.5YR4/6 褐色ブロックを少量含む）
5．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（7.5YR4/6 褐色ブロックを多く含む）　炉

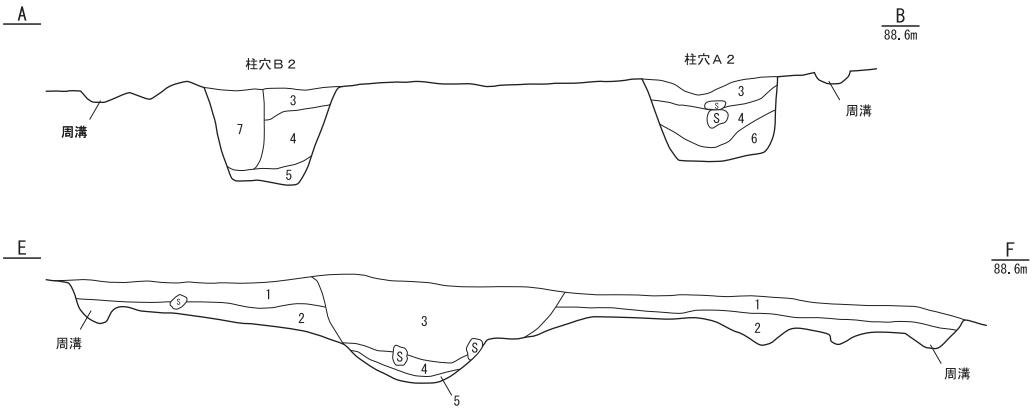
主柱穴土色
1．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR4/6 褐色ブロックを多く含む）
2．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）

0　2m

第21図　ＳＨ106実測図（１：40）

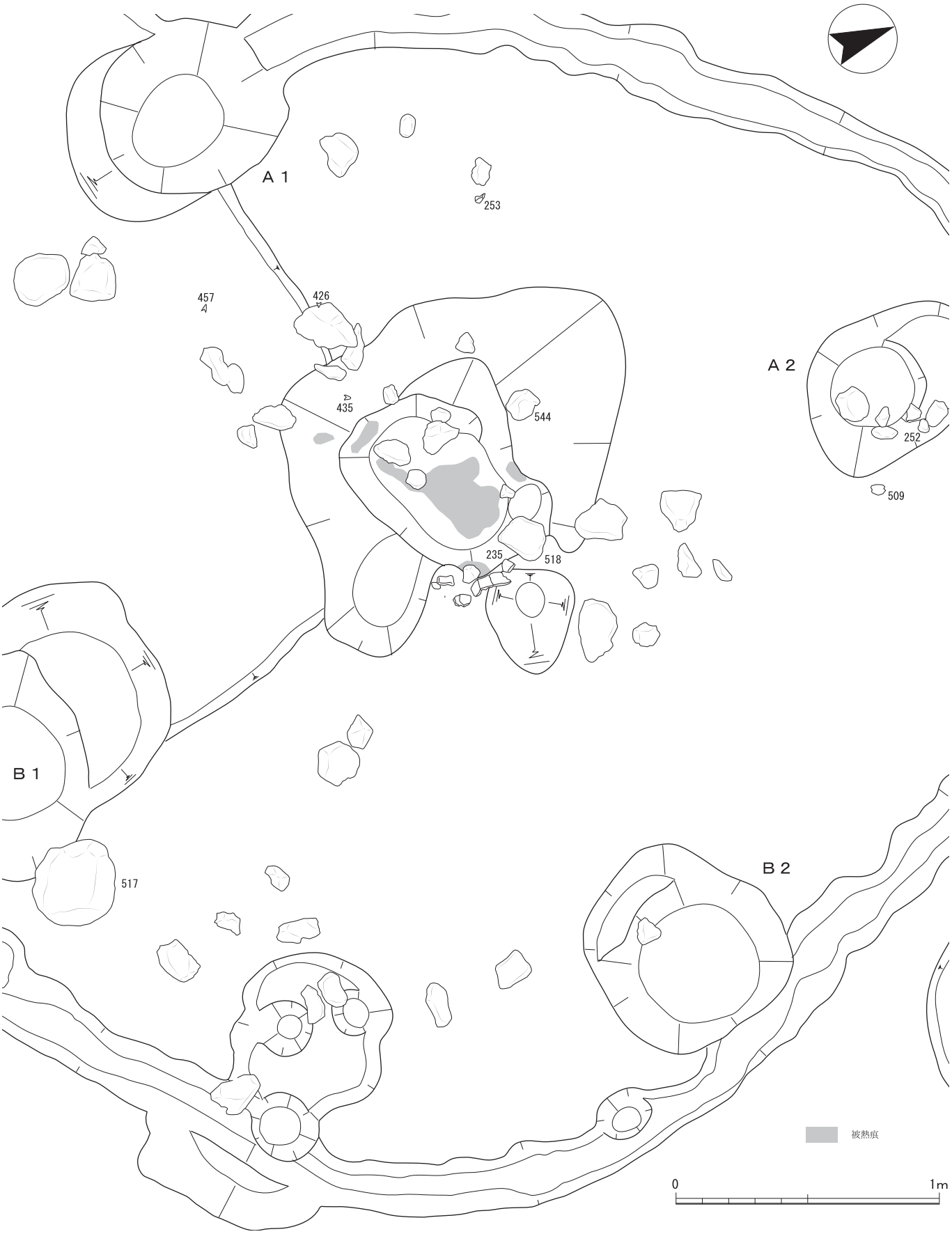
第22図　ＳＨ106遺物出土状況図（１：20）



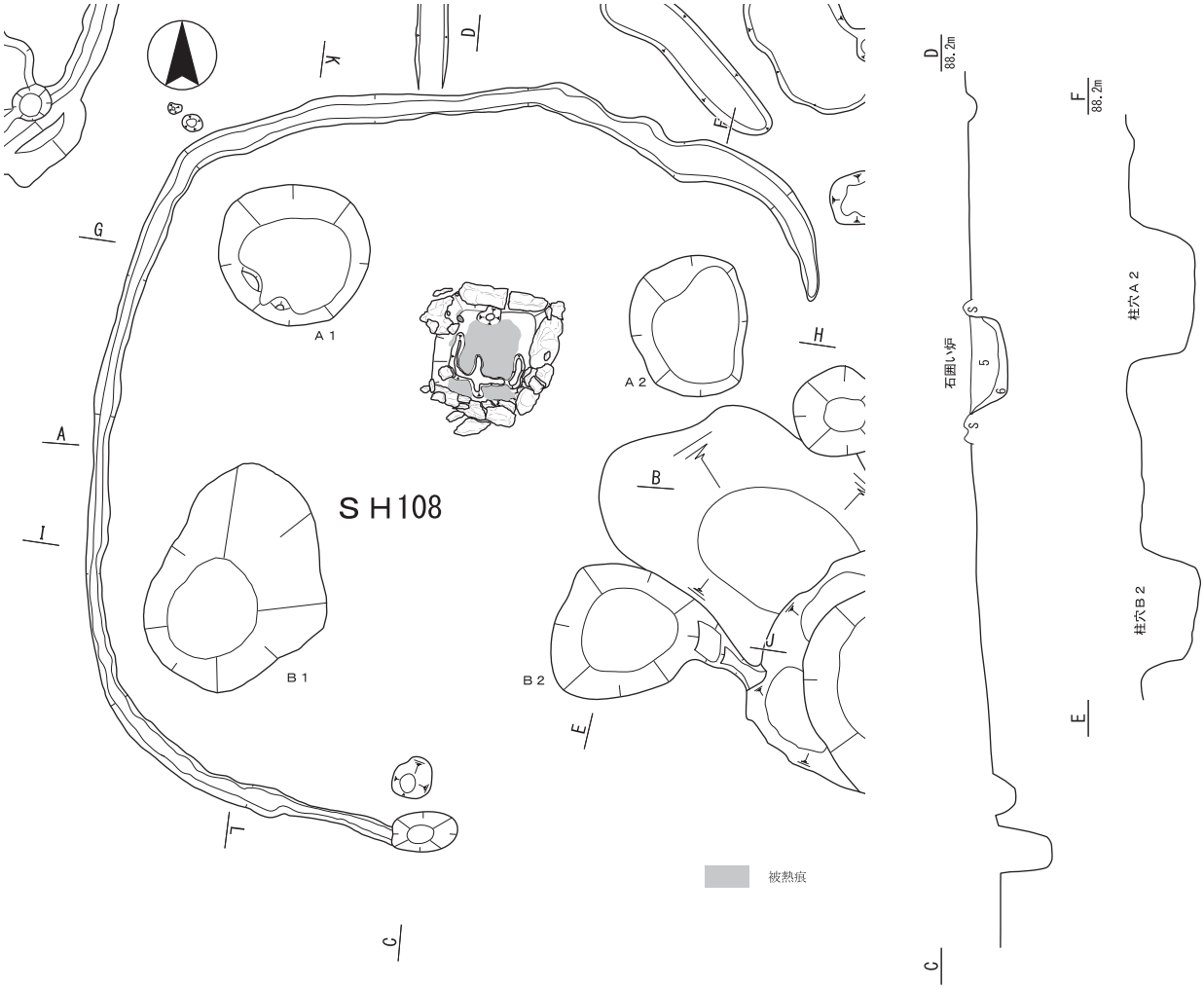


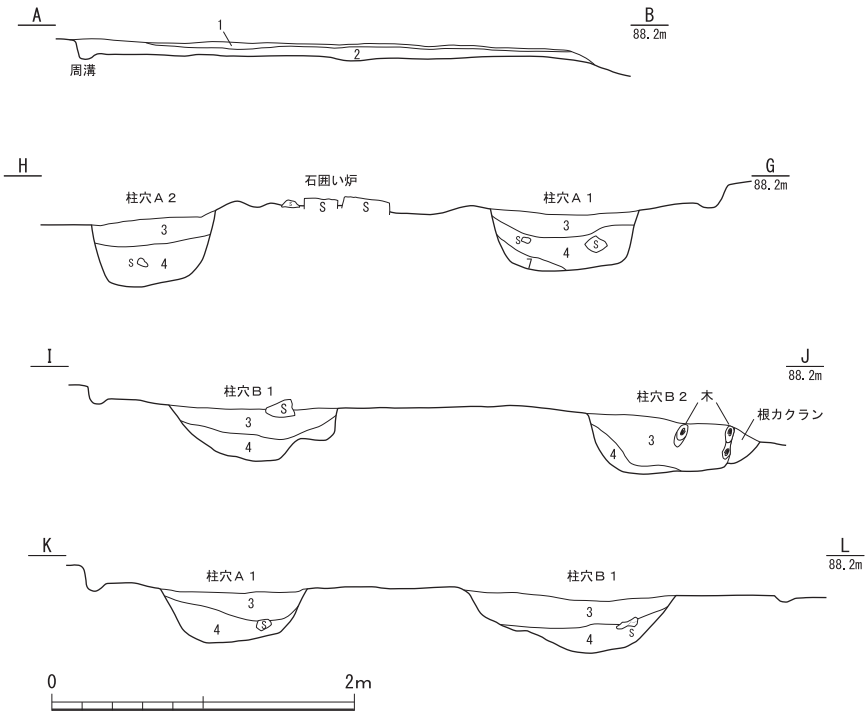
ＳＨ107
1．7.5YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
2．7.5YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR4/6 褐色ブロックを少量含む）
3．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（炉）
4．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR4/6 褐色ブロックを少量含む）
5．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR4/6 褐色ブロックを 80％含む）
6．10YR3/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR4/6 褐色ブロックを少量含む）
7．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～～粗粒砂（粘質土）

第23図　ＳＨ107実測図（１：40）



第24図　ＳＨ107遺物出土状況図（１：20）





ＳＨ108
1．7.5YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
2．7.5YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
(7.5YR4/6 褐色ブロックを少量含む)
3．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
4．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
(7.5YR4/6 褐色ブロックを少量含む)
5．10YR3/3　暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
6．10YR3/3　暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
(7.5YR4/6 褐色ブロックを微量含む)
7．7.5YR2/2 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）
(7.5YR4/6 褐色ブロックを多く含む)

第25図　ＳＨ108実測図（1：50）

（２期～５期）を中心とした土器と、石器類や剥片・砕片がある。

ＳＨ109（第27図）　東調査区の南東部、ＳＨ106の南東近くで検出した。大部分は削平されているが、４つの主柱穴を検出した。最も残りの良いもので深さ0.4mを測る。柱間は北面が2.4m、南面が2.6m、東西の両面が2.1mである。柱穴から側壁までは0.7m程を測る。周溝は北側から西側にかけての一部分のみ確認できた。中央よりやや北西寄りに屋内炉を確認した。残存する柱穴や周溝および炉の形状は、他の竪穴住居と同様であったとみられる。

炉周辺から、中期後半の土器（277・278）と切目石錘（510）を確認した。

ＳＨ110（第28図）　東調査区の中央北部、ＳＨ106の北約６ｍで検出した。掘込や周溝および屋内炉は認められず、平面形は不明である。最大径0.46mを測る４つの主柱穴を検出した。柱間は南北面が3.0m、東西面が2.2mである。柱穴のみであるために他の遺構の可能性も否定できないが、柱穴の配置と大きさ及び埋土は他の竪穴住居と同様であり、竪穴住居と推定した。遺物は検出していない。

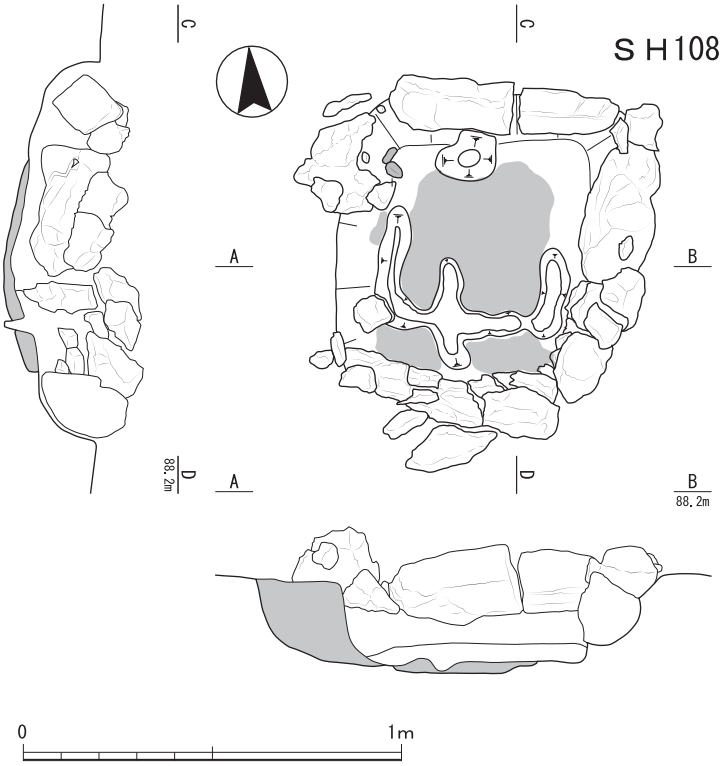
Ｂ　掘立柱建物（第５表）

便宜的に柱間数の多い側を棟方向とし、棟方向の座標北に対する振れを表記した。いずれの棟方向も、ほぼ等高線に沿った北東である。西調査区の北西部と南西部に、３棟ずつみられた。

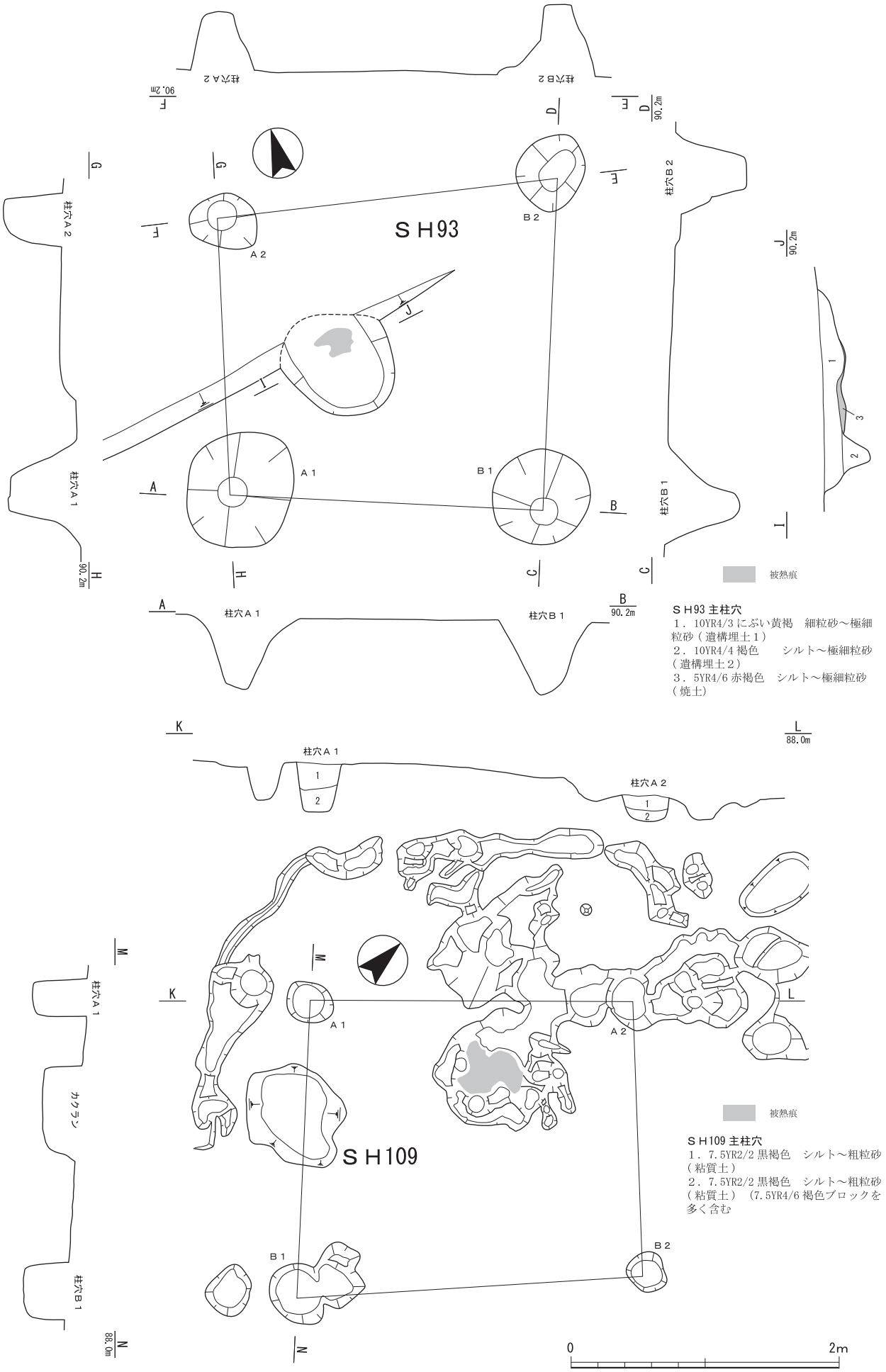
いくつもの柱穴の底部から上部にかけて、縄文中期末葉の土器を検出した。ところが、柱痕跡・掘形・抜取穴の識別ができなかったため、掘立柱建物の所属期を特定し切れなかった。しかし、全調査区において縄文中期以外の土器はほとんどみられないことから、掘立柱建物は中期末葉と推定しておく。

ＳＢ85（第29図）　西調査区の北西部で検出した。桁行３間・梁行１間の東西棟で、棟方向はW－８°－Ｎである。建物規模は桁行が約9.0m、梁行が約4.1mを測る。柱穴は楕円形を呈し、最大のもので長径1.5m程、深さ0.5m程を残す。柱間は、桁行が3.0m等間である。

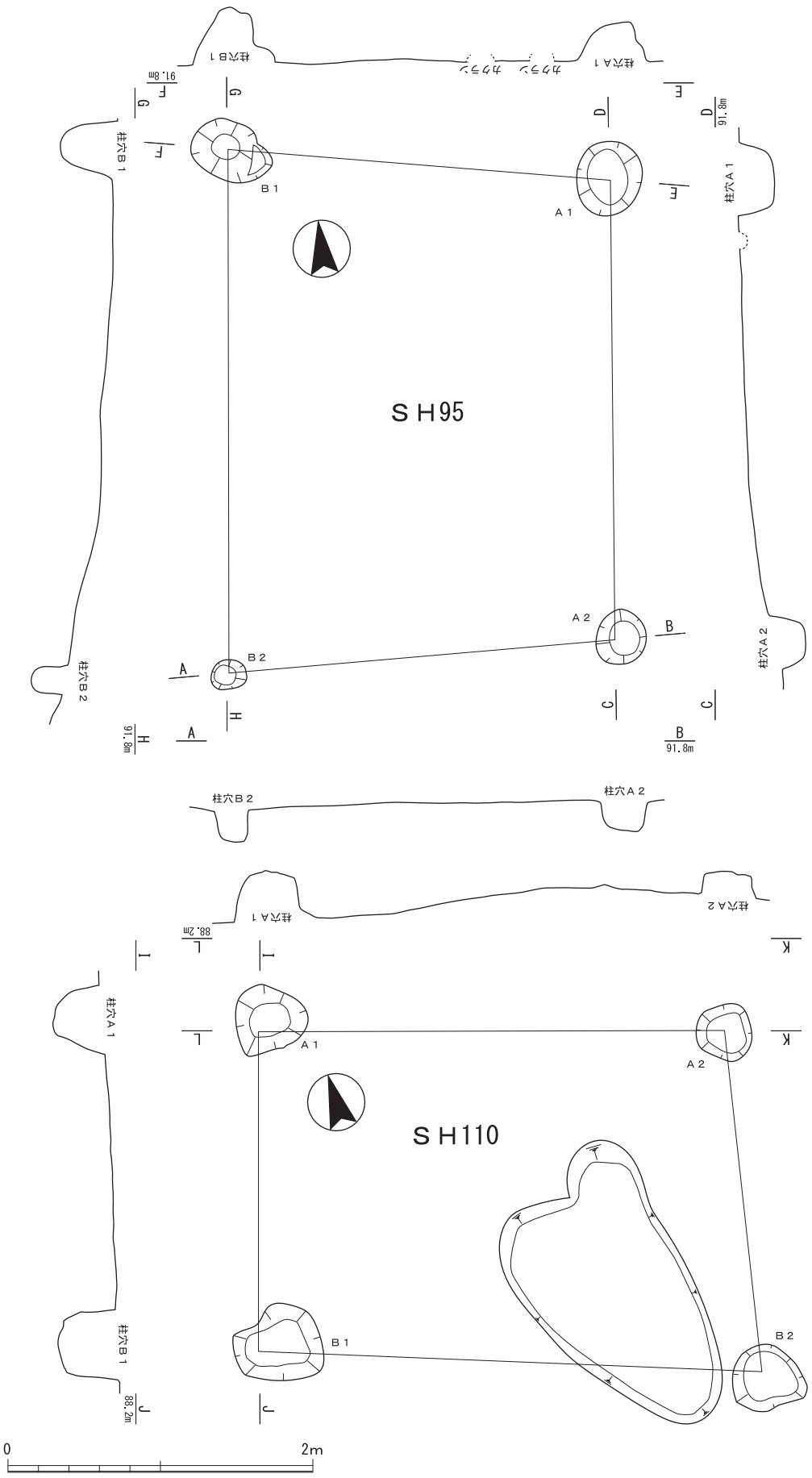
柱穴ＳＫ18・19はＳＢ86の柱穴とそれぞれ重複し、柱穴ＳＫ19の底面には２穴の深度の違いによる段差



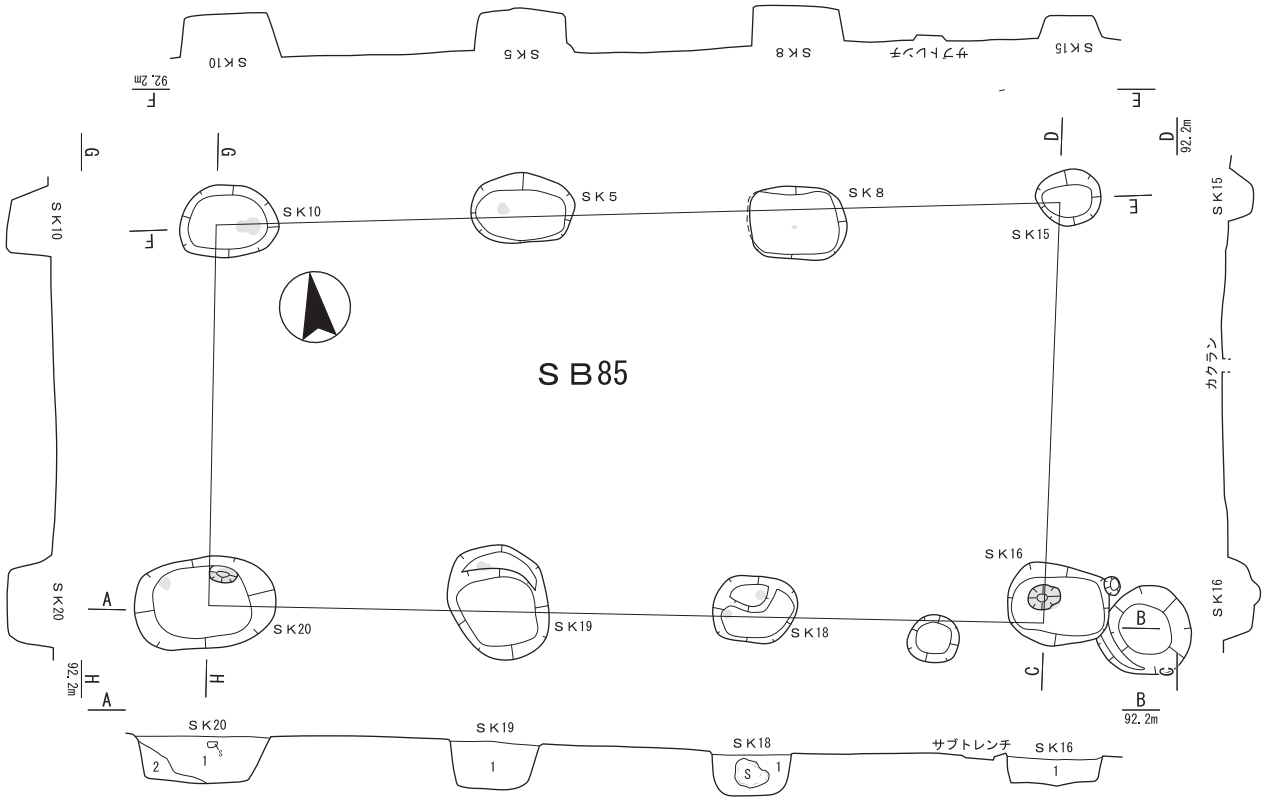
第26図　ＳＨ108石囲炉実測図（１：20）



第27図　ＳＨ93・109実測図（１：40）

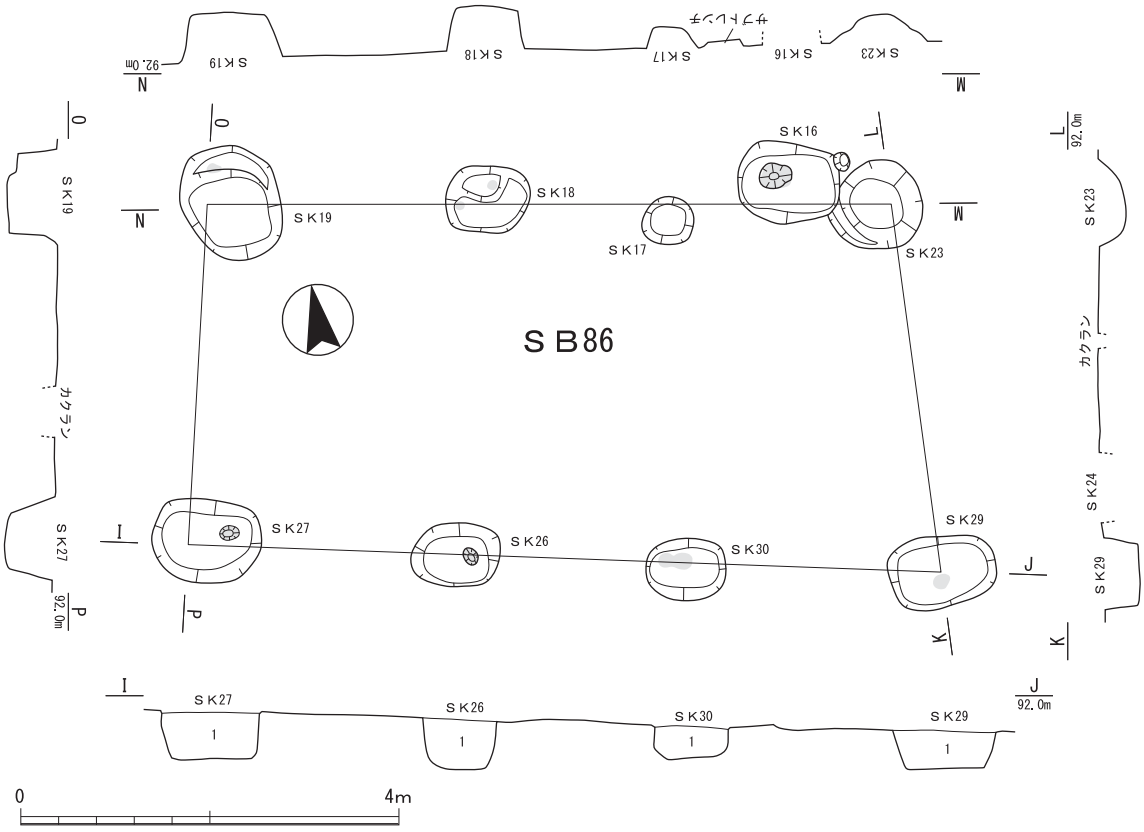


第28図　ＳＨ95・110実測図（１：40）

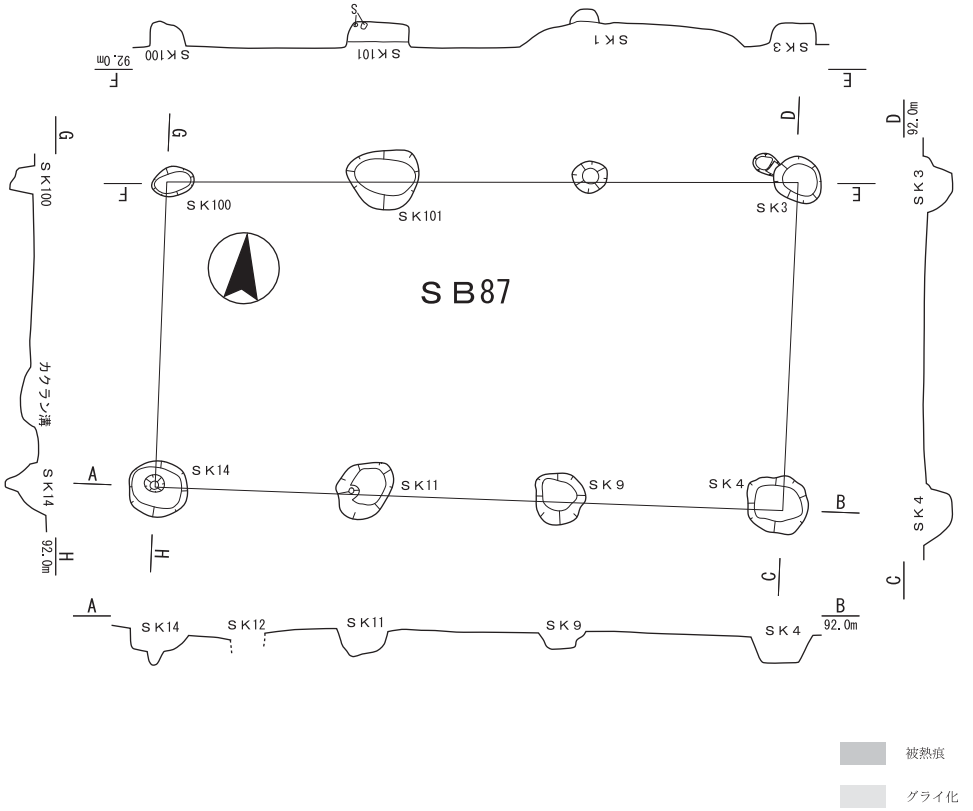


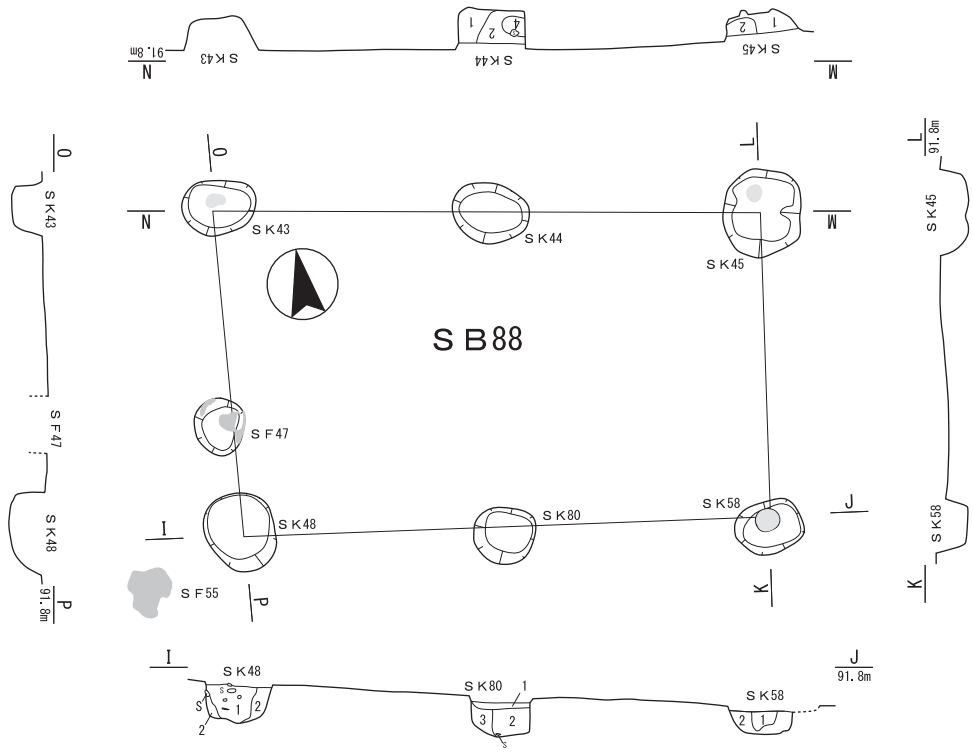
グライ化

ＳＢ85・86 主柱穴
1．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 黄褐色ブロックを少し含む）
2．10YR4/6 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）



第29図　ＳＢ85・86実測図（１：80）

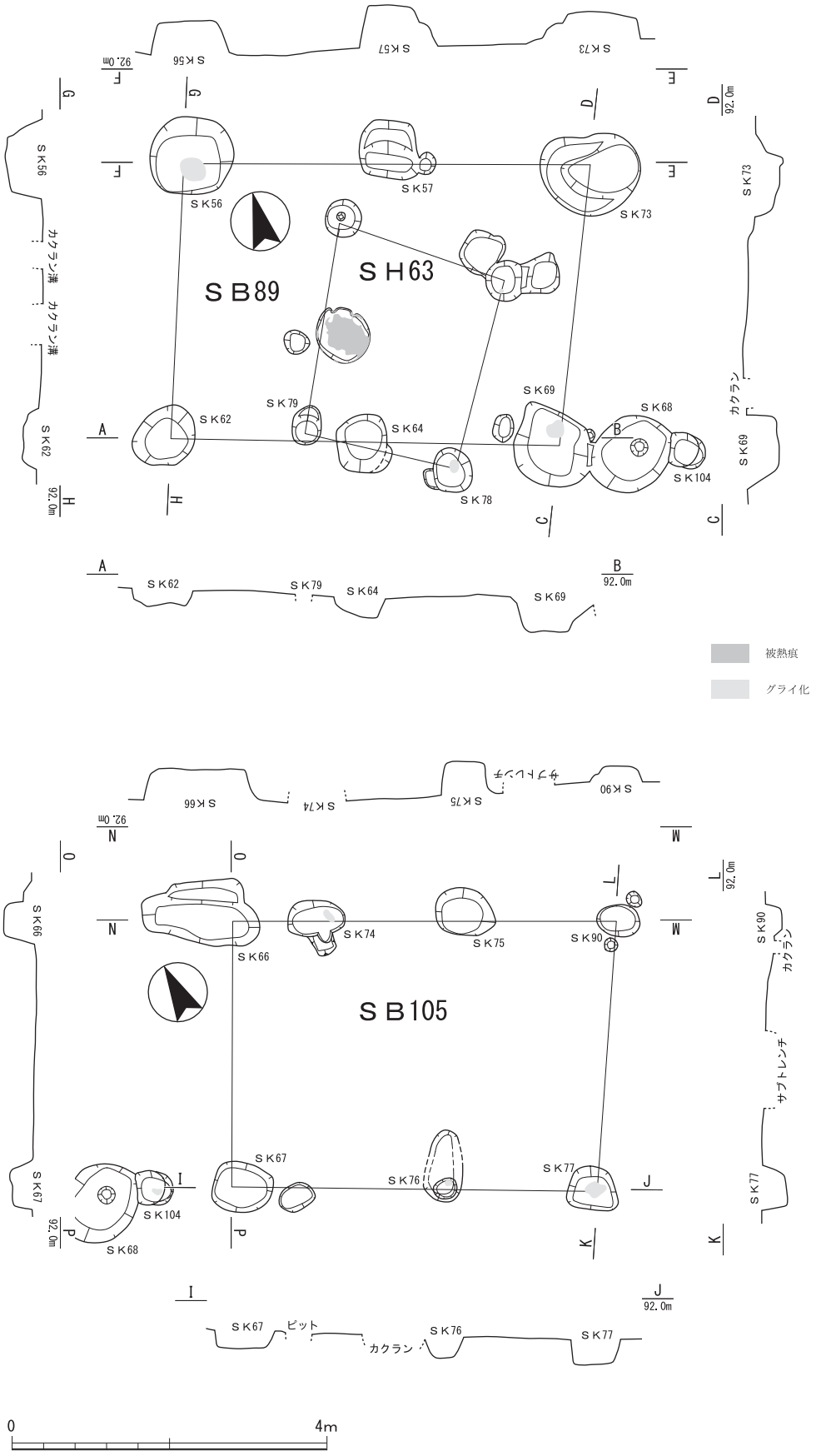




ＳＢ88 主柱穴
1．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 黄褐色ブロックを少し含む）
2．10YR4/4 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
3．10YR4/6 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
4．7.5YR5/6　明褐色ブロック

0　4m

第30図　ＳＢ87・88実測図（１：80）



第31図　ＳＢ89・105実測図（１：80）

がみられる。柱穴の底面には、柱痕跡と推定される土壌のグライ化が見られる。柱穴からは、縄文中期後半（４・５期）を中心とした土器（279～289）と石器類を検出した。

ＳＢ86（第29図）　西調査区の北西部で検出した。桁行３間・梁行１間の東西棟で、棟方向はW-13°-Nである。柱穴の上部は削平されているが、平面は楕円形を呈し、最大のもので長径1.2m程、深さ0.5m程を残す。建物規模は桁行が約7.2m、梁行が約3.7mを測る。柱間寸法は桁行が南北で違いがあり、北側は2.6m＋2.0m＋2.6m、南側は2.4m等間である。

柱穴ＳＫ18・19は、ＳＢ85の柱穴とそれぞれ同じ位置で重複している。柱穴の底面には柱痕跡と推定される土壌のグライ化が見られる。

柱穴から縄文中期後葉（４・５期）を中心とした土器（290～294）と石器類を検出した。

ＳＢ87（第30図）　西調査区の北西部で検出した。桁行３間・梁行１間の東西棟であり、棟方向はW-６°-Ｓである。柱穴は不整円形を呈し、最大径0.7m程、深さ0.5m程を残す。建物規模は桁行が約6.6m、梁行が約3.3mを測る。柱間寸法は桁行が3.3m等間である。大型土坑ＳＫ１と重複する柱穴を有し、新旧関係は柱穴が新しいと推定される。また、柱穴ＳＫ14の底面中央にはさらに0.2m深くなる小穴を確認した。

柱穴から縄文中期後葉（４期新～５期古）の土器（295～297）と石器類を検出した。

ＳＢ88（第30図）　西調査区の南西部で検出した。桁行２間・梁行１間の東西棟で、棟方向はW-９°-Nである。柱穴は楕円形を呈し、最大のもので長径0.9m程、深さ0.51m程を測る。建物規模は桁行が約6.0m、梁行が約3.4mを測る。柱間寸法は桁行が3.0m等間である。柱穴の底面には柱痕跡と推定される土壌のグライ化が見られる。また、柱穴ＳＫ58の一部に若干の被熱跡を確認した。柱穴ＳＫ43と48ライン上のＳＫ48寄りに、被熱跡のあるＳＦ47を検出した。建物の中心から桁側に外れていることから、本建物に関連する炉の可能性は低いと考える。

柱穴から縄文中期後半の土器（298・299）と石器類を検出した。

ＳＢ89（第31図）　西調査区の南西部で検出した。桁行２間・梁行１間の東西棟で、棟方向はW-17°-Nである。柱穴の上部は削平されているが、平面は楕円形を呈し、最大のもので長径1.2m程、深さ0.56m程を測る。建物規模は桁行が約5.2m、梁行が約3.6mである。柱間寸法は桁行が2.6m等間である。

柱穴の底面には柱痕跡と推定されるグライ土壌化が見られる。中でも柱穴ＳＫ56は最も残存が良く、径約0.3m、厚さ３㎝で黄褐色を呈している。柱穴ＳＫ69では、上層から中層にかけて深鉢（327等）を検出した。このほかにも、中期後葉（４期新～５期新）の土器を検出した。

屋内炉を有するＳＨ63と重複するが、新旧は確認できない。

ＳＢ105（第31図）　西調査区の南西部で検出した。桁行２間・梁行１間の東西棟で、棟方向はW-27°-Nである。柱穴はおおむね楕円形を呈し、長径0.5～1.5m程、深さ0.42m程を測る。建物規模は桁行が4.9m、梁行が3.4mを測る。柱間寸法は桁行が3.0m＋1.8mである。柱穴ＳＫ76は後世の撹乱により一部が失われている。柱穴の底面には柱痕跡と推定される土壌のグライ化が見られる。柱穴からは、縄文中期後葉（４～５期）の土器（333～338）を検出した。

Ｃ 陥穴

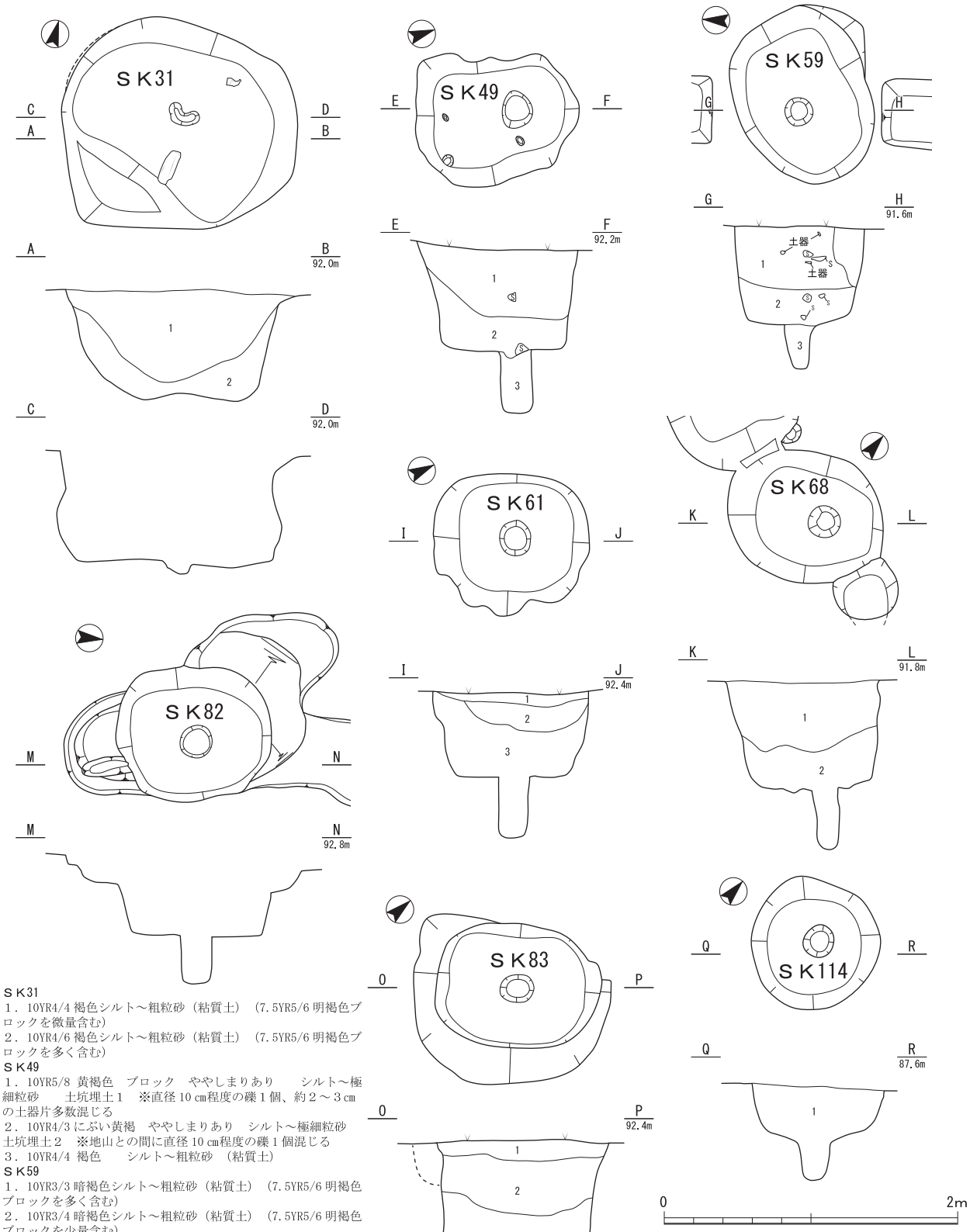
西調査区で７基（ＳＫ31・49・59・61・68・82・83）、東調査区で２基（ＳＫ113・114）を検出した。

いずれの陥穴からも縄文中期中葉から後葉の土器を検出したが、遺構との共伴関係は判然としない。しかし、全調査区から検出した遺構や遺物はほとんどが縄文中期であることから、ここでは陥穴の時期も縄文時代中期と推定しておく。

ＳＫ31（第32図）　西調査区の北西部で検出した。平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.65m、短径1.39m、長径0.84mを残していた。底部の中央で検出した長径0.2m程、深さ0.1m程の不定形なピットは、逆茂木の痕跡の可能性がある。

埋土からは、縄文時代中期後葉（２～５期）の土器（339～342）を検出した。

ＳＫ49（第32図）　西調査区の中央西部で検出した。



ＳＫ31
１．10YR4/4 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを微量含む）
２．10YR4/6 褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
ＳＫ49
１．10YR5/8 黄褐色　ブロック　ややしまりあり　　シルト～極細粒砂　　土坑埋土１　※直径 10 ㎝程度の礫１個、約２～３㎝の土器片多数混じる
２．10YR4/3 にぶい黄褐　ややしまりあり　シルト～極細粒砂　土坑埋土２　※地山との間に直径 10 ㎝程度の礫１個混じる
３．10YR4/4 褐色　　シルト～粗粒砂　（粘質土）
ＳＫ59
１．10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）
２．10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを少量含む）
３．10YR4/4 褐色　　シルト～粗粒砂　（粘質土）
ＳＫ61
１．7.5YR4/3 褐色　ややしまりあり　細粒砂～極細粒砂
２．10YR4/3 にぶい黄褐色　ややしまりあり　シルト～極細粒砂
３．10YR4/4 褐色　ややしまりあり　シルト～極細粒砂
※いずれの層にも長径１から２の土器片混じる
ＳＫ68
１．10YR4/4 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（炭化物含む）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを微量含む）
２．10YR4/4 褐色　シルト～粗粒砂（粘質強い）（明褐色ブロックを含まない）

ＳＫ83
１．10YR4/4 褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多く含む）（風倒木カクラン埋土がまじっている）
２．10YR3/4 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを多含む）
３．10YR3/3 暗褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）（7.5YR5/6 明褐色ブロックを少量含む）
ＳＫ114
１．10YR2/3 黒褐色　シルト～粗粒砂（粘質土）

第32図　ＳＫ31・49・59・61・68・82・83・114実測図（１：40）

平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.10m、短径0.85m、深さ1.1mを測る。底部の中央付近で検出した径0.25m、深さ0.15mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（５期）の土器１点（343）を検出した。

ＳＫ59（第32図）　西調査区の中央南部で検出した。平面は楕円形を呈し、長径1.21m、短径0.9m、深さ0.99mを測る。底部のほぼ中央で検出した径0.2m、深さ0.42mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（４期新～５期古）の土器（344～347）を検出した。

ＳＫ61（第32図）　西調査区の南西部で検出した。平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.06m、短径0.95m、深さ1.01mを測る。底部の中央で検出した径0.2m、深さ0.42mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（４期新～５期古）を中心とした土器（348～355）を検出した。

ＳＫ68（第32図）　西調査区の南西部、ＳＢ89とＳＢ105の間で検出した。平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.14m、短径0.9m、深さ1.15mを測る。底部ほぼ中央の径0.2m、深さ0.4mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（４期新～５期古）を中心とした土器（356～361）を検出した。

ＳＫ82（第32図）　西調査区の中央南部で検出した。

平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.06m、短径0.92m、深さ0.9mを測る。底部の中央で検出した径0.2m、深さ0.3mのピットは、逆茂木痕と推定した。

遺物は検出できなかった。

ＳＫ83（第32図）　西調査区の中央西部で検出した。

平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.13m、短径0.84m、深さ1.4mを測る。底部中央で検出した径0.16m、深さ0.45mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（４期新～５期古）の土器（362～365）を検出した。

ＳＫ113　東調査区の中央部、ＳＨ108の東で検出した。北西部は撹乱されているが平面は楕円形を呈し、残存部は長径0.94m、短径0.80m、深さ0.84mを測る。底部に杭穴は見られなかった。規模や形状から陥穴と推定した。

埋土からは、縄文時代中期中葉（２期）から後期初頭の土器（366～371）と、石器（422）を検出した。

ＳＫ114（第32図）　東調査区の北東部で検出した。

平面は円形を呈し、径0.95m、深さ0.64mを測る。底部の中央で確認した径0.28m、深さ0.28mのピットは、逆茂木痕と推定した。

遺物は検出できなかった。

Ｄ 土坑等

性格が不明である大小の土坑や被熱跡を東西調査区で確認した。その中で特徴のある遺構をいくつか記す。

ＳＫ１（第33図）　西調査区の北西部で検出した。

検出中はその規模から竪穴住居と推定していたが、完掘すると大型土坑とせざるをえない形状であった。土坑の性格は不明である。

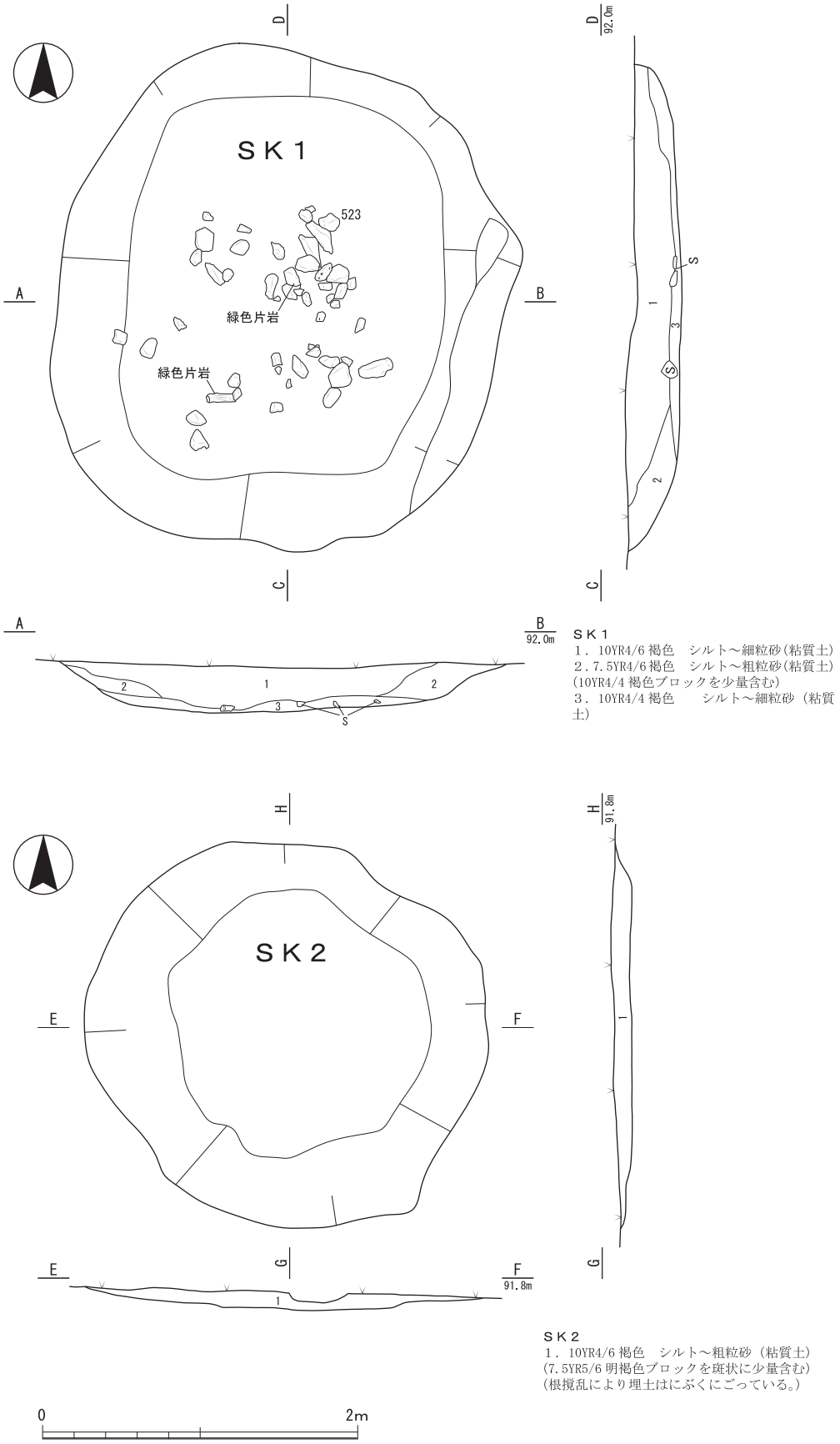
平面は楕円形を呈し、残存部は長径3.22m、短径2.82m、深0.32mを測る。底部は平らで、立ち上がりがゆるやかな形状を呈する。この特徴は、縄文時代早期の竪穴住居と類似する。しかし、土坑の周縁で柱穴は確認できず、炉も検出できなかった。さらに、出土土器が縄文中期のみであった。したがって、早期の竪穴住居ではなく、中期の土坑と判断した。ＳＫ１の底部で、ＳＢ87の柱穴を検出した。これらの新旧関係は、ＳＫ１が古く、ＳＢ87が新しいと推察される。

埋土から、縄文時代中期後半の土器（372・373）と石器類や剥片・砕片を検出した。また、遺跡周辺からは採集できない緑色片岩（約20㎝前後）を２点検出したが、これらは石斧用の石材としても利用可能なものである。

ＳＫ２（第33図）　西調査区の北西部で検出した。

検出中はその規模から、竪穴住居と推定していた。しかし完掘すると、竪穴住居ではなく大型の土坑とせざるをえない形状であった。性格は不明である。

平面は不定形な楕円を呈し、残存部は長径2.56m、短径2.42m、深0.18mを測る。壁の傾斜がゆるやかなため、底部の面積は少ない。柱穴や炉は確認できなかった。根の撹乱により埋土はにぶく濁っており、縄



第33図　ＳＫ１・２実測図（１：40）

文時代中期後半の土器１点（374）と剥片を検出した。

ＳＫ13　西調査区の北西部で検出した。平面は不定形で、長径0.85m、短径0.42m、深さ0.5mを測る。

埋土から、縄文中期後葉の土器（375～377）を検出した。

ＳＦ38　西調査区の南西部で検出した。遺構の全体形は不明で、径0.5m程の範囲に暗褐色粘質土の埋土と赤褐色の被熱跡を確認した。周囲に竪穴住居は確認できず、住居の屋内炉とは考えにくい。

出土遺物はない。

ＳＦ47（第34図）　西調査区の北西部で検出した。

掘立柱建物ＳＢ88の柱穴、ＳＫ48の北およそ１ｍに位置する。平面は略楕円形を呈する土坑で、長径0.59cm、短径0.53cm、深さ0.06mを測る。土坑の中央上部および東端に厚さ６cm程の被熱跡を確認した。ＳＢ88を構成する柱穴や炉との可能性を考えたが、相当する位置から外れるため、別の遺構とした。

出土遺物はない。

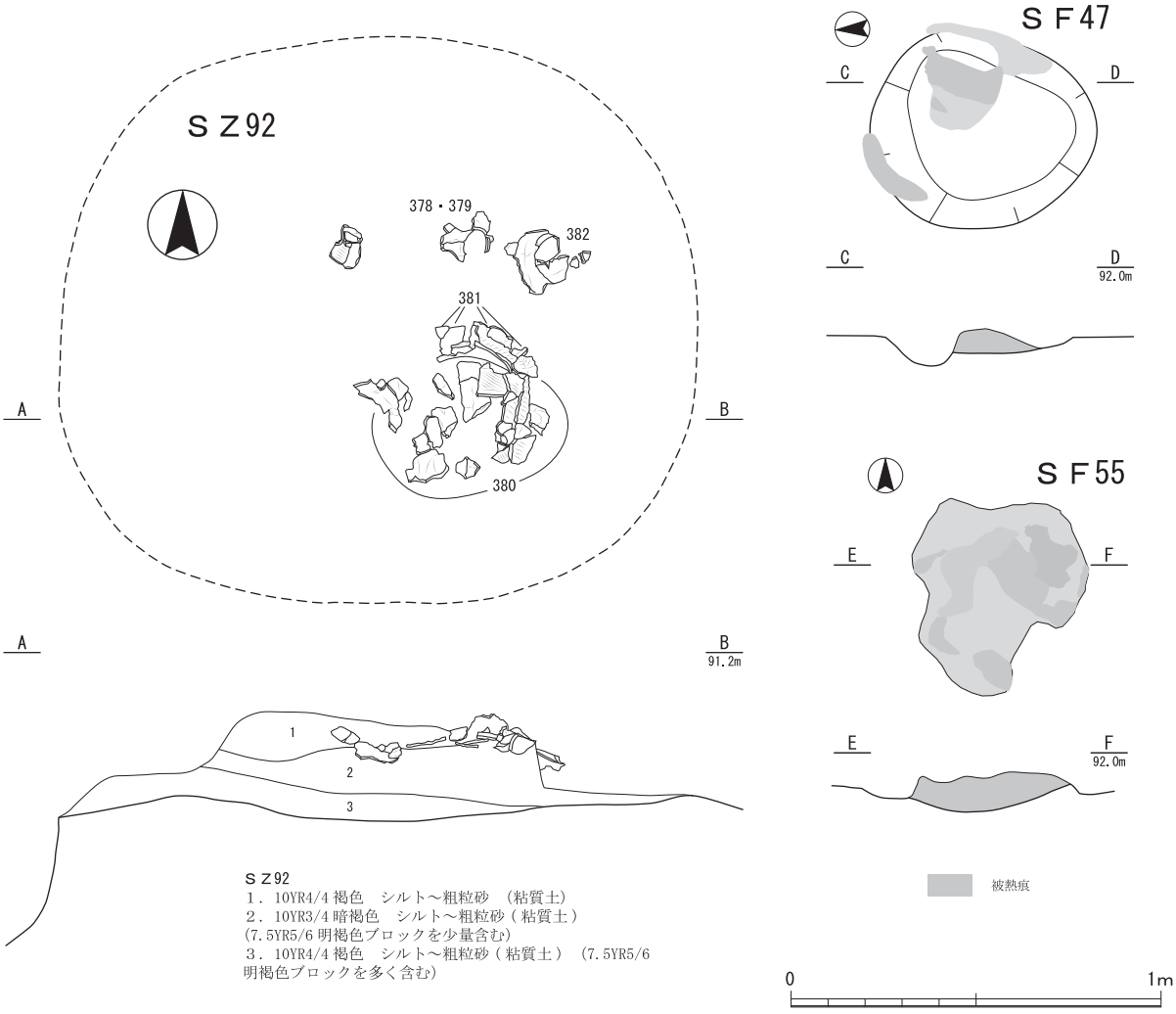
ＳＦ55（第34図）　西調査区の北西部で検出した。

前述のＳＢ88の柱穴、ＳＫ48の南西およそ１ｍに位置する。土坑状の窪みはなく、厚さ0.1m程の被熱跡のみが0.5m程の範囲に広がる。

ＳＦ70　西調査区の南西部で検出した。0.5m程の範囲に被熱跡のみが僅かに広がる。厚さは0.02mである。周囲に竪穴住居等はなく、用途は不明である。

ＳＺ92（第34図）　西調査区の北東部で検出した。

他の遺構検出面より上位で検出した。明確な遺構の範囲は確定できず、径1.7m程の範囲に、暗褐色粘質土の埋土が広がる。柱穴や炉に相当するものは無い。埋土の下位から縄文時代中期後葉の土器（380）を検出した。土器は口縁部を含む１個体の１/３程



第34図　ＳＦ47・55・ＳＺ92実測図（１：20）

が残存し、出土土器全体の内でも残りの良い例である。

ＳＫ103　西調査区の南西部で検出した。ＳＦ53の東側に接している。平面は略楕円形を呈する土坑で、北東側が僅かにすぼまる。長さ1.54m、深さ0.55mを測る。隣接する煙道付炉穴と形状は類似するが、被熱跡はない。暗褐色粘質土の埋土の中に多量の炭化物を検出した。放射性炭素年代測定の結果は、4370±20を示す。出土遺物はない。

ＳＫ112　東調査区の南東部で検出した。平面は楕円形を呈し、長径1.09m、短径1.08m、深さ0.24mである。埋土から縄文中期後葉の深鉢（383・384）を検出した。（中村）

【註】

①纐纈茂・髙橋健太郎「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』（株式会社アム・プロモーション　2008年）

遺構番号		次数	主なグリッド	性格	時代	規模			備考（新旧関係・特徴・出土遺物等）
						長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	
ＳＫ１		２次	A-S25・T25	大型土坑	縄文中期	長径3.22	短径2.82	0.32	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ２		２次	B-S１	大型土坑	縄文中期	長径2.56	短径2.42	0.18	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ３	（ＳＢ87）	２次	A-S25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.50	短径0.48	0.26	縄文土器
ＳＫ４	（ＳＢ87）	２次	A-T25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.63	短径0.61	0.40	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ５	（ＳＢ85）	２次	A-T25, B-T１	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.10	短径0.74	0.48	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ６		２次	B-T２	土坑	縄文中期	長径1.08	短径0.91	0.14	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ７		２次	B-T２	土坑	縄文中期	長径0.83	短径0.66	0.10	
ＳＫ８	（ＳＢ85）	２次	B-T１	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.03	短径0.76	0.43	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ９	（ＳＢ87）	２次	A-T25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.56	短径0.51	0.23	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ10	（ＳＢ85）	２次	A-T25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.05	短径0.76	0.48	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ11	（ＳＢ87）	２次	A-T24	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.70	短径0.54	0.30	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ12		２次	A-T24	土坑	縄文中期	長径0.65	短径0.42	0.29	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ13		２次	A-T24	土坑	縄文中期	長径0.85	短径0.42	0.15	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ14	（ＳＢ87）	２次	A-T24	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.63	短径0.59	0.32	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ15	（ＳＢ85）	２次	B-T２・U２	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.69	短径0.61	0.26	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ16	（ＳＢ85）	２次	B-U２・V２	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.08	短径0.83	0.38	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ17	（ＳＢ86）	２次	B-U１・V１	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.55	短径0.50	0.25	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ18	（ＳＢ85・86）	２次	B-U１・V１	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.89	短径0.70	0.50	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ19	（ＳＢ85・86）	２次	A-U25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.21	短径1.05	0.55	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ20	（ＳＢ85）	２次	A-U24・25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.48	短径0.97	0.53	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ21		２次	A-U24	土坑	縄文中期	長径0.68	短径0.56	0.18	縄文土器
ＳＫ22		２次	A-U22	土坑	縄文中期	長径0.64	短径0.53	0.27	縄文土器
ＳＫ23	（ＳＢ86）	２次	B-V２	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.00	短径0.93	0.30	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ24		２次	B-V２	土坑	縄文中期	長径1.32	短径0.76	0.08	
ＳＫ25		２次	B-V１	土坑	縄文中期	長径1.08	短径0.56	0.14	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ26	（ＳＢ86）	２次	B-V１	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.94	短径0.67	0.60	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ27	（ＳＢ86）	２次	A-V25	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.16	短径0.87	0.55	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ28		２次	A-V22	撹乱	縄文中期	長径1.60	短径0.92	0.03	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ29	（ＳＢ86）	２次	B-W２	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径1.14	短径0.74	0.41	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ30	（ＳＢ86）	２次	B-V１・W１	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.83	短径0.65	0.37	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ31		２次	A-X24	陥穴	縄文中期	長径1.65	短径1.39	0.84	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ32		２次	A-X20・21	土坑	縄文中期	長径0.86	短径0.75	0.15	
ＳＫ33		２次	C-A23	撹乱	縄文中期	長径1.26	短径0.95	0.16	縄文土器
ＳＫ34		２次	C-A25	撹乱	縄文中期	長径1.72	短径1.08	0.42	
ＳＫ35		２次	C-B25, D-B１	土坑	縄文中期	長径0.86	短径0.78	0.32	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ36		２次	C-B24, C24・25	竪穴住居	縄文中期	－	－	－	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ37		２次	D-B１, C１	土坑	縄文中期	長径1.12	短径0.89	0.25	
ＳＦ38		２次	D-D１・２	被熱跡	縄文中期	－	－	－	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ39		２次	D-C１	撹乱	縄文中期	長径1.20	短径0.78	0.02	縄文土器
ＳＫ40		２次	C-B20・21～C20・21	撹乱	縄文中期	長径1.00	短径0.83	0.23	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ41		２次	C-B21	撹乱	縄文中期	長径0.80	短径0.56	0.24	縄文土器
ＳＫ42		２次	C-C20・21～D20・21	撹乱	縄文中期	長径1.69	短径0.98	0.27	
ＳＫ43	（ＳＢ88）	２次	C-C24, D24	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.78	短径0.59	0.40	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ44	（ＳＢ88）	２次	C-D24	掘立柱建物柱穴	縄文中期	長径0.81	短径0.64	0.51	石器（剥片及び砕片）

第１表　遺構一覧表（１）

遺構番号		次数	主なグリッド	性格	時代	規模			備考（新旧関係・特徴・出土遺物等）
						長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	
ＳＫ45	（ＳＢ88）	２次	Ｃ−Ｄ25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.93	短径0.81	0.33	縄文土器
ＳＫ46		２次	Ｄ−Ｄ1	撹乱	縄文中期	長径1.10	短径0.68	0.19	
ＳＦ47		２次	Ｃ−Ｄ23・24	被熱跡	縄文中期	長径0.59	短径0.53	0.06	
ＳＫ48	（ＳＢ88）	２次	Ｃ−Ｄ23・24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.83	短径0.75	0.44	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ49		２次	Ｃ−Ｄ21・22	陥穴	縄文中期	長径1.10	短径0.85	1.10	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ50		２次	Ｃ−Ｄ19・20, Ｅ20・21	竪穴住居	縄文中期	長径4.10	短径4.10	0.26	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ51		２次	Ｃ−Ｄ21	集石炉	縄文早期	径0.62		0.16	ＳＦ96重複・縄文土器
ＳＦ52		２次	Ｃ−Ｄ21	煙道付炉穴	縄文早期	長径0.92	短径0.56	0.16	ＳＦ53・54・99重複・縄文土器
ＳＦ53		２次	Ｃ−Ｄ21	集石炉	縄文早期	径0.95		0.18	ＳＦ52・ＳＦ54・ＳＦ99・縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ54		２次	Ｃ−Ｅ21	煙道付炉穴	縄文早期	長径1.46	短径0.58	0.22	ＳＦ52・53・99重複・縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ55		２次	Ｃ−Ｄ23, Ｆ23	被熱跡	縄文中期	−	−	−	
ＳＫ56	（ＳＢ89）	２次	Ｃ−Ｅ24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.06	短径0.97	0.48	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ57	（ＳＢ89）	２次	Ｃ−Ｅ24, Ｆ24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.89	短径0.72	0.56	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ58	（ＳＢ88）	２次	Ｃ−Ｅ25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.72	短径0.55	0.33	縄文土器
ＳＫ59		２次	Ｄ−Ｅ１・２	陥穴	縄文中期	長径1.21	短径0.90	0.99	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ60		２次	Ｂ−Ｙ２	煙道付炉穴	縄文早期	長径1.56	短径0.72	0.10	
ＳＫ61		２次	Ｃ−Ｅ19・20	陥穴	縄文中期	長径1.06	短径0.95	1.01	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ62	（ＳＢ89）	２次	Ｃ−Ｆ23	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.85	短径0.70	0.22	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ63		２次	Ｃ−Ｆ24・25, Ｇ25	竪穴住居 炉	縄文中期	−	−	−	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ64	（ＳＢ89）	２次	Ｃ−Ｆ24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.79	短径0.63	0.27	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ65		２次	Ｃ−Ｆ24	撹乱	縄文中期	長径0.85	短径0.72	0.39	縄文土器
ＳＫ66	（ＳＢ105）	２次	Ｃ−Ｆ25, Ｄ−Ｆ１	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.52	短径0.84	0.41	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ67	（ＳＢ105）	２次	Ｃ−Ｇ25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径8.1	短径6.4	0.27	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ68		２次	Ｃ−Ｆ25, Ｇ25	陥穴	縄文中期	長径1.14	短径0.90	1.15	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ69	（ＳＢ89）	２次	Ｃ−Ｆ25, Ｇ25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.18	短径0.98	0.48	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ70		２次	Ｃ−Ｆ23	被熱跡	縄文中期	−	−	0.02	
ＳＦ71		２次	Ｃ−Ｆ19, Ｇ19	煙道付炉穴	縄文早期	長径1.1	短径0.62	0.10	縄文土器
ＳＨ72		２次	Ｃ−Ｆ15・16, Ｇ16	竪穴住居 炉	縄文中期	−	−	−	
ＳＫ73	（ＳＢ89）	２次	Ｃ−Ｆ25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.28	短径1.05	0.36	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ74		２次	Ｄ−Ｆ１	土坑	縄文中期	長径0.72	短径0.44	0.30	石器（剥片及び砕片）
ＳＫ75	（ＳＢ105）	２次	Ｄ−Ｆ１	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.79	短径0.59	0.42	縄文土器
ＳＫ76	（ＳＢ105）	２次	Ｄ−Ｇ１	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.91	短径0.49	0.29	縄文土器
ＳＫ77	（ＳＢ105）	２次	Ｄ−Ｇ１	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.69	短径0.49	0.32	縄文土器
ＳＫ78	（ＳＨ63）	２次	Ｃ−Ｆ24	竪穴住居 柱穴	縄文中期	長径0.58	短径0.49	0.47	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ79	（ＳＨ63）	２次	Ｃ−Ｆ24	竪穴住居 柱穴	縄文中期	長径0.50	短径0.37	0.43	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ80	（ＳＢ88）	２次	Ｃ−Ｄ24, Ｅ24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.64	短径0.60	0.44	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ81		２次	Ｄ−Ｅ１, Ｆ１	撹乱	縄文中期	長径1.80	短径0.84	0.35	縄文土器
ＳＫ82		２次	Ｃ−Ａ18	陥穴	縄文中期	長径1.06	短径0.92	0.9	縄文土器
ＳＫ83		２次	Ｃ−Ｆ18・Ｇ18	陥穴	縄文中期	長径1.13	短径0.84	1.40	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ84		２次	Ｃ−Ｇ21・22, Ｈ21・22	竪穴住居	縄文中期	長径4.2	短径3.90	0.45	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＢ85		２次	Ａ−Ｔ25〜Ｂ−Ｔ３, Ａ−Ｕ24〜Ｂ−Ｖ２	掘立柱建物	縄文中期	桁行9	梁行4.1	−	
ＳＢ86		２次	Ａ−Ｕ25〜Ｂ−Ｖ２, Ａ−Ｖ25〜Ｂ−Ｗ２	掘立柱建物	縄文中期	桁行7.2	梁行3.7	−	
ＳＢ87		２次	Ａ−Ｓ24・25, Ｔ24・25	掘立柱建物	縄文中期	桁行6.6	梁行3.4	−	
ＳＢ88		２次	Ｃ−Ｃ24, Ｄ23〜25, Ｅ24・25	掘立柱建物	縄文中期	桁行6.0	梁行3.4	−	

第２表　遺構一覧表（２）

遺構番号		次数	主なグリッド	性格	時代	規模			備考（新旧関係・特徴・出土遺物等）
						長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	
ＳＢ89		２次	C−E24, F23〜25, G25	掘立柱建物	縄文中期	桁行5.2	梁行3.5	−	
ＳＫ90	（ＳＢ105）	２次	D−Ｆ２，Ｇ２	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.55	短径0.40	0.18	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ91		２次	B−Ｘ５，Ｙ５	煙道付炉穴	縄文早期	長径0.85	短径0.60	0.05	ＳＦ102重複・石器（剥片及び砕片）
ＳZ92		２次	D−Ｃ４	土坑	縄文中期	−	−	−	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ93		２次	D−Ｆ17, G17	竪穴住居 炉	縄文中期	−	−	−	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ94		２次	C−B24, C24	竪穴住居	縄文中期	−	−	−	
ＳＨ95		２次	C−G23・24, H23	竪穴住居	縄文中期	−	−	−	
ＳＦ96		２次	C−D21, E21	煙道付炉穴	縄文早期	長径0.85	短径0.45	0.06	
ＳＦ97		２次	C−D21	煙道付炉穴	縄文早期	長径0.85	短径0.76	0.11	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＦ98		２次	C−E20・21	煙道付炉穴	縄文早期	長径1.25	短径0.70	0.26	ＳＦ97重複
ＳＦ99		２次	C−D21	煙道付炉穴	縄文早期	長径1.03	短径0.58	0.23	ＳＦ52・53・54重複
ＳＫ100	（ＳＢ87）	２次	A−S24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.44	短径0.31	0.25	
ＳＫ101	（ＳＢ87）	２次	A−S24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.77	短径0.62	0.28	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ102		２次	B−Ｙ５	煙道付炉穴	縄文早期	長径1.10	短径0.76	0.2	ＳＦ91重複
ＳＫ103		２次	C−D21	ＳＦ53 東土坑	縄文中期	長径1.54	−	0.55	
ＳＫ104		２次	C−G25	ＳＫ68 東土坑	縄文中期	長径0.47	短径0.43	0.37	
ＳＢ105		２次	C−Ｆ25〜D−Ｆ２， C−G25〜D−Ｇ１	掘立柱建物	縄文中期	桁行4.8	梁行3.4	−	
ＳＨ106		３次	E−U10・11, V10・11	竪穴住居	縄文中期	3.8	3.7	0.19	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ107		３次	E−Ｖ９・10, W９・10	竪穴住居	縄文中期	4.6	4.3以上	0.52	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ108		３次	E−W10・11, X10・11	竪穴住居	縄文中期	4.8以上	5.2	0.09	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ109		３次	E−W12・13	竪穴住居	縄文中期	−	−	−	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＨ110		３次	E−S10, T10・11	竪穴住居	縄文中期	−	−	−	
ＳＫ111		３次	E−X14	土坑	縄文中期	0.68	0.55	0.47	
ＳＫ112		３次	F−B15, C15	土坑	縄文中期	1.09	1.08	0.24	縄文土器
ＳＫ113		３次	E−X11・12	陥穴	縄文中期	長径0.94	短径0.80	0.47	縄文土器・石器（剥片及び砕片）
ＳＫ114		３次	E−S14	陥穴	縄文中期	長径0.95	短径0.95	0.64	

第３表　遺構一覧表（３）

遺構名	方　位	焼 土 部 位	出 土 遺 物	新 旧 関 係
ＳＦ52	N−22°−E	燃焼坑〜煙道の底面	押型文土器（１）	ＳＦ52⇒ＳＦ99⇒ＳＦ53
ＳＦ54	N−22°−E	燃焼坑の側壁	土器細片（時期不明）	ＳＦ54⇒ＳＦ53
ＳＦ60	S−21°−W	燃焼坑〜煙道の底面・壁面		
ＳＦ71	N−５°−W	燃焼坑〜煙道の底面・壁面		
ＳＦ91	S−５°−E	燃焼坑〜煙道の底面		ＳＦ91⇒ＳＦ102
ＳＦ96	N−８°−E	燃焼坑〜煙道の底面		ＳＦ96⇒ＳＦ51
ＳＦ97	N−14°−E	燃焼坑〜煙道の底面		ＳＦ96とは不明
ＳＦ98	N−14°−E	燃焼坑〜煙道の底面・壁面		ＳＦ97⇒ＳＦ98
ＳＦ99	N−22°−E	燃焼坑〜煙道の底面		ＳＦ99⇒ＳＦ53
ＳＦ102	N−25°−W	燃焼坑〜煙道の底面		

第４表　煙道付炉穴一覧表（方位は燃焼坑から煙出坑を見た方向）

遺構番号	グリッド	ﾋﾟｯﾄ番号	方位	規模 上：間、下：m	桁行柱間 m	梁行柱間 m	最大残存柱穴規模 m		その他
							大きさ	深さ	
ＳＢ85	ＡＴ25, ＢＴ１	ＳＫ５	W-８°-N	3×1 8.96×4.19	3.0+2.78+3.18	4.19	長径1.1×短径0.74	0.48	ＳＢ86と重複
	ＢＴ１	ＳＫ８					長径1.03×短径0.76	0.43	
	ＡＴ25	ＳＫ10					長径1.05×短径0.76	0.48	
	ＢＴ２	ＳＫ15					長径0.69×短径0.61	0.26	
	ＢＵ２, ＢＶ２	ＳＫ16					長径1.08×短径0.83	0.38	
	ＢＵ１, ＢＶ１	ＳＫ18					長径0.89×短径0.70	0.5	
	ＡＵ25	ＳＫ19					長径1.21×短径1.05	0.55	
	ＡＵ24, ＡＵ25	ＳＫ20					長径1.48×短径0.97	0.53	
ＳＢ86	ＢＶ１	ＳＫ17	W-13°-N	3×1 7.2×3.7	北 2.6+2.0+2.6 南 2.4+2.4+2.4	3.9	長径0.55×短径0.50	0.25	ＳＢ85と重複
	ＡＵ１, ＢＶ１	ＳＫ18					長径0.89×短径0.70	0.5	
	ＡＵ25	ＳＫ19					長径1.21×短径1.05	0.55	
	ＢＶ２	ＳＫ23					長径1.00×短径0.93	0.3	
	ＢＶ１	ＳＫ26					長径0.94×短径0.67	0.6	
	ＡＶ25	ＳＫ27					長径1.16×短径0.87	0.55	
	ＢＷ２	ＳＫ29					長径1.14×短径0.74	0.41	
	ＢＶ１, ＢＷ１	ＳＫ30					長径0.83×短径0.65	0.37	
ＳＢ87	ＡＳ25	ＳＫ３	W-６°-S	3×1 6.62×3.3	2.32+2.1+2.2	3.3	長径0.50×短径0.48	0.26	
	ＡＴ25	ＳＫ４					長径0.63×短径0.61	0.4	
	ＡＴ25	ＳＫ９					長径0.56×短径0.51	0.23	
	ＡＴ24	ＳＫ11					長径0.70×短径0.54	0.3	
	ＡＴ24	ＳＫ14					長径0.63×短径0.59	0.32	
	ＡＳ24	ＳＫ100					長径0.44×短径0.31	0.25	
	ＡＳ24	ＳＫ101					長径0.77×短径0.62	0.28	
ＳＢ88	ＣＤ24	ＳＫ43	W-９°-N	3×1 5.78×3.4	2.8+2.98	3.4	長径0.78×短径0.59	0.4	
	ＣＤ24, ＣＤ25	ＳＫ44					長径0.81×短径0.64	0.51	
	ＣＤ25	ＳＫ45					長径0.93×短径0.81	0.33	
	ＣＤ24	ＳＫ48					長径0.83×短径0.75	0.44	
	ＣＥ25	ＳＫ58					長径0.72×短径0.55	0.33	
	ＣＤ24, ＣＥ24	ＳＫ80					長径0.64×短径0.60	0.44	
ＳＢ89	ＣＥ24	ＳＫ56	W-17°-N	3×1 5.2×3.6	2.6+2.6	3.6	長径1.06×短径0.97	0.48	ＳＨ63と重複
	ＣＥ24, ＣＥ25	ＳＫ57					長径0.89×短径0.72	0.56	
	ＣＦ23, ＣＦ24	ＳＫ62					長径0.85×短径0.70	0.22	
	ＣＦ24	ＳＫ64					長径0.79×短径0.63	0.27	
	ＣＦ25, ＣＧ25	ＳＫ69					長径1.18×短径0.98	0.48	
	ＣＥ25, ＣＦ25	ＳＫ73					長径1.28×短径1.05	0.36	
ＳＢ105	ＣＦ25, ＤＦ１	ＳＫ66	W-27°-N	2×1 4.9×3.4	2.9+2.0	3.4	長径1.52×短径0.84	0.41	
	ＣＧ25	ＳＫ67					長径0.81×短径6.40	0.27	
	ＤＦ１	ＳＫ75					長径0.79×短径0.59	0.42	
	ＤＧ１	ＳＫ76					長径0.91×短径0.49	0.29	
	ＤＧ１	ＳＫ77					長径0.69×短径0.49	0.32	
	ＤＦ２	ＳＫ90					長径0.55×短径0.40	0.18	

第５表　掘立柱建物一覧表（長辺を桁行と仮定して便宜的に「棟方向」と呼ぶ、柱間は西からの順で記述）

Ⅳ　遺　　物

縄文時代中期の土器と石器を中心に、その他の時代の土器数点と和釘１点も検出した。

１　土器等

縄文土器が大半を占める。縄文土器は、早期が１点、後期初頭が２点、それ以外は中期のものである。このほかに、古式土師器や灰釉陶器など数点と、和釘１点がある。

（１）縄文時代早期の土器

煙道付炉穴ＳＦ52から１点確認した。そのほかに、微量の無文小片を早期の遺構から検出した。これらは胎土や厚みが中期のものとは異なる様相を示す。

ＳＦ51（第35図）　１は体上部片で、羽状の押型文もしくは沈線が認められ、直下には横位の山形文が施されている[①]。いわゆる「神並上層式」に近似する。

（２）縄文時代中・後期の土器

竪穴住居や掘立柱建物・陥穴・大型土坑などから検出した。中期前葉から後期初頭のものだが、主体は中期末葉である。器種は深鉢が大半を占め、このほかに少量の浅鉢や壺がある。

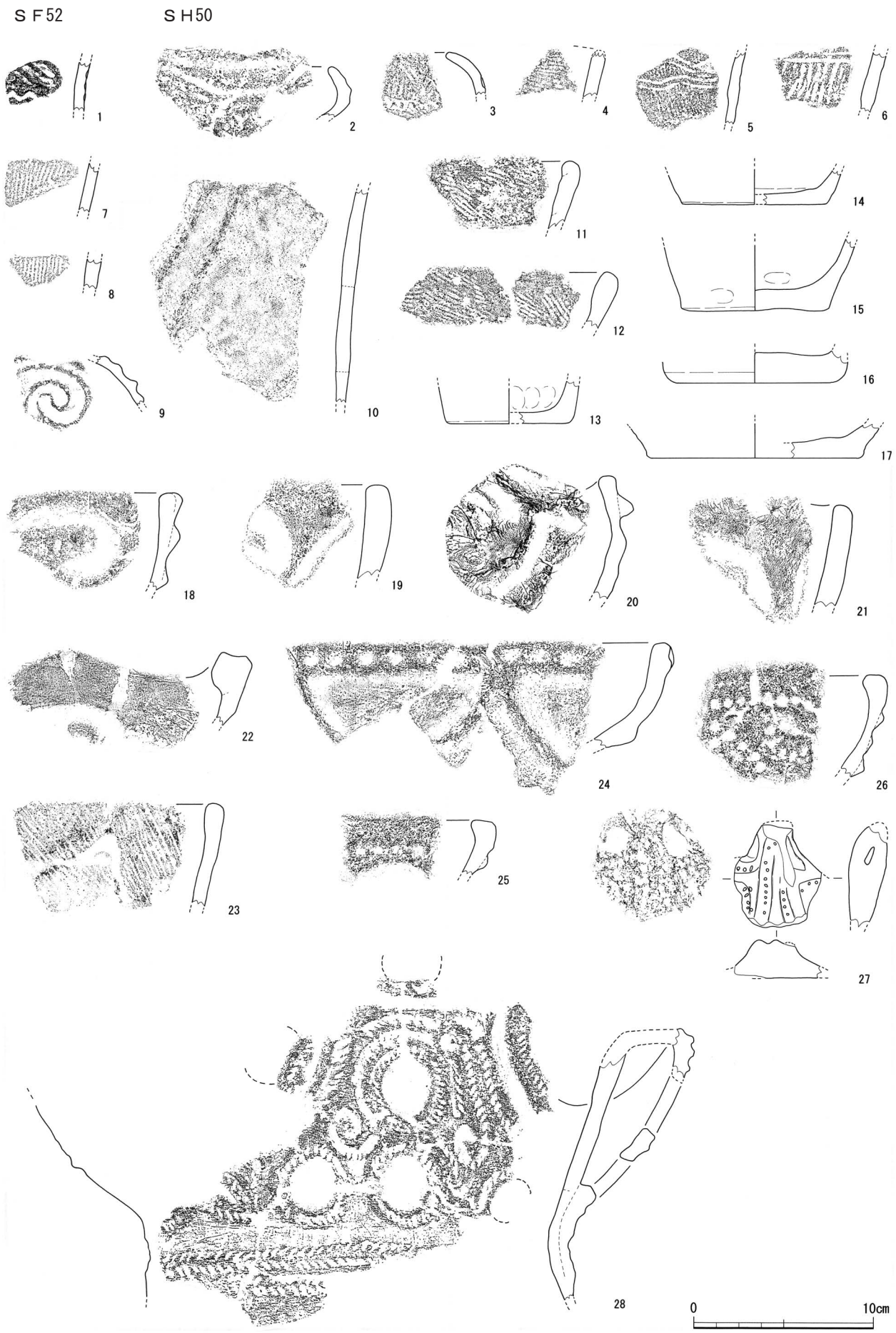
型式分類については、縄文中期後葉の「中富・神明式」編年表を主として用いた（第６表）[②]。この編年表では、大きく５段階に分け、それぞれを細分している。

Ａ　竪穴住居出土の土器

ＳＨ50（第35・36図）　出土土器は中期後葉から後期初頭のものが見られるが、４期古～５期新のものが多い。器種は63が浅鉢で、それ以外は深鉢とみられる。２と３は、咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系のキャリパー形口縁部である。２は３条の波状沈線文が横走し、３は撚糸文と横位沈線内に交互刺突を施す。共に２期古（≒中富Ⅲ・Ⅳ式）である。４～８は体部片で、撚糸文が施される。５と６には、半截竹管文が波状や直線状に横行する。６は縄巻縄文の可能性がある。２期古（≒里木Ⅱ式）である。９は、咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系のキャリパー形口縁部である。器壁が薄く、２本の沈線文が渦状に絡み合う。２～３期（≒中富Ⅲ～神明式）である。10は、２条の垂下隆帯をもつ体部である。11と12は、単節ＲＬの縄文が施される口縁部である。13～17は平底である。いずれも３～５期（≒神明～山ノ神Ⅱ式）である。18と19は平縁の口縁部であり、20～22はゆるやかな波状口縁部である。いずれも貼付隆帯と指圧による太い沈線で渦状文を描出し、４期古（≒取組式）に属する。23～26は、平口縁部である。23は、櫛描条線が斜行している。24は、肥厚する口縁部に下部がゆるやかな丸味をもつ逆三角形の貼付隆帯が繋がり、口縁直下に丸い刺突文が等間隔で並ぶ。25と26は、横

髙橋編年	従来編年				
１期（古）	中富Ⅰ式		船元Ⅳ式	里木Ⅱ式（１期）	
１期（新）	中富Ⅱ式			里木Ⅱ式（２期）	
２期（古）	中富Ⅲ・Ⅳ式	咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系		里木Ⅱ式（３期）	
２期（新）	中富Ⅴ式				
３期	神明式				加曾利Ｅ３式
４期（古）	取組式				
４期（新）	島崎Ⅲ式				
５期（古）	山ノ神Ⅰ式				
５期（新）	山ノ神Ⅱ式				

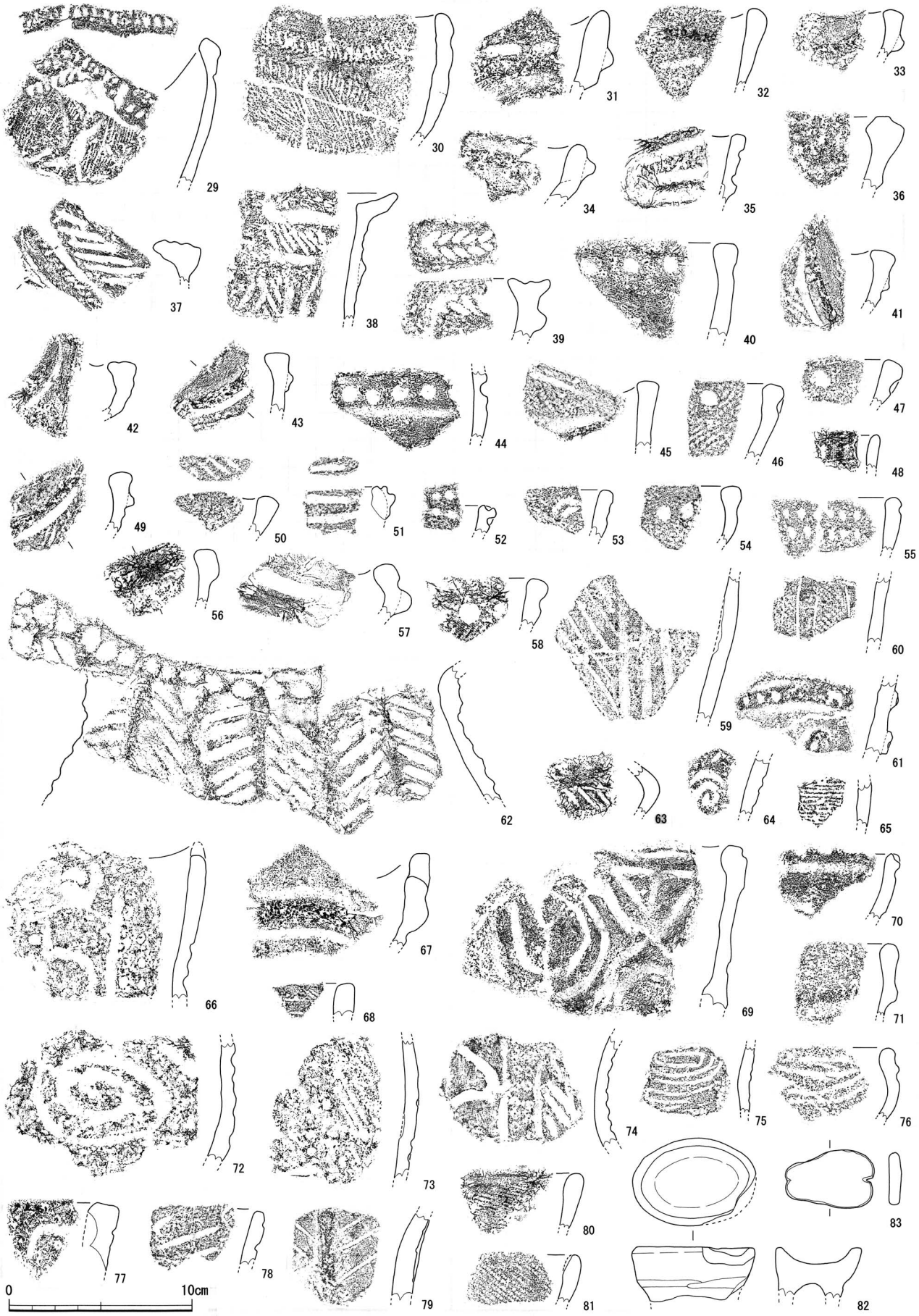
第６表　「中富式・神明式」編年表（纐纈・髙橋2008）



第35図　縄文土器実測図（1）（1：3）

位や渦状の沈線文内に円棒状具による刺突文が施される。27は、ややつぶれた橋状把手をもつ。把手上の縦位沈線文内などに円棒状具による小さな刺突文が施されており、装飾的である。いずれも４期（≒取組～島崎Ⅲ式）である。28は、富士山形の波状口縁を呈する箱状把手である。口縁部から頸部にかけて、径３㎝程を測る円形の穿孔を有す。穿孔は、立面に縦位に２個、横位に１列、等間隔に配し、側面にも１個配す。穿孔の周囲を沈線および隆帯で縁取り、縦位に配す穿孔の両側には「Ｓ」字文様を沈線で描出する。沈線内にはいずれも箆状具による連続刺突文を丁寧に施す。同様の箱状把手を４個程付くと推定する。頸部には１条の横位沈線を施し、沈線の内外には、刺突文を矢羽根状に配す。美濃地方に類例がある[③]。３期～４期古（≒神明～取組式）に属する。29～65は、ほとんどが沈線文や刺突文の構成で、隆帯が付くものは少ない。29は大波状口縁部で、波頂部や側面は内側に肥厚する。口唇および側面などに刺突文を施し、口縁部以下は縦位条線を引く。30はゆるやかな波状の口縁部で、横位や楕円状の沈線文内にヘラキザミが入り、楕円文の内側には条線が充填される。31～43と45～58は、口縁部の小片である。富士山形や三角形で大波状のもの、ゆるやかな波状のもの、平縁のものがある。ゆるやかな波状の31～35や45・57には、横位や斜行の沈線文が伴い、その内の45には単節ＲＬの縄文を施す。やや厚みのある隆帯が付く31や33・34・57は、弧状の文様を施す。富士山形の36や37・39は、断面形が「Ｔ」字形で、横位沈線をもつ。37と39には、口唇にも斜行や矢羽根状の沈線がみられる。38は、断面形が逆「Ｌ」字状の口縁部で、口縁部端から縦位に橋状把手の剥離痕がある。斜行する単沈線が、口縁部の区画内にみられる。41～43・49～51・56は三角形で大波状の口縁部である。弧状の沈線を施し、41や49には単節ＬＲの縄文が見られる。平縁の40や46・47・52・54・55・58は、円棒状具による丸い刺突文を配する。その内、46は単節ＬＲを、58は無節ℓの縄文を施し、52は横位沈線内や口唇部にも丸い刺突文がある。44は頸部で、同様の丸い刺突文を配す。48や53は細片のために判断に苦しむが、平縁ではない可能性もある。48はヘラキザミを施し、53は小さい渦文を施す。59は、体部片で外面に煤が付着し、３条の垂下沈線と斜行沈線を施す。60は単節ＬＲの縄文地に垂下沈線を施すが、沈線文間に縄文は見られない。61は体部で、隆帯は弧状に貼付され、隆帯上に円棒状具による刺突文を施す。62は、頸部から体部にかけての破片である。頸部には円棒状具による丸い刺突文が等間隔で横位に並び、体部には直行と蛇行を交互に貼付した垂下隆帯が５条残り、隆帯間は沈線文で綾杉文を丁寧に描出している。63は、浅鉢の口縁部で端部は欠失している。細く浅い沈線文を施す。64は渦文のある体部で、器壁は薄い。65は体部で、細い条線を施す。これら29～65のうち、29～35・38・40・44～48・50・52～55・57～65は、４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に、36・37・39・41～43・49・51・56は、４期新～５期新（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ）に属する。66～76は隆帯が少なく、沈線や刺突が施文の主体である。66と72～74は同一個体と思われ、垂下沈線や渦文、竹管文などをもつ。67は三角形の波状口縁部で、厚い隆帯が弧状に貼付き、隆帯の両側には沈線文が縁取る。68は、単節ＲＬの縄文を施す口縁部である。66～68は、５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。69はゆるやかな波状口縁部で、口唇に刺突文が見られる。２本１組の沈線文で円形や逆三角形を描出しており、後期初頭の中津式につながる型式である。70や71・76は口縁部の小片である。70の口唇部には刺突文が深く施され、渦状の沈線文が見られる。71は平縁で口縁部が肥厚し、横位隆帯が貼付く。75は体部で、浅い渦巻沈線文と多重連弧文をもつ。76は平縁で、横位に１条の沈線文と連弧文を施す。いずれも５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。77は富士山形の大波状口縁部で、１条の沈線文を施す。78は平縁で、口縁部直下から斜行沈線を施す。79は体部で、垂下隆帯と細い沈線で綾杉文を描出する。77～79は５期（≒山ノ神Ⅰ～Ⅱ式）である。80や81は平縁で、単節ＲＬの縄文を施す。80は、特に節が細かく繊細な施文である。共に中期末葉である。82は波状口縁部の頂部らしく、皿状であり筒状ではない。１条の横位沈線を施す。５期新～後期初頭（≒山ノ神Ⅱ式～後期初頭）である。83は土器片錘で、長軸の両端に切目がある。当遺跡で唯一のものである。所属時期は不明である。

ＳＨ50



第36図　縄文土器実測図（２）（１：３）

ＳＨ84（第37・38・39・40図）　出土土器はいずれも中期後葉に属するが、中でも末葉のものが多い。器種は104が壺、111が浅鉢か壺で、それ以外は深鉢とみられる。84の口縁部は大波状を呈し、口縁から少し下がった位置に橋状把手が付く。単節ＬＲの縄文を全面に施し、波頂部から左右対称に沈線が６条ずつ配される。把手下部の２箇所に渦文を配し、以下に懸垂文が走る。北白川Ｃ式Ｃ類の大波状口縁の深鉢に類似するが、把手が付く点は独自性と見られる。５期（≒山ノ神Ⅰ～Ⅱ式）である。85は、出土土器の中で最も残存の良いものである。口縁は外反し、頸部から胴部にかけて膨らみをもつ。口縁はゆるやかな波状を呈し、その波状に並行するように三連弧文を施す。以下には縦位沈線と紡錘文が交互に規則正しく並び、紡錘文の中にワラビ手文を配す。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。86は肥厚した口縁部で、太い横位沈線を施す。胎土は緻密で、内面はミガキを施す。２～３期（≒中富Ⅲ～神明式）である。87は、把手状の立体的な装飾と推定される。上面および側面の３方向に透かしがあり、透かしの曲線を縁取るように２重の刺突文を施す。88～91は同一個体の体部と推定される。唐草状文と２条の蛇行沈線の間に綾杉文を施す。いずれも３期～４期古（≒神明～取組式）に属する。92は、渦巻沈線文内に竹管文のある細片である。３期～５期古（≒神明～山ノ神Ⅰ式）に属する。93と94はゆるやかな波状口縁で、口縁直下に横位に連続したキザミを施し、渦巻隆帯で区画している。93は隆帯が厚く、94はつぶれている。95は口縁部で、内弯する。口縁直下に太い横位沈線が走る。縦位の「Ｓ」字状文を施し、両側に隆帯および沈線で楕円区画をはっきりと描出し、区画内に斜行沈線を充填する。96と97・102・107は口縁部で同一個体と思われ、隆帯および太い沈線で渦文を施す。107には、主文様と見られる縦位の「Ｓ」字状文を配す。４期古（≒取組式）である。98～101は口縁部で、隆帯および沈線で区画文などの文様を施す。98はゆるやかな波状口縁で、隆帯が厚い。99は口縁に並行する太めの沈線文が施され、100は、口縁直下に斜行するキザミを施す。101には隆帯上に単節ＲＬの縄文が見られる。103は平縁の口縁部で、区画文は無く、浅い斜行沈線が口縁直下から施される。104は壺の筒状把手とみられ、縁に小さな刺突文を施す。105は中空の立体装飾で、橋状把手の可能性もある。前面には隆帯および沈線で縦長の「Ｓ」字状文を描出し、小さな刺突文を前面や側面の沈線内に施す。106と108は同一個体の可能性がある体部で、縦位隆帯の両側に綾杉文を施している。98～108は、４期（≒取組～島崎Ⅲ式）に属する。109はゆるやかな波状口縁部である。摩滅しているが無文と思われる。４期以降（≒取組式～）である。110は大波状口縁部で、深い沈線内に刺突文が施される。４期新（≒島崎Ⅲ式）と見られる。111は立体的であり、浅鉢か壺の橋状把手とみられる。隆帯や沈線を配し、中心は深く窪んでいる。４期古～５期古（≒取組～山ノ神Ⅰ式）である。112～125・127～137・139～143・145～147は口縁部である。112や113・115・116・120・123・125・147は、富士山形の大波状口縁部である。112は、口縁直下に斜行沈線、口唇に刺突文を施す。113は浅い横位沈線を施す。123は、口縁部が屈曲し斜行する刻みを施す。125は、口唇に斜行する刻みを配する。115と116・120は断面形が「Ｔ」字状で、外面には並行する沈線が施される。147は、口唇に２条の沈線が認められる。117や118・121・129・137・141・143は、緩やかな波状を呈する。118や121・129・141は、浅い横位沈線を施す。この内の141は、口縁直下に無節ℓの縄文を施す。137は無文とみられる。143は、隆帯による区画文が曲線的に巡る。114は、口縁の断面が整った楕円形で肥厚し、曲線的な沈線区画がみられる。破断面から推定すると、断面楕円形の粘土紐を口縁に乗せ、それを薄く包み込むように成形している。119は、口縁直下の沈線内に篦状具による斜行する刻みが施され、その下を隆帯で区画している。122は、ゆるやかな波状口縁を呈し、口縁直下に斜行沈線が走り、隆帯による区画が施される。124は口縁の断面形が丸みを帯び、外面には円形状の指圧痕を配す。126は台付深鉢で、２条の縦位隆帯を施す。127は太い沈線による区画文を施す。128はゆるやかな波状口縁で、波頂下部に渦文を配し、両側に区画文を構成する。130は細かい条線を施し、口縁部区画文はみられない。131は沈線による区画文を配するが、口縁より少し下までは無文である。

ＳＨ84

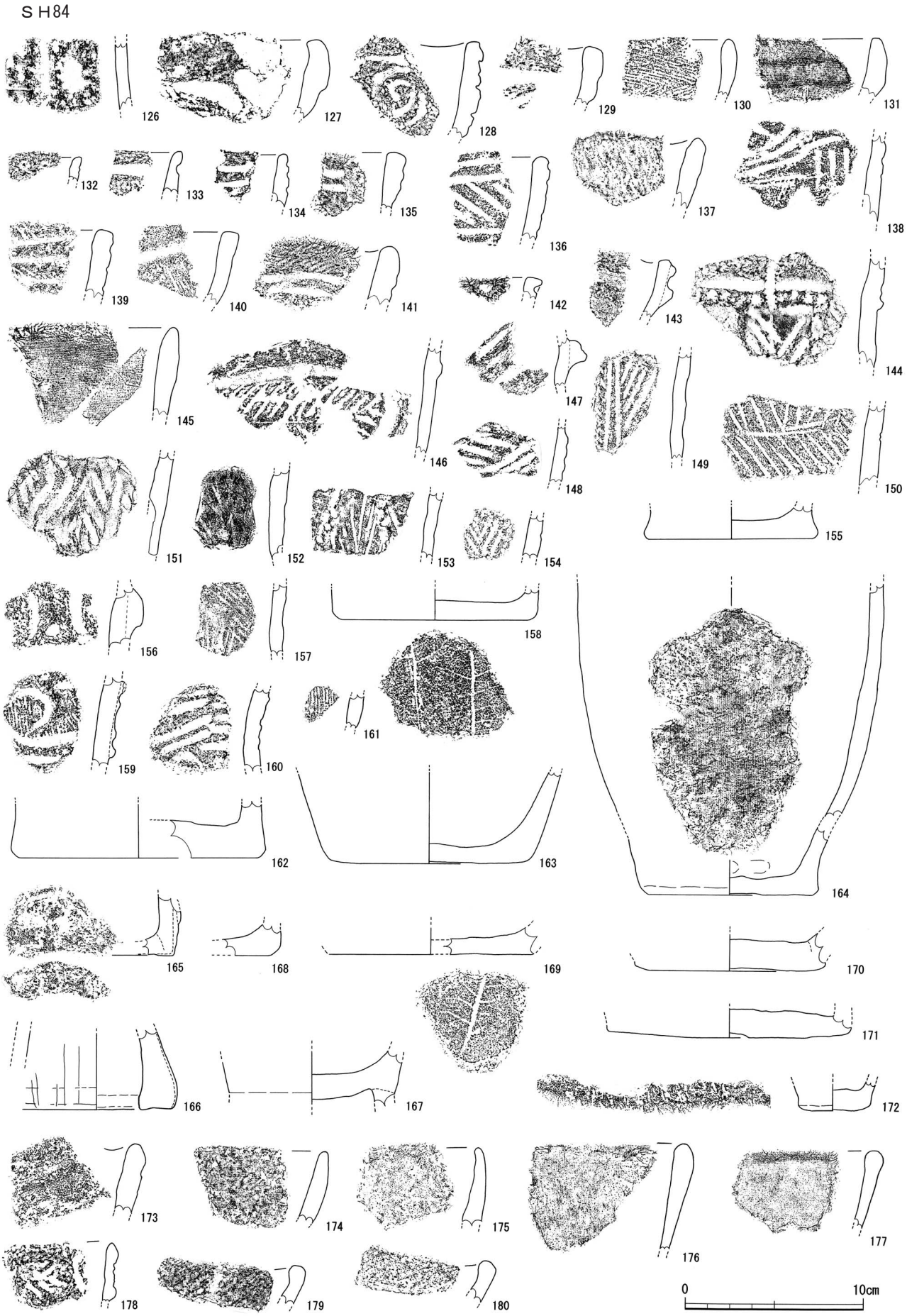
第37図　縄文土器実測図（３）（１：３）

132と133・134は薄手である。132は外面に竹管文を配し、133と134は横位沈線が深く施される。135は２条の横位沈線が並行する。136と138は同一個体とみられ、136は口縁直下に２条の横位区画沈線の間に斜行沈線が施される。138は、体部にゆるやかな曲線状の沈線と綾杉状の沈線がみられる。139は、３条の横位沈線間に矢羽根状の細沈線を施す。140は平縁で、１条の横位沈線下に条線を施す。142は、口縁直下に右方向からの刺突文が施される。144は頸部で、横位隆帯上に左下からの刺突文を等間隔に配し、以下には垂下隆帯間に綾杉文を配する。145は無文の平縁である。146は、口縁部区画内に矢羽根状沈線を充填する。148～154、156・157・159～161は体部である。148と149・152は、２条の垂下沈線と綾杉文を施す。150は、細く浅い沈線で綾杉文を描出する。151は懸垂文と２条の蛇行沈線の間に綾杉文を配す。153は、刺突を配した隆帯を「ハ」字状におき、その間に綾杉文を施す。154・157は綾杉文のみである。156は、縦位の厚い貼付隆帯上に円棒状具による丸い刺突文を１ヶ所施し、隆帯の両側には沈線区画を配する。北白川Ｃ式深鉢Ｂ類に類似する。159は渦文を隆帯と沈線で描出し、条線が渦文上にも施される。160は頸部で、多重連弧文を施す。161は、細い条線が見られる。112～163のうち、114・117～119・121・122・124～163は、４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に、112・113・115・116・120・123は４期新～５期新（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ式）に属する。164は無文の体・底部で、胎土は赤褐色である。165～167は、台付深鉢である。165と166は隆帯が付く。155・158・162・163・168～172は平底である。158や169には葉脈痕が認められる。172は径4.4㎝と小形で、外面には細く浅い沈線が施される。164～172は３期以降（≒神明式～）である。173～180は口縁部である。173はゆるやかな波状を呈し、２条の浅い横位沈線を施す。174～177は無文である。178は、口縁直下の隆帯区画内に矢羽根状沈線を配す。179と180は同一個体らしく、ゆるやかな波状を呈し、口縁直下に単節ＬＲの縄文を施す。173～180は、４～５期（≒取組～山ノ神Ⅱ式）である。181と182は、ゆるやかな波状を呈するキャリパー形の口縁部で、斜行沈線を充填した楕円区画の下に連弧文を配する。183は、口縁直下に下からの竹管文を横位に施す。184は、正面からの竹管文を口縁端部に施す。185や186は平底である。186は、細くて弱い垂下沈線と綾杉文が最下部まで施される。181～186は５期古（≒山ノ神Ⅰ式）である。187～197は口縁部である。187や188・191は三角形の大波状口縁を呈し、187や188は隆帯や沈線により区画を作る。区画内には斜行沈線を充填し、隆帯に沿うように刺突が施される。191は無文である。189や190は富士山形の大波状口縁を呈し、189は沈線を、190は単節ＬＲの縄文を施す。192～196はゆるやかな波状口縁を呈し、192は端部が肥厚する。193や195は２条の横位沈線を施す。194は渦文を描出し、196は無文である。197は平縁で、肩が明瞭な横位沈線を１条施す。198～201は体部で、198は縦位の沈線と単節ＬＲの縄文を施す。199は沈線で楕円文様を配し、無節ｒの縄文を施す。200と201は、２本の横位隆帯の内側に斜行沈線文を描出する。202は平縁で、横位沈線を２条施す。187～202は、５期新（≒山ノ神Ⅱ式）に属する。203～207は口縁部である。203や204・207は、ゆるやかな波状口縁である。203は横位沈線を２条と斜行文が見られ、204や207は斜行沈線を充填した区画文を施す。205は口縁直下に、刺突文列と横位沈線を１条施す。206は富士山形の大波状口縁を呈し、２条の沈線と単節ＬＲの縄文を施す。208は体部で、ワラビ手状の文様など、沈線で曲線文様を描出し、尖った箆状具で斜行沈線を施す。209はゆるやかな波状口縁で、端部の１ヶ所に半円状の穴をあけ、下位に刺突文を施し、沈線による区画文様を描く。210は口縁部で、器壁は薄く口唇に刺突を配する。211は体部で、条線を不規則に施す。203～211は、５期（≒山ノ神Ⅰ～Ⅱ式）に属する。

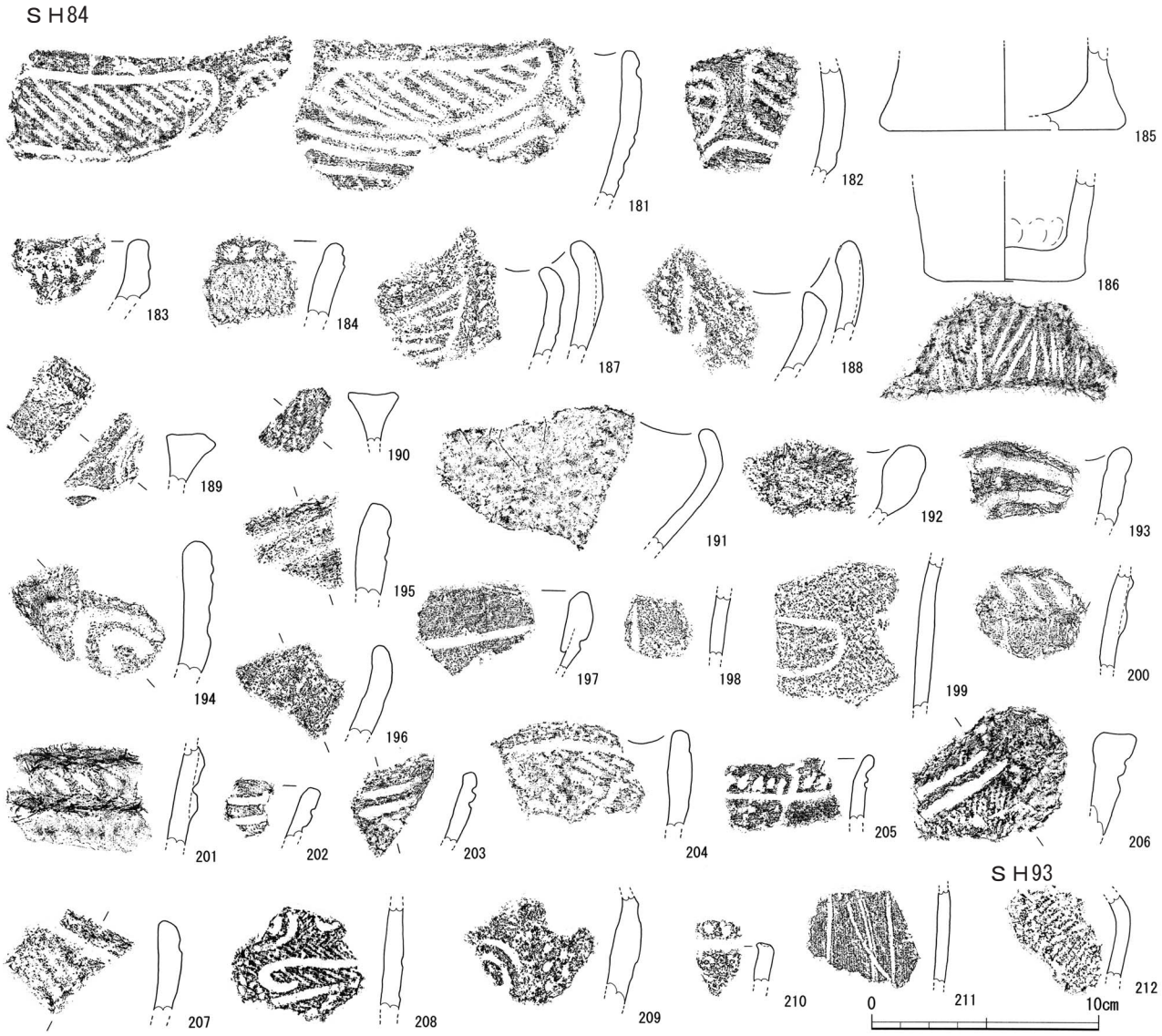
ＳＨ93（第40図）　炉から212のみが出土した。やや内弯する深鉢の体部で、単節ＬＲの縄文を施す。３期（≒神明式）以降に属する。

ＳＨ106（第41図）　出土土器は中期後葉に属するが、古相（２期～３期）の例が一定量認められた。完形および完形に近いものはない。器種は234が浅鉢で、それ以外は深鉢とみられる。213は深鉢の胴部で、器壁は薄く、幅の狭い沈線が連弧状に施される。２期古（≒咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）に属す

第38図　縄文土器実測図（４）（１：３）



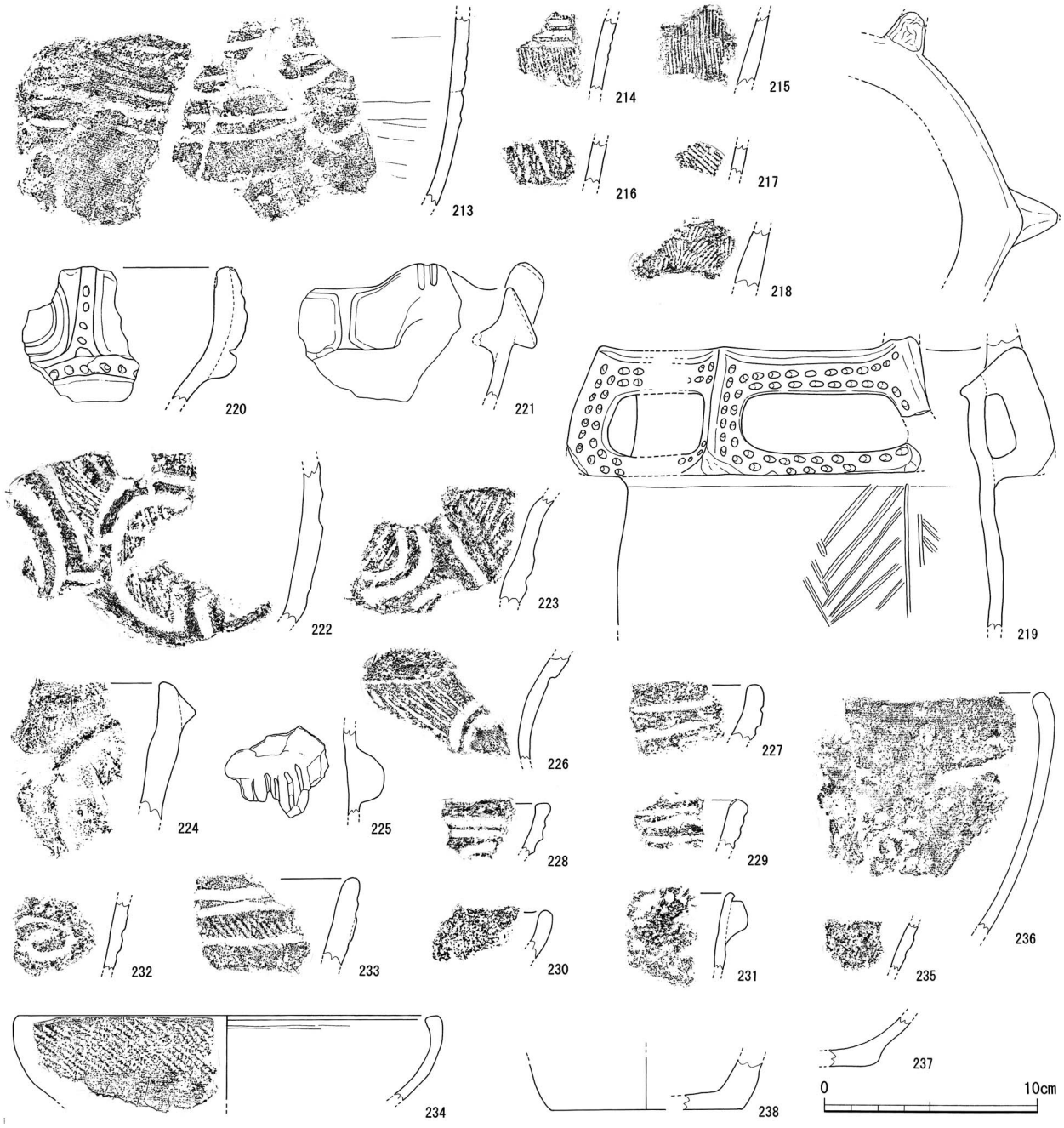
第39図　縄文土器実測図（５）（１：３）



第40図　縄文土器実測図（６）（１：３）

る。214～217は撚糸を地文とする体部である。214は、半截竹管文が横位に３条認められる。２期古（≒里木Ⅱ式）に属する。218は体部で、撚糸文をやや乱方向に施す。２期古（≒里木Ⅱ式）である。219は口縁部文様帯が立体的で、文様上の貼付隆帯が口端にあたり、内側に蓋受状の段をもつ。口縁部の上下２段には、貼付した横位隆帯を縦に繋ぐ橋状把手をもつ。把手は６区画と推定される。内側の蓋受け状の段は把手部分で角をもち、六角形を呈するように思われる。隆帯および把手上には竹管文が施されている。口縁部から胴部にかけてはやや膨らみ、２条１単位の懸垂文の両側に浅い綾杉文が施されている。岐阜県の戸入村平遺跡[4]に類例がある。220はキャリパー形の口縁部で、竹管文を配した隆帯による方形区画文と推定され、区画内には沈線が認められる。221は、立体装飾のある波状口縁である。内側に蓋受け状の段をもち、波頂部から両側に隆帯による区画文が施される。219と器形や文様構成は類似するが、219ほどの立体感はなくつぶれている。いずれも３期（≒神明式）である。222と223は、体部片で同一個体の可能性がある。隆帯と沈線で唐草状に描出し、２本の短い隆帯が左右の唐草状文を繋いでいる。文様の内外には、細い斜行沈線が粗雑に施される。共に３期～４期古（≒神明～取組式）である。なお、226は222や223と文様が類似するが、同一個体かは不明である。224は台付深鉢の口縁部で、弧状の隆帯が貼り付く。３期～５期古（≒神明～山ノ神Ⅰ式）である。225は、横位の貼付隆帯の下に中実の把手が縦位に付くもので、把手上に深い沈線が縦位に施されている。227と228・230は、ゆるやかな波状の口縁部である。227は２条の横位沈線が横行する。228は、２条の沈線と区画文らしい

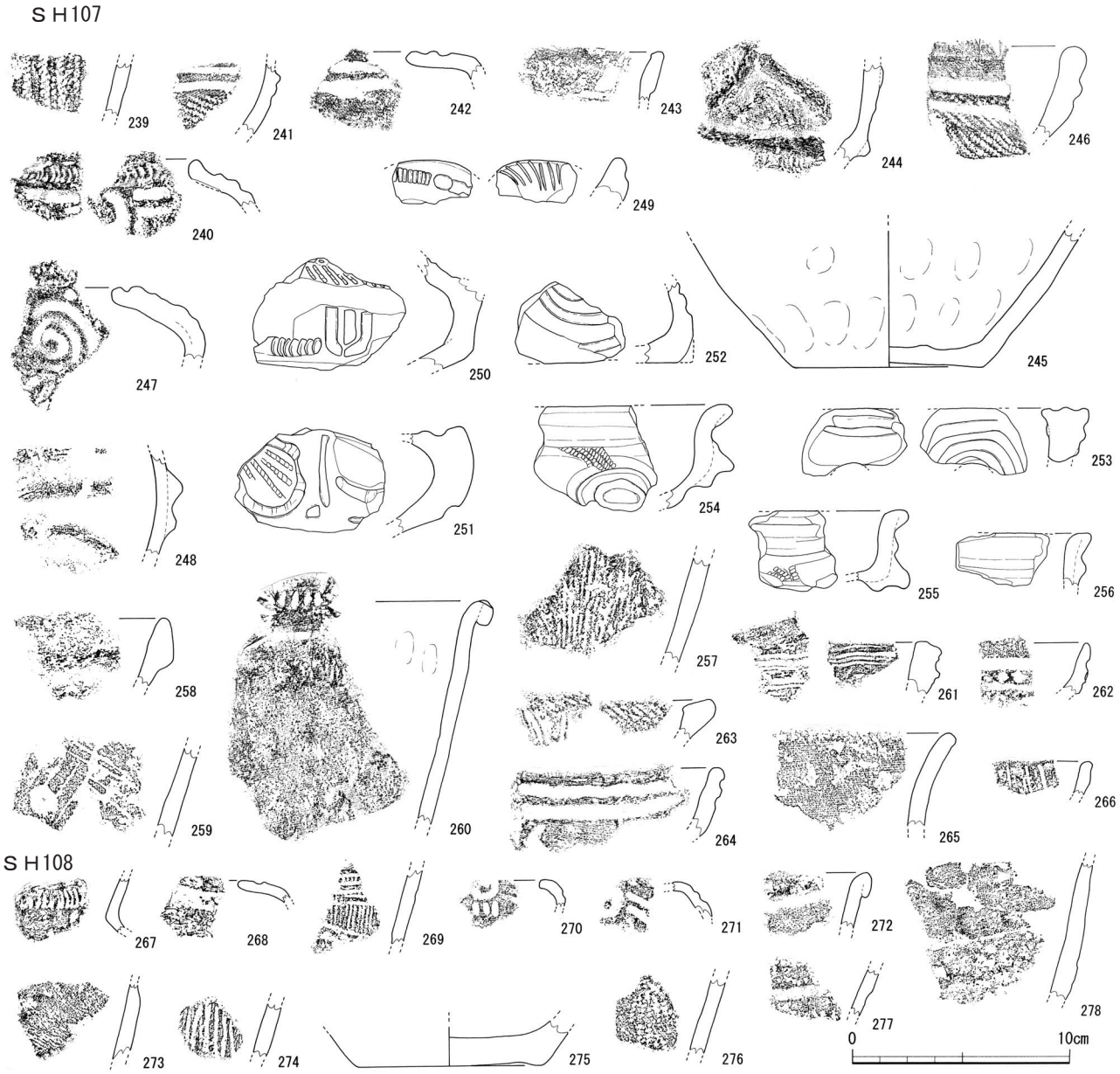
ＳＨ106



第41図　縄文土器実測図（７）（１：３）

弧状の沈線を施す。229は、平縁の口縁部で３条の沈線が横行する。230は無文である。231は分厚い隆帯がつく口縁部で、隆帯上に竹管文が認められる。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。232は、渦巻状沈線のある体部である。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。233は口縁部で、太い箆描沈線区画の中に無節ｒの縄文を充填している。５期（≒山ノ神Ⅰ・Ⅱ式）である。234は浅鉢である。口縁部はやや内弯し、器壁は薄い。単節ＲＬの縄文が施されている。235は単節ＲＬの縄文が施される体部で、器壁は薄い。236はやや内弯する口縁部で、磨滅により文様は不明である。237は、236の底部と思われるが接点はない。238は底部であり、外面に文様は認められない。

ＳＨ107（第42図）　出土土器は中期後葉を中心とするが、中期前半から末葉のものもある。器種は254～256は鉢で、それ以外は深鉢とみられる。239は体部で器壁は薄く、単節ＲＬの縄文が施される。中期前半（船元系）と推定する。240はキャリパー形の口縁部で器壁は薄く、口縁直下に横位の押引文を施



第42図　縄文土器実測図（８）（１：３）

し、「Ｓ」字状と見られる文様を縦位に配す。241は体部で器壁は薄く、２条の横位沈線と、単節ＲＬの縄文が施される。共に２期新（≒咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）である。242はキャリパー形の口縁部で、横位沈線が２条施されている。２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）に属する。243は肥厚帯口縁部で口縁下部に横位沈線がみられる。244は体部で、貼付け隆帯や押引文と単節ＲＬの縄文が施される。245は無文であり、底部から立ち上がりのない体部に続く。いずれも２～３期（≒中富Ⅲ～神明式）に属する。246は口縁部で、横位隆帯と沈線で区画を描出している。区画内に単節ＲＬの縄文を充填するが、隆帯上にも縄文がはみ出している。２期新～３期（≒咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系～神明式）である。247はキャリパー形の口縁部で、器壁は厚い。口縁直下に沈線と刺突文を施し、肩部にかけて渦文を描出している。248は口縁部で、端部を欠失している。１本の横位隆帯と、区画を構成する弧状の隆帯が見られる。249にはドーナツ形らしい装飾が見られ、大波状口縁部に付く可能性がある。横位沈線内に刻みを充填し、外面には放射状に広がる細い沈線が施される。250～252はキャリパー形に張り出す部分である。250は、沈線や刻みにより文様をはっきりと描出しており、戸入型[5]に近い。251は中央に縦位の隆帯が付き、右側には渦文を、左側には区画を施し、区画内には単節ＲＬの縄文を配する。252は渦状の文様が施され

る。253は、大波状口縁部の角にあたる部分で、内外面および口唇に沈線が施される。いずれも３期（≒神明式）である。254～256は、同一個体の鉢の口縁部と思われる。ゆるやかな波状を呈し、端部は外反する。横位沈線の下位に、隆帯による立体的な渦文が斜め下向きに付く。一部に単節ＲＬの縄文が施される。257は体部で、条線を施す。これらは３期～４期古（≒神明～取組式）に属する。258や260～263は口縁部で、沈線や刺突による文様描出が中心である。258と260は端部が肥厚する。260は、細く丸い粘土紐がそのまま外に貼付くような形状を呈し、口唇に刻みが入る。体部は無文である。261は内外面に櫛状具で不揃いな条線を施す。262は器壁が薄く、横位沈線が２条とその間には円棒状具による丸い刺突文を等間隔に配す。263は口唇に単節ＲＬの縄文が施され、外面は鋭い篦状具による沈線文を深く施す。259は体部で、細く浅い綾杉文を施す。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。264は口縁部で、口縁直下に２条の横位沈線を配し、その下に垂下沈線などを描出する。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）に属する。265は外反する無文の口縁部である。266は口縁部で器壁が薄く、細い沈線を口縁直下から縦位に施す。いずれも中期後葉である。

ＳＨ108（第42図）　出土土器は、中期後葉でも古相（２期）の例を中心とするが、中期前半の例も認められる。器種は、いずれも深鉢とみられる。267や268・270・271はキャリパー形の口縁部で、器壁が薄い。267は石囲炉の埋土から出土した。幅の広い爪形文が施される。古相を示し、中期前半（船元系）と推定する。268は、口縁直下の横位沈線内に交互刺突が見られる。269は体部で、横位沈線を上下にはさみ、内部に撚糸文を充填する。いずれも里木Ⅱ式（≒２期古）に比定される。270や271は、渦文を中心とした沈線が放射状に広がる。272は折り返し肥厚の口縁部で、無文である。いずれも２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）である。273や274は、撚糸文を施す体部である。２期古（≒里木Ⅱ式）に比定される。275は平底である。立ち上りは外に拡張せず、底面は若干窪む形状を呈する。２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）に属する。276は体部で、単節ＲＬの縄文が施される。中期後半に属する。

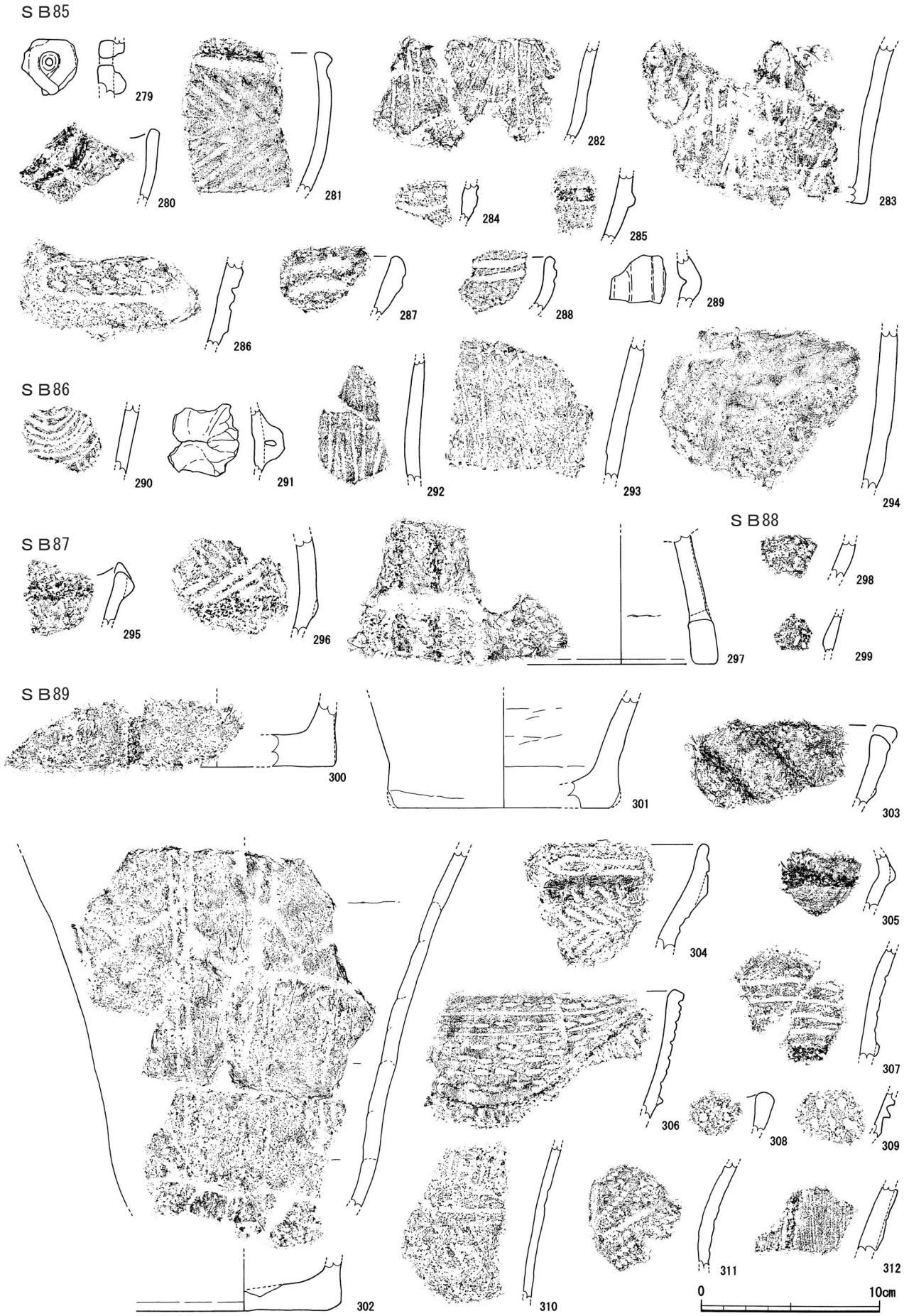
ＳＨ109（第42図）　２点の土器が出土した。277・278は共に深鉢の体部であり、外面は磨滅する。277は浅い沈線を施すが、278は無文である。いずれも中期の後葉であろう。

Ｂ　掘立柱建物出土の土器

ＳＢ85（第43図）　柱穴ＳＫ５・８・18・20から出土した中期後葉の土器だが、末葉の例が多い。器種はいずれも深鉢とみられる。279は、ドーナツ状に粘土を巻いており、胴部に貼付く把手と思われる。３期以降（≒神明式～）である。280はゆるやかな波状口縁を呈し、口縁直下に隆帯が付く。隆帯に無節ℓの縄文を施す。281は、ゆるやかなキャリパー形の口縁部で、浅い矢羽根状沈線が横位に施される。282は体部で、４条の垂下沈線と綾杉文が交互に施される。283は体部で、底部がはがれている。垂下沈線と綾杉文を、底部直近まで施す。284は口縁部で、刺突文と横位沈線文を施す。285は体部で、隆帯が貼付く。280～285は４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。286は体部で、楕円区画の中に、左上からの刺突文を充填する。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）に属する。287や288は平口縁部で、２条の横位沈線を施す。共に５期（≒山ノ神Ⅰ・Ⅱ式）である。289は橋状把手と思われ、ややつぶれた形状を呈する。中期後葉に属する。

ＳＢ86（第43図）　いずれも柱穴ＳＫ23から出土した土器で、中期後葉に属するが、末葉の例が多い。器種はいずれも深鉢とみられる。290は体部で、渦文と連弧文・２条の縦位沈線を施す。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。291は橋状把手で、ややつぶれた形状を呈する。292や293は体部で綾杉文を施す。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。294は無文の体部であり、中期後葉である。

ＳＢ87（第43図）　柱穴ＳＫ３・11から出土した土器であり、いずれも末葉と認められる。295は、ゆるやかな波状口縁の深鉢で、端部は外面に肥厚する。296は、端部を欠失しているが深鉢の口縁付近で、隆帯による区画文の中に沈線による矢羽根状文を充填する。297は台付深鉢の脚台部分で、縦位の隆帯と長楕円形の透孔を施す。胎土は赤褐色を呈する。すべて４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。



第43図　縄文土器実測図（９）（１：３）

ＳＢ88（43図）　柱穴ＳＫ45・48から出土した。出土量は少なく、型式分類ができるものはない。298と299は、共に体部の無文片である。胎土や器壁の厚さから、中期後葉と推定できる。

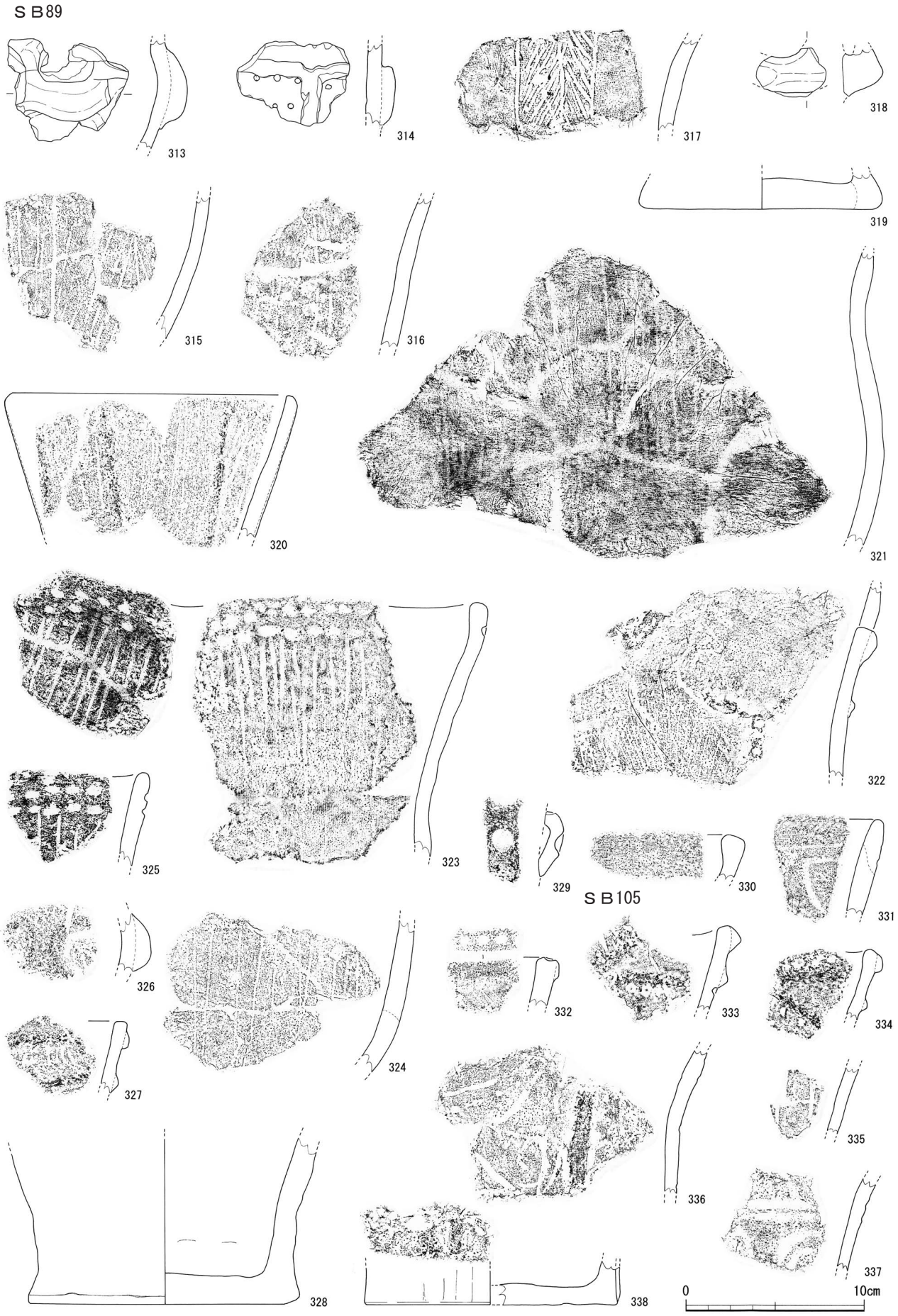
ＳＢ89（第43･44図）　柱穴ＳＫ69を中心に、柱穴ＳＫ56・57・64・73から出土した土器である。中期後葉に属するが末葉を中心としている。器種はいずれも深鉢とみられる。300と301・319・328は底部である。300は隆帯が縦位に付く。301と319・328は無文である。いずれも３期以降（≒神明式～）である。302は体・底部で、２条１組の懸垂文を等間隔に配す。外面は摩滅して不明瞭だが、一部に縄文を施す。303や304・305・306・308は口縁部である。303は平縁で、隆帯により渦文を描出し、弧状の隆帯にかかる押引文を施す。304は、口縁直下へ沈線を長楕円に施し、１条の隆帯を貼付ける。下位には刺突や矢羽根状沈線を配する。305は波状口縁を呈し、断面形は「く」字で外面に肥厚する。306は、平縁で、口縁直下に細い横位沈線を２条配し、隆帯により連弧文のような大振りの弧線を描く。口縁端部から弧線までの範囲に、左方向への刺突文を充填する。308はゆるやかな波状口縁を呈し、円棒状具による丸い刺突文を２ヶ所に配す。307や309～312・314は体部である。307は多重の連弧文を施し、309は深い刺突文を配す。310は器壁が薄く、摩滅が激しい。かすかに綾杉文が見られる。311は縦位沈線と単節ＲＬの縄文を施し、312は隆帯と条線を残す。314は、２本の細い粘土紐をからみ合わせ、「Ｔ」字状にしたものを貼付して装飾としたものと推定する。装飾の周りには円棒状具による小丸の刺突文を配す。313は橋状把手である。つぶれた形状を呈し、中実になる。大石遺跡⑥に類例がある。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。315～317は体部で、垂下沈線と綾杉文の構成である。317は、有文と無文の部分が明確に分かれる。315は５期古（≒山の神Ⅰ式）、316と317は５期（≒山ノ神Ⅰ・Ⅱ式）である。318は把手と見られ、立体的で弧状を呈する。中期後葉に属する。319～332は、柱穴ＳＫ69から出土した。319は平底である。３期以降（≒神明式～）である。320は口縁部で、縦位の隆帯が付き、垂下沈線や綾杉文が施される。323～325・328は同一個体と思われ、321も文様が類似する。口縁直下に刺突文を横位に２列配し、下位に垂下沈線を浅く雑に描く。東員町村前遺跡⑦に類例がある（ＳＫ69出土・報告番号66）。322は口縁部で、富士山形の大波状を呈する。隆帯がＵ字状に付き、Ｕ字の下端からも隆帯が垂下する。隆帯上には円棒状具による刺突文が施される。326や329は橋状把手である。326はつぶれた形状を呈し中実であり、329は円棒状具による大きな丸い刺突文を施す。327は口縁部で、横位隆帯が付き、沈線内に刻みを施す。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。330は、口縁部の下位に1条の横位沈線を施す。331は口縁端部に単節ＬＲの縄文を施し、横位沈線と区画文を配する。共に５期新（≒山ノ神Ⅱ式）に属する。332は口唇に円棒状具による刺突文を配し、端部が肥厚して横位沈線と斜行条線を施す。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。

ＳＢ105（第44図）　柱穴ＳＫ66・75から出土した土器である。中期後葉に属するが末葉を中心としている。器種はいずれも深鉢とみられる。333や334はゆるやかな波状口縁部であり、隆帯や竹管文により文様を描出する。334は口唇にも竹管文を配す。335は体部で、縦位沈線を２条配する。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。336は体部に縦位の隆帯が付き、沈線による区画とその中に円棒状具による刺突文を配する。337は体部に横位沈線を２条と渦文をもつ。共に５期（≒山ノ神Ⅰ・Ⅱ式）に属する。338は平底で、縦位隆帯が付く。３期以降（≒神明式～）である。

Ｃ　陥穴出土の土器

ＳＫ31（第45図）　出土土器は中期後葉である。器種はいずれも深鉢とみられる。339は撚糸文を施す体部で、２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）に属する。340は条線を施す体部で、３期以降（≒神明式～）に属する。341は、口唇に円棒状具による刺突文を配する波状口縁部で、４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。342は口縁部で、外面に肥厚する。摩滅のため、文様は明確に見られない。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。

ＳＫ49（第45図）　343のみが出土した。深い沈線で文様を描出する深鉢の口縁部である。５期（≒山



第44図　縄文土器実測図（10）（１：３）

ノ神Ⅰ～山ノ神Ⅱ式）に属する。

ＳＫ59（第45図）　出土した土器は、いずれも中期末葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。344は、ゆるやかな波状を呈する口縁部である。隆帯による区画の中に、篦状具による矢羽根状線を施す。345と346は頸部で、隆帯上に刺突文を施す。347は体部で、条線を施す。すべて４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。

ＳＫ61（第45図）　出土土器は中期後葉の内、末葉を中心としているが、後期初頭の例もある。器種はいずれも深鉢とみられる。348は平縁で、口縁直下に竹管文を配する。349はゆるやかな波状を呈し、沈線による区画文を施す。350は頸部で、隆帯上に刺突文を施す。351は、多重沈線と条線が施された体部である。352はゆるやかな波状を呈する口縁部で、隆帯による区画の中に矢羽根状沈線を配す。353は体部で、矢羽根状沈線を施す。354は橋状把手である。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。355はゆるやかな波状を呈する口縁部で、胎土は緻密である。横位沈線を１条と、区画を描く隆帯が付く。後期初頭と推定される。

ＳＫ68（第45図）　出土土器は中期後葉の内、末葉を中心とする。器種はいずれも深鉢とみられる。356は平縁の口縁部である。端部の外側に隆帯を貼付けて肥厚し、隆帯上に刺突文を配す。357は口縁部でゆるやかな波状を呈し、文様は見られない。358や359は胴部で、細くて浅い垂下沈線と綾杉文を施す。360は口縁部で、隆帯による区画を描き、口縁直下に刺突文を配す。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。361は平底であり、３期以降（≒神明式～）に属する。

ＳＫ83（第45図）　出土土器は、いずれも中期末葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。362は、富士山形の大波状を呈する口縁部で、２条の横位沈線と斜行沈線を施す。363と364は体部で、363は条線を、364は沈線１条と単節ＬＲの縄文を施す。365は頸部で隆帯が付き、隆帯上に刺突文を施す。すべて、４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。

ＳＫ113（第45図）　出土した土器は、中期後葉～後期初頭のものである。器種はいずれも深鉢とみられる。366は口縁部で器壁は薄く、半截棒状具で押引文を施す。367はキャリパー形の口縁部で、沈線を施す。共に２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）である。368は富士山形の大波状口縁で、口唇に横位沈線を施す。369は口縁部で、口唇に円棒状具による刺突文を配し、外面に横位沈線を施す。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。370は体部、371は口縁部で、共に単節ＬＲの縄文と明瞭な沈線による擦消縄文を施す。５期新～後期初頭（≒山ノ神Ⅱ～後期初頭）であり、中津Ⅰ式成立期のものと推定される。

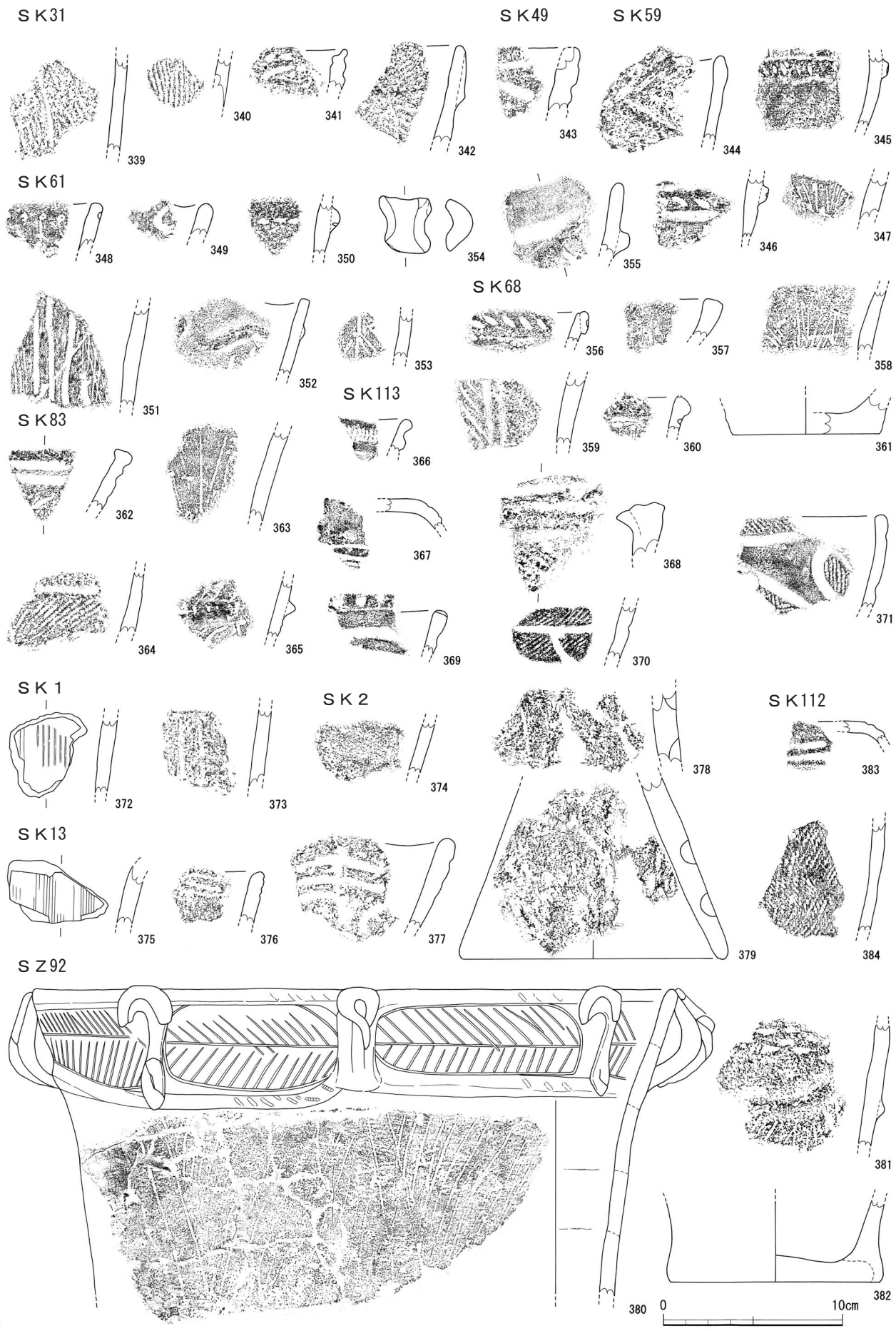
Ｄ　土坑等出土土器

ＳＫ１（第45図）　出土した土器は、中期後葉のものである。372は、深鉢の体部で浅い条線を施す。５期（≒山ノ神Ⅰ・Ⅱ式）である。373は、深鉢の体部で縦位沈線を２条施す。中期後葉に属する。

ＳＫ２（第45図）　出土した土器は374の深鉢１点で、無文の体部片である。型式分類は明確でなく、中期後葉とする。

ＳＫ13（第45図）　出土した土器は、中期後葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。375は体部で、縦位条線を施す。３期以降（≒神明式～）に属する。376は口縁部で、横位条線を施す。４～５期（≒取組～山ノ神Ⅱ式）である。377は口縁部で、ゆるやかな波状を呈する。口縁に沿うように横位沈線を２条施し、渦文や区画文を配す。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。

ＳＺ92（第45図）　出土土器は中期後葉の内、末葉を中心とする。器種はいずれも深鉢とみられる。378や379は同一個体と思われ、懸垂文と丸穴を２ヶ所ずつ配す。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）に属する。380は、楕円形の口縁部区画文と把手状の装飾が交互に配される。区画文内には篦状具による細い矢羽根状沈線が描かれる。把手状の装飾は２種類の形状があり、いずれも粘土紐をねじらせて貼付けている。胴部には２条１組の垂下沈線と雑な斜行沈線を配す。北白川Ｃ式Ｂ類に類似するが、把手の様相は異なり、独自性が見られる。５期古（≒山ノ神Ⅰ式）に属する。381は体部で、隆帯が「Ｕ」字状に付き、隆帯より上に刺突文を、下に篦状具による鋭い条線を施す。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～



第45図　縄文土器実測図（11）（１：３）

山ノ神Ⅰ式）に属する。382は底部で、外面に文様は無い。中期後葉である。

ＳＫ112（第45図）　出土した土器は、中期後葉の内、２期古のものがある。器種はいずれも深鉢とみられる。383はキャリパー形の口縁部で、沈線を３条施す。２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）に属する。384は体部で、撚糸文もしくは縄巻縄文を施す。２期古（≒里木Ⅱ式）である。

Ｐｉｔ出土（第46図）　出土土器はすべて中期末葉である。385は深鉢の口縁部で、ゆるやかな波状を呈し、横位沈線を１条施す。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。386は、細かい刺突で弧状の文様を描く。土器の装飾部分かと推定されるが、土偶の可能性も否定できない。

Ｅ 包含層等出土の土器

ＳＫ28（撹乱）（第46図）　出土した387は器壁が薄い深鉢の口縁部で、横位の沈線と竹管文を配する。５期古（≒山ノ神Ⅰ式）に属する。

Ｂ－Ｙ５風倒木痕・根撹乱（第46図）　中期後葉の土器が出土した。388と389は、壺の「Ｘ」字状の橋状把手と見られる。共に大きくしっかりした作りであり、把手の上下両端に円穴を配する。388は、体部には把手を貼付けした後に楕円状の沈線を描き、内側を単節ＬＲの縄文を充填する。388は４期（≒取組～島崎Ⅲ式）、389は４～５期（≒取組～山ノ神Ⅱ式）に属する。390は把手状の装飾と推定し、沈線でワラビ手状の文様などを描出する。４期～５期古（≒取組～山ノ神Ⅰ式）である。391と392は深鉢の体部で、391は単節ＬＲの縄文を地文として、２条の垂下沈線と蛇行沈線を配す。392は弧状の２重隆帯が付き、隆帯上に円棒状具による刺突文を施す。共に４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。393は深鉢の口縁部で、穿孔が１つ見られ、補修孔と推定される。

Ｄ－Ａ～Ｄ風倒木痕・西調査区東端の谷（第46図）

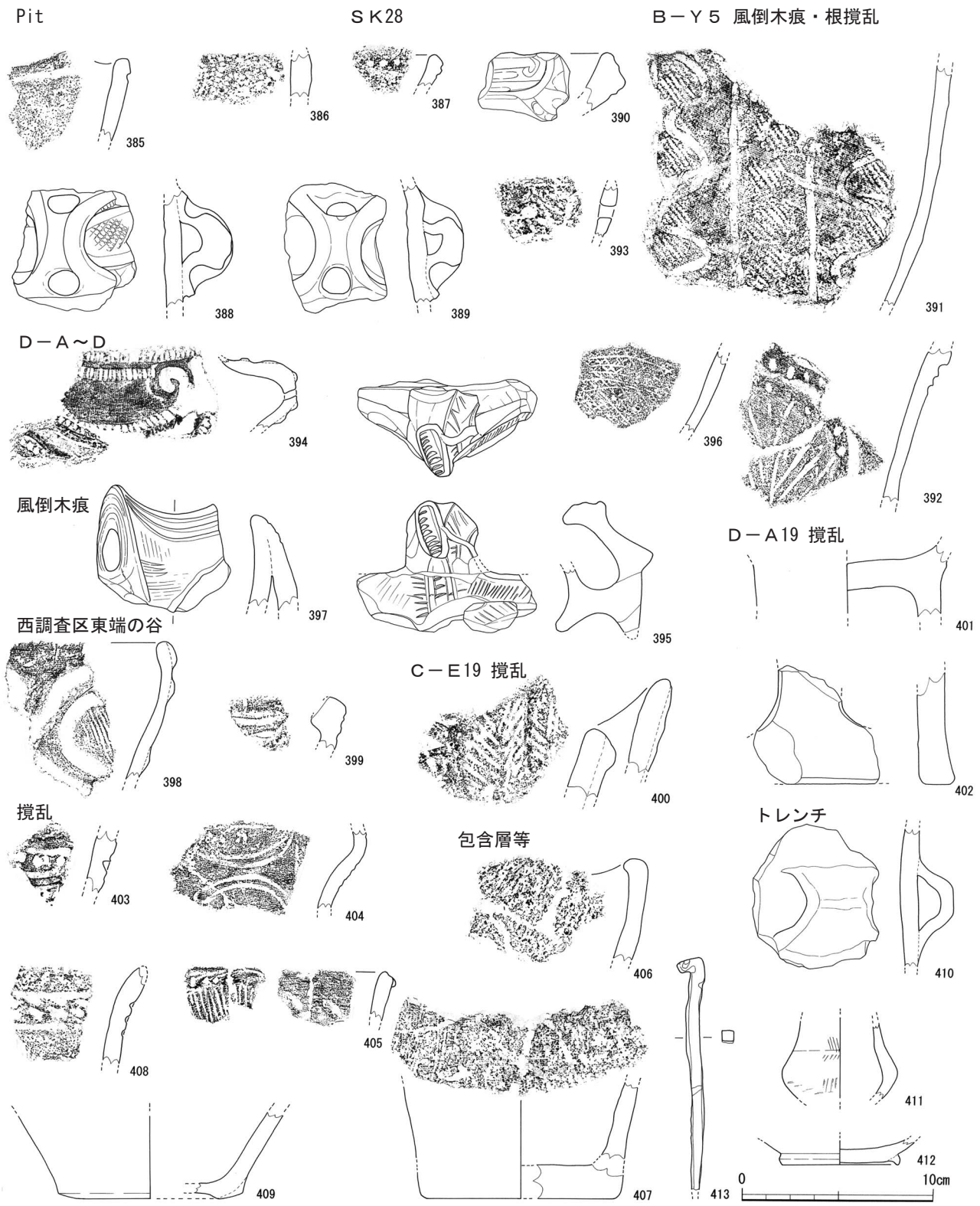
中期後葉の土器が出土した。器種は、いずれも深鉢とみられる。394はキャリパー形口縁部で屈曲し、胎土は赤褐色で締る。太い沈線で渦文などの文様を描出し、沈線内に篦刺突が入る。２期古（≒咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）である。395は把手状の立体的な装飾で、多角形の蓋受けを有する。把手に細い粘土紐を貼付け、内側に刺突文を施す。把手の両側には透かしを配し、下位には細い沈線が斜行する。美濃地域に類例がある。３期（≒神明式）である。396は体部で、胎土は緻密である。条線が交差し文様を描く。３期～５期古（≒神明～山ノ神Ⅰ式）である。397は口縁部で三角形の大波状を呈し、波頂部は左側に面を持ち、大きな穴があく。３重の沈線が穴の周りと口縁直下に施される。398は口縁部で、隆帯や沈線により区画文を描出し、区画内に斜行沈線を充填する。共に４期（≒取組～島崎Ⅲ式）である。399は口縁部で、三角形の大波状を呈し、沈線が横行する。

撹乱（第46図）　出土した土器は、中期後葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。400は口縁部でゆるやかな波状を呈し、垂下隆帯と綾杉文を施す。401は台付深鉢の底部で、底面は内側に窪み、外面は無文である。いずれも４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。403は体部で、横位沈線と並行する刺突文を施す。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）である。404は体部で、２重の弧状沈線文を描く。２期（≒中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系）である。405は口縁部で、端部が肥厚し円棒状具による刺突文を施す。外面は条線を施し、内面は斜行する窪みを有する。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。

包含層等（第46図）　出土した土器は、中期後葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。402は台付深鉢の底部で、外面は無文である。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。406と407は同一個体と見られ、体・底部である。摩滅により明瞭ではないが、条線が縦位にかすかに残る。３期以降（≒神明式～）である。408は口縁部で端部を欠失する。２条の横位沈線と、斜行する細長い刺突文を施す。５期新（≒山ノ神Ⅱ式）に属する。409は底部で、外面は無文である。３期以降（≒神明式～）である。410は橋状把手であり、大型で立体的である。４期新～５期古（≒島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ式）である。

（３）その他の土器と金属製品

古式土師器１点と灰釉陶器１点、和釘１点である（第46図）。411は古墳時代前期の古式土師器の小型丸底壺と思われる。412は灰釉陶器の底部である。413は和釘である。先端を僅かに欠失する。（中村）



第46図　縄文土器等実測図（12）（１：３）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
1	162-08	深鉢	C-D21	ＳＦ52	体上部：羽状の押型文か沈線と横位山形文	褐 7.5YR4/3	「神並上層」	
2	137-05	深鉢	C-D20	ＳＨ50	強いキャリパー形口縁部 沈線文	褐 7.5YR4/4	２古 中富Ⅲ～Ⅳ	
3	147-10	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	キャリパー形口縁部 沈線・交互刺突・撚糸文	にぶい黄褐 10YR5/4	２古 中富Ⅲ・Ⅳ	
4	150-08	深鉢	C-D20	ＳＨ50中	撚糸文	にぶい黄褐 10YR5/3	２古 中富Ⅲ・Ⅳ	
5	137-08	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	撚糸・沈線文	褐 7.5YR4/3	２古 中富Ⅲ・Ⅳ	
6	138-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	撚糸・(縄巻縄文)・沈線文	にぶい黄橙 10YR6/4	２古 中富Ⅲ・Ⅳ	
7	150-05	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	撚糸文	明赤褐 5YR5/6	２古 中富Ⅲ・Ⅳ	
8	150-07	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	撚糸文	にぶい黄褐 10YR5/4	２古 中富Ⅲ・Ⅳ	
9	137-06	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	キャリパー形口縁部 沈線・渦文	橙 7.5YR7/6	２～３ 中富Ⅲ～神明	
10	141-06	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.25	隆帯文	明黄褐 10YR7/6	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
11	143-04	深鉢	C-D20	ＳＨ50	ＲＬ縄文	にぶい黄橙 10YR5/3	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
12	143-05	深鉢	C-D20	ＳＨ50	ＲＬ縄文	にぶい黄橙 10YR5/4	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
13	145-02	深鉢	C-E20	ＳＨ50	平底	にぶい橙 7.5YR7/4	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
14	140-02	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.47	平底	にぶい黄橙 10YR6/4	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
15	140-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.24	平底	明黄褐 10YR7/6	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
16	145-03	深鉢	C-D20	ＳＨ50	平底	にぶい黄橙 10YR6/4	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
17	146-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50	平底	にぶい黄橙 10YR6/4	３～５ 神明～山ノ神Ⅱ	
18	136-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50	平口縁部 隆帯・渦巻沈線文	にぶい黄橙 10YR6/3	４古 取組	
19	138-07	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No. 4	波状口縁部 隆帯・渦巻沈線文	灰黄褐 10YR6/2	４古 取組	
20	139-02	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.17	平口縁部 隆帯・渦巻沈線文	にぶい黄褐 10YR5/3	４古 取組	
21	138-08	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.14	キャリパー形・波状口縁部 隆帯・渦巻沈線文	褐 7.5YR4/4	４古 取組	
22	139-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.29	波状口縁部 隆帯・渦巻沈線文	灰黄褐 10YR4/2	４古 取組	
23	137-09	深鉢	C-D20	ＳＨ50	平口縁部 櫛猫条線	にぶい黄褐 10YR5/3	４ 取組～島崎Ⅲ	
24	143-08	深鉢	C-D20	ＳＨ50	キャリパー形・平口縁部 隆帯・沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR7/3	４ 取組～島崎Ⅲ	
25	140-08	深鉢	C-E20	ＳＨ50	キャリパー形・平口縁部 隆帯・渦巻沈線・刺突文	浅黄橙 10YR8/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
26	140-07	深鉢	C-D20	ＳＨ50	キャリパー形・平口縁部 隆帯・渦巻沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR7/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
27	136-02	深鉢	C-D20	ＳＨ50	橋状把手 隆帯・沈線・刺突文	にぶい褐 7.5YR5/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
28	134-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50	キャリパー形・山形大波状口縁部・箱状把手 透かし・渦文・刺突文	橙 7.5YR6/6	３～４古 神明～取組	
29	143-06	深鉢	C-E20	ＳＨ50	キャリパー形・大三角形波状口縁部 刺突・条線文	にぶい黄橙 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
30	136-03	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.52	キャリパー形・波状口縁部 櫛描文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
31	141-04	深鉢	C-D20	ＳＨ50	沈線・隆帯文	にぶい黄 2.5Y6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
32	147-08	深鉢	C-D20	ＳＨ50上	隆帯・沈線文	黄褐 10YR5/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
33	137-04	深鉢	C-D20	ＳＨ50	隆帯・縄文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
34	143-03	深鉢	C-D20	ＳＨ50	ハリツケナデ 隆帯	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
35	146-06	深鉢	C-D・E20	ＳＨ50下 南東部	隆帯・沈線文	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
36	143-01	深鉢	C-D20	ＳＨ50	ユビオサエ・山形口縁部	橙 7.5YR6/6	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
37	138-02	深鉢	C-D20	ＳＨ50	富士山形口縁部 沈線文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
38	138-03	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.50	橋状把手 隆帯・刺突・沈線文	灰褐 7.5YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
39	147-02	深鉢	C-E20	ＳＨ50	山形口縁部 隆帯・沈線文	明褐 7.5YR5/6	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
40	140-05	深鉢	C-D20	ＳＨ50	刺突文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
41	137-03	深鉢	C-D20	ＳＨ50	隆帯・沈線・縄文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
42	139-03	深鉢	C-D20	ＳＨ50 No.27	沈線文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	

第７表　縄文土器観察表（１）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
43	137-01	深鉢	C-D20	S H50	隆帯・沈線・縄文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
44	138-06	深鉢	C-D20	S H50	刺突・沈線文	褐 10YR4/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
45	149-06	深鉢	C-D20	S H50上	隆帯・沈線・縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
46	150-01	深鉢	C-D20	S H50上	刺突・縄文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
47	149-11	深鉢	C-D20	S H50上	刺突文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
48	147-01	深鉢	C-D20	S H50中	刺突文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
49	137-02	深鉢	C-D20	S H50	隆帯・沈線・縄文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
50	149-01	深鉢	C-D20	S H50上	沈線文	にぶい橙 7.5YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	風化
51	149-09	深鉢	C-D20	S H50 畦	沈線文	黒褐 10YR3/1	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
52	148-03	深鉢	C-D20	S H50上	刺突文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
53	149-03	深鉢	C-D20	S H50上	沈線文	暗灰黄 2.5Y5/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
54	149-02	深鉢	C-D20	S H50上	刺突文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
55	148-02	深鉢	C-D20	S H50上	刺突文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
56	146-04	深鉢	C-D・E20	S H50 西畦	隆帯・沈線文	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
57	141-03	深鉢	C-D20	S H50	隆帯・沈線文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
58	146-05	深鉢	C-D・E20	S H50 西畦	刺突・縄文	明黄褐 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
59	152-02	深鉢	C-D20	S H50上	沈線文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	炭化物付着
60	151-04	深鉢	C-D20	S H50上	沈線・縄文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
61	144-01	深鉢	C-D20	S H50	隆帯・刺突文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
62	135-06	深鉢	C-D20	S H50	キャリパー形口縁部？ 押圧・刺突文	褐 7.5YR4/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
63	146-09	浅鉢	C-D20	S H50中	沈線	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
64	137-07	深鉢	C-D20	S H50上	(渦巻？)沈線文	にぶい黄橙 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
65	146-07	深鉢	C-D20	S H50下 南西部	撚糸文？	にぶい黄褐 10YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
66	142-01	深鉢	C-D20	S H50 No.37	連続竹管・垂下沈線・蛇行沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５新 山ノ神Ⅱ	
67	147-09	深鉢	C-D20	S H50上	沈線・隆帯文	にぶい黄橙 10YR6/4	５新 山ノ神Ⅱ	
68	146-02	深鉢	C-D20	S H50中 北東部	沈線・縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	５新 山ノ神Ⅱ	
69	139-04	深鉢	C-D20	S H50 No.23・26	波状口縁部 沈線・刺突文	灰黄褐 10YR4/2	５新 山ノ神Ⅱ	
70	144-04	深鉢	C-D20	S H50	沈線・刺突文	にぶい褐 7.5YR5/4	５新 山ノ神Ⅱ	
71	138-04	深鉢	C-D・E20	S H50	隆帯文	橙 7.5YR6/6	５新 山ノ神Ⅱ	
72	142-03	深鉢	C-D20	S H50 No.36	渦巻沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５新 山ノ神Ⅱ	
73	142-04	深鉢	C-D20	S H50	連続竹管・斜行沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５新 山ノ神Ⅱ	
74	142-02	深鉢	C-D20	S H50 No.35	連続竹管・垂下沈線・蛇行沈線・斜行沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５新 山ノ神Ⅱ	
75	150-02	深鉢	C-D20	S H50上	沈線・渦・多重連弧文	にぶい褐 7.5YR5/4	５新 山ノ神Ⅱ	
76	150-03	深鉢	C-D20	S H50上	沈線文	褐 10YR4/4	５新 山ノ神Ⅱ	
77	136-04	深鉢	C-D20	S H50	山形・大波状口縁部 沈線文	にぶい黄橙 10YR5/4	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
78	149-10	深鉢	C-D20	S H50上	平縁	灰黄褐 10YR4/2	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
79	152-01	深鉢	C-D20	S H50上	隆帯・羽状・綾杉文	灰 5Y5/1	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
80	146-08	深鉢	C-D20	S H50中	平縁 縄文	灰黄褐 10YR4/2	中期末葉	
81	147-04	深鉢	C-E20	S H50	平縁 縄文	黒褐 10YR3/2	中期末葉	
82	145-01	深鉢	C-D20	S H50	波状口縁部 沈線文	橙 7.5YR6/6	５新～後期初頭 山ノ神Ⅱ～後期初頭	
83	147-07	土器片錘	C-D20	S H50上	長軸両端に切込み 無文	灰黄褐 10YR4/2	時期不明	
84	132-01	深鉢	C-G22	S H84下 No. 9	大波状口縁部・橋状把手 沈線・渦・懸垂・ＬＲ縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	

第８表　縄文土器観察表（２）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
85	131-01	深鉢	C-G22	SH84 No.２・３・６～８・16・18・43・53・58・102	波状口縁部 連弧・沈線・紡錘・ワラビ手文	褐 7.5YR4/3	５新 山ノ神Ⅱ	
86	111-02	深鉢	C-H22	SH84下	沈線・刺突	にぶい黄褐 10YR5/4	２～３ 中富Ⅲ～神明	
87	127-01	深鉢	C-G・H 21・22	SH84下	把手 刺突文	黄褐 10YR5/6	３～４古 神明～取組	
88	109-03	深鉢	C-H22	SH84下	隆帯・沈線・綾杉文	褐 7.5YR4/4	３～４古 神明～取組	
89	109-05	深鉢	C-G・H 21・22	SH84下 北東部 炉	沈線・綾杉文	褐 7.5YR4/4	３～４古 神明～取組	
90	109-01	深鉢	C-G22	SH84下 No.34	沈線・綾杉文	にぶい褐 7.5YR5/4	３～４古 神明～取組	
91	109-02	深鉢	C-G22	SH84下 No.34	沈線・綾杉文	橙 7.5YR6/6	３～４古 神明～取組	
92	126-08	深鉢	C-G22	SH84 炉周辺	隆帯・渦状沈線・竹管文	にぶい橙 7.5YR6/4	３～５古 神明～山ノ神Ⅰ	
93	101-02	深鉢	C-G22	SH84下 No.１	波状口縁 刺突・隆帯による渦巻き・細い沈線文	にぶい黄橙 10YR6/4	４古 取組	
94	101-03	深鉢	C-G・H22	SH84上 No.63	波状口縁 刺突文・太い沈線による渦巻き文	にぶい黄褐 10YR5/3	４古 取組	
95	101-01	深鉢	C-G・H 21・22	SH84下 北東部周溝	太い沈線によるワラビ手状文・楕円形区画文	にぶい黄橙 10YR6/4	４古 取組	
96	122-01	深鉢	C-G・H22	SH84上 No.66	隆帯・沈線・渦文	灰黄褐 10YR4/2	４古 取組	
97	122-02	深鉢	C-G・H 21・22	SH84下 北西部	隆帯・沈線・渦文	黒褐 10YR3/1	４古 取組	
98	113-09	深鉢	C-G22・23	SH84 畦	波状口縁 隆帯・沈線・区画文	にぶい黄橙 10YR6/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
99	114-01	深鉢	C-G・H 21・22	SH84 畦	隆帯・沈線・区画文	にぶい黄褐 10YR5/3	４ 取組～島崎Ⅲ	
100	113-02	深鉢	C-G・H22	SH84下 北西部	刺突・隆帯・沈線・区画文	にぶい黄橙 10YR7/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
101	113-05	深鉢	C-G22	SH84	隆帯・沈線・区画・ＲＬ縄文	灰黄褐 10YR4/2	４ 取組～島崎Ⅲ	
102	121-06	深鉢	C-H21・22	SH84上 南西部	隆帯・沈線・渦文	灰黄褐 10YR4/2	４古 取組	
103	122-07	深鉢	C-G・H 21・22	SH84 畦	沈線文	黒褐 2.5Y3/1	４ 取組～島崎Ⅲ	
104	127-05	壺	C-G・H 21・22	SH84	把手 刺突文	橙 7.5YR6/6	４ 取組	
105	127-02	深鉢	C-G22	SH84下	橋状把手？ 隆帯・沈線・刺突文	にぶい黄褐 10YR4/3	４ 取組～島崎Ⅲ	
106	119-07	深鉢	C-G21	SH84上	隆帯・矢羽根・綾杉文	にぶい褐 7.5YR5/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
107	121-05	深鉢	C-G22・23	SH84 畦	隆帯・沈線・渦文	灰黄褐 10YR6/2	４古 取組	
108	102-08	深鉢	C-G・H22	SH84上 No.97	隆帯・羽状沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
109	107-08	深鉢	C-G22	SH84下 No.56	波状口縁部 無紋・縄文？	褐 7.5YR4/4	４～ 取組～	
110	116-10	深鉢	C-H22	SH84	山形・大波状口縁部 突帯・沈線・刺突文	灰黄褐 2.5Y4/2	４新 島崎Ⅲ	
111	105-07	浅鉢or壺	C-G・H22	SH84上 No.21	橋状把手 隆帯・沈線文	にぶい橙 7.5YR7/4	４古～５古 取組～山ノ神Ⅰ	
112	129-01	深鉢	C-G22・23	SH84 畦	富士山形大波状口縁部 刺突・斜行沈線文	浅黄橙 7.5YR8/4	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
113	111-05	深鉢	C-G22	SH84下	突帯？横位沈線文	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
114	111-01	深鉢	C-H22	SH84	沈線・刺突文	明黄褐 10YR6/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
115	133-02	深鉢	C-G22	SH84下 No.26	富士山形大波状口縁部 沈線文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
116	133-05	深鉢	C-G22	SH84下 No.26	富士山形大波状口縁部 沈線文	にぶい黄橙 10YR5/3	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
117	114-08	深鉢	C-G22・23	SH84 畦		浅黄橙 10YR8/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
118	108-06	深鉢	C-G22	SH84上	ユビオサエ後ナデ 横位沈線文	暗褐 10YR3/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
119	111-04	深鉢	C-G22	SH84下	刺突・突帯・沈線・隆帯による区画文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
120	133-01	深鉢	C-G22	SH84	富士山形大波状口縁部 沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
121	115-03	深鉢	C-G22・23	SH84 畦	横位沈線文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
122	119-06	深鉢	C-G22	SH84 柱穴Ａ２	緩やかな波状口縁部 斜行沈線・隆帯による区画文・キザミ	褐 7.5YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
123	104-06	深鉢	C-G・H22	SH84上 No.46	斜行するキザミ・刺突文	橙 7.5YR7/6	４新～５新 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
124	115-04	深鉢	C-G22・23	SH84畦	指による圧痕 刺突文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
125	116-01	深鉢	C-H22	SH84	富士山形大波状口縁部 斜行するキザミ・刺突文	橙 5YR6/8	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
126	105-01	深鉢	C-G・H22	SH84上 No.92	横位隆帯・突帯文	橙 7.5YR7/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	

第９表　縄文土器観察表（３）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
127	114-02	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	沈線による区画文	にぶい黄褐 10YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
128	104-09	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.90	渦・区画文	灰黄褐 10YR5/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
129	108-07	深鉢	C-G22	S H84上	ユビオサエ後ナデ 横位沈線文	暗褐 10YR3/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
130	123-05	深鉢	C-H22	S H84	沈線	灰褐 7.5YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
131	111-06	深鉢	C-G22	S H84下	突帯？・沈線による区画文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
132	116-04	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	竹管文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
133	107-03	深鉢	C-G22	S H84下 No.46	横位沈線・縄文	黒褐 10YR3/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
134	107-07	深鉢	C-G22	S H84下 No.56	横位沈線	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
135	107-04	深鉢	C-G22	S H84下 No.52	横位沈線	にぶい黄褐 10YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
136	125-02	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	沈線・左上がり斜線列	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
137	111-07	深鉢	C-G22	S H84上	無文	明褐 7.5YR5/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
138	125-03	深鉢	C-G・H22	S H84 炉東	沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
139	120-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84中	矢羽根・横位沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
140	122-08	深鉢	C-G22	S H84	平縁 沈線文	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
141	129-04	深鉢	C-G22	S H84	隆帯・横位沈線文	明赤褐 5YR5/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
142	128-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部	刺突文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
143	116-09	深鉢	C-G22	S H84	突帯・隆帯による区画文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
144	105-03	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.96	突帯・刺突・沈線・綾杉文	黒 7.5Y2/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
145	112-05	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	平縁 無文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
146	121-04	深鉢	C-G・H 21・22・23	S H84 畦	隆帯・羽状文 矢羽根状沈線	黒褐 2.5Y3/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
147	112-04	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	富士山形大波状口縁部 隆帯・沈線文	にぶい橙 7.5YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
148	125-04	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	垂下沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
149	120-05	深鉢	C-G・H22	S H84下 北西部	矢羽根・垂下沈線・綾杉文	橙 5YR6/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
150	120-06	深鉢	C-H22	S H84 南東部	矢羽根・沈線・綾杉文	にぶい橙 7.5YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
151	122-05	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	懸垂・蛇行沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
152	123-09	深鉢	C-G・H22	S H84下 南東部	垂下沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
153	119-08	深鉢	C-G・H 21・22	S H84中	垂下隆帯・刺突・矢羽根・綾杉文	にぶい橙 7.5YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
154	120-03	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	矢羽根・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
155	105-05	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 5		明褐 7.5YR5/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
156	127-06	深鉢	C-H22	S H84下	貼付隆帯・刺突・沈線文・押圧	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
157	120-02	深鉢	C-G22	S H84下	矢羽根・綾杉文	浅黄橙 10YR8/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
158	105-08	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.15	葉脈痕	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
159	128-03	深鉢	C-G・H 21・22	S H84 畦	隆帯・沈線・渦文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
160	133-07	深鉢	C-H22	S H84下 南東部	沈線・矢羽根？・多重連弧文	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
161	123-04	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	沈線	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
162	106-01	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.62		にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
163	106-02	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.76	未調整	明黄褐 10YR7/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
164	130-01	深鉢	C-G22	S H84下 No.16・18・50・60	調整不明瞭・無文	明赤褐 2.5Y5/8	３～ 神明～	
165	129-06	深鉢	C-G22	S H84下	隆帯文	橙 5YR6/8	３～ 神明～	
166	129-07	深鉢	C-G22	S H84	隆帯文	橙 7.5YR6/6	３～ 神明～	
167	128-06	深鉢	C-G21・22	S H84 主柱穴		橙 7.5YR7/6	３～ 神明～	
168	129-05	深鉢	C-H22	S H84		にぶい橙 5YR6/4	３～ 神明～	

第10表　縄文土器観察表（４）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
169	128-08	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部	葉脈痕あり	にぶい褐 7.5YR6/3	３～ 神明～	
170	128-07	深鉢	C-G22	S H84 炉周辺		橙 7.5YR6/6	３～ 神明～	
171	108-05	深鉢	C-G22	S H84下 No.59		浅黄橙 10YR8/3	３～ 神明～	
172	128-05	深鉢	C-H22	S H84	沈線文	明赤褐 2.5YR5/6	３～ 神明～	
173	115-07	深鉢	C-G22	S H84	横位沈線文	にぶい黄褐 7.5YR5/4	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
174	104-01	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.57	無文	にぶい黄褐 10YR5/3	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
175	116-02	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	無文	灰褐 7.5YR5/2	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
176	113-08	深鉢	C-G22	S H84	無文	橙 5YR6/8	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
177	113-06	深鉢	C-G22	S H84	無文	褐 7.5YR4/3	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
178	104-02	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.22	刺突文・隆帯による区画・羽根状沈線文	橙 7.5YR6/6	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
179	107-05	深鉢	C-G・H22	S H84 南東部	ＬＲ縄文	灰黄褐 10YR6/2	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
180	107-06	深鉢	C-G22	S H84下 No.56	ＬＲ縄文	灰黄 2.5Y7/2	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
181	103-03 103-04	深鉢	C-G・H22	S H84下 No.30 S H84上 No.38	楕円区画(斜行沈線)・渦巻文？・連弧文	にぶい黄橙 10YR7/3	５古 山ノ神Ⅰ	
182	117-02	深鉢	C-G22	S H84上	条痕・楕円区画(斜行沈線)・連弧文	褐灰 10YR5/1	５古 山ノ神Ⅰ	
183	110-04	深鉢	C-G・H22	S H84 南東部	刻み・刺突文	にぶい黄褐 10YR5/3	５古 山ノ神Ⅰ	
184	110-03	深鉢	C-G21	S H84上	刺突文	にぶい黄褐 10YR5/4	５古 山ノ神Ⅰ	
185	105-06	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.10・12		明褐 7.5YR5/6	５古 山ノ神Ⅰ	
186	107-01	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.84	ヘラ描き沈線・垂下沈線・綾杉文	にぶい黄橙1 0YR7/3	５古 山ノ神Ⅰ	
187	102-03	深鉢	C-G22	S H84中	大波状口縁部 隆帯(横に刺突)・縄文？・斜行沈線文	にぶい黄橙 10YR7/3	５新 山ノ神Ⅱ	
188	102-02	深鉢	C-G22	S H84上	大波状口縁部 隆帯(横に刺突)・縄文？・斜行沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５新 山ノ神Ⅱ	
189	102-04	深鉢	C-G22	S H84	大波状口縁部 太い沈線文	黒褐 7.5YR3/1	５新 山ノ神Ⅱ	
190	102-05	深鉢	C-G22	S H84	大波状口縁部 ＬＲ縄文	灰黄 2.5Y7/2	５新 山ノ神Ⅱ	
191	107-09	深鉢	C-G22	S H84下 No.65	大波状口縁部	にぶい橙 7.5YR6/4	５新 山ノ神Ⅱ	スス付着
192	114-04	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	波状口縁部	にぶい黄橙 10YR2/4	５新 山ノ神Ⅱ	
193	114-03	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	波状口縁部 横位沈線文	灰黄褐 10YR4/2	５新 山ノ神Ⅱ	
194	115-06	深鉢	C-G22	S H84下 No.50	波状口縁部 渦文	褐 7.5YR4/6	５新 山ノ神Ⅱ	
195	112-02	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	波状口縁部 横位沈線文	黄褐 10YR5/6	５新 山ノ神Ⅱ	
196	114-06	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	波状口縁部 無文	褐 7.5YR4/3	５新 山ノ神Ⅱ	
197	104-08	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.82	平縁 横位沈線	灰黄褐 10YR4/2	５新 山ノ神Ⅱ	
198	125-05	深鉢	C-G21	S H84上	沈線・ＬＲ縄文	にぶい黄橙 10YR6/3	５新 山ノ神Ⅱ	
199	121-01	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	沈線(楕円文様)・無節ｒ縄文	暗褐 7.5YR3/3	５新 山ノ神Ⅱ	
200	117-07	深鉢	C-G22・23	S H84 畦	横位隆帯・斜行沈線文	灰黄褐 10YR6/2	５新 山ノ神Ⅱ	
201	117-06	深鉢	C-G22	S H84	横位隆帯・斜行沈線文	にぶい黄橙 10YR7/3	５新 山ノ神Ⅱ	
202	110-09	深鉢	C-G22	S H84下 No.56	平縁 横位沈線	灰黄褐 10YR4/2	５新 山ノ神Ⅱ	
203	104-03	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.34	波状口縁部 横位沈線	浅黄 2.5Y7/3	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
204	102-07	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.39	波状口縁部 横位沈線・区画文(斜行沈線)	にぶい黄橙 10YR7/3	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
205	112-06	深鉢	C-G22	S H84下	刺突列・横位沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
206	104-07	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.57	大波状口縁部 沈線・ＬＲ縄文	黒褐 2.5Y3/1	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
207	110-01	深鉢	C-G22	S H84上	波状口縁部 横位沈線・区画文	にぶい黄褐 10YR5/4	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
208	102-06	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.73	ワラビ手状沈線文・羽状斜行沈線	褐 7.5YR4/3	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
209	128-04	深鉢	C-H22	S H84下	波状口縁部 穿孔・隆帯・刺突・区画・沈線文	にぶい黄橙 10YR6/3	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
210	110-08	深鉢	C-G21	S H84上	刺突文	暗褐 7.5YR3/3	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	

第11表　縄文土器観察表（５）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
211	124-01	深鉢	C-G・H 21・22	ＳＨ84下 北東部	条線文	にぶい褐 7.5YR5/4	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
212	161-08	深鉢	D-F17	ＳＨ93 炉	ＬＲ縄文	褐 10YR4/4	３～ 神明式～	
213	191-02	深鉢	E-U・V11	ＳＨ106 No.23・24・25	連弧状沈線・無文帯	にぶい黄褐 10YR4/3	２古 咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
214	187-02	深鉢	E-U11	ＳＨ106	半截竹管状具での横位沈線・撚糸地文	橙 5YR6/6	２古 里木Ⅱ	
215	188-11	深鉢	E-U11	ＳＨ106	撚糸地文	明赤褐 5YR5/6	２古 里木Ⅱ	
216	187-03	深鉢	E-U11	ＳＨ106 畦北	撚糸地文	橙 7.5YR7/6	２古 里木Ⅱ	
217	187-04	深鉢	E-U11	ＳＨ106 土器集中(西)	縄文無節？撚糸地文	灰黄褐 10YR5/2	２古 里木Ⅱ	
218	188-09	深鉢	E-V11	ＳＨ106 炉	撚糸地文	にぶい黄橙 10YR6/4	２ 里木Ⅱ	
219	185-01	深鉢	E-U・V11	ＳＨ106 No.10・ 13・15	橋状把手 貼付隆帯・竹管状工具による刺突・懸垂・綾杉文・方形(楕円形)区画・矢羽根状沈線	橙 5YR6/6	３ 神明	
220	185-02	深鉢	E-V11	ＳＨ106 No. ２	竹管・方形区画・沈線文 隆帯に連続刺突文・渦巻き文	浅黄 2.5Y7/4	３ 神明	
221	186-04	深鉢	E-U11	ＳＨ106(切株周辺)	波状口縁部 隆帯による区画文(区画内縄文か？)	にぶい黄橙 10YR7/3	３ 神明	
222	189-08	深鉢	E-U11	ＳＨ106	隆帯・斜行沈線文	黒褐 2.5Y3/1	３～４古 神明～取組	
223	189-09	深鉢	E-U11	ＳＨ106	隆帯・斜行沈線文	にぶい黄褐 10YR4/3	３～４古 神明～取組	
224	186-03	深鉢	E-U11	ＳＨ106	弧状の貼付隆帯	浅黄橙 10YR8/4	３～５古 神明～山ノ神Ⅰ	
225	190-01	深鉢	E-V11	ＳＨ106 柱穴Ｂ１	中実の把手 沈線文	にぶい黄褐 10YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
226	188-08	深鉢	E-U・V11	ＳＨ106	隆帯・斜行沈線文	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
227	188-07	深鉢	E-U・V11	ＳＨ106 No.17	波状口縁部 横位沈線	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
228	188-01	深鉢	E-U11	ＳＨ106 柱穴Ｂ１	波状口縁部 隆帯・弧状の沈線・区画文	灰白 10YR8/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
229	187-01	深鉢	E-U11	ＳＨ106(土器集中２)	平縁 沈線文	にぶい橙 7.5YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
230	188-03	深鉢	E-U11	ＳＨ106 柱穴Ｂ１	波状口縁部 無文	にぶい黄褐 10YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
231	188-04	深鉢	E-V11	ＳＨ106 柱穴Ａ１	刺突・隆帯・竹管文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
232	189-04	深鉢	E-U・V11	ＳＨ106 No.22	渦状沈線文	にぶい黄橙 10YR7/3	５新 山ノ神Ⅱ	
233	186-01	深鉢	E-V11	ＳＨ106	ヘラ描き沈線区画・無節ｒ縄文	にぶい黄橙 10YR7/4	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	
234	186-02	浅鉢	E-U・V11	ＳＨ106 No.16	ＲＬ縄文	にぶい黄 2.5Y6/4	中期末葉	
235	188-10	深鉢	E-V11	ＳＨ106 柱穴Ａ１	ＲＬ縄文	にぶい黄褐 10YR4/3	中期末葉	
236	191-01	深鉢	E-V11	ＳＨ106 No. ４	摩滅により不明瞭	浅黄橙 10YR8/4	中期末葉	
237	191-01	深鉢	E-U・V11	ＳＨ106 No.17		浅黄橙 10YR8/4	中期末葉	
238	186-06	深鉢	E-V11	ＳＨ106 No. ９	無文	浅黄橙 10YR8/4	中期末葉	
239	197-03	深鉢	E-W10	ＳＨ107 柱穴Ａ１	沈線・ＲＬ縄文	にぶい褐 7.5YR5/4	中期前半(船元系)	
240	194-01	深鉢	E-W10	ＳＨ107	横位の押引文・縦位のＳ字状文	にぶい黄褐 10YR5/4	２新 咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
241	196-01	深鉢	E-W10	ＳＨ107	横位沈線・ＲＬ縄文	にぶい橙 7.5YR6/4	２新 咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
242	192-04	深鉢	E-Ｗ９	ＳＨ107 炉周辺	キャリパー形口縁部 横位沈線	にぶい黄橙 10YR6/4	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
243	192-07	深鉢	E-W10	ＳＨ107	肥厚帯口縁部 横位沈線・段有り	にぶい黄褐 10YR5/4	２～３ 中富Ⅲ～神明	
244	193-03	深鉢	E-W10	ＳＨ107 炉周辺	貼付け隆帯・押引き・ＲＬ縄文	橙 7.5YR6/6	２～３ 中富Ⅲ～神明	
245	195-01	深鉢	E-W10	ＳＨ107 柱穴Ａ２	無文	にぶい黄橙 10YR7/3	２～３ 中富Ⅲ～神明	
246	192-05	深鉢	E-W10	ＳＨ107	横位隆帯・沈線文	黒褐 10YR3/1	２新～３ 咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系～神明	
247	194-03	深鉢	E-W10	ＳＨ107 柱穴Ｂ２	キャリパー形口縁部 沈線・刺突・渦文	灰黄褐 10YR4/2	３ 咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
248	196-03	深鉢	E-W10	ＳＨ107	横位・弧状隆帯文	にぶい褐 7.5YR5/4	３ 神明	
249	194-04	深鉢	E-Ｗ９・10	ＳＨ107	横位沈線文	灰黄褐 10YR4/2	３ 神明	
250	194-07	深鉢	E-W10	ＳＨ107	沈線文	にぶい黄橙 10YR6/4	３ 神明	
251	194-06	深鉢	E-W10	ＳＨ107 No. ５	縦位隆帯・渦・ＲＬ縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	３ 神明	

第12表　縄文土器観察表（６）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
252	194-05	深鉢	E-W10	ＳＨ107 No.10	渦文	明赤褐 5YR5/6	３ 神明	
253	194-02	深鉢	E-W10	ＳＨ107 炉	大波状口縁部 沈線文	にぶい黄褐 10YR4/3	３ 神明	
254	193-06	鉢	E-W10	ＳＨ107 炉	波状口縁部 横位沈線・隆帯・ＲＬ縄文	灰黄褐 10YR4/2	３～４古 神明～取組	
255	193-07	鉢	E-W10	ＳＨ107 炉周辺	波状口縁部 横位沈線・隆帯・ＲＬ縄文	灰黄褐 10YR4/2	３～４古 神明～取組	
256	193-08	鉢	E-W10	ＳＨ107	波状口縁部 横位沈線・隆帯・ＲＬ縄文	灰黄褐 10YR4/2	３～４古 神明～取組	
257	193-02	深鉢	E-W９	ＳＨ107 炉周辺	条痕	褐 10YR4/4	３～４古 神明～取組	
258	196-08	深鉢	E-W９・10	ＳＨ107	工具痕あり 沈線・刺突文	浅黄橙 7.5YR8/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
259	196-04	深鉢	E-W10	ＳＨ107	羽状文・綾杉文	にぶい橙 7.5YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
260	192-02	深鉢	E-W10	ＳＨ107 柱穴Ａ２	沈線・刺突文・刻み	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
261	196-02	深鉢	E-W９	ＳＨ107	条痕・隆帯・沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
262	195-06	深鉢	E-W９・10	ＳＨ107	横位沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
263	196-05	深鉢	E-W10	ＳＨ107	条痕・沈線・刺突・ＲＬ縄文	橙 7.5YR6/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
264	192-03	深鉢	E-W10	ＳＨ107	横位・垂下沈線文	にぶい黄褐 10YR5/3	５新 山ノ神Ⅱ	
265	187-06	深鉢	E-W10	ＳＨ107 No.６	刻みあったか？・無文	浅黄橙 7.5YR8/6	中期後葉	
266	195-07	深鉢	E-W９・10	ＳＨ107	縦位沈線文	黒褐 10YR3/1	中期後葉	
267	198-03	深鉢	E-W11	ＳＨ108 石囲炉	キャリパー形口縁部 櫛状工具・爪形文	橙 5YR6/6	中期前半(船元系)	
268	199-05	深鉢	E-X11	ＳＨ108 柱穴Ｂ２	キャリパー形口縁部 刺突・隆帯・沈線文	橙 7.5YR7/6	２古 里木Ⅱ	
269	198-06	深鉢	E-W11	ＳＨ108 柱穴Ａ２	櫛状工具痕 横位沈線・撚糸文	にぶい黄橙 10YR6/4	２古 里木Ⅱ	
270	198-01	深鉢	E-X11	ＳＨ108 柱穴Ｂ１	キャリパー形口縁部 沈線・渦文	明赤褐 5YR3/4	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
271	198-05	深鉢	E-X11	ＳＨ108 柱穴Ａ２	キャリパー形口縁部 沈線・渦文	明赤褐 5YR5/6	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
272	198-07	深鉢	E-X10・11	ＳＨ108 南西部	隆帯・無文	灰黄褐 10YR4/2	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
273	198-08	深鉢	E-X11	ＳＨ108 北西部	撚糸文	灰黄褐 10YR4/2	２ 里木Ⅱ	
274	198-02	深鉢	E-X11	ＳＨ108 柱穴Ａ１	沈線・撚糸文	黒褐 10YR3/2	２ 里木Ⅱ	
275	198-09	深鉢	E-X11	ＳＨ108 北西部		橙 7.5YR6/6	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
276	198-11	深鉢	E-X11	ＳＨ108 南東部	ＲＬ縄文	灰黄褐 10YR4/2	中期後葉	
277	199-07	深鉢	E-W12	ＳＨ109 周溝	沈線文	にぶい黄褐 10YR4/3	中期後葉	
278	199-06	深鉢	E-W12	ＳＨ109	沈線・無文	灰黄褐 10YR4/2	中期後葉	
279	154-01	深鉢	A-U24	ＳＫ20	粘土紐・貼付把手	にぶい褐 7.5YR6/3	３～ 神明式～	ＳＢ85
280	153-01	深鉢	A-T25	ＳＫ５	波状口縁部 隆帯・無節Ｌの縄文	灰黄 2.5Y4/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ85
281	153-08	深鉢	B-U１	ＳＫ18	隆帯・矢羽根状の横位沈線文	灰褐 7.5YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ85
282	154-04	深鉢	A-U24	ＳＫ20	垂下沈線・綾杉文	明褐 7.5YR5/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ85
283	153-09	深鉢	A-U24	ＳＫ20	垂下沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ85
284	154-02	深鉢	A-U24	ＳＫ20	隆帯・刺突・横位沈線文	灰 5Y6/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ85
285	154-03	深鉢	A-U24	ＳＫ20	隆帯	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ85
286	154-05	深鉢	A-U24	ＳＫ20	刺突文・沈線	にぶい黄橙 10YR7/2	５新 山ノ神Ⅱ	ＳＢ85
287	153-04	深鉢	B-T1	ＳＫ８ 北	隆帯・横位沈線	にぶい黄橙 10YR7/3	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	ＳＢ85
288	153-02	深鉢	A-T25	ＳＫ５	横位沈線	灰褐 10YR4/1	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	ＳＢ85
289	153-05	深鉢	B-T1	ＳＫ８	橋状把手	にぶい黄橙 10YR7/3	中期後葉	ＳＢ85
290	154-07	深鉢	B-V２	ＳＫ23	渦・連弧・縦位沈線文	黒 10YR2/1	５新 山ノ神Ⅱ	ＳＢ86
291	155-02	深鉢	B-V２	ＳＫ23	橋状把手	褐 10YR4/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ86
292	155-01	深鉢	B-V２	ＳＫ23	沈線・綾杉文	暗褐 10YR3/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ86
293	154-08	深鉢	B-V２	ＳＫ23	沈線・綾杉文	橙 7.5YR6/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ86

第13表　縄文土器観察表（７）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
294	154-06	深鉢	B-V２	ＳＫ23	無文	明褐 7.5YR5/6	中期後葉	ＳＢ86
295	156-02	深鉢	A-T24	ＳＫ11	波状口縁部 隆帯文	浅黄橙 10YR8/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ87
296	156-03	深鉢	A-T24	ＳＫ11	隆帯による区画・矢羽根状沈線文	にぶい黄橙 10YR7/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ87
297	156-01	台付深鉢	A-S25	ＳＫ３	楕円形の透孔(三方？)・細い隆帯(二条残) 縦位の隆帯文	明赤褐 5YR5/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ87
298	156-04	深鉢	C-D25	ＳＫ45	無文	浅黄 2.5Y7/3	中期後葉	ＳＢ88
299	156-05	深鉢	C-D24	ＳＫ48	沈線・無文	にぶい橙 7.5YR7/4	中期後葉	ＳＢ88
300	157-01	深鉢	C-E24	ＳＫ56 No. ３	縦位隆帯文	浅黄橙 10YR8/4	３～ 神明式～	ＳＢ89
301	156-09	深鉢	C-E24	ＳＫ56	縄文？・無文	淡黄 2.5Y8/3	３～ 神明式～	ＳＢ89
302	158-01 158-02	深鉢	C-E24	ＳＫ57 No. １・No. ２・No. ３	沈線・懸垂・縄文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
303	157-02	深鉢	C-E24	ＳＫ56	平縁 隆帯・渦・弧状押引き沈線文・連続刺突文	黒褐 10YR3/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
304	158-04	深鉢	C-E24	ＳＫ57	沈線・隆帯・矢羽根状沈線・刺突文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
305	156-07	深鉢	C-E24	ＳＫ56	波状口縁部 隆帯文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
306	158-05	深鉢	C-F24	ＳＫ64	平縁 横位沈線・刺突・隆帯文	褐灰 10YR4/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
307	159-04	深鉢	C-F25	ＳＫ73	隆帯・沈線・連弧文	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
308	159-02	深鉢	C-F24	ＳＫ64	波状口縁 刺突文	暗灰黄 2.5Y4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
309	159-03	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69	刺突文	にぶい褐 7.5YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
310	159-01	深鉢	C-F24	ＳＫ64	矢羽根・無文？・綾杉文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
311	159-08	深鉢	C-F25	ＳＫ73	縦位沈線・ＲＬ縄文	にぶい褐 7.5YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
312	159-09	深鉢	C-F25	ＳＫ73	隆帯・線刻・条痕	にぶい黄橙 10YR7/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
313	159-06	深鉢	C-F25	ＳＫ73	橋状把手 ハリツケナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
314	159-05	深鉢	C-F25	ＳＫ73	隆帯・刺突文	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
315	159-07	深鉢	C-F25	ＳＫ73	線刻 垂下沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/2	５古 山ノ神Ⅰ	ＳＢ89・ スス付着
316	158-03	深鉢	C-F24	ＳＫ64	垂下沈線・綾杉文	にぶい褐 7.5YR5/3	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	ＳＢ89・ スス付着
317	157-03	深鉢	C-E24	ＳＫ56 No. ２	羽状沈線文 垂下沈線・綾杉文	灰黄褐 10YR4/2	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	ＳＢ89
318	156-06	深鉢	C-E24	ＳＫ56	把手	明黄褐 10YR7/6	中期後葉	ＳＢ89
319	181-06	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 19	無文	にぶい黄橙 10YR7/4	３～ 神明式～	ＳＢ89
320	179-01	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 23	縦位の隆帯・垂下沈線・綾杉文	橙 5YR7/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
321	175-01	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 26	垂下沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
322	178-02	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 17	大波状口縁部 隆帯・沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
323	176-02	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 27	刺突・沈線	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
323	177-01	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 14	刺突・沈線	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
324	178-05	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 21	沈線	浅黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
325	177-03	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69	刺突・沈線	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
326	180-02	深鉢	C-F25	ＳＫ69	橋状把手 隆帯区画文？(区画内は斜行沈線)	灰黄褐 10YR5/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
327	181-04	深鉢	C-F25	ＳＫ69	横位隆帯・沈線文・爪形文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
328	178-01	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 1	無文	にぶい橙 7.5YR7/4	３～ 神明式～	ＳＢ89
329	179-02	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 18	橋状把手 刺突	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
330	181-02	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 21	横位沈線・無文・隆帯部分	明赤褐 5YR5/6	５新 山ノ神Ⅱ	ＳＢ89
331	181-01	深鉢	C-F・G25	ＳＫ69 No. 21	横位沈線・区画・ＬＲ縄文	にぶい褐 7.5YR5/4	５新 山ノ神Ⅱ	ＳＢ89
332	181-05	深鉢	C-F25	ＳＫ69	斜行条線・隆帯・横位沈線文	にぶい褐 7.5YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ89
333	160-06	深鉢	D-F１	ＳＫ75	波状口縁部 隆帯・竹管文	黒褐 10YR3/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ105
334	160-05	深鉢	D-F１	ＳＫ75	波状口縁部 刺突・隆帯・竹管文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ105

第14表　縄文土器観察表（８）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
335	160-01	深鉢	D-F１	ＳＫ66	縦位沈線文	灰黄褐 10YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	ＳＢ105
336	160-02	深鉢	D-F１	ＳＫ75	縦位隆帯・沈線による区画・刺突文	明赤褐 5YR5/8	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	ＳＢ105
337	160-03	深鉢	D-F１	ＳＫ75	横位沈線・渦文	明黄褐 10YR6/6	５ 山ノ神Ⅰ・Ⅱ	ＳＢ105
338	160-04	深鉢	D-F１	ＳＫ75	縦位隆帯文	浅黄 2.5Y7/4	３～ 神明	ＳＢ105
339	162-05	深鉢	A-X24	ＳＫ31	撚糸文	橙 7.5YR7/6	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
340	162-06	深鉢	A-X24	ＳＫ31	条痕	黄褐 10YR5/6	３～ 神明～	
341	162-04	深鉢	A-X24	ＳＫ31	波状口縁部 沈線・刺突文	黒褐 10YR3/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
342	162-03	深鉢	A-X24	ＳＫ31	隆帯文？	にぶい黄橙 10YR7/3	５新 山ノ神Ⅱ	
343	162-07	深鉢	C-D22	ＳＫ49	沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
344	163-04	深鉢	C-E１・２	ＳＫ59	波状口縁部 隆帯・矢羽根状線文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
345	163-02	深鉢	C-E１・２	ＳＫ59	隆帯・刺突文	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
346	163-03	深鉢	C-E１・２	ＳＫ59	隆帯・刺突文・沈線	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
347	163-05	深鉢	C-E１・２	ＳＫ59	沈線・条痕	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
348	164-05	深鉢	C-E19・20	ＳＫ61	平縁 刺突・竹管文	にぶい黄褐 10YR4/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
349	164-02	深鉢	C-E19・20	ＳＫ61	沈線・区画文	黄褐 2.5Y5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
350	163-06	深鉢	C-E19・20	ＳＫ61	隆帯・刺突文	浅黄橙 10YR8/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
351	163-07	深鉢	C-E19・20	ＳＫ61	多重沈線文・条痕	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
352	164-06	深鉢	C-E20	ＳＫ61	隆帯・区画・矢羽根状沈線文	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
353	164-04	深鉢	C-E19・20	ＳＫ61	矢羽根状沈線文	黒 10YR2/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
354	163-08	深鉢	C-E19・20	ＳＫ61	橋状把手	にぶい黄褐 10YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
355	164-07	深鉢	C-E20	ＳＫ61	横位沈線・隆帯・区画文	にぶい黄褐 10YR5/4	後期初頭	
356	167-05	深鉢	C-F・G25	ＳＫ68 北	平縁 隆帯・刺突文	にぶい黄橙 10YR7/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
357	166-01	深鉢	C-G25	ＳＫ68		にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
358	165-05	深鉢	C-G25	ＳＫ68	垂下沈線・綾杉文	暗赤灰 5R4/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
359	166-02	深鉢	C-G25	ＳＫ68	垂下沈線・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
360	166-07	深鉢	C-G25	ＳＫ68	隆帯・区画・刺突文	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
361	165-03	深鉢	C-G25	ＳＫ68		橙 7.5YR7/6	３～ 神明式～	
362	167-08	深鉢	C-F18	ＳＫ83	大波状口縁部 横位・斜行沈線文	にぶい褐 7.5YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
363	168-02	深鉢	C-F18	ＳＫ83	条痕	にぶい黄橙 10YR6/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
364	168-03	深鉢	C-F18	ＳＫ83	沈線・ＬＲ縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
365	167-10	深鉢	C-F18	ＳＫ83	沈線・隆帯・刺突文	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
366	201-01	深鉢	E-X12	ＳＫ113	隆帯・沈線・棒状具で押引き	黒褐 10YR3/2	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
367	201-03	深鉢	E-X12	ＳＫ113	キャリパー形口縁部 沈線文	灰黄褐 10YR4/2	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
368	200-04	深鉢	E-X12	ＳＫ113	大波状口縁部 横位沈線・格子？	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
369	201-02	深鉢	E-X12	ＳＫ113	刻み・横位沈線・刺突文	灰褐 7.5YR4/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
370	200-05	深鉢	E-X12	ＳＫ113	沈線・ＬＲ縄文	明褐 7.5YR5/6	５新～後期初頭 山ノ神Ⅱ～後期初頭	
371	200-02	深鉢	E-X12	ＳＫ113	沈線・ＬＲ縄文	にぶい黄褐 10YR5/4	５新～後期初頭 山ノ神Ⅱ～後期初頭	
372	161-02	深鉢	A-S・T25	ＳＫ１	沈線・ハケ・条痕	灰黄褐 10YR5/2	５ 山ノ神Ⅰ～Ⅱ	
373	161-03	深鉢	A-T25	ＳＫ１	沈線文	にぶい黄橙 10YR7/3	中期後葉	
374	161-04	深鉢	B-S１	ＳＫ２	無文	にぶい黄橙 10YR6/4	中期後葉	
375	161-06	深鉢	A-T24	ＳＫ13	沈線・ハケ・縦位条痕	褐灰 10YR4/1	３～ 神明式～	
376	161-05	深鉢	A-T24	ＳＫ13	沈線・横位条痕	明褐 7.5YR5/6	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	

第15表　縄文土器観察表（９）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色　調	髙橋編年 従来編年	その他
377	161-07	深鉢	A-T24	ＳＫ13	波状口縁部 横位沈線・渦・区画文	褐灰 10YR4/1	５新 山ノ神Ⅱ	
378	183-01	深鉢	D-C４	ＳＺ92 No.20	隆帯・突き瘤文・懸垂文	橙 7.5YR7/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
379	183-01	深鉢	D-C４	ＳＺ92 No.20	隆帯・突き瘤文・懸垂文	橙 7.5YR7/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
380	184-01	深鉢	D-C４	ＳＺ92 No.１～18	把手状の装飾 楕円区画・垂下・斜行・矢羽根状沈線文 隆帯文に刺突・櫛状のハケ後沈線	灰白 2.5Y8/2 黒褐 2.5Y3/2	５古 山ノ神Ⅰ	
381	182-04	深鉢	D-C４	ＳＺ92 No.９～12 の下	刺突・隆帯文・条痕	灰黄褐 10YR5/2	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
382	182-01	深鉢	D-C４	ＳＺ92 No.21	無文	橙 7.5YR6/6	中期後葉	
383	200-03	深鉢	F-C15	ＳＫ112	キャリパー形口縁部 沈線文	にぶい黄褐 10YR5/3	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
384	200-01	深鉢	F-C15	ＳＫ112	撚糸・縄巻縄文	灰黄褐 10YR4/2	２古 里木Ⅱ	
385	168-05	深鉢	A-V23	Pit４	波状口縁部 横位沈線	にぶい黄橙 10YR7/3	５新 山ノ神Ⅱ	
386	171-08	土偶？	C-E17	Pit２	刺突文・沈線文	橙 7.5YR6/6	不明	
387	162-02	深鉢	A-V22	ＳＫ28(撹乱)	刺突・横位沈線・竹管文	黒褐 10YR3/1	５古 山ノ神Ⅰ	
388	169-03	壺	B-Y5	風倒木痕	橋状把手・ハリツケナデ	褐 7.5YR4/3	４ 取組～島崎Ⅲ	
389	169-02	壺	B-Y5	風倒木痕	橋状把手・ハリツケナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	４～５ 取組～山ノ神Ⅱ	
390	169-04	深鉢	B-Y5	風倒木痕	沈線文(ワラビ手状)	にぶい褐 7.5YR5/4	４～５古 取組～山ノ神Ⅰ	
391	170-02	深鉢	B-Y5	風倒木痕	垂下・蛇行沈線・ＬＲ縄文	にぶい褐 7.5YR5/3	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
392	169-07	深鉢	B-Y5	風倒木痕	隆帯・刺突文・沈線	黒 2.5Y2/1	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
393	171-04	深鉢	B-Y5	根撹乱痕	穿孔(補修孔)・縄文・沈線	浅黄 2.5Y7/3	中期後葉	
394	172-02	深鉢	D-A・B19	風倒木痕	キャリパー形口縁部 沈線・渦文・連続刺突文・隆帯文	橙 5YR6/6	２古 咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
395	170-01	深鉢	D-A～ C18-20	風倒木痕	把手 隆帯・斜行沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR7/4	３ 神明式	
396	169-06	深鉢	D-A～ C18～20	風倒木痕	沈線・条痕	にぶい黄褐 10YR5/4	３～５古 神明～山ノ神Ⅰ式	
397	172-03	深鉢	D-A～ C18～20	風倒木痕	大波状口縁部 沈線文・工具痕残る	浅黄橙 10YR8/4	４ 取組～島崎Ⅲ	
398	172-06	深鉢	D-A・B	西調査区 東端の谷	隆帯による区画・斜行沈線文	にぶい黄橙 10YR6/3	４ 取組～島崎Ⅲ	
399	169-05	深鉢	D-D７	風倒木痕	波状口縁部 沈線文	にぶい橙 7.5Y6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
400	171-06	深鉢	C-E19	撹乱	波状口縁部 垂下隆帯・羽状沈線文・綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
401	171-05	深鉢	D-A19	根撹乱	無文	橙 7.5YR6/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
402	201-07	深鉢	B-Y23	調査区 東壁面	無文	橙 7.5YR6/6	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
403	201-04	深鉢	E-X12	撹乱	横位沈線・刺突文	にぶい黄橙 10YR6/4	５新 山ノ神Ⅱ	
404	201-06	深鉢	E-V６	風倒木痕南	沈線	褐 10YR4/4	２ 中富Ⅲ～咲畑貝塚Ⅰ群Ａ類系	
405	201-05	深鉢	E-X９	撹乱	ハケ・刻み・条痕・刺突文	にぶい褐 7.5YR5/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
406	173-01	深鉢	B-C１	包含層(南北土層ライン)	沈線・条痕	褐 10YR4/4	３～ 神明	
407	173-01	深鉢	B-C１	包含層(南北土層ライン)	沈線・条痕	褐 10YR4/4	３～ 神明	
408	171-02	深鉢	C-A20	包含層	沈線区画文・横位沈線・刺突文	褐灰 10YR4/1	５新 山ノ神Ⅱ	
409	201-08	深鉢	F-C13	包含層	無文	にぶい黄橙 10YR6/4	３～ 神明	
410	174-02	深鉢	T11	検出中	橋状把手 ユビオサエ	にぶい黄橙 10YR6/4	４新～５古 島崎Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
411	172-01	古式土師器 小型丸底壺	D-A～ C18～20	風倒木痕	ハケ少し残る	橙 7.5YR7/6	古墳時代前期後半	
412	174-04	灰釉陶器 椀		表面採集	ロクロナデ・貼付ナデ	灰 N5/	10～11世紀	
413	301-01	鉄器 和釘	B－T４・５	撹乱	残存長11.9cm・厚み0.6cm・重さ17.64ｇ			

第16表　縄文土器観察表（10）

2　石器

石器は遺構から出土したものが大半であり、石鏃や剥片等の小型石器の多くは遺構埋土の篩掛けにより検出した。出土総数は、169点である。その器種別内訳[8]は、石鏃78点、石鏃未成品10点、石錐４点、削器１点、二次加工痕有剥片10点、使用痕有剥片２点、楔形石器７点、石核２点、大型剥片２点、打製石斧２点、磨製石斧３点、切目石錘18点、大型石皿兼台石８点、小型石皿８点、磨石７点、敲石４点、礫器３点である。このほかに、小型剥片や砕片も多数検出した。当遺跡の縄文時代では、早期と中期の土器や遺構が認められている。このため、個別の石器の所属期は厳密には特定できない。しかし、その多くは中期の所産であろう。

Ａ　石鏃（第48･49･50図414～484）

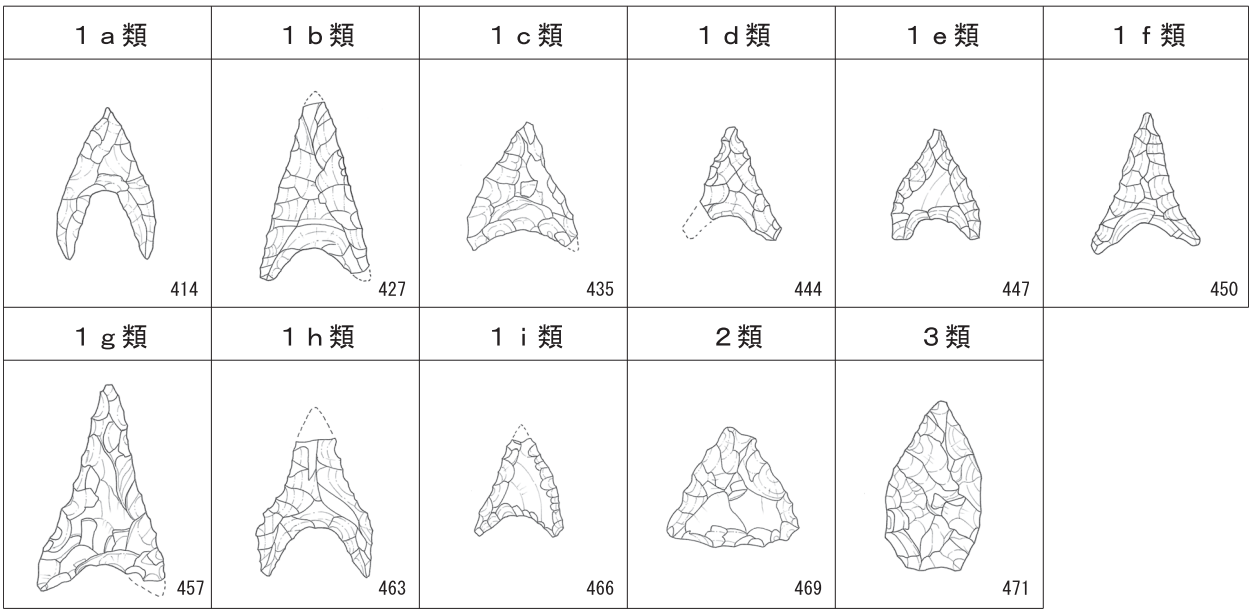
未成品も含めた88点を検出し、その内71点を図示した。以下の通りに分類する。凹基無茎式を１類として、主に側縁の形態に注目しａ～ｉと細分した[9]。平基無茎式を２類、３類を円基無茎式とした。

１ａ類（414）　基部の抉りが全長の半分程で、側縁は全体的に外弯する。いわゆる「長脚鏃」である。１点のみを検出した。先端部は尖鋭で、側縁は緩やかに膨らみ、脚の最下部は内にすぼまる形状を呈す。左右対称で薄く、精巧に作られ、その他の個体よりも古相を示す。サヌカイト製である。

１ｂ類（415～429）　側縁が直線的で、全体形は正三角形状か二等辺三角形状を呈する類である。全体形が正三角形状のもの（416）は少なく、二等辺三角形状のもの（415・417～429）が多い。基部の抉りが山形で浅いもの（415・416・418・419）や、山形でやや深いもの（417・420～422・426～429）、基部の中央のみが深く抉られ脚部が丸味をもつもの（423～425）がある。419は先端部が潰れ、425は片面に一次面を残す。426は中央のみ分厚い。石材は、サヌカイト製（417・420～423・425・426・428）のほか、チャート製（415・424・429）、下呂石製（416・418・427）、黒曜石製（419）である。

１ｃ類（430～443）　側縁が緩やかに外弯する類である。基部の抉りが浅いもの（430・431・434・443）や、やや深いもの（432・435～438・442）、基部の中央のみが深く抉られ脚部が丸みをもつもの（433・439・441）がある。440は製作途中なのか不明だが脚部が左右非対称である。431や435・437・443は片面に一次面を残し、439は片面の大半を剥離する。石材は、サヌカイト製（430・432～435・437～441・443）のほか、チャート製（442）や下呂石製（431・436）である。

１ｄ類（444・445）　側縁が緩やかに内弯する類である。２点検出し、いずれも小型である。444は、



第47図　石鏃分類図

基部の抉りが中央のみ深く、脚部が丸みをもち、445は、基部の抉りが浅く弧状を呈す。444は下呂石製、445はサヌカイト製である。

１ｅ類（446・447）　側縁上部が緩やかに内弯し、下部は外反する類である。２点検出し、いずれも小型である。446は脚部が左右非対称で、基部の抉りが浅く、447は基部の中央のみが深く抉られ、脚部が丸みをもち、両面に一次面を残す。446はサヌカイト製、447はチャート製である。

１ｆ類（448～453）　側縁が上部で屈曲し、中部にかけて緩やかに内弯する類である。448や449は側縁の形状が左右非対称である。448は小型で、基部の大半を欠失し、抉りは浅い。449は片面に一次面を残す。450や451の基部の抉りはやや深く、山形より波状に近い形状を呈す。452や453は基部の抉りが浅く、452は先端部が尖鋭ではなく、453は脚部が太い。石材は、サヌカイト製（448・449・452・453）のほかに、チャート製（450・451）である。

１ｇ類（454～459）　側縁が上部で屈曲し、中部にかけて緩やかに内弯し、下部は外反する類である。基部の抉りが山形のもの（454～458）や、基部の中央のみが深く抉られ、脚部が丸みをもつもの（459）がある。石材は、サヌカイト製（454・455・457）と、チャート製（458）、下呂石製（456・459）である。

１ｈ類（460～465）　１ｇ類の内、脚部の側縁が内に屈曲する類である。460は細身で、基部の抉りがやや浅い。基部の抉りが山形で深いもの（462～464）は、すべて脚部が尖鋭である。基部の中央のみが深く抉られるもの（461・465）は、脚部が太くなる。石材は、サヌカイト製（460・462～464）と、チャート製（461・465）である。

１ｉ類（466）　側縁が左右非対称を呈する類である。側縁の一方は外反し、もう一方は内弯する。基部の抉りは山形でやや深く、左右対称である。両面に一次面を残して周縁のみを調整する。石材はチャート製である。

２類（467～469）　平基無茎式である。側縁は直線的か、やや外反する形状である。467は先端部が三方とも丸く、468は未調整部が多い。469は三角鏃であり、両面に一次面を残す。石材は、３点ともサヌカイト製である。

３類（470～474）　円基無茎式であり、側縁は、すべて緩やかに外反する。最大幅が全長の中央あたりに位置するもの（471・472・474）と、下部に位置するもの（470・473）がある。石材は、サヌカイト製（470・472）とチャート製（471・473・474）である。

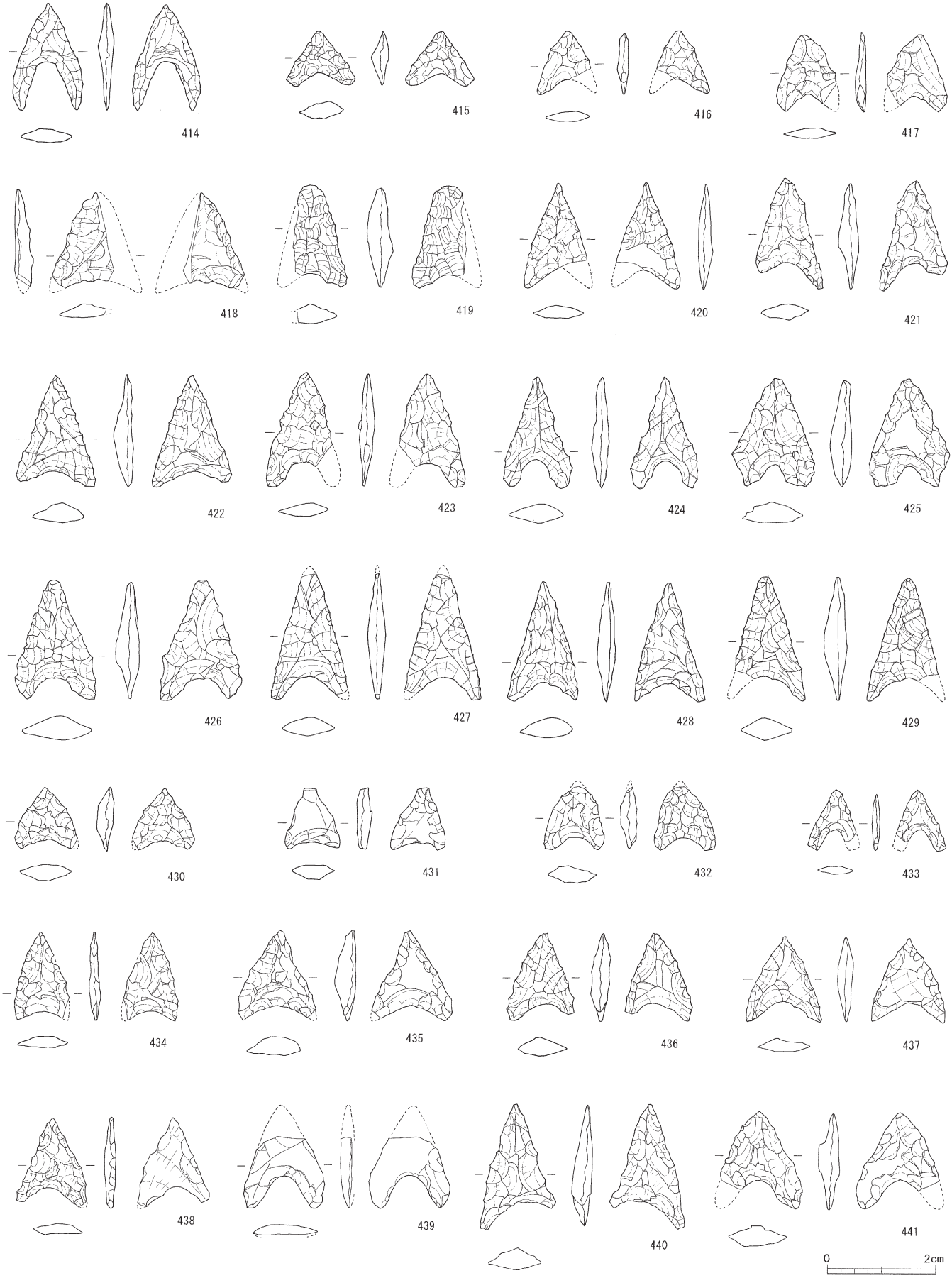
石鏃未成品（475～484）　剥片に二次調整が施されたものの内、製品には至らないが、石鏃と推定できそうなものを未成品とした。475は細身で、先端部は尖るものの基部は認められず、片面はほぼ一次面のままである。476は分厚く片面は未調整部が多い。477や478、480の３点は基部の作出が認められ、凹基を呈す。477や478は両面に、480は片面に一次面を残し、全体形が不整形である。479は側縁が左右非対称で、基部が未調整と推定するが、逆位に見るとつまみ部を有する石錐のようにも見える。481は縁に面をもち、調整途中とみられる。482や483は下部を大きく欠失し、最終形態が不明であることから未成品としている。484は、分厚く先端部や基部など全体的に調整が未完成の様相である。サヌカイト製（475・477・479・481）の他、チャート製（476・478・480・482～484）がある。

Ｂ　石錐（第50図485～487）

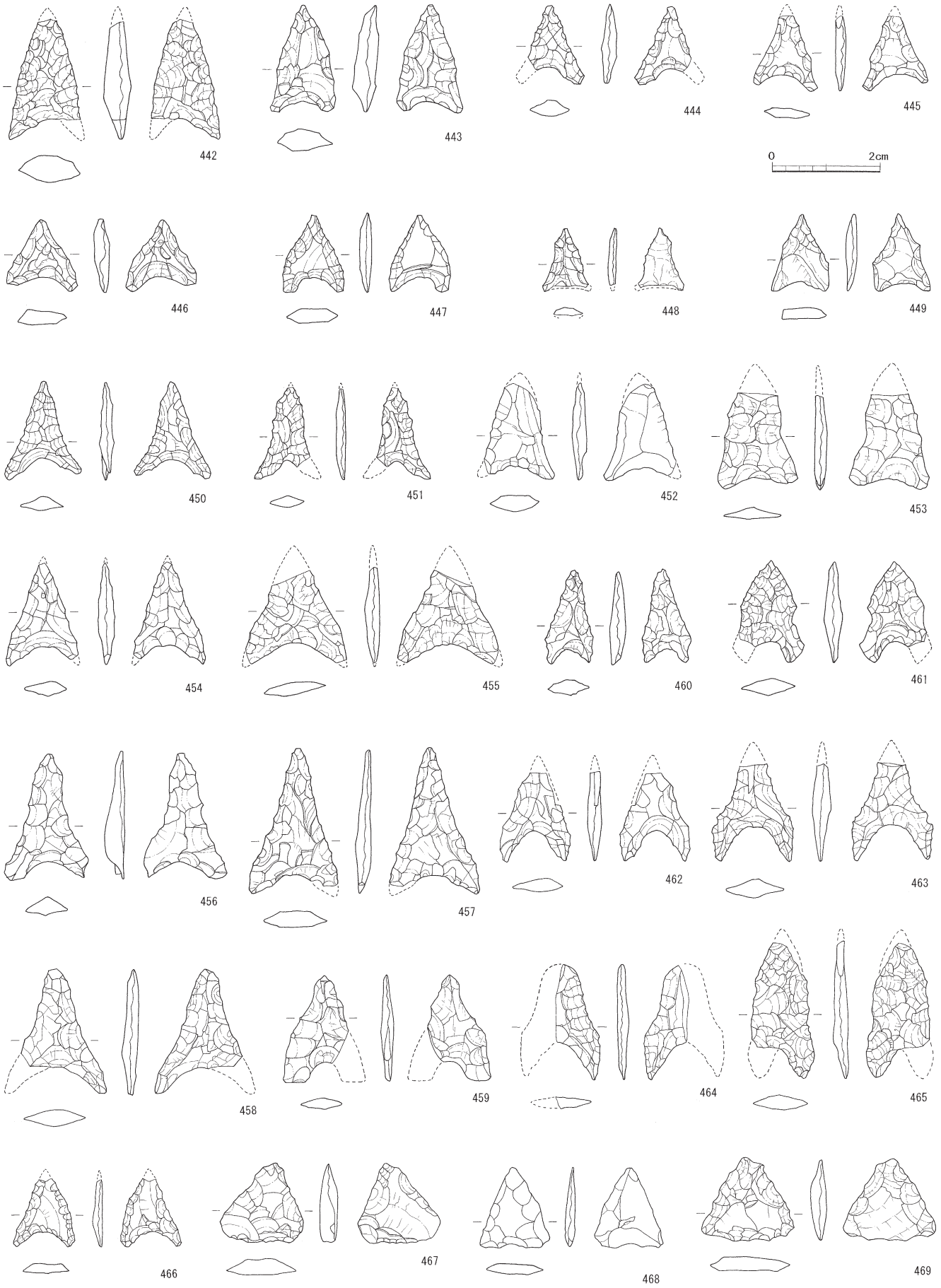
石錐は４点検出し、その内３点図示した。３点共に、つまみ部をもたない。485は分厚く機能部が長く棒状で、ほぼ全体に入念な調整を行うが、先端部はやや尖鋭さを欠く。486や487は、全体的に寸詰で機能部が短い。486の片面は一次面のままであるが、先端部は尖鋭である。487の先端部は尖鋭さに欠く。石材は、すべてサヌカイト製である。

Ｃ　二次加工痕有剥片（ＲＦ）（第50･51図488～490）

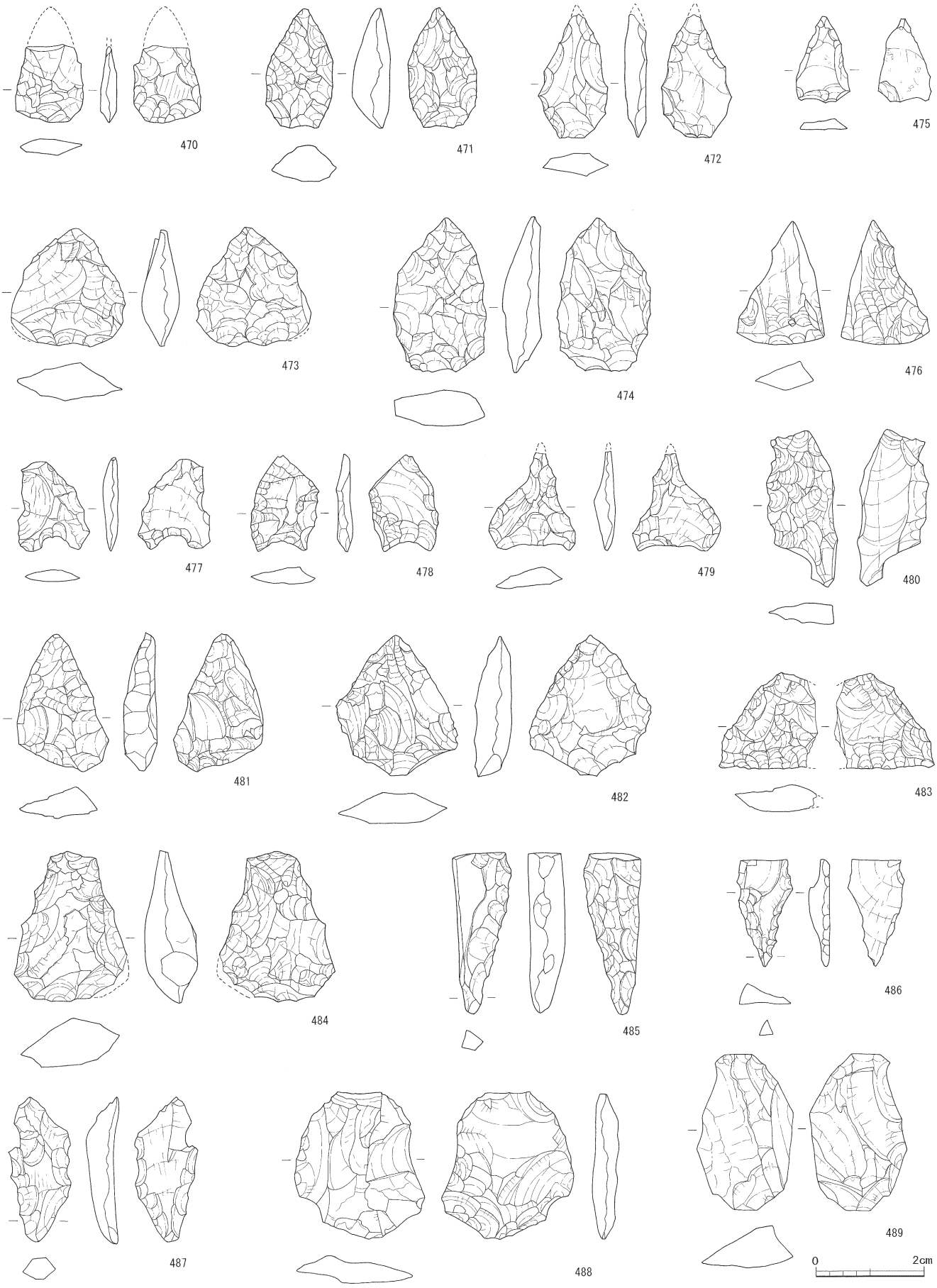
剥片素材の周縁に二次加工した石器の内、定型的な器種として認識できないものを、二次加工痕有剥片（ＲＦ）とした。10点検出し、３点を図示したが、削器や掻器等の未成品を含んでいる可能性もある。488はチャート製で、縦長剥片の下端に二次加工が施される。489はサヌカイト製で、片側縁を欠失し上端と下端に押圧剥離とみられる二次加工が施される。剥片の大きさや厚み、調整の様子から、石鏃の製作を意図していた可能性がある。490はチャート製で片面はほとんどが礫面のままで分厚く、弧状の側縁に二次加工を施す。部分的に両面調整により薄



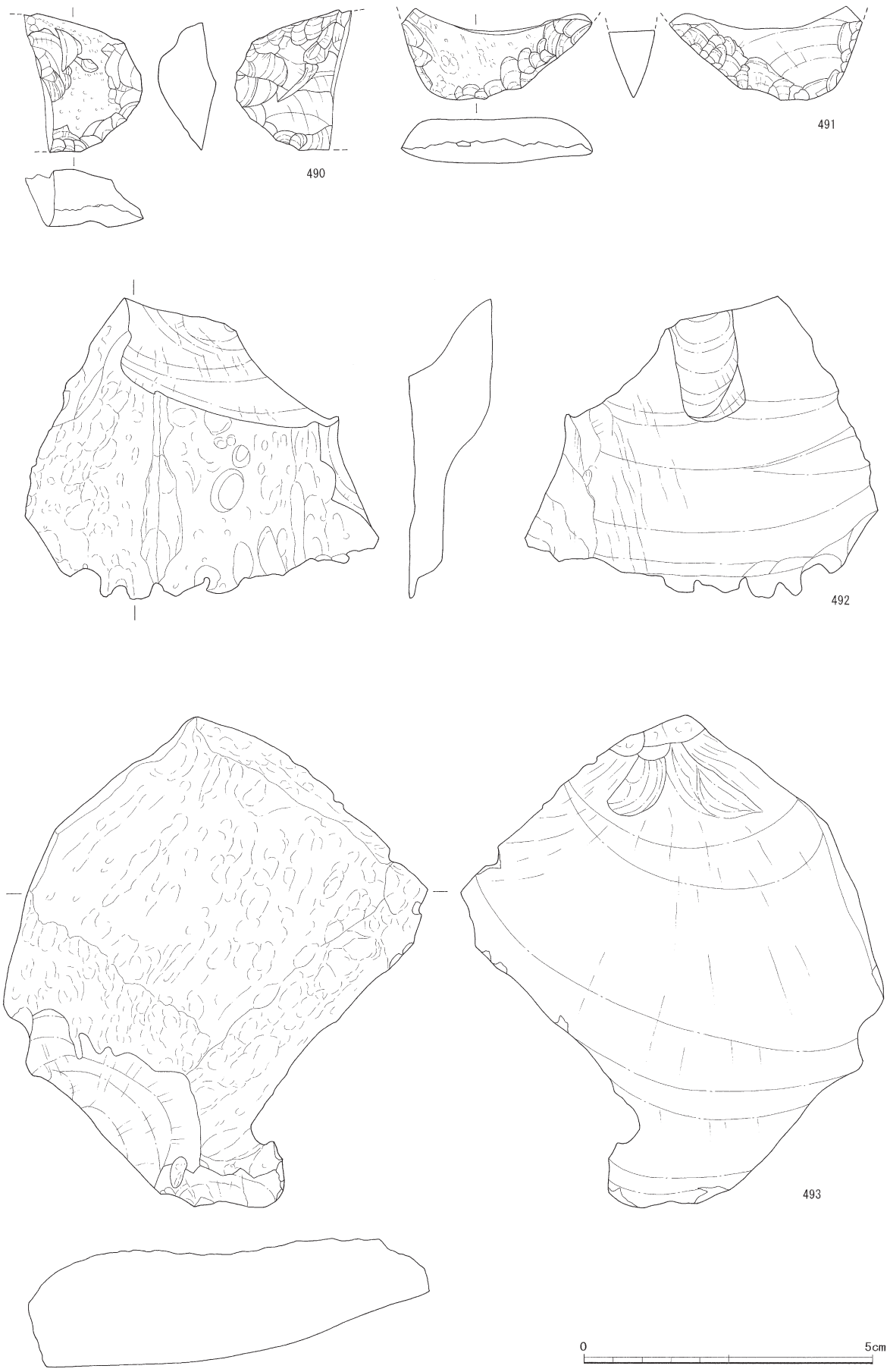
第48図　石器実測図（1）（1：1）



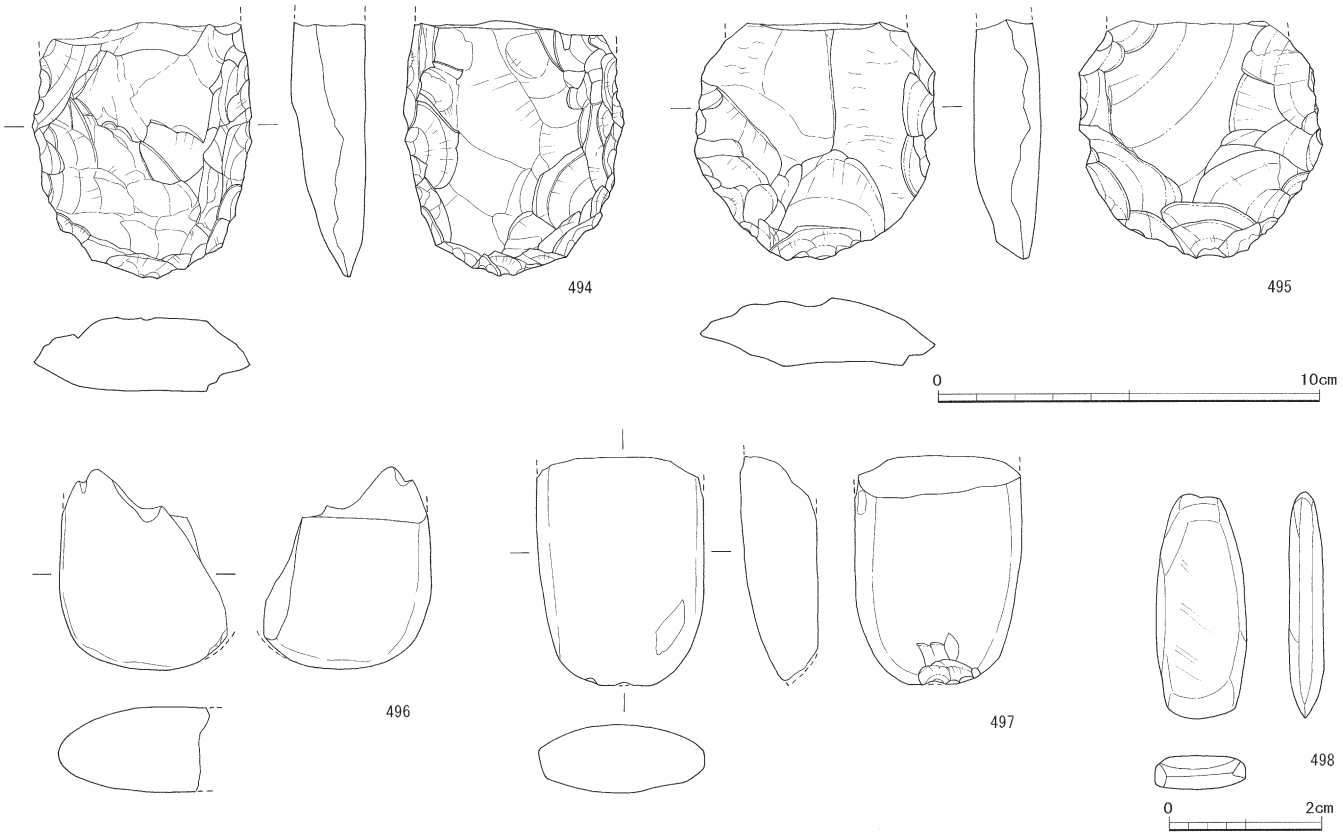
第49図　石器実測図（２）（１：１）



第50図　石器実測図（３）（１：１）



第51図　石器実測図（4）（1：1）



第52図　石器実測図（５）（１：２）（１：１）

く尖る。

Ｄ 削器（第51図491）

１点のみを検出し図示した。押圧剥離による両面調整を側縁にのみ施し、側縁は鋭利な刃状を呈す。調整部以外は、礫面および一次面を多く残す。石材は、サヌカイト製である。

Ｅ 剥片（第51図492・493）

数多く検出した剥片の中でも、大型の２点を図示した。気泡状の礫面を残す拳大の剥片で、492は竪穴住居ＳＨ106の埋土から検出し、493は表面採集である。石材は、いずれもサヌカイト製である。

Ｆ 打製石斧（第52図494・495）

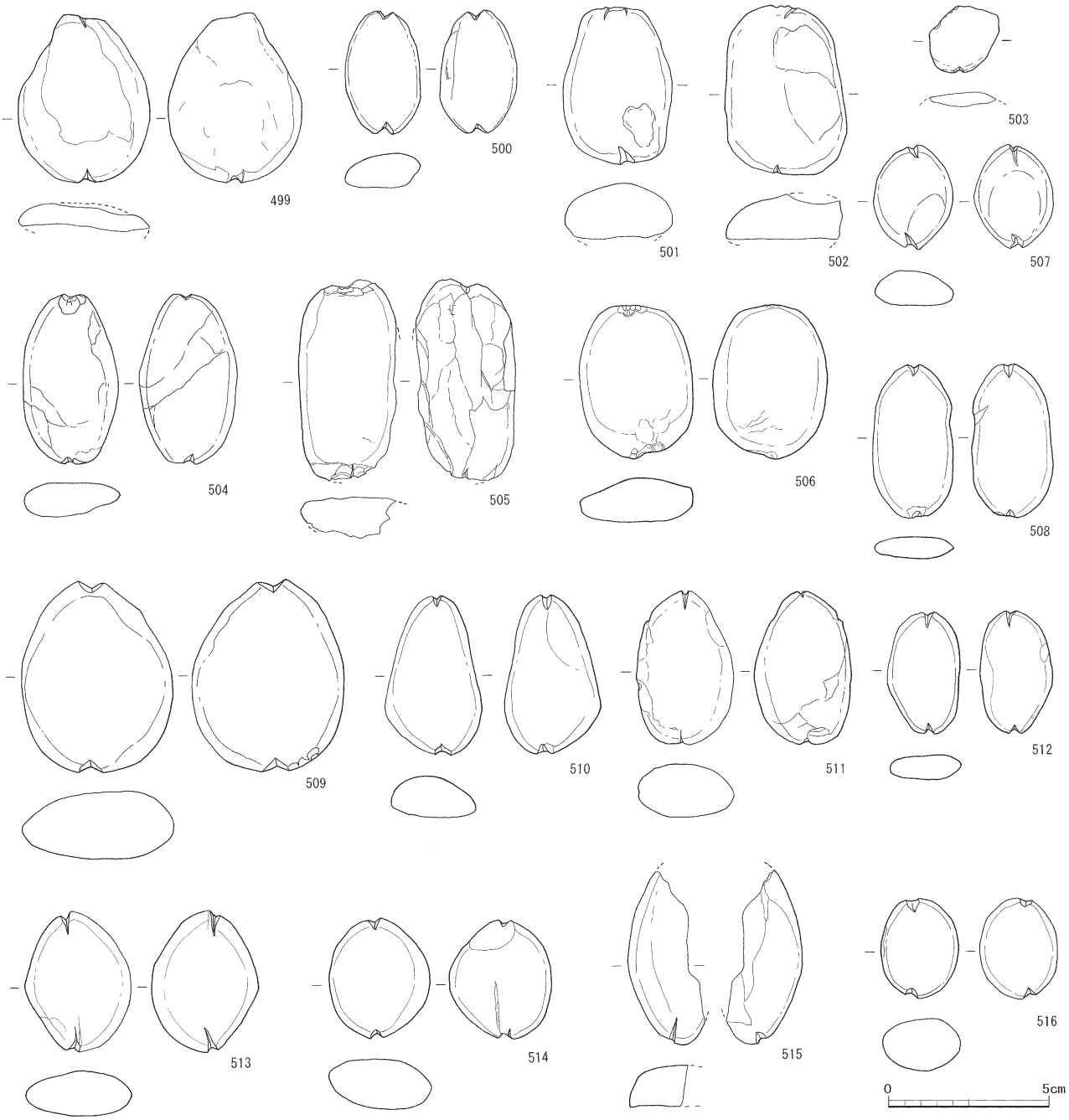
２点検出し、全て図示した。いずれも全体の半分以上を欠失している。494は、刃部片とみられる。上部がややすぼまる形状を呈し、全形は撥形と推定する。両面の中央まで丁寧に剥離を施している。495は側縁下部が丸形を呈し、上部は強いくびれを成す。両面に一次面を残し、周縁に粗くて浅い加工を施す。全形は分銅形と推定し、下端は尖鋭さを欠くため、刃部であるか不明である。

Ｇ 磨製石斧（第52図496～498）

３点検出し、全て図示した。496と497は、両側縁に面を有する片刃の定角石斧である。共に基部の大半を欠失したままで、楔として再利用した形跡はない。また、表面が摩滅して研磨の様子は不明瞭である。496は、遺跡の分布調査時に、当遺跡内で表面採集したものである。498は、小型細身で鑿状の定角石斧の完形品である。精巧な作りであり、刃部が尖鋭で全面にわたりよく研磨されて光沢があり、使用痕はみられない。石材は、泥岩製である。

Ｈ 切目石錘（第53図499～516）

長径３～６㎝程、重さ10～75ｇ程の扁平な川原石の長軸両端に切目を入れたものである。切目石錘は図示したように18点を検出したが、打欠石錘は確認できなかった。ほとんどが完形であるが、499や501・502は片面の大半を、503と515は片側の大半を欠失している。いずれも自然礫をそのまま素材としたもので、形態はさまざまである。完形のものをみると、素材となる礫が円形に近いもの（507・509・513・514・516）や、楕円形のもの（500・506・511・512）、



第53図　石器実測図（６）（１：２）

長楕円形のもの（504・505・508）、楕円形で上部が細くすぼまるもの（510）がある。切目の形成は、完形のものについては、全て長辺の両端のみに施されている。切目が両端の両面に明瞭なものは、500・507～514・516である。499は一端が片面に、505や506は両端に打欠きを施した後に切目を形成したもので、一端のみに切目が確認できる。507や513は切目の方向が両端で相違し、中軸を通らない。512は薄手で泥岩製である。

Ｉ　大型石皿兼台石（第54・55・56図517～524）

８点検出し、全てを図示した。器表に磨面をもつことから石皿と判断したものの内、大きくて重いために設置しての使用が推定できるものを本器種とした。固定的に使用されており、台石としての多様な使用も推定できる。517は、竪穴住居（ＳＨ107）の床面で検出したものである。８点の内で最大の平面規模を測り、平滑な上面の広範囲に磨痕が認められる。下面も割と平らで、置いた時に水平を保ち易く、

竪穴住居内に据えた作業台でもあった可能性がある。518は、竪穴住居（ＳＨ107）の埋土中で検出したもので、平滑な上面に擦痕が多く残る。519～521は、掘立柱建物の柱穴から検出したものである。519は、平滑な上面の広範囲に磨面が認められる。520は、磨痕のある面を上面とし、周縁はすべて意図的に割った可能性がある。521は、欠失部を復元すると長径50㎝程の略楕円形を呈する大型品で、柱穴の中位に立つように埋没していた。平面の中央には石皿としての使用による凹みがみられる。石材は花崗岩製で、風化が激しく脆い状態である。522は、ＳＨ108の埋土中で検出したもので、半分を欠失している。上面のすべてにかなり磨った痕跡がみられる。523や524は全形の大半を欠失するが、磨面を有することから石皿とした。

Ｊ 小型石皿（第56･57図525～532）

８点検出し、全て図示した。大型石皿兼台石に対して、小型で薄手のものを本器種とした。525は大半を欠くが、片面に擦痕が認められる。526は扁平な礫を使用している。三方を欠失するが、意図的に割ったのかは不明である。整った矩形を呈し、上面にかすかに磨痕を残す。527は、角が丸い自然礫を使用し、半分を欠失している。平滑な上面のみが機能面となり、中央は特に擦痕が明瞭である。側面は、被熱し赤変する。528は破片で、機能面には磨痕が認められる。529～531は、三方または四方を欠失し、全形は不明である。平滑な片面に磨痕を有す。532は角が丸い扁平な礫を使用し、二方を欠失する。両面に擦痕が認められる。

Ｋ 磨石（第58･59図533～539）

７点検出し、全て図示した。石材は花崗岩・流紋岩・閃緑岩製の川原礫を使用し、平面は円か円に近い楕円形の整った礫を選んでいる。７点共に、両面の中央に磨痕が認められ、若干凹んだ形状を呈するものもある。533は敲打痕もみられ、敲石としても用いている。539は完形で、典型的な形状を呈す。

Ｌ 敲石（第60図540～543）

４点検出し、全て図示した。片手で支持できる大きさや重量で、敲打痕を有するものを敲石とした。全て自然礫を使用している。540や542は長楕円形の棒状で、541や543は不定形な形状を呈す。敲打痕の位置はさまざまで、540は両面の中央に、541や543は平滑な上面の中央に、542は先端部からやや平面よりの位置に、敲打痕が認められる。

Ｍ 礫器（第61図544～546）

３点検出し、全て図示した。円礫および分割礫の一端に、粗い剥離を加えて刃部を形成したものを礫器とした。544や545は分割礫で、546は円礫である。544や546は両面、545は片面からの剥離で刃部を形成している。石材は544が砂岩製、545・546がホルンフェルスである。（中村）

【註】

①縄文早期土器については、山田猛氏にご教示を頂いた。

②髙橋健太郎氏と石田由紀子氏にご教示を頂いた。

縄文中期後葉の土器編年について、下記編年を参考にした。

纐纈茂・髙橋健太郎「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』（株式会社アム・プロモーション　2008年）

③可児市教育委員会「宮之脇遺跡Ａ地点」「宮之脇遺跡Ｂ地点」『川合遺跡群』（1994年）

各務原市教育委員会『炉畑遺跡発掘報告書』（1973年）

関市教育委員会『塚原遺跡・塚原古墳群』（1989年）

④財団法人岐阜県文化財保護センター『岐阜県文化財保護センター調査報告書　第11集　徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集　戸入村平遺跡』（1994年）

⑤髙橋健太郎「神明式土器の地域相」『美濃の考古学　第７号』（美濃の考古学刊行会　2004年）

⑥三重県埋蔵文化財センター「大石遺跡」『平成３年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』（1992年）

⑦東員町教育委員会『東員町埋蔵文化財調査報告４　村前遺跡発掘調査報告』（1993年）

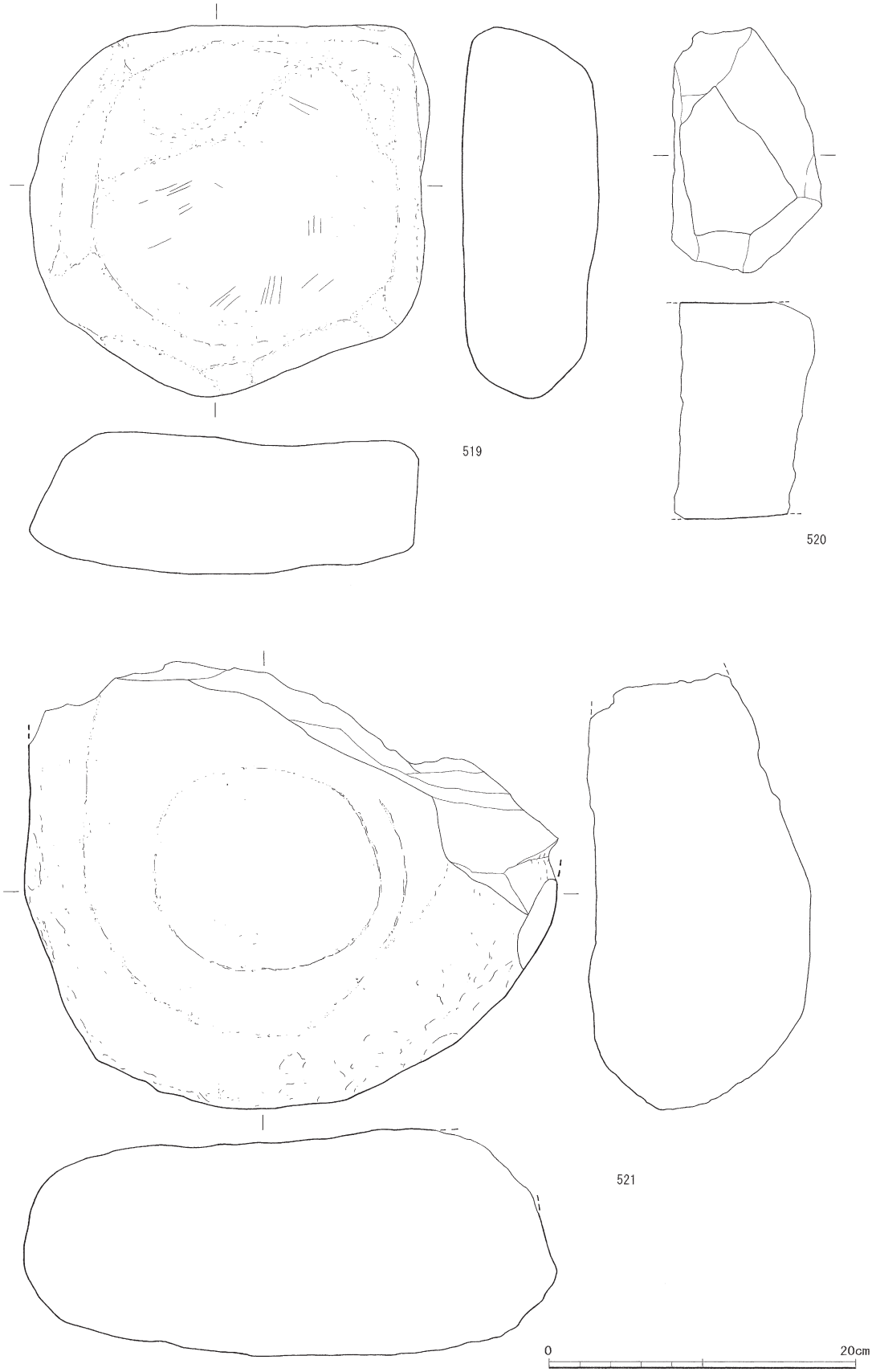
⑧石器の選別と器種の同定については、田村陽一氏と久保勝正氏にご教示を頂いた。石材については、津村善博氏にご教示を頂いた。

⑨石鏃の分類については、以下の文献を参考にした。

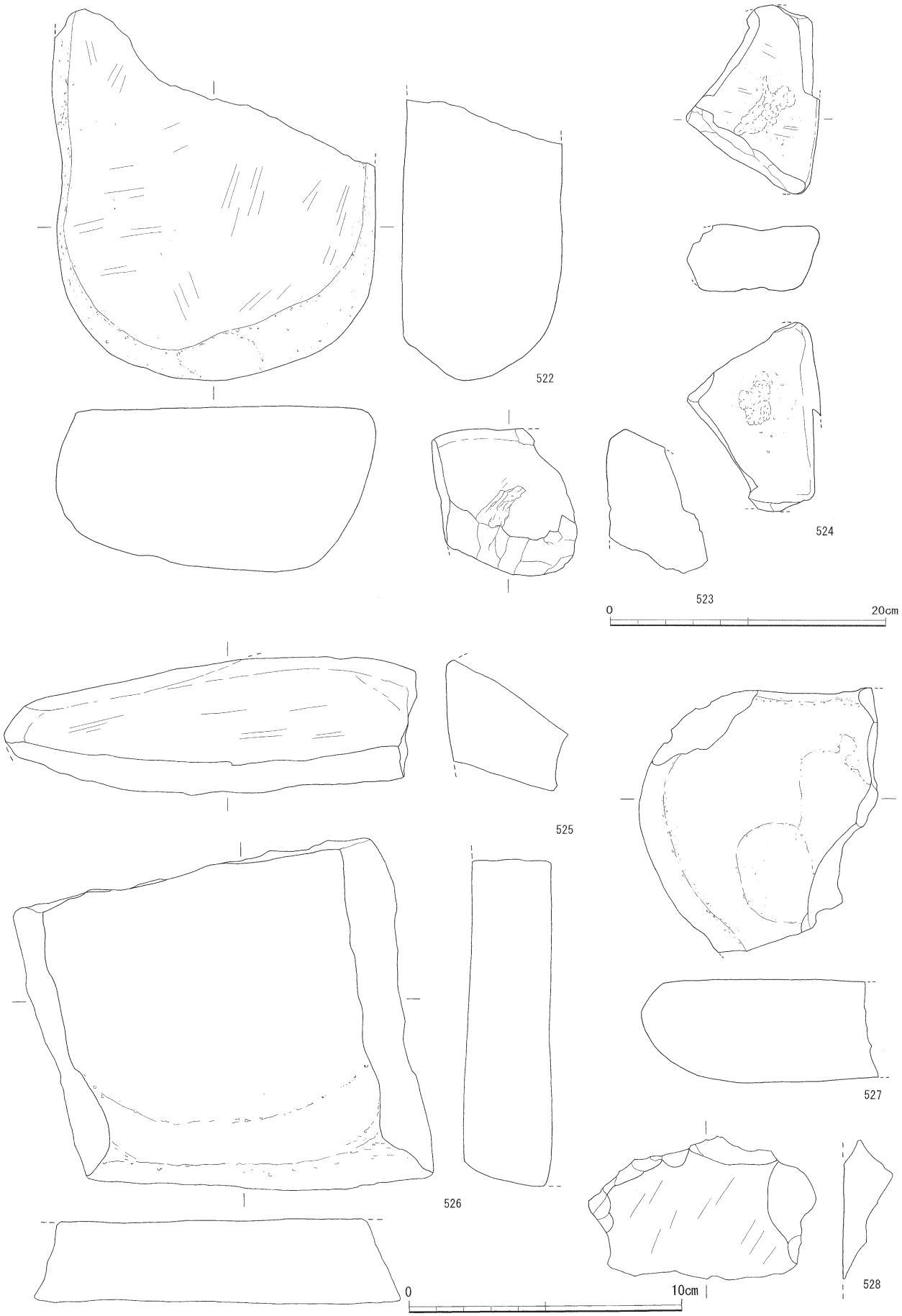
奈良県立橿原考古学研究所「鵜山遺跡」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第96冊』（2006年）

なお、図示できなかった遺物は表・写真でのみ掲載した。（報告番号547～582）

第54図　石器実測図（７）（１：４）

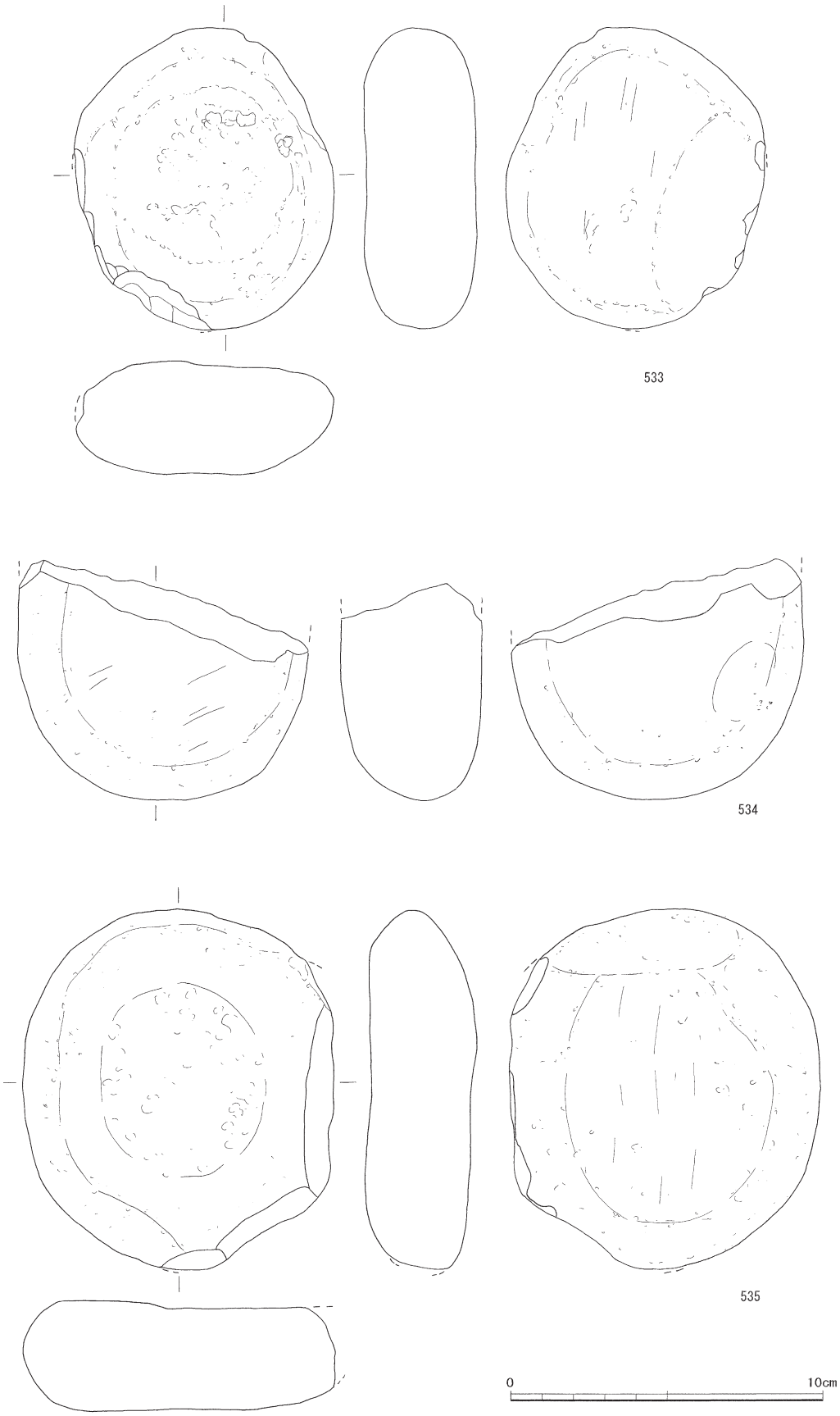


第55図　石器実測図（８）（１：４）

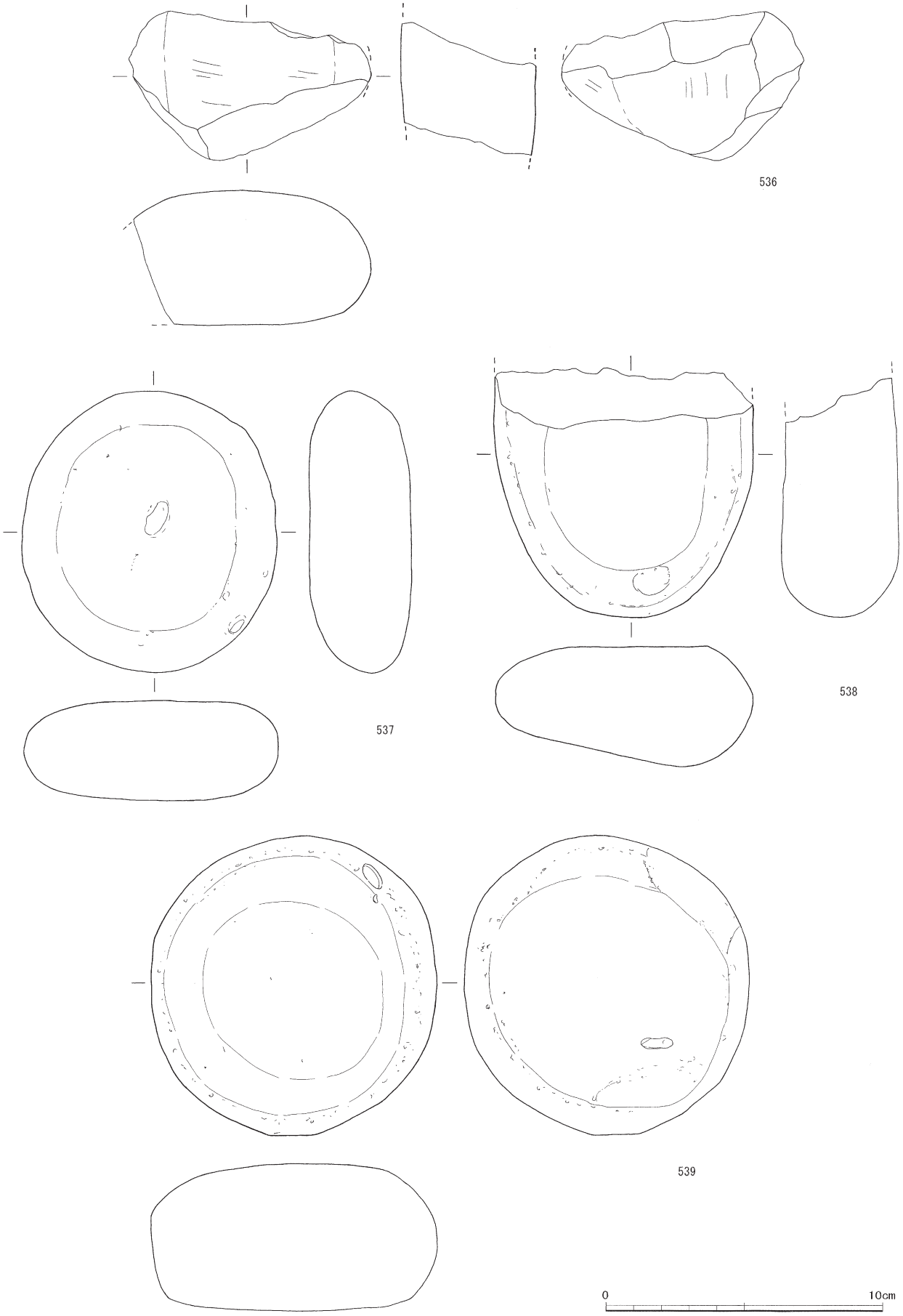


第56図　石器実測図（9）（1：4）（1：2）

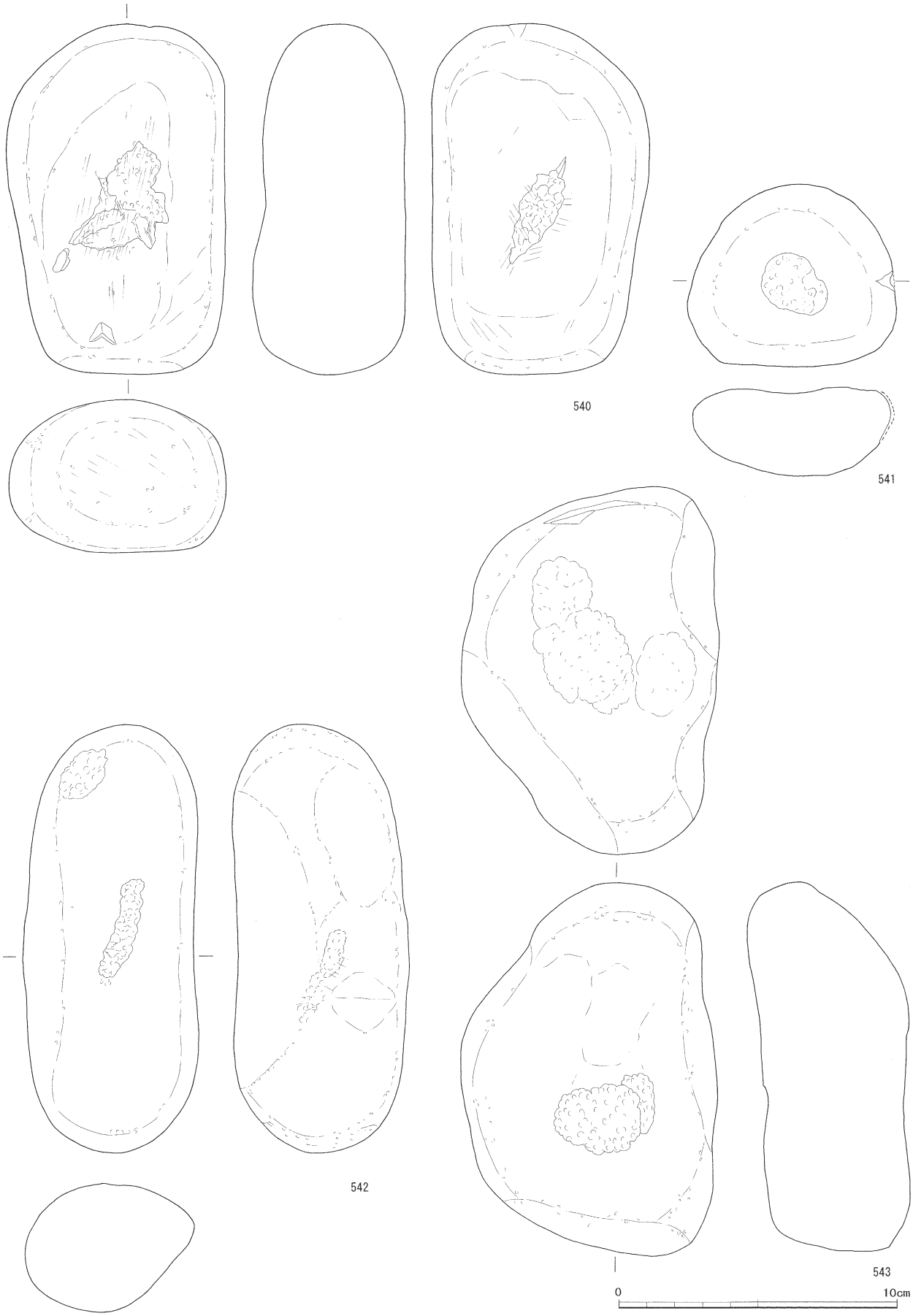
第57図　石器実測図（10）（１：２）



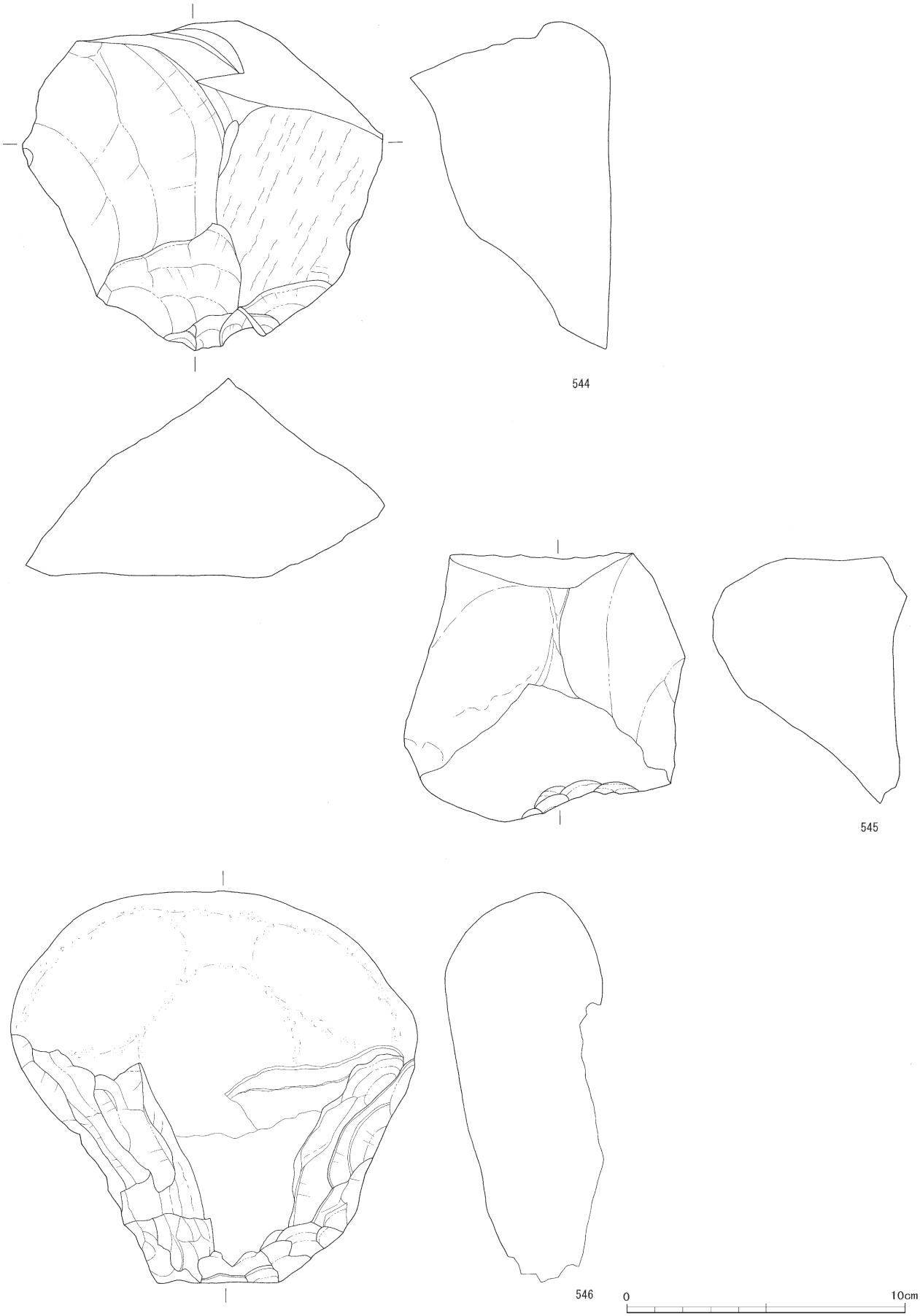
第58図　石器実測図（11）（１：２）



第59図　石器実測図（12）（１：２）



第60図　石器実測図（13）（１：２）



第61図　石器実測図（14）（１：２）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
414	001-03	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	完形	2.0	1.3	0.3	0.4	長脚鏃・草創期？ 篩掛け
415	012-01	石鏃	B-V2	SK23	チャート	完形	1.0	1.3	0.3	0.27	篩掛け
416	013-04	石鏃	A-U25	SK19	下呂石	片脚部欠失	1.2	(1.1)	0.2	(0.19)	篩掛け
417	029-01	石鏃	E-W9・10	SH107	サヌカイト	片脚部欠失	0.95	(1.1)	0.2	(0.25)	篩掛け
418	022-02	石鏃	C-E24	SK57南	下呂石	約1/3欠失	(1.80)	(1.9)	0.35	(0.47)	篩掛け
419	002-01	石鏃	C-D20	SH50上	黒曜石	約1/4欠失	1.9	(1.0)	0.37	0.7	篩掛け
420	006-05	石鏃	C-D20	SH50下	サヌカイト	片脚部欠失	1.95	(1.2)	0.3	(0.40)	篩掛け
421	008-01	石鏃	C-G・H 21・22	SH84畦	サヌカイト	完形	2.05	1.25	0.4	0.52	篩掛け
422	004-03	石鏃	E-X12	SK113	サヌカイト	完形	2.1	1.50	0.38	0.7	篩掛け
423	015-01	石鏃	A-S・T25	SK1	サヌカイト	片脚部欠失	2.1	(1.2)	0.3	(0.46)	篩掛け
424	004-01	石鏃	E-W9・10	SH107	チャート	完形	2.1	1.3	0.34	0.5	篩掛け
425	028-03	石鏃	E-W9・10	SH107	サヌカイト	完形	2.0	1.5	0.4	1.03	篩掛け
426	004-02	石鏃	E-W9・10	SH107 No.2	サヌカイト	完形	2.2	1.55	0.48	1.0	
427	003-02	石鏃	A-V25	SK27	下呂石	先端部欠失 片脚先端部欠失	(2.3)	1.4	0.38	0.8	篩掛け
428	003-04	石鏃	C-E24	SK56	サヌカイト	完形	2.2	1.4	0.4	0.8	篩掛け
429	003-01	石鏃	B-T1	SK8北	チャート	片脚部欠失	2.3	(1.3)	0.45	0.9	篩掛け
430	012-02	石鏃	B-V2	SK23	サヌカイト	片脚先端部欠失	1.15	(1.20)	0.3	(0.36)	篩掛け
431	008-02	石鏃	C-G・H 21・22	SH84中	下呂石	完形	1.15	1.0	0.3	0.37	風化顕著 篩掛け
432	006-01	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	先端部欠失	(1.2)	1.2	0.3	(0.4)	篩掛け
433	021-04	石鏃	D-F1	SK66北	サヌカイト	片脚部欠失	1.15	(0.9)	0.15	(0.11)	篩掛け
434	021-01	石鏃	A-V25	SK27	サヌカイト	片脚部欠失 側縁部欠失	1.65	(1.05)	0.2	(0.36)	
435	028-01	石鏃	E-W9・10	SH107 No.3	サヌカイト	片脚先端部欠失	1.7	(1.45)	0.4	0.68	
436	002-03	石鏃	C-G・H 21・22	SH84下	下呂石	完形	1.6	1.25	0.35	0.5	篩掛け
437	002-04	石鏃	C-G・H 21・22	SH84畦	サヌカイト	完形	1.6	1.4	0.27	0.4	篩掛け
438	014-02	石鏃	B-T1	SK8	サヌカイト	片脚先端部欠失	1.7	(1.3)	0.25	(0.42)	篩掛け
439	008-05	石鏃	C-G・H 21・22	SH84中	サヌカイト	先端部欠失	(1.35)	1.5	(0.2)	(0.39)	外面はほぼ剥離 篩掛け
440	008-04	石鏃	C-G・H 21・22	SH84上	サヌカイト	完形	2.35	1.40	0.4	0.85	篩掛け
441	022-01	石鏃	C-F18	SK83	サヌカイト	片脚部欠失	1.8	(1.5)	0.4	(0.67)	篩掛け
442	029-03	石鏃	E-W12・13	SH109	チャート	先端部欠失 片脚部欠失	(2.3)	(1.3)	0.5	(1.21)	篩掛け
443	006-03	石鏃	C-D20	SH50中	サヌカイト	完形	2.0	1.2	0.5	0.98	篩掛け
444	021-02	石鏃	C-F25・ G25	SK68北	下呂石	片脚部欠失	1.5	(1.05)	0.3	(0.27)	篩掛け
445	029-02	石鏃	E-X11	SH108下	サヌカイト	先端部欠失	(1.4)	1.2	0.2	0.29	篩掛け
446	026-01	石鏃	E-U・V11	SH106	サヌカイト	完形	1.35	1.30	0.3	0.43	篩掛け
447	002-02	石鏃	C-G・H 21・22	SH84下	チャート	完形	1.45	1.15	0.25	0.4	篩掛け
448	012-04	石鏃	B-V1	SK26	サヌカイト	基部大半欠失	1.2	(0.95)	(0.12)	0.13	篩掛け
449	026-03	石鏃	E-U・V11	SH106	サヌカイト	完形	1.45	1.1	0.2	0.32	篩掛け
450	001-04	石鏃	C-D20	SH50中	チャート	完形	1.8	2.0	0.28	0.4	篩掛け
451	022-04	石鏃	D-C4	SZ92	チャート	片脚部欠失	1.7	(1.5)	0.2	0.23	篩掛け
452	008-03	石鏃	C-G21	SH84下	サヌカイト	片脚部欠失	(1.8)	(1.3)	0.3	0.56	全体的に風化顕著 篩掛け
453	034-03	石鏃	E-X12	SK113	サヌカイト	先端部欠失	(1.8)	1.5	0.25	0.59	篩掛け
454	001-01	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	先端部欠失 片脚先端部欠失	(1.9)	(1.4)	0.29	(0.5)	篩掛け
455	036-01	石鏃	E-V6	風倒木	サヌカイト	先端部欠失 両脚先端部欠失	(1.75)	(1.9)	0.3	(0.67)	
456	028-04	石鏃	E-W9・10	SH107下	下呂石	完形	2.4	1.6	0.35	0.7	裏面風化 篩掛け
457	028-02	石鏃	E-W9・10	SH107 No.1	サヌカイト	片脚先端部欠失	2.75	(1.65)	0.3	(0.89)	
458	006-04	石鏃	C-D20	SH50中	チャート	片脚部欠失	2.3	(1.6)	0.3	(0.68)	篩掛け

第17表　石器観察表（１）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
459	014-04	石鏃	A-S・T25	SK1	下呂石	片脚部欠失 側縁部欠失	2.0	(1.2)	0.3	(0.56)	篩掛け
460	014-01	石鏃	A-S・T25	SK1	サヌカイト	完形	1.7	0.9	0.3	0.37	篩掛け
461	036-03	石鏃		表面採集	チャート	片脚部欠失	1.9	(1.25)	0.35 (最大)	0.59	分布調査
462	001-02	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	先端部欠失 側縁部欠失	(1.7)	1.3	0.28	(0.4)	篩掛け
463	003-03	石鏃	C-D21	SK49	サヌカイト	先端部欠失	(1.8)	1.6	0.35	0.6	篩掛け
464	009-03	石鏃	C-G・H 21・22	SH84下	サヌカイト	約1/2欠失	(2.15)	(0.85)	(0.2)	(0.31)	篩掛け
465	013-02	石鏃	A-U24・25	SK20北	チャート	先端部欠失 片脚部欠失	(2.55)	(1.2)	0.3	(0.83)	篩掛け
466	036-02	石鏃		表面採集	チャート	先端部欠失	(1.35)	1.15	0.2	(0.28)	分布調査
467	031-03	石鏃	E-X12	SK113	サヌカイト	完形	1.5	1.55	0.35	0.82	
468	014-03	石鏃	B-T1	SK8北	サヌカイト	完形	1.5	1.3	0.2	0.29	全体に風化顕著 篩掛け
469	026-02	石鏃	E-U・V11	SH106	サヌカイト	完形	1.55	1.75	0.3	0.72	篩掛け
470	007-03	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	先端部欠失	(1.4)	1.3	(0.35)	(0.76)	篩掛け
471	009-01	石鏃	C-G・H 21・22	SH84畦	チャート	完形	2.2	1.25	0.7	2.07	篩掛け
472	006-02	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	先端部欠失	(2.3)	1.3	0.4	1.16	篩掛け
473	009-02	石鏃	C-G・H 21・22	SH84上	チャート	基部先端部欠失	2.2	2.1	0.7	3.29	新欠ではなく割れた石の目 篩掛け
474	013-03	石鏃	A-U24・25	SK20	チャート	完形	2.9	1.75	0.7	3.94	篩掛け
475	031-01	石鏃	E-U・V11	SH106	サヌカイト	未成品	1.60	1.0	0.2	0.37	篩掛け
476	031-04	石鏃	E-X11	SH108下	チャート	未成品	2.3	1.65	0.7	1.93	篩掛け
477	034-01	石鏃	E-X12	SK113	サヌカイト	未成品	1.7	1.35	0.3	0.6	篩掛け
478	031-02	石鏃	E-X11	SH108下	チャート	未成品	1.8	1.3	0.3	0.83	篩掛け
479	034-02	石鏃	E-X12	SK113	サヌカイト	未成品	1.8	1.6	0.4	0.77	篩掛け
480	029-04	石鏃	E-W9・10	SH107下	チャート	未成品	2.9	1.35	0.5	2.23	篩掛け
481	024-03	石鏃	D-C4	SZ92	サヌカイト	未成品	2.55	1.7	0.65	2.28	篩掛け
482	024-01	石鏃	C-F24	SK78	チャート	未成品	2.6	2.3	0.7	3.78	篩掛け
483	015-03	石鏃	C-G22	SH84下 北東部	チャート	未成品	1.8	(1.8)	(0.5)	(1.69)	
484	016-01	石鏃	C-G・H 21・22	SH84下	チャート	未成品	2.75	2.1	1.0	4.9	石材全体にヒビが多く入る
485	010-01	石錐	C-H22	SH84下 南東部	サヌカイト		3.0	1.1	0.7	2.92	
486	010-02	石錐	C-G・H 21・22	SH84上	サヌカイト		2.0	1.05	0.4	0.71	篩掛け
487	031-05	石錐	E-X10・11	SH108 南西部	サヌカイト		2.7	1.2	0.6 (最大)	1.79	全体に風化
488	016-02	RF	C-G・H 21・22	SH84畦	チャート		2.75	2.4	0.5	3.32	篩掛け
489	030-01	RF	E-V11	SH106 柱穴A1	サヌカイト		2.9	1.8	0.8	3.63	
490	024-02	RF	D-C4	SZ92	チャート		(2.4)	(2.05)	(1.0)	(4.38)	篩掛け
491	035-01	削器	E-X12	SK113	サヌカイト		1.6	3.3	0.8	3.18	
492	027-01	大型 剥片	E-V11	SH106 No.27	サヌカイト		5.2	6.1	1.4	33.14	
493	037-01	大型 剥片	E-T16周辺	表面採集	サヌカイト		8.55	7.35	2.2	119.92	
494	019-01	打製 石斧	C-G22	SH84下 No.28	ホルンフェルス	約1/2欠失 刃部	6.7	5.8	2.0	102.06	
495	020-01	打製 石斧	B-Y5	根撹乱	流紋岩	約1/2欠失	(6.25)	(5.40)	(1.80)	(90.18)	
496	038-01	磨製 石斧		表面採集	砂岩	基部欠失 刃部一部残存	5.3	4.4	2.3 (最大)	64.59	摩耗顕著 分布調査
497	018-01	磨製 石斧		表面採集	流紋岩	先端部使用して 欠失？	(6.0)	(4.4)	(2.0)	(86.86)	全体に風化顕著
498	005-02	磨製 石斧	C-F・G25	SK68	泥岩	完形	3.0	1.2	0.43	3.0	鑿状小型 篩掛け
499	011-01	切目 石錘	C-D20	SH50	ホルンフェルス	片面欠失	5.3	4.2	0.9	21.75	
500	005-01	切目 石錘	C-D20	SH50	砂岩	完形	3.82	2.4	1.15	13.1	篩掛け
501	011-02	切目 石錘	C-D20	SH50	ホルンフェルス	片面欠失	(5.0)	(3.4)	(1.8)	(36.85)	
502	011-03	切目 石錘	C-D20	SH50	ホルンフェルス	片面欠失	5.3	3.9	1.4	38.66	
503	016-03	切目 石錘	C-G・H 21・22	SH84下	砂岩	大半欠失	(2.1)	(2.3)	(0.45)	(2.49)	篩掛け

第18表　石器観察表（２）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
504	017-02	切目石錘	C-G22	SH84	ホルンフェルス	完形	5.3	3.1	1.1	25.24	
505	053-01	切目石錘	C-G・H 21・22	SH84下 北東部	ホルンフェルス	片面欠失	6.3	3.0	1.26	33.93	
506	032-01	切目石錘	E-W10	SH107 炉周辺	ホルンフェルス	完形	4.8	3.6	1.7	37.37	赤色付着物有り
507	033-02	切目石錘	E-W9・10	SH107下	泥岩	完形	3.3	2.5	1.2 (最大)	13.11	篩掛け
508	033-01	切目石錘	E-W10	SH107 南東部	砂岩	完形	4.8	2.5	0.7	14.11	
509	032-02	切目石錘	E-W9・10	SH107 No.4	砂岩	完形	6.0	4.8	2.1	75.33	
510	033-03	切目石錘	E-W12	SH109 炉	ホルンフェルス	完形	5.0	3.05	1.3	24.53	
511	017-01	切目石錘	B-U1	SK18	ホルンフェルス	完形	3.8	3.05	1.7	30.59	篩掛け
512	023-03	切目石錘	A-V25	SK27	泥岩	ほぼ完形	3.85	2.3	0.85 (最大)	10.03	篩掛け
513	023-02	切目石錘	C-F24	Pit1	ホルンフェルス	完形	4.4	3.4	1.4	23.68	
514	023-01	切目石錘	C-D21	SK49	砂岩	完形	3.7	3.2	1.6	25.3	被熱？ 篩掛け
515	035-03	切目石錘	E-X12	SK113	ホルンフェルス	約1/2欠失 切目一方のみ残存	5.4	2.4	1.3	19.22	篩掛け
516	035-02	切目石錘	E-X12	SK113	砂岩	完形	3.15	2.45	1.6	16.96	被熱
517	039-01	台石	E-W10	SH107 No.14	花崗岩	完形	35.6	31.9	11.9	20.5kg	擦痕顕著
518	051-01	台石	E-W10	SH107 No.12	花崗岩	完形	21.0	17.0	7.2	4500	擦痕顕著
519	049-01	台石	D-F1	SK66	花崗岩	完形	24.5	25.4	9.3	8900	使用痕顕著
520	056-01	台石	C-F23・24	SK62 No.1	流紋岩	周縁を意図的に割る	16.1	9.9	14.3	3500	
521	048-01	台石	B-U・V1	SK18	花崗岩	約1/4欠失	28.7	35.1	15.0	19.6kg	剥離顕著
522	040-01	台石	E-X11	SH108 No.1	火砕岩	約1/2欠失	27.35	23.8	12.2	10.7kg	擦痕顕著
523	057-01	台石	A-S・T25	SK1 No.1	ホルンフェルス	大半欠失	10.8	10.6	6.1	950	
524	056-02	台石	C-D20	SH50 No.46	砂岩	大半欠失	13.9	9.8	4.9	850	
525	052-01	小型石皿	C-G・H22	SH84上 No.1	砂岩	大半欠失	15.1	5.1	4.9	409.45	被熱有り
526	044-01	小型石皿	C-D20	SH50 No.48	砂岩	三方欠失	12.9	15.3	3.2	1070	
527	041-01	小型石皿	E-V11	SH106 No.20	砂岩	約1/2欠失	19.4	17.5	7.8	4000	被熱痕有り 使用痕顕著
528	047-01	小型石皿	E-X12	SK113	ホルンフェルス	破片	5.2	8.3	2.0 (最大)	72.5	
529	045-02	小型石皿	D-B13	撹乱	砂岩	四方欠失	11.6	5.9	8.8	998	人為的に割っている
530	050-01	小型石皿	D-E1・2	SK59	砂岩	三方欠失	13.2	15.7	7.5	2000	
531	052-02	小型石皿	B-Y23	調査区東壁	砂岩	四方欠失	(7.6)	(8.3)		154.94	
532	042-01	小型石皿	A-W20・21	風倒木痕	砂岩	二方欠失	10.1	7.6	3.0	353	
533	043-02	磨石	C-G22	SH84下 No.31	花崗岩	一部欠失	9.7	8.35	3.6	397.5	被熱か、擦痕・敲打痕有り
534	044-02	磨石	C-G21	SH84上	花崗岩	約1/2残存	7.7	9.3	4.5	430	
535	043-01	磨石	A-T24	SK12	花崗岩	一部欠失	11.5	10.0	3.6	650	
536	042-03	磨石	C-D20	SH50上	閃緑岩	大半欠失	5.4	8.8	4.9	257.5	
537	042-02	磨石	A-U25	SK19	細粒花崗岩	完形	10.2	9.3	3.7	570	全体に剥離顕著
538	045-01	磨石	C-E20	SK61	花崗岩	約1/3残存	9.0	9.4	4.6 (最大)	500	使用痕顕著
539	025-01	磨石	C-A21	Pit1	流紋岩	完形	10.8	9.4	5.3	900	表裏面ともに良く使用、側面も一周使用、全体に使用
540	046-01	敲石	C-G・H22	SH84上 No.71	流紋岩	完形	12.6	7.85	5.5	960	
541	053-02	敲石	B-V2	SK23北	花崗岩	ほぼ完形	7.5	6.5	3.2	199.52	篩掛け
542	053-03	敲石		排土	花崗岩	完形	15.4	6.1	4.7	700	
543	054-01	敲石	C-E24	Pit1	砂岩	完形	9.2	13.3	5.9	1050	
544	055-01	礫器	E-W10	SH107 No.11	砂岩		11.9	13	7.7 (最大)	1000	
545	055-02	礫器	D-C4	SZ92	ホルンフェルス		9.8	10.2	7.1	650	
546	052-03	礫器	D-E1・2	SK59	ホルンフェルス		14.1	14.8	5.7	1400	
547	007-01	石鏃	C-D20	SH50中	サヌカイト	両脚部欠失	(1.5)	(1.4)	(1.3)	(0.4)	篩掛け
548	007-02	石鏃	C-D20	SH50畦	サヌカイト	先端部欠失 片脚部欠失	(0.9)	(1.15)	(0.2)	(0.23)	篩掛け

第19表　石器観察表（３）

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
549	010-03	石鏃	C-G・H 21・22	SH84畦	サヌカイト	未成品	(1.5)	(1.3)	(0.3)	(0.51)	篩掛け
550	012-03	石鏃	B-V1	SK26北	サヌカイト	片脚部欠失	(1.3)	(0.9)	(0.15)	(0.14)	風化顕著 篩掛け
551	013-01	石鏃	A-U24・25	SK20北	サヌカイト	先端部欠失	(1.6)	1.2	0.3	(0.40)	篩掛け
552	015-02	石鏃	C-G・H 21・22	SH84下	サヌカイト	片脚部のみ残存	(1.3)	(0.8)	(0.2)	(0.16)	篩掛け
553	021-03	石鏃	C-F・G25	SK68	チャート	先端部欠失 両脚部欠失	(2.0)	(1.35)	(0.35)	(1.27)	篩掛け
554	022-03	石鏃	D-C4	SZ92	チャート	先端部欠失 片脚部欠失	1.0	(1.0)	0.3	0.23	篩掛け
555	007-04	石鏃	C-D20	SH50中	下呂石	先端部欠失 両脚部欠失	(1.4)	(1.1)	(0.3)	(0.46)	篩掛け
556	007-05	石鏃	C-D20	SH50上	サヌカイト	脚部先端のみ残存	(0.6)	(0.35)	(0.2)	(0.04)	篩掛け
557	015-04	石鏃	C-G21	SH84下	チャート	先端部のみ残存	(1.3)	(1.1)	(0.3)	(0.34)	篩掛け
558	024-04	石鏃	C-A23	SK33	サヌカイト	先端部のみ残存	(0.9)	(0.7)	(0.25)	(0.12)	篩掛け
559	030-02	石鏃	E-W9・10	SH107	サヌカイト	先端部のみ残存	(1.5)	(0.8)	(0.2)	0.18	全体にヒビ有り
560		石鏃	E-X11	SH108下	チャート	先端部のみ残存	(0.8)	(0.5)	(0.3)	0.1	篩掛け
561		石鏃	B-T1	SK8北	チャート	先端部欠失 両脚部欠失	(1.5)	(1.1)	(0.3)	0.3	篩掛け
562		石鏃	A-U24・25	SK20北	チャート	片脚部のみ残存	(0.9)	(0.7)	(0.2)	0.2	篩掛け
563		石鏃	C-D20	SH50下	チャート	先端部のみ残存	(0.8)	(0.9)	(0.2)	0.2	篩掛け
564	030-03	石錐	E-W9・10	SH107	サヌカイト		1.55	0.8	0.45	0.56	篩掛け
565		楔形石器	C-G・H 21・22	SH84下 北東部	サヌカイト		3.5	1.4	1.6	10.3	
566		楔形石器	C-F・G25	SK68北	サヌカイト		2.3	0.8	1.1	2.5	篩掛け
567		楔形石器	C-D20	SH50上	サヌカイト		1.9	4.1	1.0	5.9	篩掛け
568		楔形石器	C-G・H 21・22	SH84上	チャート		1.7	2.7	0.7	3.6	篩掛け
569		楔形石器	C-D・E20	SH50畦	サヌカイト		2.1	1.8	0.7	2.1	
570		楔形石器	C-D・E20	SH50畦	サヌカイト		2.4	2.0	0.8	2.7	
571		楔形石器	C-D20	SH50上	サヌカイト		1.5	2.4	1.0	4.2	篩掛け
572	030-04	RF	E-W9・10	SH107下	チャート		1.3	1.0	0.2	0.30	篩掛け
573		RF	C-E20	SH50	サヌカイト		2.4	1.4	0.4	1.8	
574		RF	E-U11	SH106	チャート		2.7	1.8	0.5	2.3	
575		RF	C-G21	SH84下	チャート		1.0	1.1	0.3	0.3	篩掛け
576		RF	C-G21	SH84下	チャート		1.5	1.5	0.2	0.6	異形石器(全周両面調整) 篩掛け
577		RF	C-D20	SH50上	サヌカイト		3.4	1.9	0.6	4.1	篩掛け
578		RF	C-D20	SH50上	サヌカイト		2.0	1.4	0.5	1.3	篩掛け
579		UF	E-U11	SH106	チャート		3.6	1.5	0.7	4.8	
580		UF	B-X21	包含層	チャート		3.2	1.85	0.55	3.2	
581		石核	B-V1	SK26	チャート		3.1	1.4	1.3	6.2	篩掛け
582		石核	B-V2	SK23	チャート		2.35	1.45	1.0	3.1	篩掛け

第20表　石器観察表（４）

遺構番号	報告番号
ＳＫ１	423・459・460・523
ＳＫ８（ＳＢ85）	429・438・468・561
ＳＫ12	535
ＳＫ18（ＳＢ86）	511・521
ＳＫ19（ＳＢ85）	416・537
ＳＫ20	465・474・551・562
ＳＫ23（ＳＢ86）	415・430・541・582
ＳＫ26（ＳＢ86）	448・550・581
ＳＫ27（ＳＢ86）	427・434・512
ＳＫ33	558
ＳＫ49	463・514
ＳＨ50	414・419・420・432・443・450・454・458・462・470・472・499・500・501・502・524・526・536・547・548・555・556・563・567・569・570・571・573・577・578
ＳＫ56（ＳＢ89）	428
ＳＫ57（ＳＢ89）	418
ＳＫ59	530・546
ＳＫ61	538
ＳＫ62（ＳＢ89）	520
ＳＫ66（ＳＢ105）	433・519
ＳＫ68	444・498・553・566
ＳＫ78（ＳＢ86）	482
ＳＫ83	441
ＳＨ84	421・431・436・437・439・440・447・452・464・471・473・483・484・485・486・488・494・503・504・505・525・533・534・540・549・552・557・565・568・575・576
ＳＫ92	450・481・490・545・554
ＳＨ106	446・449・469・475・489・492・527・574・579
ＳＨ107	417・424・425・426・435・456・457・480・506・507・508・509・517・518・544・559・564・572
ＳＨ108	445・476・478・487・522・560
ＳＨ109	442・510
ＳＫ113	422・453・467・477・479・491・515・516・528
ピット	513・539・543
遺構外	455・461・466・493・495・496・497・529・531・532・542・580

第21表　石器出土一覧表

Ⅴ　自然科学分析

1　放射性炭素年代測定

（１）はじめに

三重県菰野町に所在する鈴山遺跡の第２次発掘調査と第３次発掘調査で検出された縄文時代の遺構から出土した炭化材について、加速器質分析法（AMS法）による放射能性炭素年代測定を行った。なお、同じ材料について樹種同定を行っている。

（２）試料と方法

試料は、縄文時代早期とされる集石炉から出土した炭化材２点（ＰＬＤ-33671、33672）と煙道付炉穴から出土した炭化材3点（ＰＬＤ-33673、33679、33680）、縄文時代中期とされる掘立柱建物柱穴、落とし穴、竪穴住居、土坑から出土した炭化材14点（ＰＬＤ-33666～33670、33674～33678、33681～33684）である。測定試料の情報、調整データは第22・23表のとおりである。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

（３）結果

第23表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、暦年較正結果を、第62～65図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には0xCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（４）考察

以下、２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、結果を整理する。縄文土器編年と^{14}C年代・暦年較正結果との対応関係については、小林(2008)、小林(2009)、工藤(2012)を参照した。

縄文時代早期とされる集石炉（ＳＦ51、ＳＦ53）と煙道付炉穴（ＳＦ60、ＳＦ91、ＳＦ97）から出土した炭化材（ＰＬＤ-33671～33673、33679、33680）は、^{14}C年代が9650±30～9535±30^{14}CBP、２σ暦年代範囲が9238～8759calBCの範囲に収まり、いずれも縄文時代早期前葉に相当する年代を示した。縄文時代中期とされる掘立柱建物柱穴、落とし穴、竪穴住居、土坑から出土した炭化材14点（ＰＬＤ-33666～33670、33674～33678、33681～33684）のうち、ＳＫ67（ＳＢ105柱穴）のＰＬＤ-33675、ＳＫ48（ＳＢ88）のＰＬＤ-33676、ＳＨ84（竪穴住居床面直上）のＰＬＤ-33678の３点は、試料調整を行ったが、AMS測定に十分なグラファイト（炭素の結晶）を得られず、確からしい^{14}C年代を得られなかった。したがって、^{14}C年代が得られた11点についてのみ記す。ＳＫ103（土坑）のＰＬＤ-33682、ＳＨ108（竪穴住居石囲炉）のＰＬＤ-33683、ＳＨ50（竪穴住居床面５㎝上）のＰＬＤ-33670、ＳＫ100（ＳＢ87柱穴）のＰＬＤ-33681、ＳＫ30（ＳＢ86柱穴）のＰＬＤ-

33667、ＳＫ５（ＳＢ85柱穴）のＰＬＤ-33666の6点は、^{14}Ｃ年代が4370±20～4120±25^{14}ＣBP、２σ暦年代範囲が3082～2580 calBCの範囲に収まり、縄文時代中期後半に相当する年代であった。

一方、ＳＫ83（落とし穴）のＰＬＤ-33677は、^{14}Ｃ年代が6940±30^{14}ＣBP、２σ暦年代範囲が5887-5741 calBC（95.4%）で、縄文時代早期後葉に相当する年代であった。縄文時代中期にＳＫ83が掘られた際に縄文時代早期後葉の土層に含まれていた炭化材が落とし穴の中に供給された可能性が考えられる。あるいはＳＫ83の時期が縄文時代早期後葉まで古くなる可能性も考えられる。

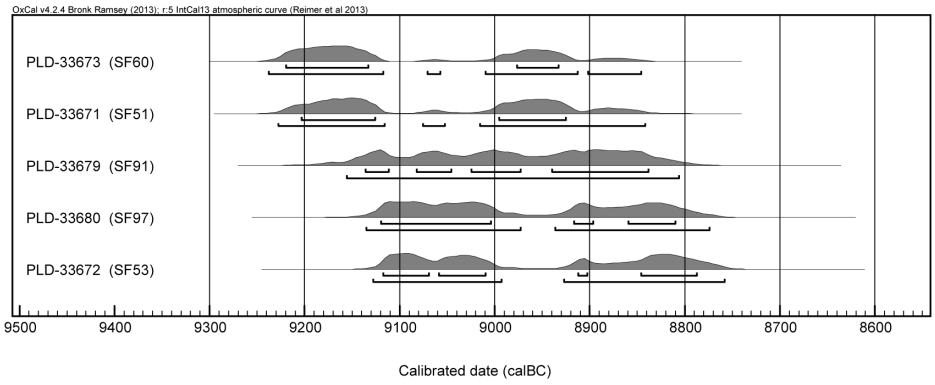
また、ＳＫ31（落とし穴）のＰＬＤ-33668は、^{14}Ｃ年代が3885±20^{14}ＣBP、２σ暦年代範囲が2462-2298 calBC（95.4%）で、縄文時代後期初頭、ＳＫ62（ＳＢ89柱穴）のＰＬＤ-33674は、^{14}Ｃ年代が3660±25^{14}ＣBP、２σ暦年代範囲が2135-2079 calBC（34.3%）および2064-1955 calBC（61.1%）で、縄文時代後期前葉に相当する年代であった。これらの遺構は、発掘調査所見よりもやや新しい可能性がある。

さらに、ＳＫ113（土坑）のＰＬＤ-33684は、^{14}Ｃ年代が2955±20^{14}ＣBP、２σ暦年代範囲が1259-1245 calBC（1.8%）、1234-1108 calBC（92.3%）および1099-1087 calBC（1.3%）で、縄文時代晩期前葉、ＳＫ45（ＳＢ88柱穴）のＰＬＤ-33669は、^{14}Ｃ年代が2565±2014ＣBP、２σ暦年代範囲が805-755 calBC（92.0%）、680-670 calBC（1.9%）および606-596 calBC（1.5%）で、縄文時代晩期中葉～後葉に相当する年代であった。これらの遺構については、発掘調査所見と合わせて時期を再検討する必要がある。

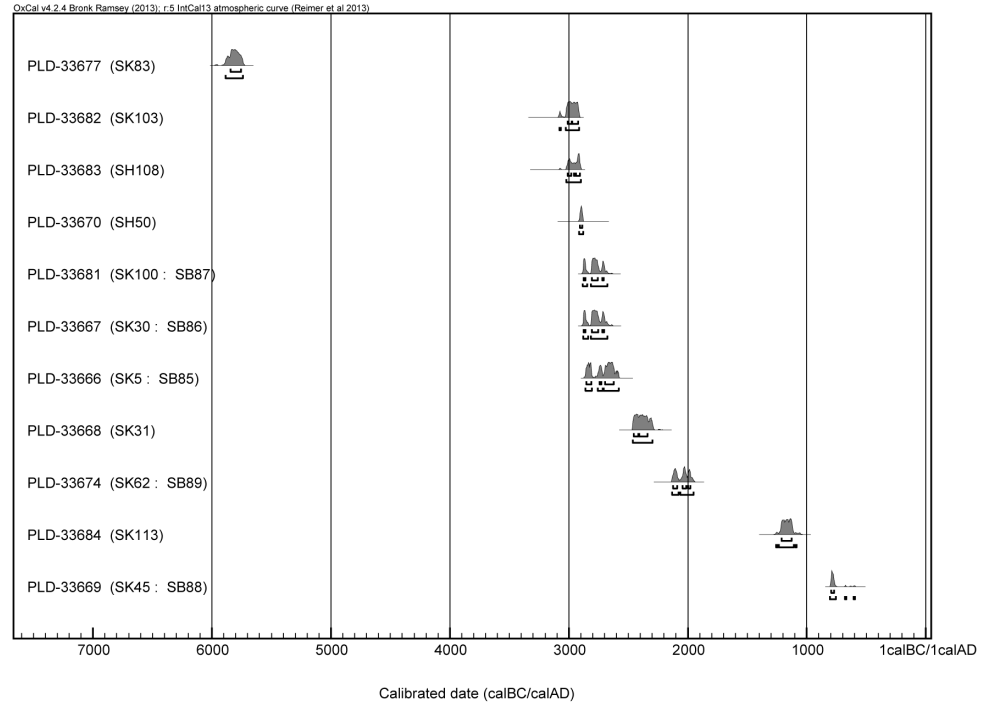
ＡＭＳ年代測定グループ
伊藤茂・安昭炫・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・小林克也・中村賢太朗
（パレオ・ラボ）

【参考文献】

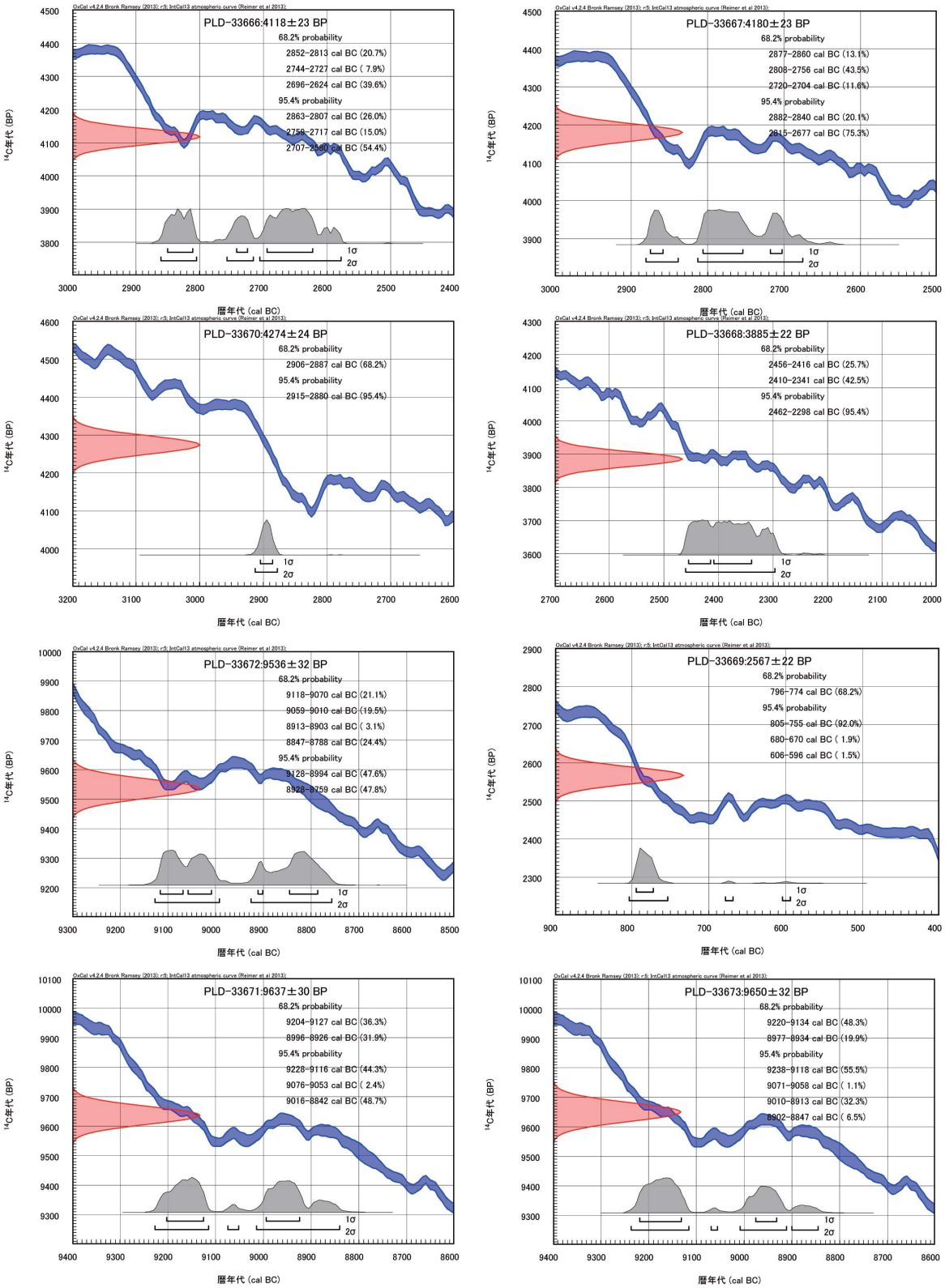
・Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
・小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学2-歴史のものさし-，257-269，同成社.
・小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82，雄山閣.
・工藤雄一郎（2012）第10章後氷期の考古編年と^{14}Ｃ年代．旧石器・縄文時代の環境文化史，212-229，新泉社.
・中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}Ｃ年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}Ｃ年代」：３-20，日本第四紀学会.
・Reimer,P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell,P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H.,Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes,P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H.,Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A.,Kaiser, K.F., Kromer,B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer,
・R.W., Richards, D.A., Scott, E.M.,Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,55(4), 1869-1887.



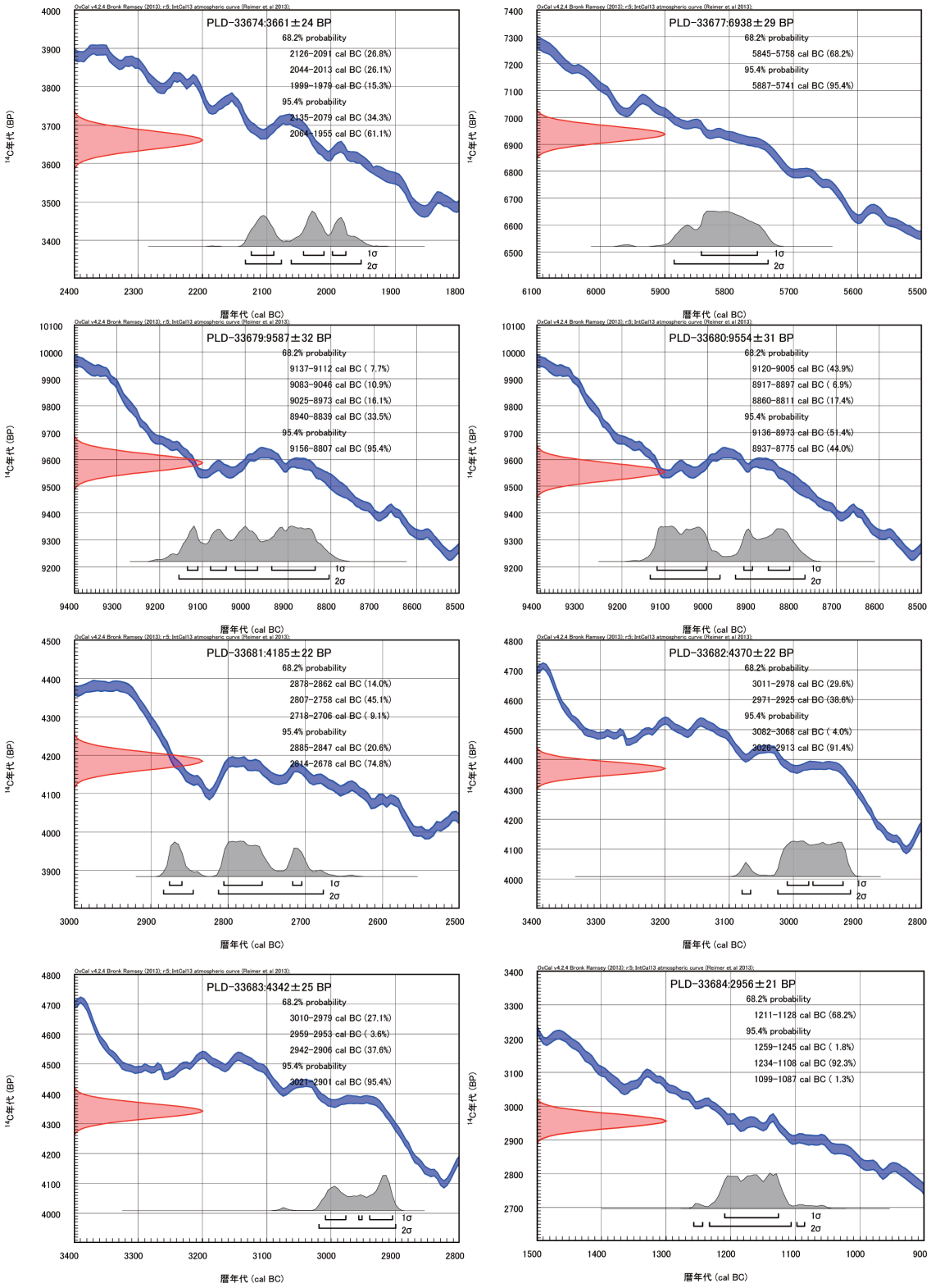
第62図　縄文時代早期の遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較



第63図　縄文時代中期の遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較



第64図　暦年較正結果（１）



第65図　暦年較正結果（２）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33666	試料No.1 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK5(SB85柱穴) グリッド：A-T25 炭化物No.7	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33667	試料No.2 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK30(SB86柱穴) グリッド：B-V1 炭化物No.5	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33668	試料No.3 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK31(落とし穴) グリッド：A-X24 炭化物No.1	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33669	試料No.4 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK45(SB88柱穴) グリッド：C-D25 炭化物No.8	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33670	試料No.5 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SH50(竪穴住居床面5cm上) グリッド：C-D20 炭化物No.16	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33671	試料No.6 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF51(集石炉) グリッド：C-D21 炭化物No.19	種類：炭化材（ツツジ属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33672	試料No.7 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF53(集石炉) グリッド：C-D21 炭化物No.24	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N)
PLD-33673	試料No.8 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF60(煙道付炉穴) グリッド：B-Y2 炭化物No.2	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33674	試料No.9 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK62(SB89柱穴) グリッド：C-F23 炭化物No.12	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33675	試料No.10 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK67(SB105柱穴) グリッド：C-G25 炭化物No.25	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-33676	試料No.11 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK48（SB88柱穴） グリッド：C-D24 炭化物No.11	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N)
PLD-33677	試料No.12 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK83(落とし穴) グリッド：C-F18 炭化物No.17	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N)

第22表　測定試料および処理（１）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33678	試料No.13 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SH84（竪穴住居床面直上） グリッド：C-G21 炭化物No.20	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）
PLD-33679	試料No.14 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF91(煙道付炉穴) グリッド：B-Y5 炭化物No.23	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-33680	試料No.15 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF97(煙道付炉穴) グリッド：C-E21 炭化物No.21	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-33681	試料No.16 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK100（SB87柱穴） グリッド：A-S24 炭化物No.22	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-33682	試料No.17 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK103(土坑) グリッド：C-D21 炭化物No.15	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-33683	試料No.18 遺跡名：鈴山遺跡（第3次） 遺構：SH108(竪穴住居石囲い炉) グリッド：E-X11 炭化物No.1	種類：炭化材（ツツジ属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-33684	試料No.19 遺跡名：鈴山遺跡（第3次） 遺構：SK113(土坑) グリッド：E-X12 炭化物No.2	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

第23表　測定試料および処理（２）

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-33666 SK5(SB85柱穴)	-23.87±0.21	4118±23	4120±25	2852-2813 cal BC (20.7%) 2744-2727 cal BC (7.9%) 2696-2624 cal BC (39.6%)	2863-2807 cal BC (26.0%) 2759-2717 cal BC (15.0%) 2707-2580 cal BC (54.4%)
PLD-33667 SK30(SB86柱穴)	-23.52±0.23	4180±23	4180±25	2877-2860 cal BC (13.1%) 2808-2756 cal BC (43.5%) 2720-2704 cal BC (11.6%)	2882-2840 cal BC (20.1%) 2815-2677 cal BC (75.3%)
PLD-33668 SK31(落とし穴)	-22.13±0.19	3885±22	3885±20	2456-2416 cal BC (25.7%) 2410-2341 cal BC (42.5%)	2462-2298 cal BC (95.4%)
PLD-33669 SK45(SB88柱穴)	-26.98±0.19	2567±22	2565±20	796-774 cal BC (68.2%)	805-755 cal BC (92.0%) 680-670 cal BC (1.9%) 606-596 cal BC (1.5%)
PLD-33670 SH50(竪穴住居床面5cm上)	-23.88±0.15	4274±24	4275±25	2906-2887 cal BC (68.2%)	2915-2880 cal BC (95.4%)
PLD-33671 SF51(集石炉)	-24.14±0.22	9637±30	9635±30	9204-9127 cal BC (36.3%) 8996-8926 cal BC (31.9%)	9228-9116 cal BC (44.3%) 9076-9053 cal BC (2.4%) 9016-8842 cal BC (48.7%)
PLD-33672 SF53(集石炉)	-25.18±0.23	9536±32	9535±30	9118-9070 cal BC (21.1%) 9059-9010 cal BC (19.5%) 8913-8903 cal BC (3.1%) 8847-8788 cal BC (24.4%)	9128-8994 cal BC (47.6%) 8928-8759 cal BC (47.8%)
PLD-33673 SF60(煙道付炉穴)	-26.20±0.16	9650±32	9650±30	9220-9134 cal BC (48.3%) 8977-8934 cal BC (19.9%)	9238-9118 cal BC (55.5%) 9071-9058 cal BC (1.1%) 9010-8913 cal BC (32.3%) 8902-8847 cal BC (6.5%)
PLD-33674 SK62(SB89柱穴)	-25.85±0.27	3661±24	3660±25	2126-2091 cal BC (26.8%) 2044-2013 cal BC (26.1%) 1999-1979 cal BC (15.3%)	2135-2079 cal BC (34.3%) 2064-1955 cal BC (61.1%)
PLD-33675 SK67(SB105柱穴)	—	—	—	—	—
PLD-33676 SK48 (SB88柱穴)	—	—	—	—	—
PLD-33677 SK83(落とし穴)	-24.34±0.31	6938±29	6940±30	5845-5758 cal BC (68.2%)	5887-5741 cal BC (95.4%)
PLD-33678 SH84 (竪穴住居床面直上)	—	—	—	—	—
PLD-33679 SF91(煙道付炉穴)	-27.49±0.19	9587±32	9585±30	9137-9112 cal BC (7.7%) 9083-9046 cal BC (10.9%) 9025-8973 cal BC (16.1%) 8940-8839 cal BC (33.5%)	9156-8807 cal BC (95.4%)
PLD-33680 SF97(煙道付炉穴)	-27.71±0.19	9554±31	9555±30	9120-9005 cal BC (43.9%) 8917-8897 cal BC (6.9%) 8860-8811 cal BC (17.4%)	9136-8973 cal BC (51.4%) 8937-8775 cal BC (44.0%)
PLD-33681 SK100 (SB87柱穴)	-24.84±0.21	4185±22	4185±20	2878-2862 cal BC (14.0%) 2807-2758 cal BC (45.1%) 2718-2706 cal BC (9.1%)	2885-2847 cal BC (20.6%) 2814-2678 cal BC (74.8%)
PLD-33682 SK103(土坑)	-25.02±0.18	4370±22	4370±20	3011-2978 cal BC (29.6%) 2971-2925 cal BC (38.6%)	3082-3068 cal BC (4.0%) 3026-2913 cal BC (91.4%)
PLD-33683 SH108(竪穴住居石囲い炉)	-26.97±0.26	4342±25	4340±25	3010-2979 cal BC (27.1%) 2959-2953 cal BC (3.6%) 2942-2906 cal BC (37.6%)	3021-2901 cal BC (95.4%)
PLD-33684 SK113(土坑)	-24.26±0.20	2956±21	2955±20	1211-1128 cal BC (68.2%)	1259-1245 cal BC (1.8%) 1234-1108 cal BC (92.3%) 1099-1087 cal BC (1.3%)

第24表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

2　樹種同定

（１）はじめに

三重郡菰野町大字音羽に所在する鈴山遺跡の第２次および第３次調査で出土した炭化材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行なわれている(放射性炭素年代測定の項参照)。

（２）試料と方法

試料は、縄文時代早期の集石炉であるＳＦ51とＳＦ53、煙道付炉穴であるＳＦ60とＳＦ91、ＳＦ97、縄文時代中期のＳＫ５（掘立柱建物ＳＢ85柱穴)、ＳＫ30（ＳＢ86柱穴)、ＳＫ100（ＳＢ87柱穴)、ＳＫ45（ＳＢ88柱穴)、ＳＫ48（ＳＢ88柱穴)、ＳＫ62（ＳＢ89柱穴)、ＳＫ67（ＳＢ105柱穴)、竪穴住居跡であるＳＨ50、ＳＨ84、ＳＨ108、落とし穴であるＳＫ31、ＳＫ83、土坑であるＳＫ103、ＳＫ113から各１点出土した、計19点の炭化材である。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面（板目)、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　ＪＳＭ-5900ＬＶ）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（３）結果

同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ)、ツツジ属の３分類群がみられた。また、試料が微細なため、広葉樹までの同定とした試料が６点あった。クリと広葉樹が各６点で、アカガシ亜属が５点、ツツジ属が２点であった。同定結果を第25表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第66図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1)クリ　*Castanea crenata* Siebold. et Zucc.
ブナ科　第66図　１ａ-１ｃ(No.８)

年輪のはじめに大型の道管が１～３ 列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(2)コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　第66図　２ａ-２ｃ(No.５)、３ａ(No.９)、４ａ(No.17)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(3)ツツジ属　*Rhododendron*　ツツジ科　第66図　５ａ-５ｃ(No.18)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は10～20段程度の階段穿孔となり、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～４列が直立する異性で、幅１～５列となる。単列の放射組織は、レンズ状になる。

ツツジ属にはヤマツツジやサツキなどがあり、代表的なヤマツツジは北海道南部、本州、四国、九州に生育する、高さ１～５ｍになる半落葉低木の広葉樹である。材は堅くて緻密で、ねばり強い。

(4)広葉樹　Broadleaf-wood　第66図　６ａ(No.15)

道管を有する広葉樹であるが、試料が微細で他の特徴が確認できず、広葉樹までの同定に留めた。

（４）考察

縄文時代早期の集石炉であるＳＦ51の炭化材はツツジ属、ＳＦ53の炭化材はクリであった。また、煙道付炉穴であるＳＦ60とＳＦ91の炭化材はクリ、ＳＦ97の炭化材は広葉樹であった。試料は燃料材の可能性が考えられている。クリとツツジ属は共に薪炭材として利用される樹種であり（平井，1996)、遺跡周辺に生育していたクリとツツジ属が利用されたと考えられる。同じ縄文時代早期の遺跡である松

阪市の鴻ノ木遺跡でも、早期の炉跡から出土した炭化材でクリが非常に多く確認されており（伊東・山田編，2012）、鈴山遺跡でも同様の傾向を示す可能性がある。

縄文時代中期のＳＫ５（ＳＢ85柱穴）とＳＫ30（ＳＢ86柱穴）の炭化材はクリ、ＳＫ45（ＳＢ88柱穴）とＳＫ62（ＳＢ89柱穴）の炭化材はアカガシ亜属、ＳＫ100（ＳＢ87柱穴）とＳＫ48（ＳＢ88柱穴）、ＳＫ67（ＳＢ105柱穴）の炭化材は広葉樹であった。これらの試料は、いずれも掘立柱建物の柱の可能性がある。クリとアカガシ亜属は堅硬な樹種であり（伊東ほか，2012）、柱として選択的に利用されたと考えられる。

竪穴住居跡であるＳＨ50の炭化材はアカガシ亜属、ＳＨ84の炭化材は広葉樹、ＳＨ108の炭化材はツツジ属であった。これらの試料は、焼けた建築材や燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。アカガシ亜属とツツジ属は遺跡周辺にも普通に生育する樹種であり（伊東ほか，2011）、遺跡周辺のアカガシ亜属とツツジ属が伐採利用されたと考えられる。陥穴であるＳＫ31の炭化材はアカガシ亜属、ＳＫ83の炭化材はクリ、土坑であるＳＫ103の炭化材はアカガシ亜属、ＳＫ113の炭化材は広葉樹であった。これらの試料の用途は不明である。遺跡周辺に生育していたクリやアカガシ亜属が伐採利用されたと考えられる。

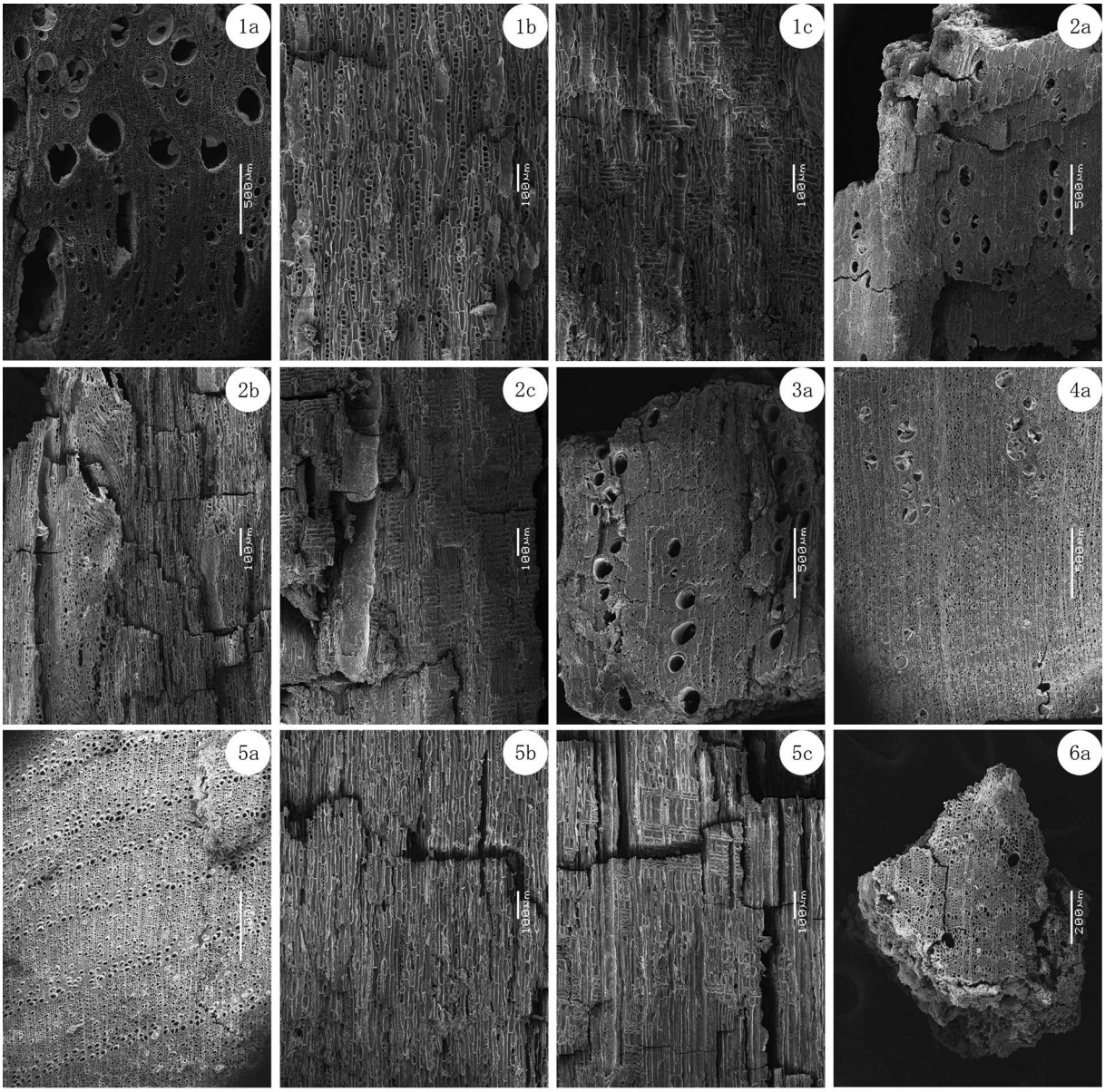
小林克也
（パレオ・ラボ）

【引用文献】

・平井信二（1996）木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房.
・伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.
・伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.

試料No.	調査年次	遺構名	遺物No.	樹種	時期	年代測定番号
1	２次	ＳＫ５（ＳＢ85柱穴）	炭化物No. ７	クリ	縄文時代中期	ＰＬＤ-33666
2	２次	ＳＫ30（ＳＢ86柱穴）	炭化物No. ５	クリ	縄文時代中期	ＰＬＤ-33667
3	２次	ＳＫ31（陥穴）	炭化物No. １	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	ＰＬＤ-33668
4	２次	ＳＫ45（ＳＢ88柱穴）	炭化物No. ８	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	ＰＬＤ-33669
5	２次	ＳＨ50（竪穴住居 床面５㎝上）	炭化物No. 16	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	ＰＬＤ-33670
6	２次	ＳＦ51（集石炉）	炭化物No. 19	ツツジ属	縄文時代早期	ＰＬＤ-33671
7	２次	ＳＦ53（集石炉）	炭化物No. 24	クリ	縄文時代早期	ＰＬＤ-33672
8	２次	ＳＦ60（煙道付炉穴）	炭化物No. ２	クリ	縄文時代早期	ＰＬＤ-33673
9	２次	ＳＫ62（ＳＢ89柱穴）	炭化物No. 12	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	ＰＬＤ-33674
10	２次	ＳＫ67（ＳＢ105柱穴）	炭化物No. 25	広葉樹	縄文時代中期	ＰＬＤ-33675
11	２次	ＳＫ48（ＳＢ88柱穴）	炭化物No. 11	広葉樹	縄文時代中期	ＰＬＤ-33676
12	２次	ＳＫ83（陥穴）	炭化物No. 17	クリ	縄文時代中期	ＰＬＤ-33677
13	２次	ＳＨ84（竪穴住居 床面直上）	炭化物No. 20	広葉樹	縄文時代中期	ＰＬＤ-33678
14	２次	ＳＦ91（煙道付炉穴）	炭化物No. 23	クリ	縄文時代早期	ＰＬＤ-33679
15	２次	ＳＦ97（煙道付炉穴）	炭化物No. 21	広葉樹	縄文時代早期	ＰＬＤ-33680
16	２次	ＳＫ100（ＳＢ87柱穴）	炭化物No. 22	広葉樹	縄文時代中期	ＰＬＤ-33681
17	２次	ＳＫ103（土坑）	炭化物No. 15	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	ＰＬＤ-33682
18	３次	ＳＨ108（竪穴住居 石囲炉）	炭化物No. １	ツツジ属	縄文時代中期	ＰＬＤ-33683
19	３次	ＳＫ113（土坑）	炭化物No. ２	広葉樹	縄文時代中期	ＰＬＤ-33684

第25表　出土炭化材の樹種同定結果一覧



1a-1c. クリ(No. 8)、2a-2c. コナラ属アカガシ亜属(No. 5)、3a. コナラ属アカガシ亜属(No. 9)、4a. コナラ属アカガシ亜属(No. 17)、5a-5c. ツツジ属(No. 18)、6a. 広葉樹(No. 15)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第66図　出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

3　産地同定

（１）はじめに

三重郡菰野町大字音羽に所在する鈴山遺跡から出土した縄文時代中期の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。なお、成果品等の所有権および著作権の帰属は、三重県埋蔵文化財センターにある。

（２）試料と方法

分析対象は、鈴山遺跡の第２次および第３次発掘調査で出土した石器17点である（第26表）。いずれも縄文時代中期の石器とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジと精製水を用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計ＳＥＡ1200ＶＸを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム(Rh)、Ｘ線検出器はＳＤＤ検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにＰｂ測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定法である、判別図法を用いた（望月，1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計７元素のＸ線強度（cps；countper second）について、以下に示す指標値を計算する。

1）Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

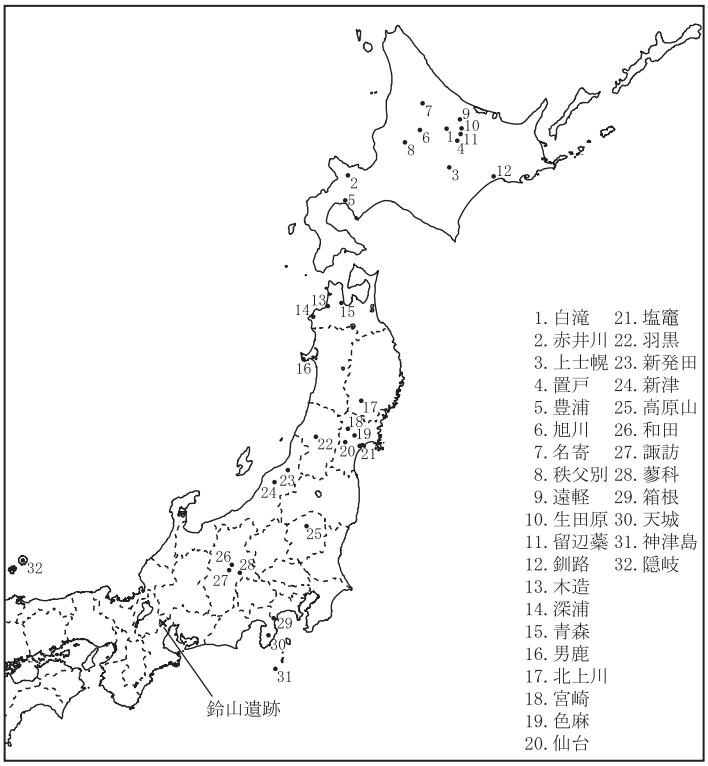
2）Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

3）Mn強度×100/Fe強度4）log(Fe強度/K強度)

そして、これらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log(Fe強度/Ｋ強度)の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光Ｘ線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合は、log(Fe強度/Ｋ強度)の値が減少する点に注意が

分析No.	遺跡	出土遺構	器種	最大厚さ(㎜)	最大長さ(㎜)
1	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ50上（ふるいがけ）	石鏃	3.8	20.0
2	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ50上（ふるいがけ）	剥片	2.2	13.0
3	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ50上（ふるいがけ）	剥片	1.8	15.1
4	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ50下（ふるいがけ）	石鏃破片	2.0	9.0
5	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ50下（ふるいがけ）	剥片	3.6	11.8
6	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ84（ふるいがけ）	剥片	0.7	6.2
7	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ84中（ふるいがけ）	剥片	1.7	14.8
8	鈴山遺跡（２次）	ＳＫ１（ふるいがけ）	剥片	2.8	23.2
9	鈴山遺跡（２次）	ＳＫ２（ふるいがけ）	剥片	1.2	9.6
10	鈴山遺跡（２次）	ＳＫ５（ふるいがけ）	剥片	2.2	8.4
11	鈴山遺跡（２次）	ＳＫ92（ふるいがけ）	剥片	5.1	17.0
12	鈴山遺跡（３次）	ＳＨ106（ふるいがけ）	剥片	4.0	10.0
13	鈴山遺跡（３次）	ＳＨ106（ふるいがけ）	剥片	3.4	11.8
14	鈴山遺跡（３次）	ＳＨ107下（ふるいがけ）	剥片	3.3	8.1
15	鈴山遺跡（３次）	ＳＨ108下（ふるいがけ）	剥片	1.9	9.8
16	鈴山遺跡（３次）	ＳＨ108石囲炉（ふるいがけ）	剥片	1.2	6.0
17	鈴山遺跡（２次）	ＳＨ50中（ふるいがけ）	剥片	3.3	11.0

第26表　分析対象となる黒曜石製石器



第67図　黒曜石産地分布図（東日本）

必要である（望月，1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第27表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第67図に各原石の採取地の分布図を示す。

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43),八号沢露頭(15)	赤石山山頂,八号沢露頭,八号沢,黒曜の沢,幌加林道(36)
		白滝2	7の沢川支流(2),IK露頭(10),十勝石沢露頭直下河床(11),アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股(4),タウシュベツ川右岸(42),タウシュベツ川左岸(10),十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
	豊浦	豊浦	豊泉(10)	
	旭川	旭川	近文台(8),雨紛台(2)	
	名寄	名寄	忠烈布川（19）	
	秩父別	秩父別1	中山(65)	
		秩父別2		
		秩父別3		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床(9)	
		留辺蘂2		
	釧路	釧路	釧路市営スキー場(9),阿寒川右岸(2),阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15),鶴ヶ坂（10）	
	深浦	八森山	岡崎浜(7),八森山公園(8)	
	青森	青森	天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)	
		脇本	脇本海岸(4)	
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9),真城（33）	
		北上折居2		
		北上折居3		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
	色麻	根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24),大越沢（10）	
		櫛引	たらのき代（19）	
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
		七尋沢	七尋沢(3),宮川(3),枝持沢(3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)	
		鷹山	鷹山(14),東餅屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20),土屋橋北西(58),土屋橋西(1)	
		古峠	和田峠トンネル上(28),古峠(38),和田峠スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)	
		高松沢	高松沢(19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35),星ヶ塔(20)	
	蓼科	冷山	冷山(20),麦草峠(20),麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)	
		畑宿	畑宿(51)	
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)	
静岡		上多賀	上多賀(20)	
	天城	柏峠	柏峠(20)	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)	
		砂糠崎	砂糠崎(20)	
島根	隠岐	久見	久見パーライト中(6),久見採掘現場(5)	
		箕浦	箕浦海岸(3),加茂(4),岸浜(3)	

第27表　東日本黒曜石産地の判別群

（３）分析結果

第29表に黒曜石製石器の測定値および算出した指標値を、第68図と第69図に黒曜石原石の判別図に黒曜石製石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。なお、分析No.16は、観察の結果、無色透明で黒曜石ではないと考えられたため、別途半定量分析を行った。その結果、ほぼケイ素（SiO_2）のみの化学組成であり（第28表）、水晶と確認された。

分析の結果、16点の黒曜石製石器のうち、９点が星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。また、３点（分析No.２、３、14）は第69図では星ヶ台群の範囲に、第68図では星ヶ台群の下方に当たる位置にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ（望月，1999）、試料は星ヶ台群に属する可能性が高い。

残りの４点（分析No.５、６、９、10）は、星ヶ台群の近くにプロットされるものの、合致する判別群はなく、産地は不明であった。ただし、この４点は、第68図では互いに近い位置にプロットされ、第69図では分析No.９、10の下方に分析No.５、６がプロットされており、同一判別群である可能性がある。ここでは不明１群とした。

第29表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

産地の判明した12点は、いずれも信州産であった。長田（2011）では、縄文時代を中心とした愛知県、岐阜県、三重県内の18遺跡442点の黒曜石産地推定結果が集成されている。これによると、信州産が400点と圧倒的多数であるが、神津島産が15点、箱根産、柏峠産が各１点と、少量ながら信州産以外の黒曜石も確認されている。

（４）おわりに

鈴山遺跡より出土した縄文時代中期の石器17点について、蛍光Ｘ線分析による産地推定を行った結果、12点が諏訪エリア産の黒曜石と推定された。また、４点は産地不明黒曜石、１点は水晶であった。

分析No.	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	CaO	材質
16	0.31	98.80	0.80	0.10	水晶

第28表　分析No.16の半定量分析結果

分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{Mn*100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	分析No.
1	238.1	91.5	903.6	625.1	239.5	315.9	617.2	34.77	10.12	13.32	0.58	星ヶ台	諏訪	1
2	369.0	94.0	928.1	652.1	238.3	318.8	610.4	35.84	10.12	13.10	0.40	星ヶ台?	諏訪?	2
3	338.4	89.3	889.5	652.5	227.6	308.9	606.5	36.34	10.04	12.67	0.42	星ヶ台?	諏訪?	3
4	193.3	75.2	771.7	480.2	178.6	238.4	457.4	35.45	9.75	13.19	0.60	星ヶ台	諏訪	4
5	309.9	86.3	871.9	620.9	204.3	280.0	525.6	38.07	9.90	12.53	0.45	不明1?	不明	5
6	90.7	23.5	246.7	152.7	53.5	69.9	128.2	37.76	9.52	13.24	0.43	不明1?	不明	6
7	208.7	82.3	838.6	550.0	203.0	267.3	510.3	35.93	9.82	13.26	0.60	星ヶ台	諏訪	7
8	119.9	47.3	469.3	314.5	122.8	164.1	315.7	34.29	10.09	13.39	0.59	星ヶ台	諏訪	8
9	97.6	38.5	410.0	228.0	81.9	106.7	199.8	36.98	9.40	13.29	0.62	不明1	不明	9
10	167.2	64.6	692.3	390.6	145.5	186.4	354.6	36.26	9.32	13.51	0.62	不明1	不明	10
11	311.6	122.2	1162.6	802.0	301.7	404.1	781.0	35.04	10.52	13.18	0.57	星ヶ台	諏訪	11
12	165.3	64.9	662.0	402.4	148.4	196.7	376.7	35.79	9.80	13.20	0.60	星ヶ台	諏訪	12
13	143.7	55.0	544.2	379.6	146.9	195.7	379.8	34.45	10.10	13.33	0.58	星ヶ台	諏訪	13
14	116.3	31.6	297.0	215.3	79.2	108.8	214.3	34.86	10.63	12.83	0.41	星ヶ台?	諏訪?	14
15	217.4	83.9	846.0	549.1	200.8	261.4	496.9	36.41	9.92	13.31	0.59	星ヶ台	諏訪	15
17	262.1	102.2	1037.9	650.8	241.0	321.4	621.5	35.47	9.84	13.14	0.60	星ヶ台	諏訪	17

第29表　測定値および産地推定結果

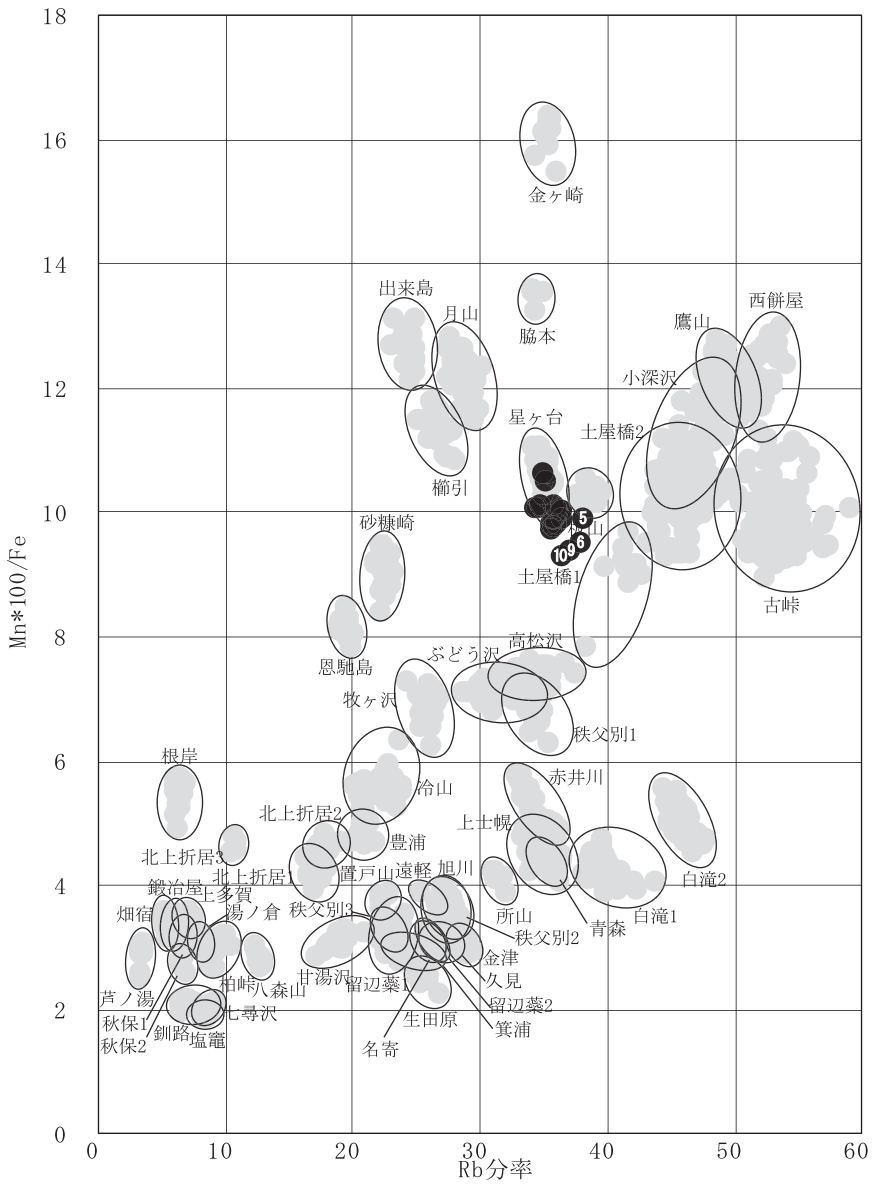
【引用文献】

・望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2―上和田城山遺跡篇―」：172-179，大和市教育委員会．

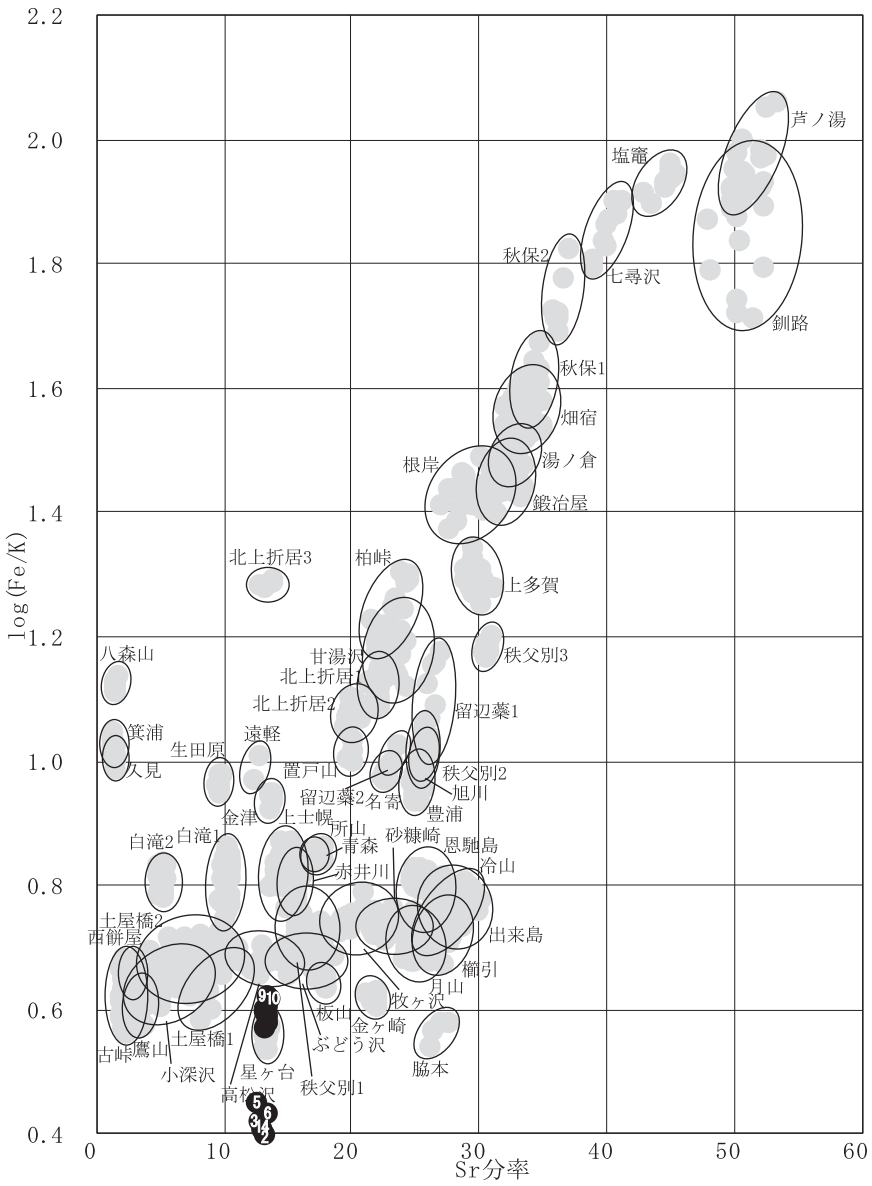
・長田友也（2011）水汲遺跡の位置づけ．長田友也編「水汲遺跡」：249-252，豊田市教育委員会．

竹原弘展

（パレオ・ラボ）



第68図　黒曜石産地推定判別図（１）



第69図　黒曜石産地推定判別図（２）

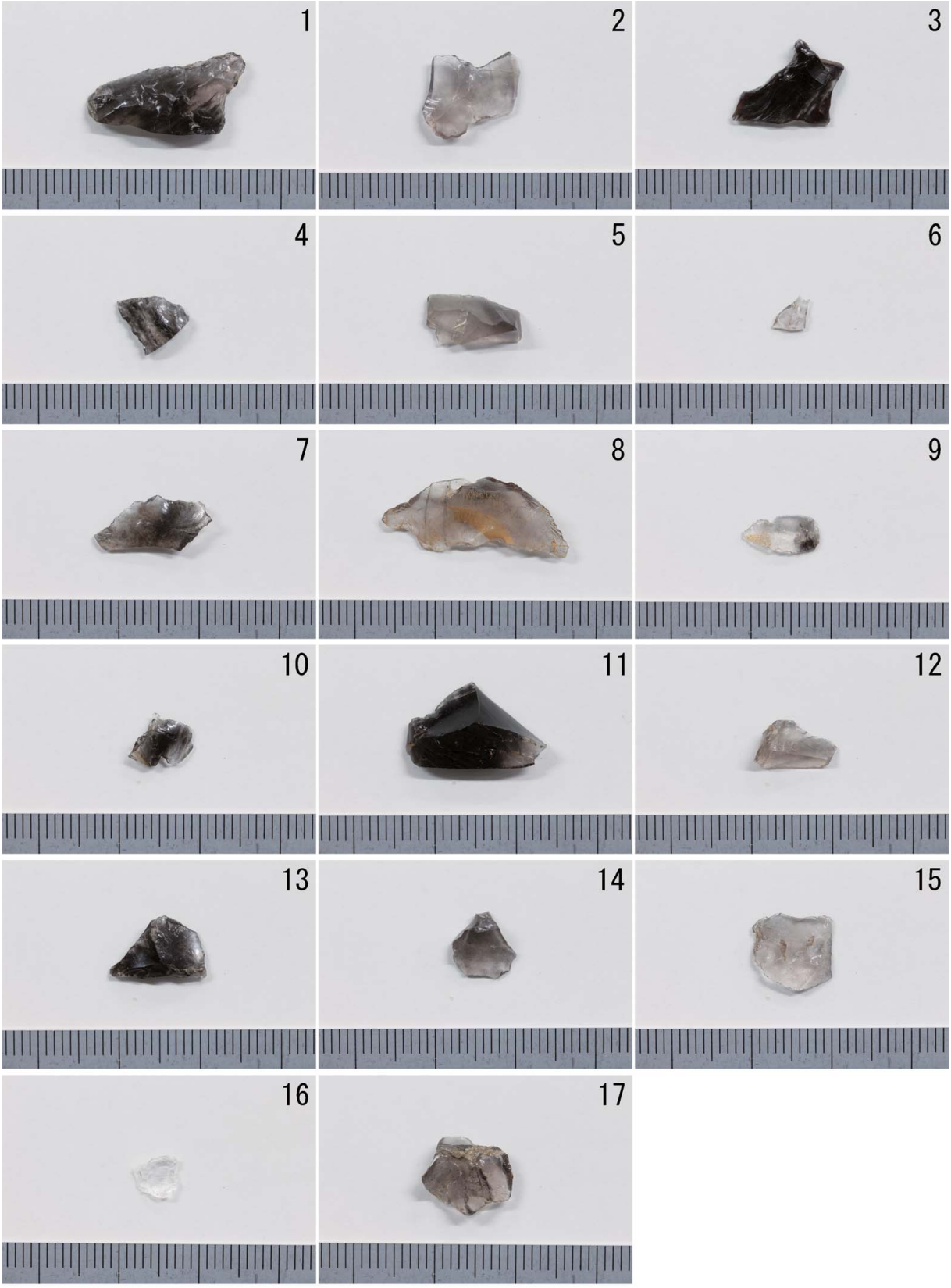


写真３　分析試料写真

Ⅵ　結　　語

1　縄文時代早期

（1）遺構

煙道付炉穴　西調査区で10基を検出した。いずれも上部が後世に削平を受けて、煙道の天井部が無く、一見土坑のようであるが、全体の形状や前傾（オーバーハング）した壁、および焼土の様子などから、煙道付炉穴と判断した。

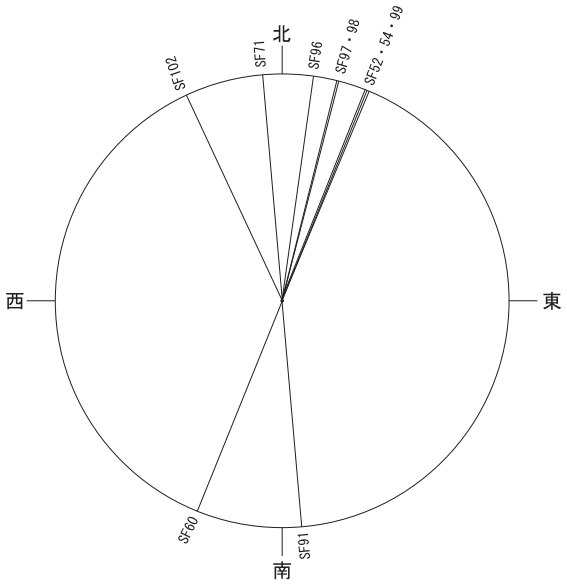
なお、三重県内では、当遺跡を含めて９遺跡で確認されている（第30表）。

まず、全体構造の概略は、遺存状態の良いものから推定すると、全般的な平面形は細長い二等辺三角形をしており、全長は2.5m程度と思われる。
燃焼坑から煙道に向けて浅くなる例が多く、煙道天井部が崩落しないように、ある程度の深さ（60～70cm以上）が必要であったと思われる。

また、焼土は煙道前半部の底面に１m程広がり、壁面にまで及ぶ例もある。厚さは２～５cm程である。

次に、燃焼坑から煙出坑を見た方向は、10基中、８基が概ね北向き、２基が南向きで、東向きや西向きは無い（第70図）。

ところで、10基の中には、重複する例（ＳＦ52とＳＦ54とＳＦ99、ＳＦ96とＳＦ97とＳＦ98、ＳＦ91とＳＦ102）と、単独の例（ＳＦ60、ＳＦ71）が存在している。



第70図　煙道付炉穴の燃焼坑から煙出坑をみた方角

煙道付炉穴は、先行する遺構の窪みを利用し、重複して設営されることが多いと指摘されており[①]、当遺跡でも重複する例は、それと同様のことが言えると推定する。

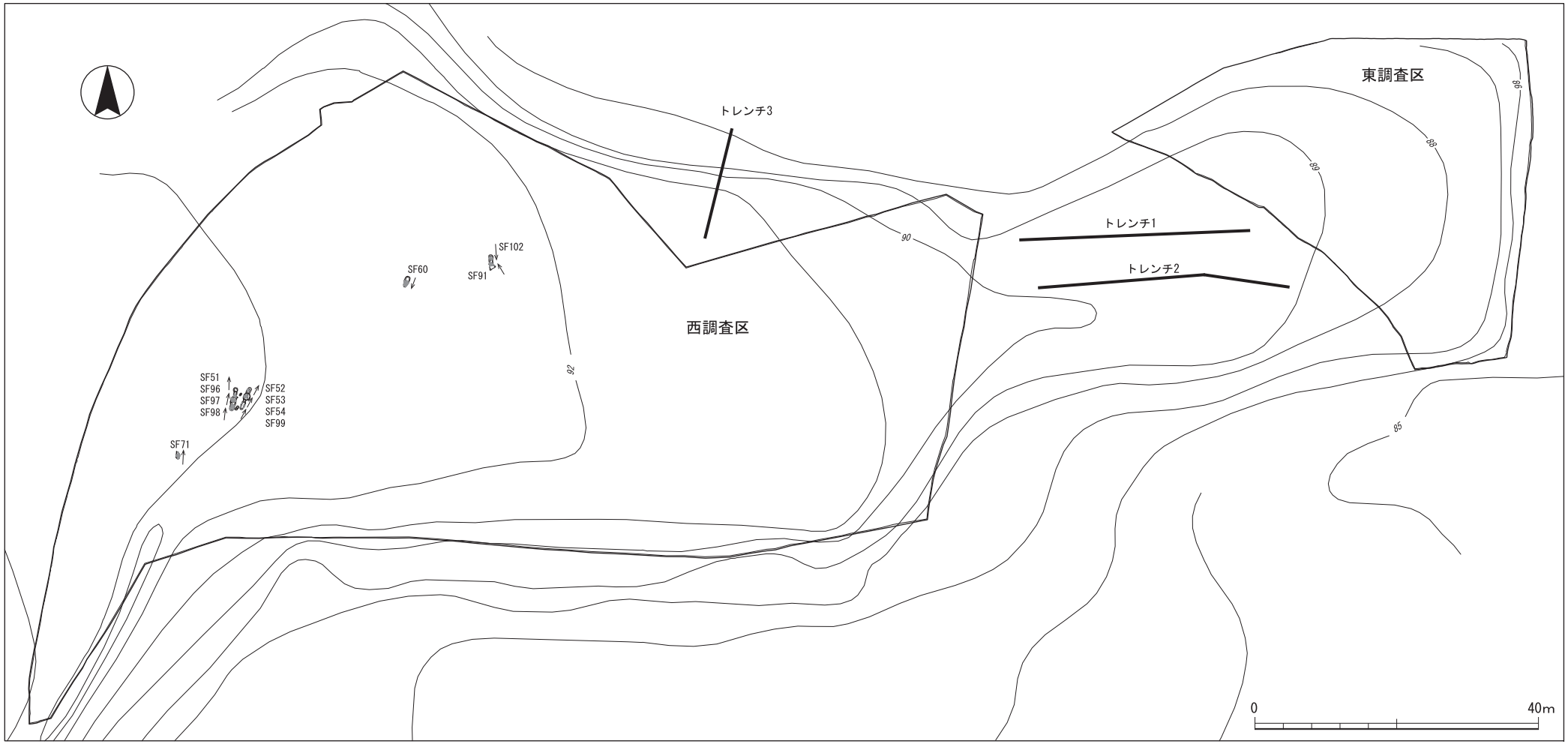
最後に、存続期間は１時期に１基設営したと仮定すると、３基の重複あるいは単独で分布する状況から、最短で３時期、最長で10時期だったと推定し、人々が何回か回帰した累積結果であると思われる。

また所属時期は、ＳＦ52については出土した押型文土器から、早期前半であることを示し、重複するＳＦ54・99は窪みを利用したと推定することから、近しい時期であろう。その他の煙道付炉穴については検討を要するが、平面形や焼土、埋土の様子が類似することから、それほど離れた時期ではないと推定する。

なお、報告のように、出土した炭化材の年代測定の結果は、^{14}Ｃ年代が9650±30～9535±30^{14}ＣBP、２σ暦年代範囲が9238～8759calBCの内に収まり、早期前葉に相当する。

遺跡名	所在地	煙道付炉穴数
中野山遺跡	四日市市北山町	174基
東庄内Ａ遺跡	鈴鹿市東庄内町・亀山市川崎町	２基
大鼻遺跡	亀山市太岡寺町	16基
西出遺跡	津市美里町	３基
鴻ノ木遺跡	松阪市射和町・中万町	21基
コドノＢ遺跡	多気郡明和町上村	３基
坂倉遺跡	多気郡多気町東池上	19基
野添大辻遺跡	度会郡大紀町野添	11基

第30表　煙道付炉穴出土遺跡一覧表



第71図　早期の主要遺構全体図（1：800）

集石炉　西調査区で２基を検出した。共に煙道付炉穴と重複しており、新旧関係は煙道付炉穴より新しい。平面形は略円形をしており、残存深は0.16～0.18mを測るが、復元深は煙道付炉穴と同等の0.6～0.7m程度であったと推定する。

埋土中に焼石や炭化物が含まれていたことで、壁面や底面に被熱が認められないが、「集石炉」とした。一般に「集石炉」には底面に石組を配する類もあるが、本遺構はそれに該当しない。しかし、焼石や炭化物が認められたことから、何らかの調理施設であった可能性はある。

出土した炭化材の年代測定の結果は、^{14}C年代および２σ暦年代範囲は、煙道付炉穴と同じ範囲に収まり、早期前葉に相当する。

２　縄文時代中期

（１）遺物

土器　中期中葉や後期初頭の例も数点認められたが、圧倒的多数は中期後葉に属する。そのほとんどが、遺構から出土した。東調査区では古相のものの割合が高く、西調査区では新相のものの割合が高い傾向にある。深鉢が大半で、このほかに台付深鉢や浅鉢、壺が寡少ある。完形は無く、小片のみである。

中期後葉でも古い時期（１～３期）では、地方色が弱くて量も少ない。一方、より新しい時期（４期新～５期新）になるほど地方色が強くなり、出土量も多くなる傾向を示す。

具体的には、北（美濃地域）と西（畿内・瀬戸内地域）の地域と類似するものが見られる。２・３期の中でも特に立体装飾系のものは、美濃地域の塚原遺跡[②]や戸入村平遺跡[③]の東の地域の土器と類似し、独自性は見出しがたい。それに対し、４・５期は大波状口縁の深鉢など、西の地域（北白川Ｃ式Ｃ類）と類似するものもあるが全ては一致せず、似て非なるものである。つまり当地の独自性が強まる傾向にあるといえよう。また、西からの影響も北経由であったと見られる[④]。

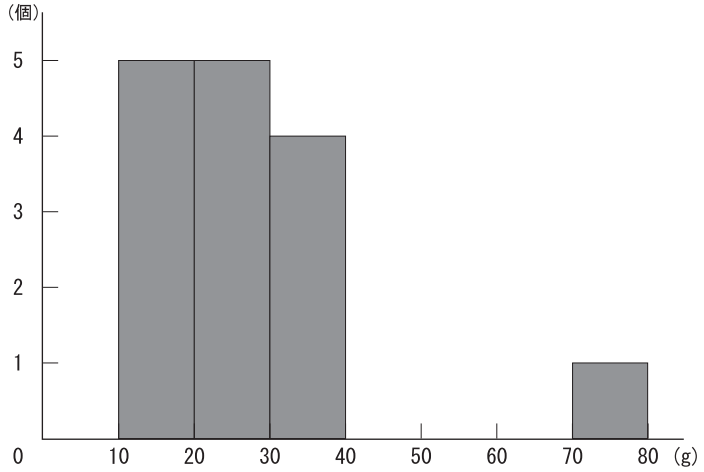
石器　出土した石器は、厳密には早期か中期かを特定できない。しかし、当遺跡から出土した土器のほとんどが中期であるため、石器についてもその多くは中期であると推定した。

礫石器（台石・石皿・磨石・敲石・礫器・切目石錘等）は、遺跡周辺で採取できる石材（花崗岩・流紋岩・砂岩・ホルンフェルス・閃緑岩）である。一方、剥片石器（石鏃・石錐・削器等）は、サヌカイトや下呂石・黒曜石などという、他地域の石材を使用している。

各遺構埋土の篩掛けにより、多量の剥片や砕片を検出した。石材の割合は、サヌカイトが大半を占め、次にチャート・下呂石・黒曜石の順に多い。また、拳大の大型剥片も検出したことから、他地域から石材を運び、当遺跡で石器の製作をしていたことが推定される。

器種組成としては、狩猟具と食物加工具・漁労具・工具がある。中でも、狩猟具の石鏃が78点と多い。

また、漁労具と考えられる切目石錘は18点を数え、



第72図　切目石錘の重量（残存度の高いもののみ対象とした）

10～40ｇのものが大半で、70～80ｇのものも認められた（第72図）。

一方、植物加工具の台石や石皿・敲石・磨石は、竪穴住居の棟数に対しては少ない感がある。しかし、消耗度や同時の使用数、あるいは他の素材なども考慮する必要があろう。すると、植物食と狩猟や漁労がバランス良く採用されていたと考えられる。

なお、石錘は切目のみで打ち欠きが認められない点や、打製石斧の少なさにも注目しておきたい。

（２）遺構

竪穴住居（第74図）　西調査区で８棟、東調査区で５棟、合計13棟を検出した。

４個の主柱穴だけの残存例と周溝や壁まで、さらには周溝外に建物に付随するような小穴が残存する例もある。これらは後世の削平による残存の違いに過ぎず、構造上の基本的な相違はないと考える。

周溝が形作る平面形は、一見したところ略隅丸方形をしている例が多い。しかし、よく観察してみると、周溝は部分的に直線的で辺を意識しているようにも感じられる。北勢地域の竪穴住居は中期に円形から隅丸方形に変化するとされる[5]が、当該遺構はその過渡期の形状であろうか。

一方、主柱が周溝に近いという特徴を持ち、その分だけ垂木先は周溝から遠かったはずである。さらに、周溝外には小穴がめぐっている例もある。全体的に何十cmかは削平されていることも考慮すると、これらの小穴は主柱からの距離が垂木先穴としては近過ぎることになり、垂木のような傾斜も認められない。したがって、これらの小穴は垂木先穴ではなく、側柱とも言うべき小柱穴であった可能性も考えられよう。

なお、屋内炉は、ＳＨ108に見られる石囲炉が一般的であったように思われ、石を配した痕跡と思われる窪みや、相当する大きさの石がＳＨ50やＳＨ84などで検出されている。

主柱を結んだ形は、正方形ではなく台形状をしており、柱間の最も狭い面（台形の上辺）の奥寄りに炉が位置する傾向にある。そのため、この反対側（台形の底辺）を出入口と推定した。

なお、この出入口と推定した周溝のほぼ中央には、ＳＨ50・ＳＨ106・ＳＨ107のように小穴や土坑を検出した例がある。これらは、踏み段の痕跡、階段や梯子を支える支柱や、出入口付近で見つかることの多い埋甕の抜き取り痕跡の可能性も考えられる[6]。

また、検出した13棟の出入口の方向は、東や南を向いており、北や西に向く例は１例もない。この原因は、日当たりや風向き、あるいは、雨水処理のために南東方向に延びる丘陵上に位置する地形の傾斜を考慮した事などが考えられようか。

竪穴住居の平面形や規模、柱穴や屋内炉の位置は、美濃地域の宮之脇遺跡[7]などの例と類似する。土器の地域色や掘立柱建物の伝播の問題などと共に、さらに類例を検証していく必要があろう。

また、平面規模は調査区によって規模の違う傾向が認められる（第31表）。主柱の平均的な柱間は、東調査区で概ね２ｍの後半から３ｍ程度、西調査区で概ね２ｍ弱から２ｍの前半である。

また、竪穴住居から出土した土器の型式は、両調査区ともに、中期後葉に属するが、東調査区の５棟は２～３期に、西調査区の８棟は４期古～５期古に属しており、東調査区の方が古い。

つまり、東調査区の竪穴住居は、西調査区より古くて柱間が広く、平面規模も大きく、新しくなると柱間が狭く、平面規模も小さくなる傾向にある。

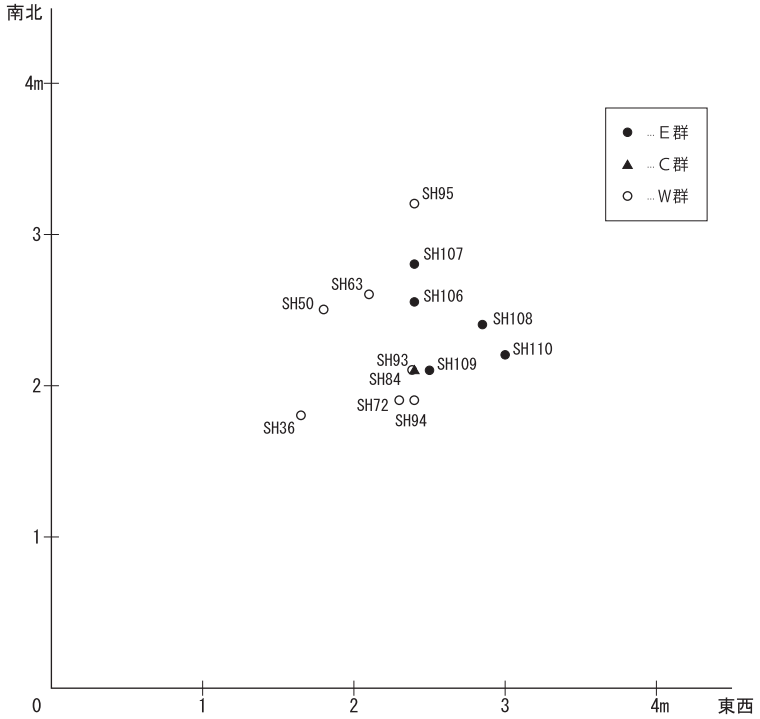
今後、主柱の柱間の広狭や平面規模の大小と時期の相関関係が、他の遺跡でも見られるのか、比較検討を要するものと思われる。

掘立柱建物（第74図）　西調査区で６棟を検出した。

柱穴は、平均して径約0.81ｍで、竪穴住居の柱穴（平均径約0.49ｍ）と比較して大きい。桁行の柱間は狭く、一方で梁行の柱間は広い１間であり、弥生時代以降の高床倉庫と基本的に同じ柱の配置である。また、柱穴の周辺に壁周溝や炉（焼土）はみられない。以上の点から、切妻の高床倉庫で、妻入りの可能性があると推定した。ただし、竪穴住居の総数が少ないことから、平地式住居である可能性も残る[8]。

ところで、６棟の棟方向は、等高線にほぼ沿う位置に立地し、梁間はほぼ同じであるが、桁行３間のものと桁行２間のものが、それぞれ３棟ずつ、棟方向を概ね東西にして、西調査区の北西部と南西部の２ヶ所にまとまりを見せている。

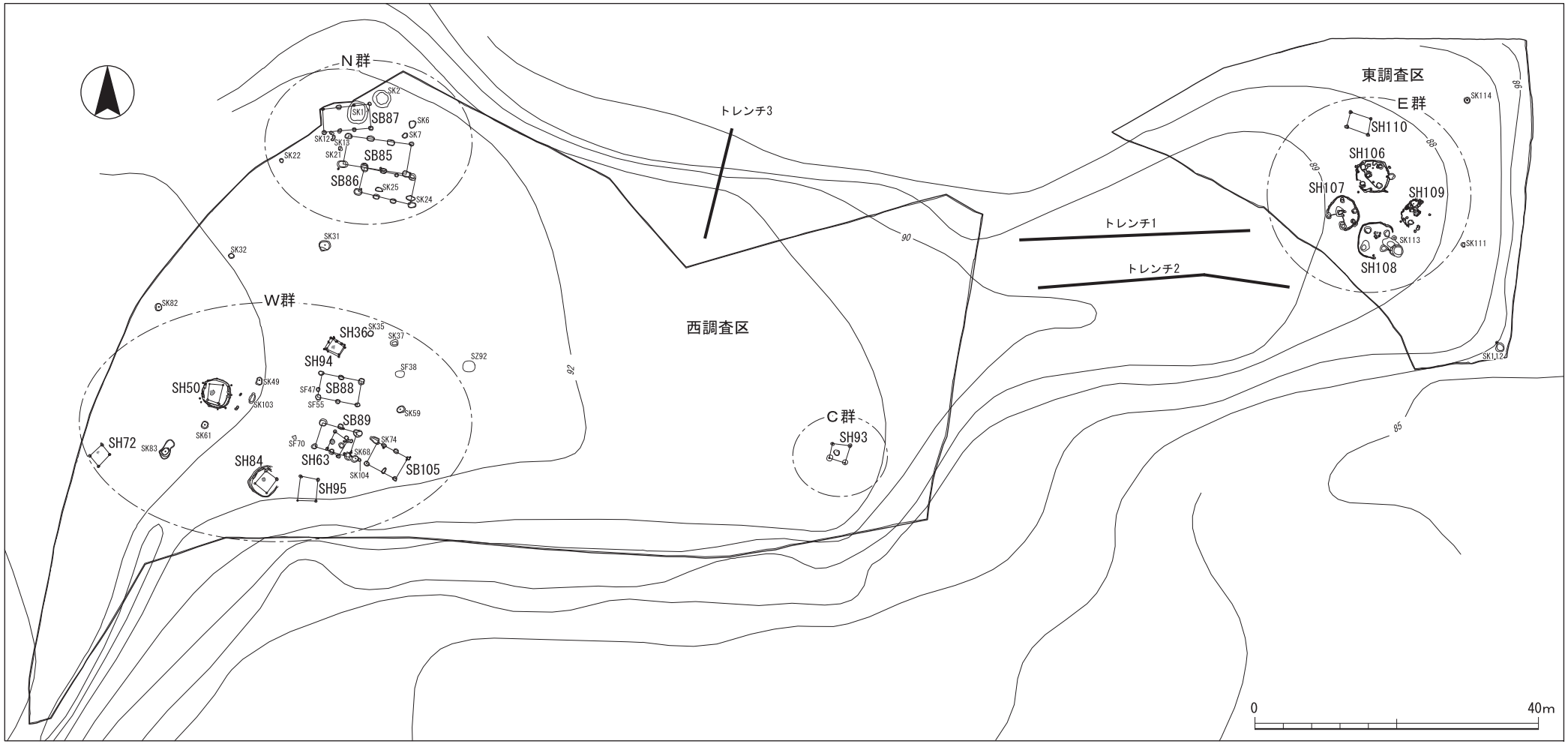
規模については、南西部の３棟よりも北西部の



第73図　竪穴住居の主柱の平均柱間

遺構番号	調査区	規模(m) 長径・短径	残存最大深 (m)	最大柱穴(m) 上：長径・短径 下：最大深	柱間(m)	周溝(m) 上：最大幅 下：最大深	その他
ＳＨ36	西調査区	不明	不明	0.34・0.3 0.27	北面2.37・南面2.37 東面1.52・西面1.8	不明	石囲炉？
ＳＨ50	西調査区	4.1m四方	0.26	0.57・0.38 0.48	北面1.9・南面1.7 東面2.7・西面2.3	0.8 0.16	建替 垂木穴 石囲炉
ＳＨ63	西調査区	不明	不明	0.6・0.55 0.48	北面2.2・南面２ 東面2.42・西面2.7	不明	石囲炉？
ＳＨ72	西調査区	不明	不明	0.52・0.38 0.3	北面2.4・南面2.28 東面1.76・西面1.88	不明	石囲炉？
ＳＨ84	西調査区	4.2・3.9	0.45	0.7・0.55 0.42	北面２・南面2.14 東面2.4・西面2.35	0.24 0.18	石囲炉？
ＳＨ93	西調査区	不明	不明	0.82・0.78 0.53	北面2.57・南面2.34 東面2.49・西面2.08	不明	石囲炉？
ＳＨ94	西調査区	不明	不明	0.38・0.28 0.23	北面1.84・南面1.88 東面1.58・西面1.88	不明	石囲炉？
ＳＨ95	西調査区	不明	不明	0.53・0.38 0.39	北面2.02・南面2.54 東面3.04・西面3.48	不明	不明
ＳＨ106	東調査区	5.55・4.1	0.19	0.66・0.5 0.22	北面２・南面1.9 東面2.2・西面1.96	0.06	石囲炉？
ＳＨ107	東調査区	4.6・４以上	0.52	0.86・0.6 0.5	北面2.2・南面２ 東面2.42・西面2.7	0.07	石囲炉？
ＳＨ108	東調査区	5・4.6以上	0.09	1.26・0.9 0.28	北面2.2・南面2.3 東面1.76・西面２	0.06	石囲炉
ＳＨ109	東調査区	不明	不明	0.45・0.42 0.34	北面2.06・南面2.22 東面2.6・西面2.4	0.02	石囲炉？
ＳＨ110	東調査区	不明	不明	0.59・0.51 0.38	北面3.07・南面3.31 東面2.26・西面2.1	不明	不明

第31表　竪穴住居一覧表



第74図　中期の主要遺構全体図（1：800）

３棟の方が大きいため、高床倉庫とするなら収蔵する能力は高いと思われる。

そして、北西部の３棟は、それぞれ近接して、一部は重複しており、同時存在は考え難く、建て替え、もしくは時期差があるものと思われる。

県内での縄文時代中期の掘立柱建物の検出例には、四日市市の小牧南遺跡[9]がある。ともに中期後葉に属している。鈴山遺跡の掘立柱建物は、中期後葉の２・３期頃にはなく、４・５期頃に出現すると推定され、小牧南遺跡と同時期ないしは古い可能性がある。当例よりも先行する例は現時点では未確認であるため、当地域の掘立柱建物の出現期の様相を知る好例となった。

なお、掘立柱建物の類例として、岐阜県の塚原遺跡[10]があげられる。また、出土土器の中には、美濃地域との類似性を窺わせるものもあるため、北方からの影響を受けた可能性も考えられる。今後、類例の増加を待ち、県内の掘立柱建物の出現について、検討を加えていきたい。

陥穴　西調査区で７基、東調査区で２基を検出した。平面形は概ね楕円形で、底面中央に径0.2m程の杭穴と思われる小穴１基を有するものが７基ある。陥穴から、中期後葉の一定時期の土器を検出しているため、当時期のものであると判断した。

７基の陥穴は、いずれも単独であり、等高線に沿って並ぶものではない。したがって、追込猟ではなく、獣道に設置した罠猟であったと推定する[11]。

また、陥穴の場所は、竪穴住居と近接する例もあるが、陥穴は、非居住域に設置された可能性が高いと考えられる[12]ため、竪穴住居とは同時存在でなく、時期差があったと考えられる。

群構成　最後に、中期の遺構が所在する位置や、存続の時期などについて、まとめてみることにする。

東西両調査区を合わせて、竪穴住居13棟と掘立柱建物６棟を検出したが、均一な分布ではなく、偏在する傾向が窺える。具体的に、まとまり（群）を見せるのは、大きく４つのエリアである。南西部を「W群」・北西部を「N群」・東部を「E群」・中央部は単独だが「C群」と呼んでおく（第74図）。

W群　竪穴住居７棟と掘立柱建物３棟がまとまりを見せる。竪穴住居は近接もしくは、重複するものがあり、掘立柱建物には重複はないが、やや近接している。また、竪穴住居と掘立柱建物が重複しているものもある。出土土器の多くは、３土器型式（４期新～５期新）に及んでいる。

したがって、竪穴住居２棟程度と、掘立柱建物１棟が、一つの単位（セット）として、３時期程度に居住した累積結果と考えられないだろうか。ただし、遺構は土器型式より存続期間が短かったであろうことから、３時期の居住は断続的であったと推定する。

N群　掘立柱建物３棟が、まとまりを見せる。この３棟の桁行は全て３間であり、W群の３棟が全て２間であることとは対照的である。梁間はほぼ同規模であることから建物規模も大きい。また、この３棟は一部に重複がみられ、１・２棟が２～３時期にわたって存在したと推定する。出土土器は３土器型式（４期新～５期新）であり、その内４期新～５期古が多く見られる。したがって掘立柱建物は３時期にわたって存在した累積結果であると推定する。ただし、やはり遺構は土器型式より存続期間が短かったであろうから、ここでも３時期の存在は断続的だったと考えられる。

なお、このN群西側の調査区外に竪穴住居が存在している可能性もあるが、調査区内では確認されず、W群のような竪穴住居と掘立柱建物の単位（セット）は、不明である。

ただし、仮に、竪穴住居が周囲に存在していないとした場合、W群の掘立柱建物との規模の相違や数の一致などから判断して、W群の単位と想定した竪穴住居２棟程度と掘立柱建物１棟の単位（セット）に、このN群の掘立柱建物が、個々に組み合わさる可能性も考えられようか。

E群　竪穴住居５棟がまとまりを見せており、掘立柱建物は確認されていない。竪穴住居の５棟の内、近接しているものもあり、すべての同時存在は考えにくい。また、出土土器は２～３期のものの割合が、他の群よりも多く、前後のものも見られる。

したがって、ここでも１・２棟程が３時期程にわたり居住した累積結果と考える。ただし、やはり遺構は土器型式より存続期間が短かったであろうことから、３時期の居住は断続的であったと考える。

Ｃ群　竪穴住居１棟だけが存在している。西側はW群方向へと平坦であり、東側へは緩やかに傾斜して下っている。後世の削平などによる、遺構の未検出も考えられなくもないが、他に竪穴住居や掘立柱建物もない。

まとめ　以上、４つの群を見てきた。群によっては、竪穴住居と掘立柱建物が単位（セット）となり、または、掘立柱建物や竪穴住居だけが、概ね２～３時期の変遷をたどりながら、断続的に集落が営まれてきた様相が、浮かび上がってきたものと思われる。

今回の発掘調査区は、周知の埋蔵文化財包蔵地範囲の大半、約８～９割がその対象となった。言い換えれば、ほぼ、遺跡の全体を調査したことになる。

埋蔵文化財包蔵地範囲外の西側については、地形の大きな変換点もないため、遺構の更なる広がりも想定されるが、現時点では明言できない。

仮に、埋蔵文化財包蔵地範囲が、概ね正しいとすれば、前述の「群構成」から読み取れる、竪穴住居と掘立柱建物の単位（セット）などは、妥当であるかもしれない。

小結　鈴山遺跡の発掘調査で得られた縄文時代早期および中期の遺構や遺物の発見は、北勢地域における縄文時代の様相を知る上で貴重な手掛かりとなった。なかでも、早期の煙道付炉穴から、人々の生活がおよそ１万年前には始まっていたことを明らかにした。また、県内最古である掘立柱建物からは、その出現期の様相について考える好例となった。それらの調査成果は、北勢地域に限らず、県内や近接する地域の縄文時代の研究に影響を与えるとともに、郷土の歴史を塗り替える程の重要な遺跡であることも判明した。（中村）

【註】

①小濱学「炉穴とその機能」『縄文時代の考古学５　なりわい　食糧生産の技術』（同成社　2007年）

②関市教育委員会『塚原遺跡・塚原古墳群』（1989年）

③財団法人岐阜県文化財保護センター『岐阜県文化財保護センター調査報告書　第11集　徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集　戸入村平遺跡』（1994年）

④髙橋健太郎氏のご教示による。

⑤田村陽一「縄文時代住居について」『三重県史　資料編考古１』（三重県　2005年）

⑥石井寛氏のご教示による。

⑦可児市教育委員会「宮之脇遺跡Ａ地点」「宮之脇遺跡Ｂ地点」『川合遺跡群』（1994年）

⑧前掲註⑥に同じ

⑨三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（2014年）

⑩前掲註②に同じ

⑪大泰時統「北日本の陥し穴」『縄文時代の考古学５　なりわい　食糧生産の技術』（同成社　2007年）

⑫前掲註⑪に同じ

【参考文献】

・石井寛「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録第６冊』（港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1989年）

・石井寛「縄文時代掘立柱建物址に関する諸議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第６集』（帝京大学山梨文化財研究所　1995年）

・石田由紀子「三重県内の中期末土器について」『東海縄文研究会 第13回研究会 三重県における縄文時代中期末 発表資料集』（東海縄文研究会　2017年）

・小畑弘己「縄文時代の環境変動と植物利用戦略」『考古学研究　第63巻第３号』（考古学研究会　2016年）

・小林達雄「多摩ニュータウンの先住者」『月刊文化財１月号』（文化庁文化財保護部監修　1973年）

・中村法道「三重県の縄文時代掘立柱建物について」『東海縄文研究会 第13回研究会 三重県における縄文時代中期末 発表資料集』（東海縄文研究会　2017年）

・林謙作「縄文期の集団領域－仙台湾岸を中心とした予察－」『考古学研究　第20巻第４号』（考古学研究会　1974年）

・堀越正行「小竪穴考」（一）～（四）『史館　５号・６号・８号・９号』（1975～1979年）

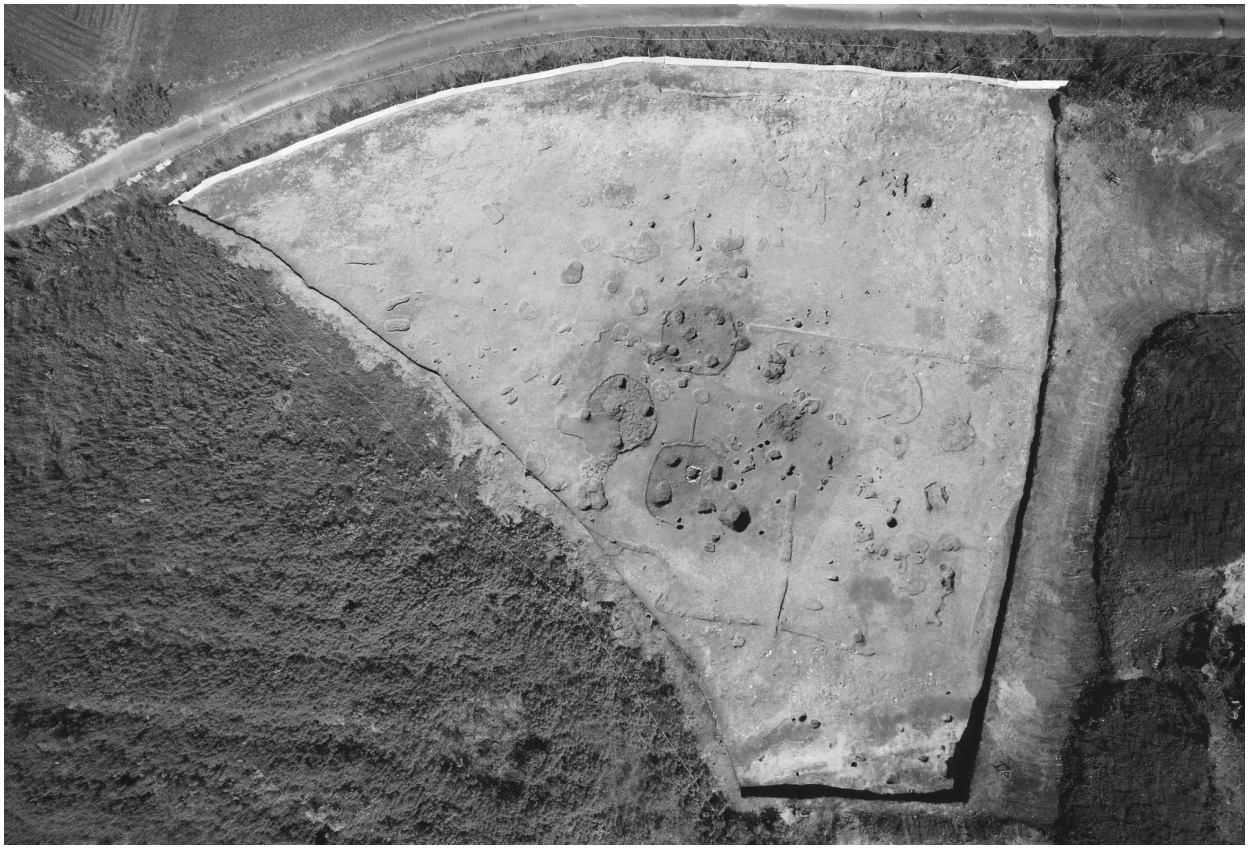
・山田猛「煙道付炉穴について」『第10回 東海縄文研究会 東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』（東海縄文研究会　2014年）

写　真　図　版

西調査区遠景（北から）

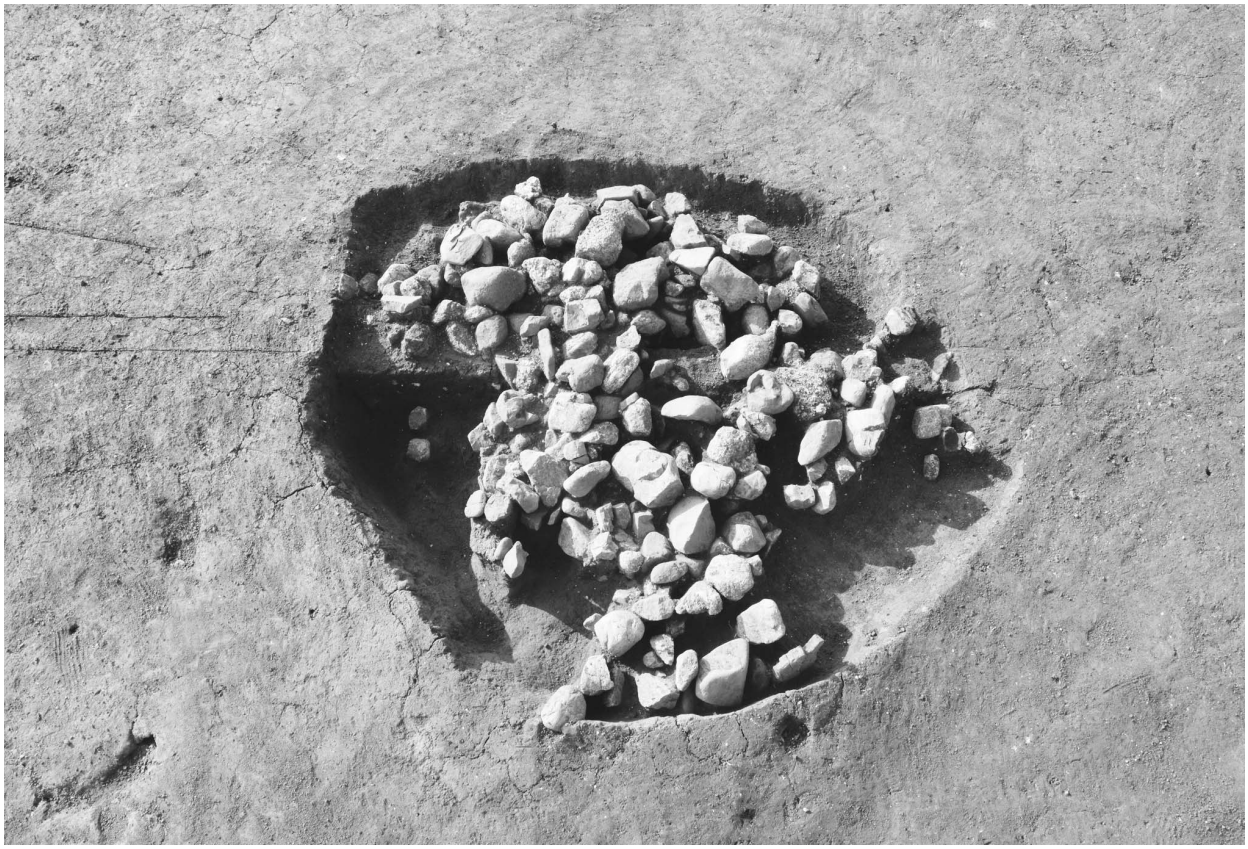
写真図版１

西調査区完掘状況（真上から）



東調査区完掘状況（真上から）

ＳＦ51礫出土状況（東から）



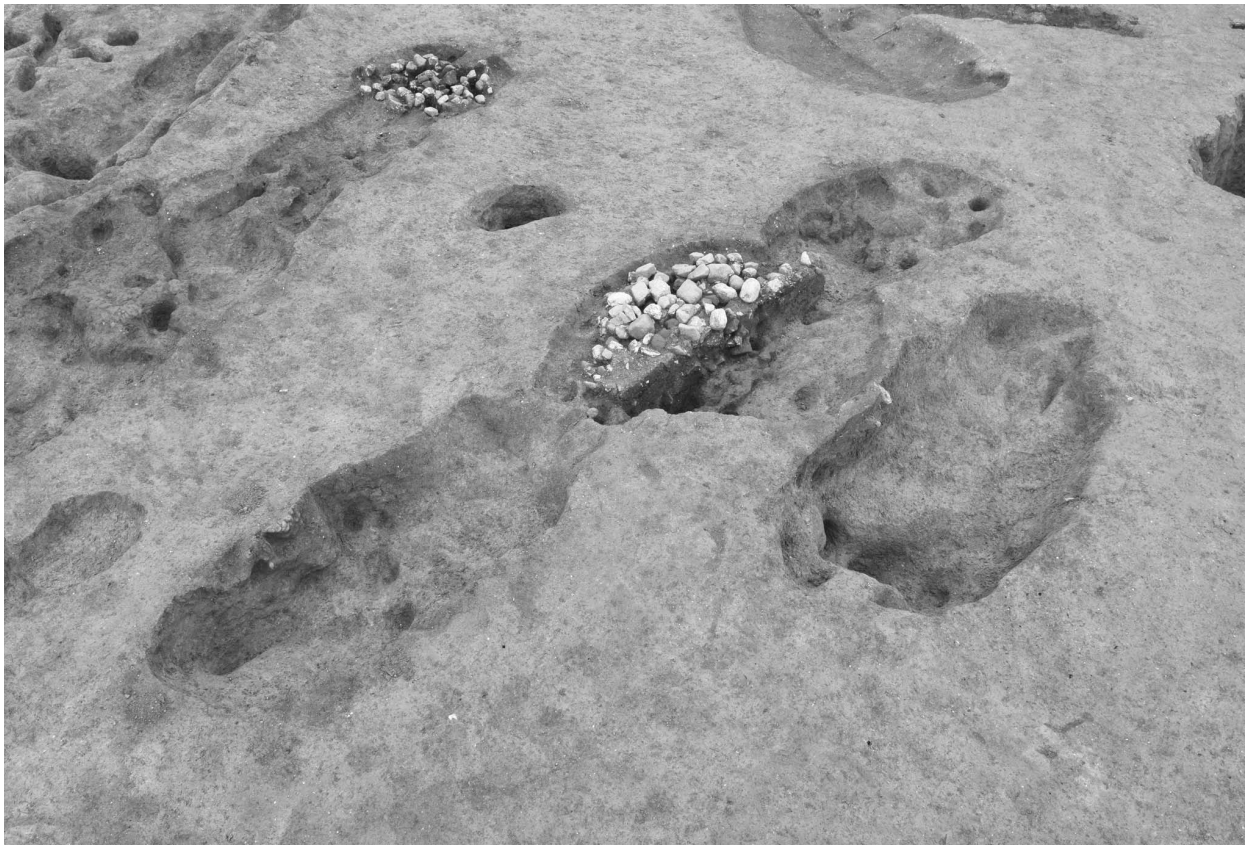
ＳＦ53礫出土状況（東から）

写真図版３

ＳＦ51・96・97・98完掘状況（南東から）

ＳＦ60完掘状況（北西から）

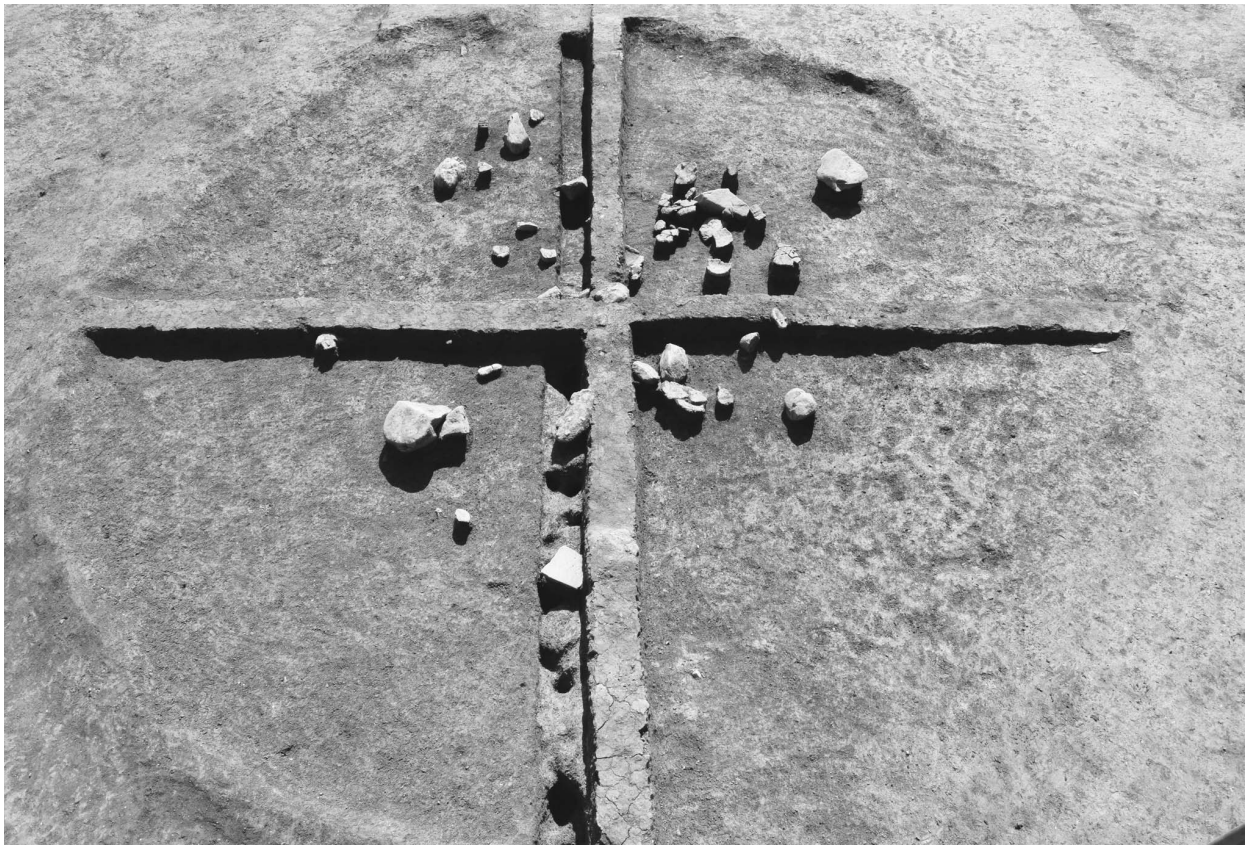
ＳＦ52・53・54・99完掘状況（北西から）



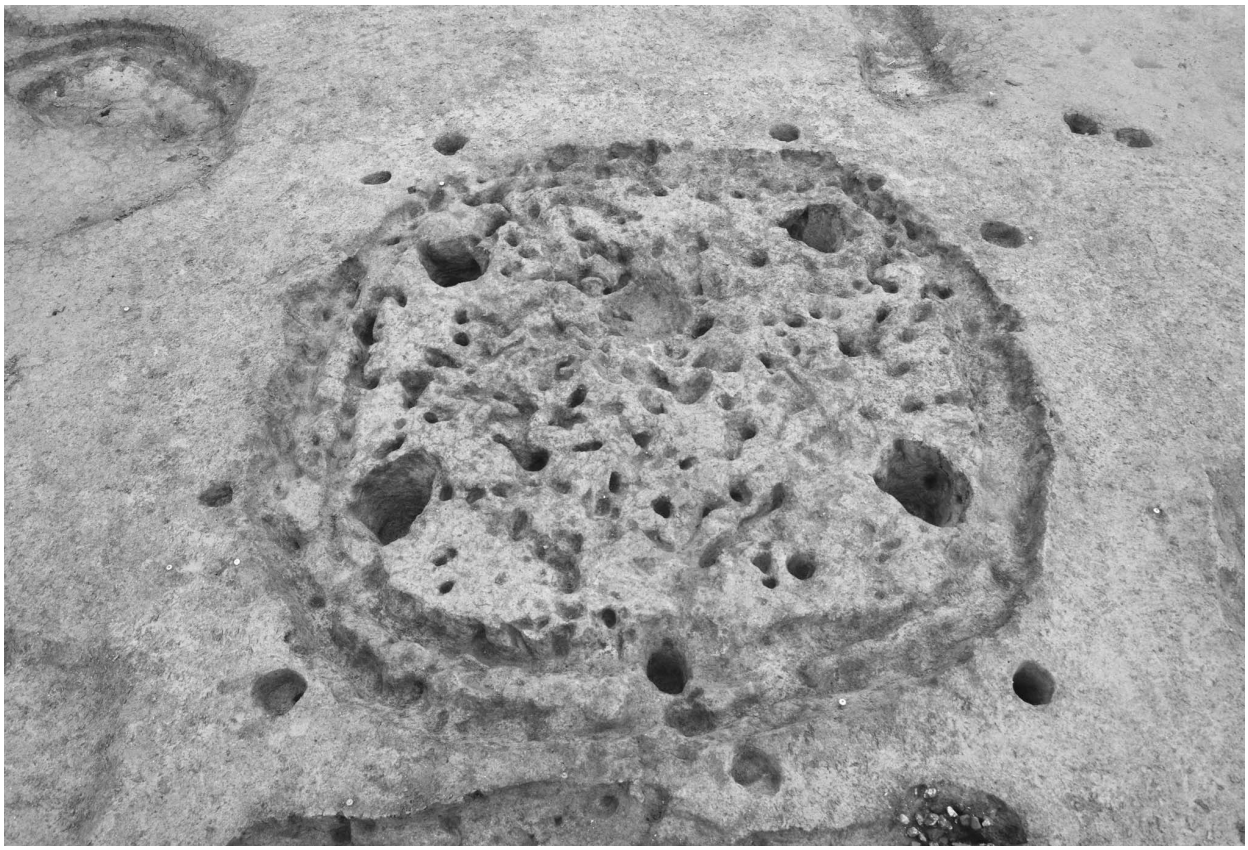
ＳＦ52・54完掘状況・ＳＦ53・99半裁状況（南西から）

写真図版５

ＳＨ36・94完掘状況（南東から）



ＳＨ50遺物出土状況（北から）

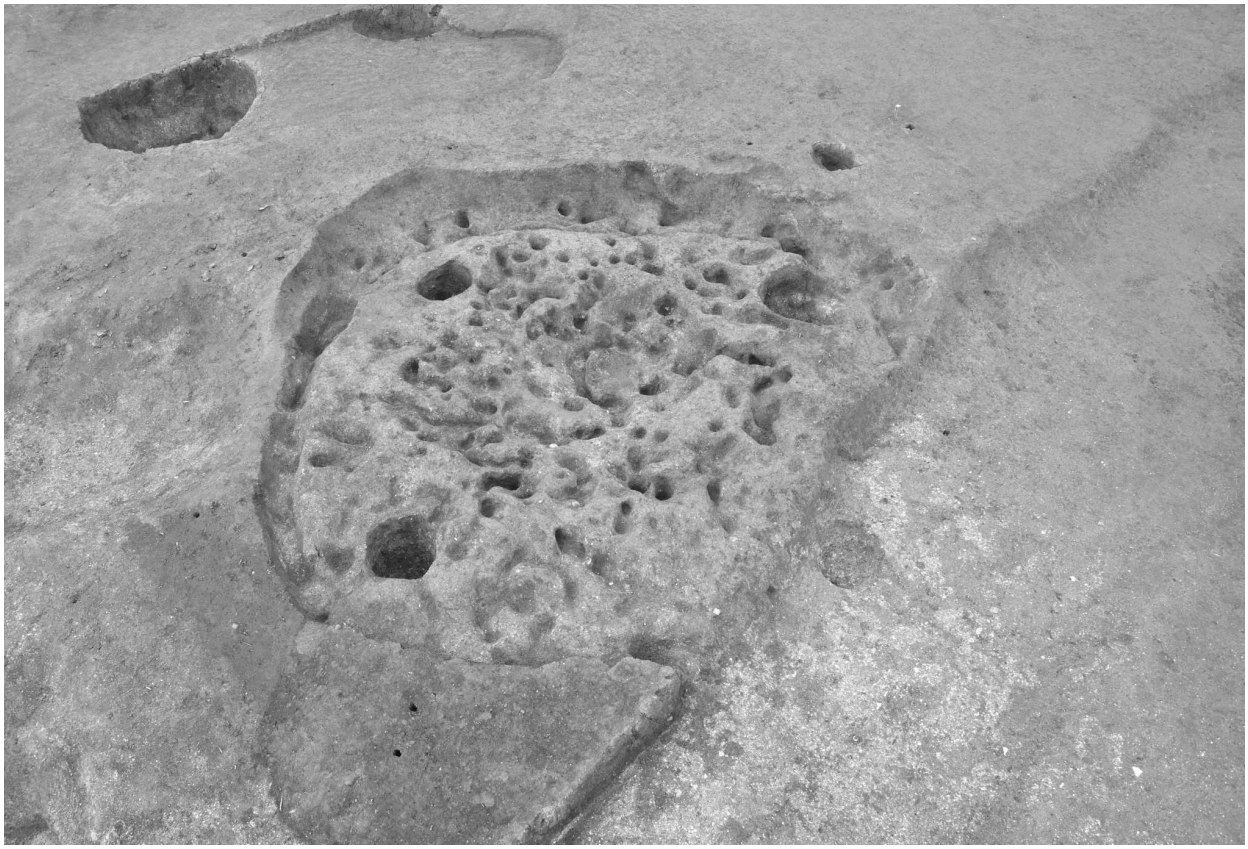


ＳＨ50完掘状況（東から）

ＳＨ72完掘状況（東から）

写真図版７

ＳＨ84遺物出土状況（北から）



ＳＨ84完掘状況（南東から）

ＳＨ93完掘状況（東から）

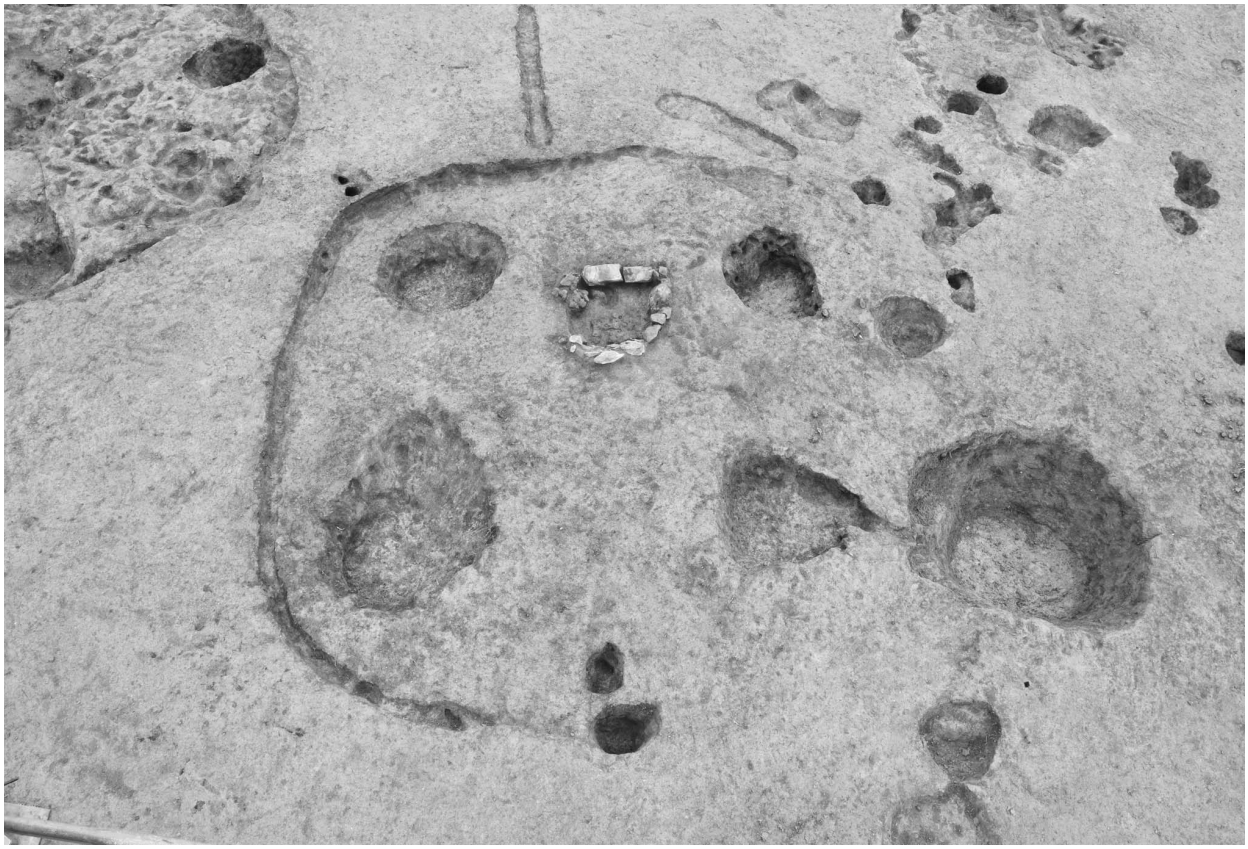
ＳＨ95完掘状況（東から）

写真図版９

ＳＨ106完掘状況（東から）

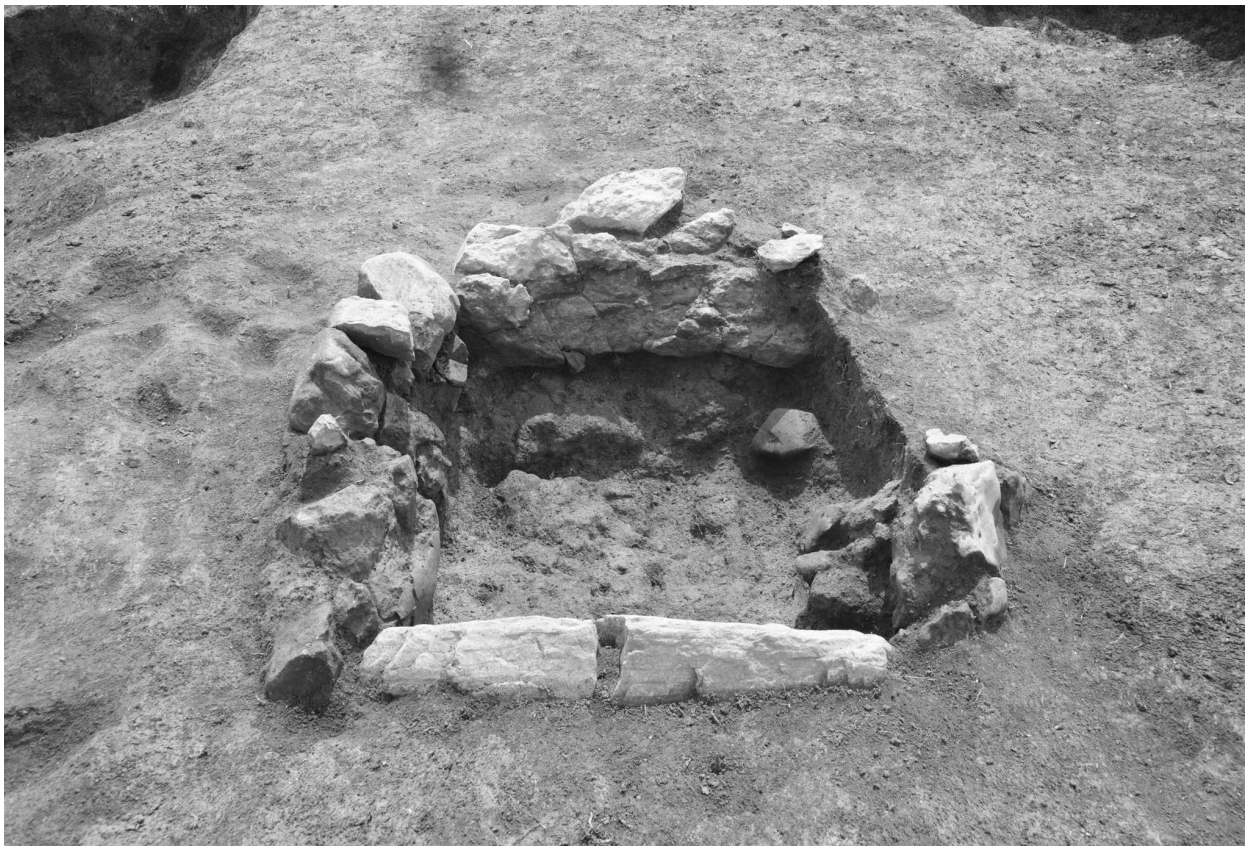
ＳＨ107礫出土状況（南西から）

ＳＨ107完掘状況（南西から）

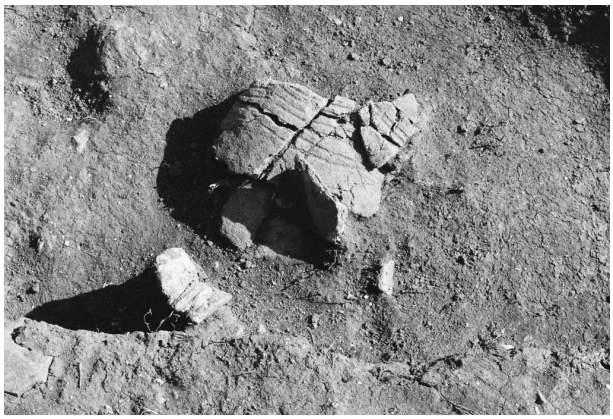


ＳＨ108完掘状況（南から）

写真図版11



ＳＨ108石囲炉完掘状況（北から）

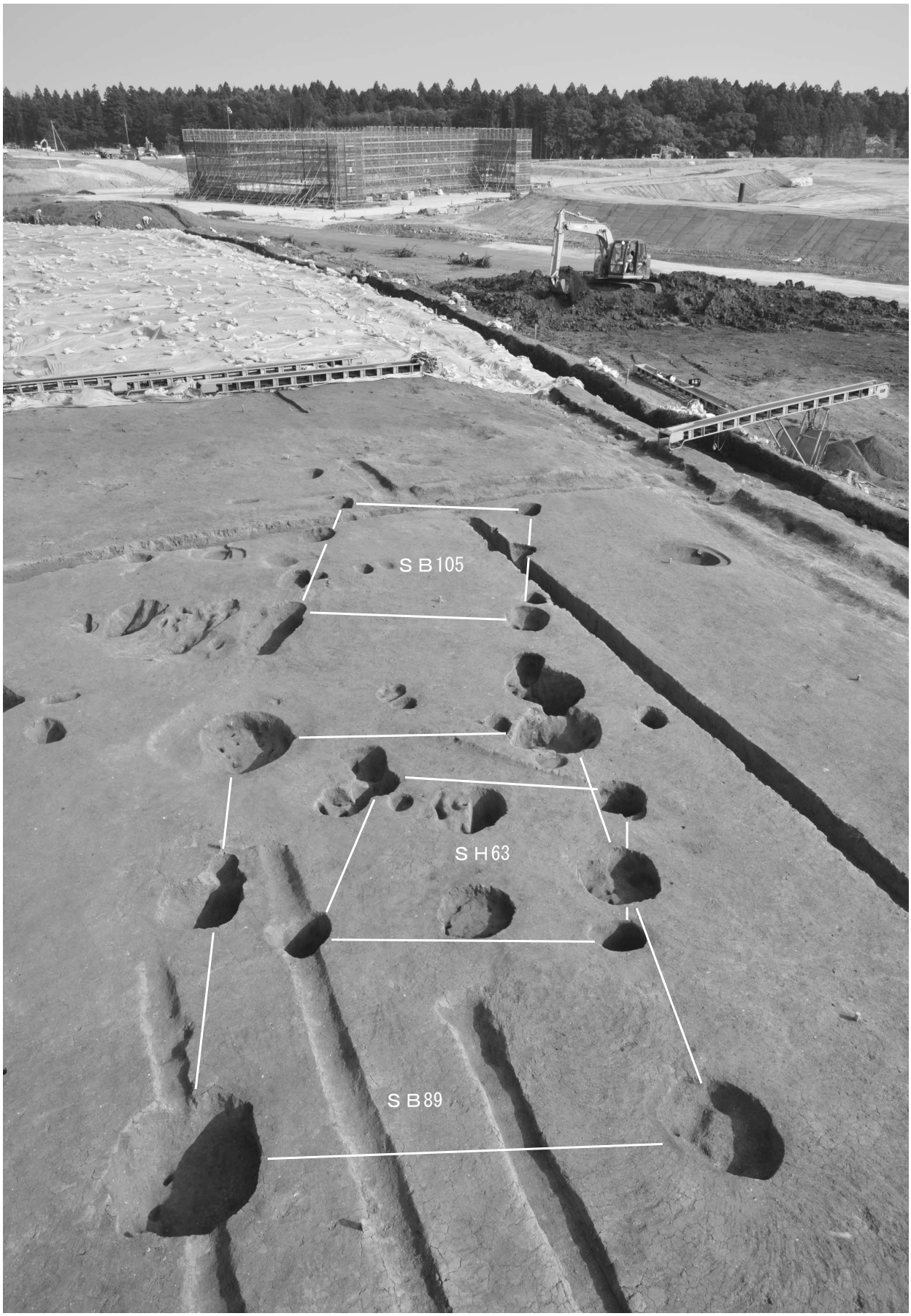


ＳＨ106遺物出土状況（北から）

ＳＺ92遺物出土状況（東から）

ＳＨ106炉周辺遺物出土状況（南西から）

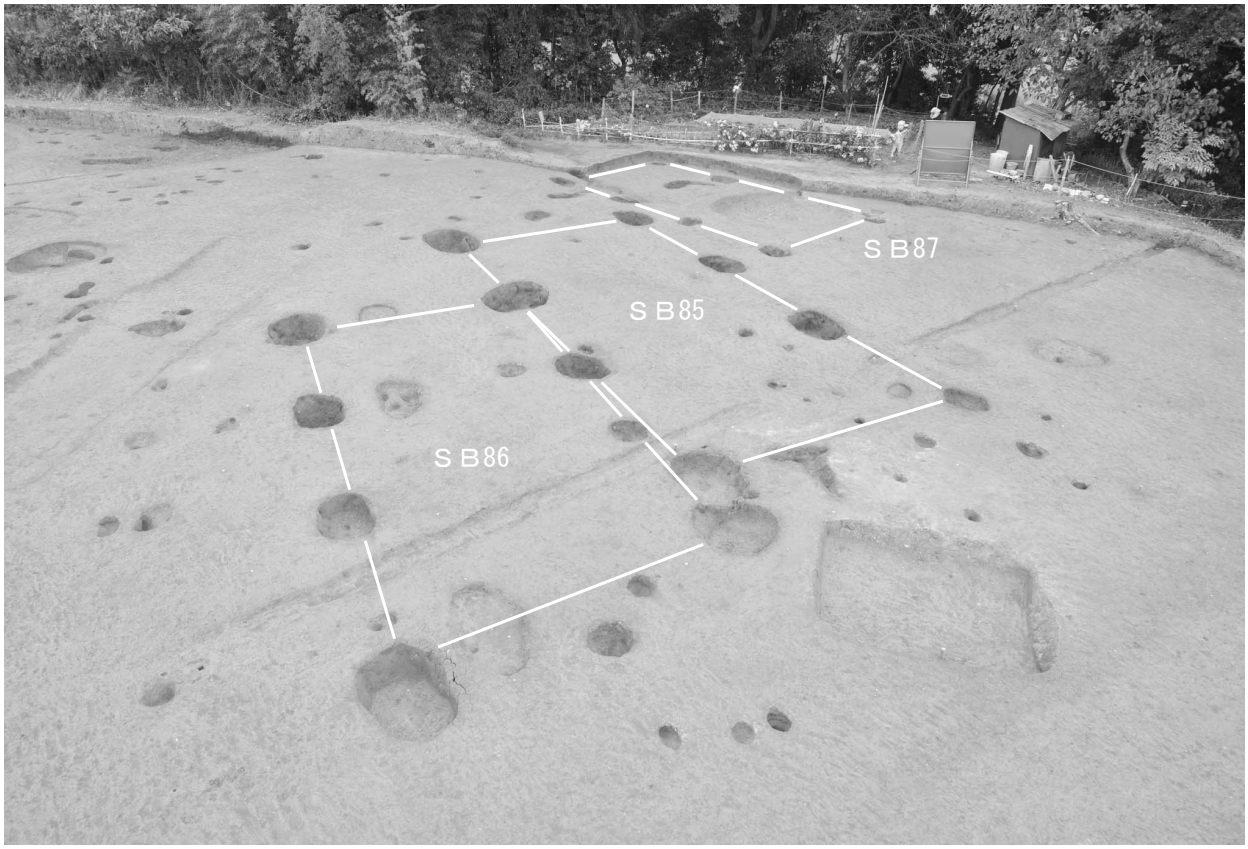
ＳＨ108石囲炉掘削状況（南西から）



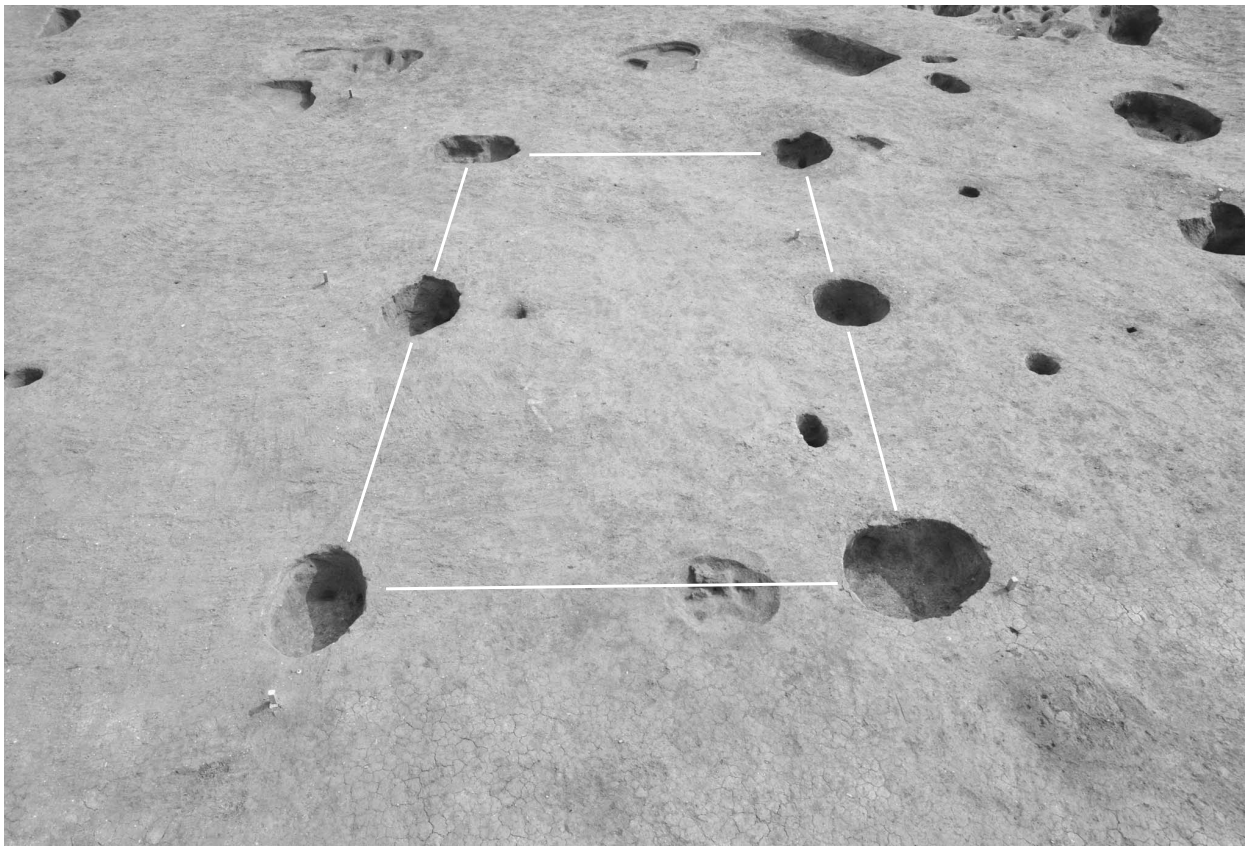
ＳＢ89・105・ＳＨ63完掘状況（西から）

写真図版13

ＳＢ87完掘状況（東から）



ＳＢ85・86・87完掘状況（南東から）



ＳＢ88完掘状況（西から）

ＳＢ85・86柱穴（ＳＫ18）礫出土状況（南から）

ＳＢ85柱穴（ＳＫ20）遺物出土状況（南東から）

ＳＢ89柱穴（ＳＫ56）柱痕跡完掘状況（南から）

ＳＢ89柱穴（ＳＫ69）遺物出土状況（北から）

写真図版15

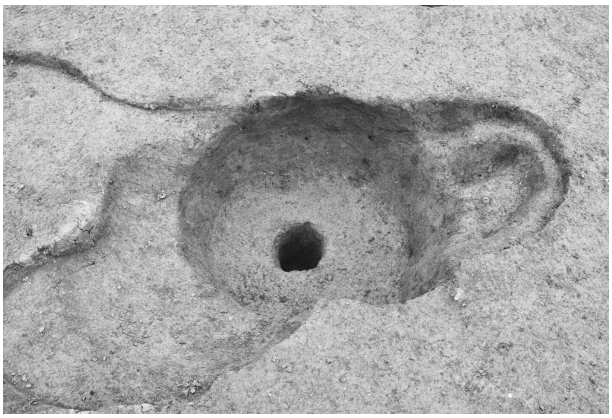
ＳＫ１礫出土状況（東から）

ＳＫ２完掘状況（南東から）

ＳＫ31完掘状況（南から）

ＳＫ68完掘状況（南から）

ＳＫ49完掘状況（東から）



ＳＫ82完掘状況（西から）

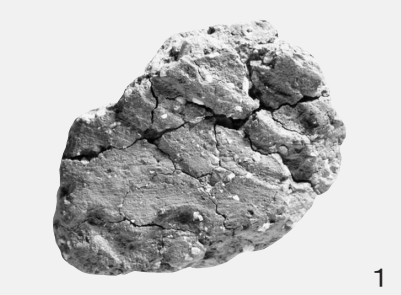
ＳＫ59完掘状況（南東から）

ＳＫ83完掘状況（南東から）

ＳＫ61完掘状況（北西から）

ＳＫ113完掘状況（北東から）

写真図版17


1

2

3

4

5

6

7

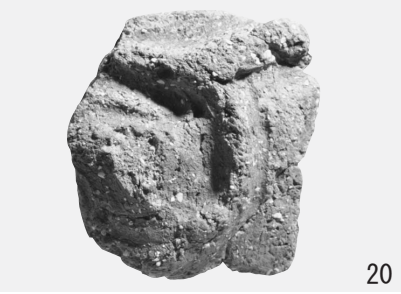
8

9

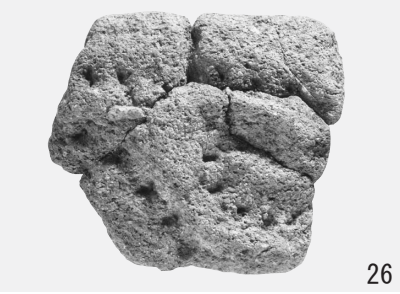
11

12

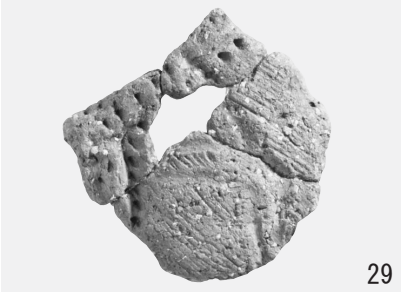
18

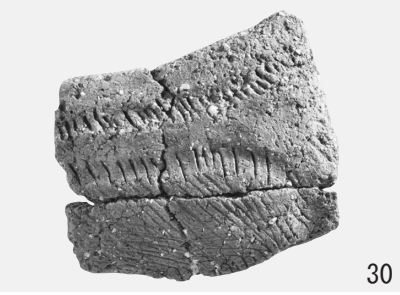

20

24


26

27


29


30

出土遺物（１）

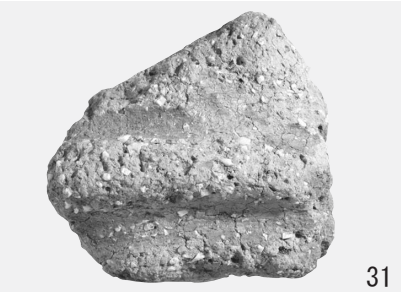
28

28

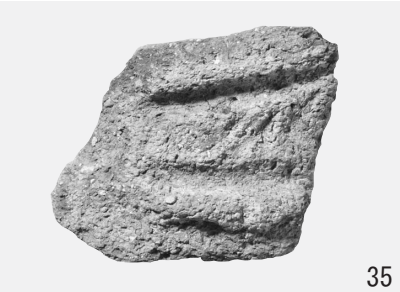
28

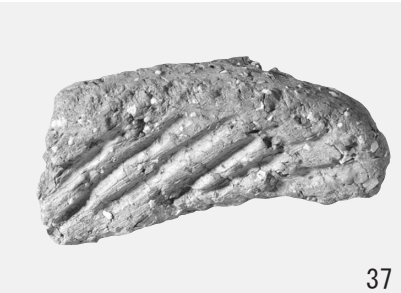
28

28


31

32


35


37

38

39

40

41

42

出土遺物（２）

写真図版19

43

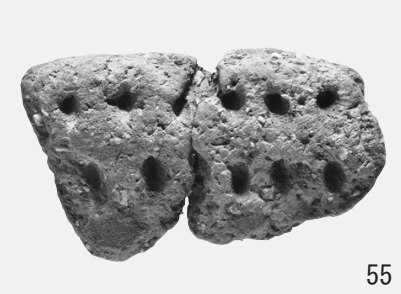
44

45

46

48

49


55

57

59

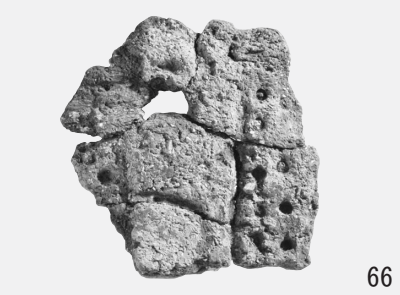
60

61

62

63

65


66

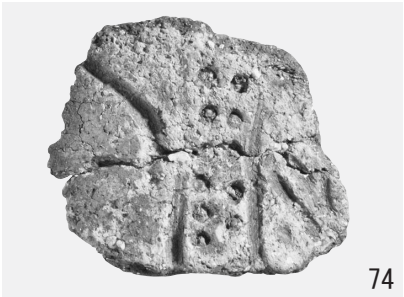
67

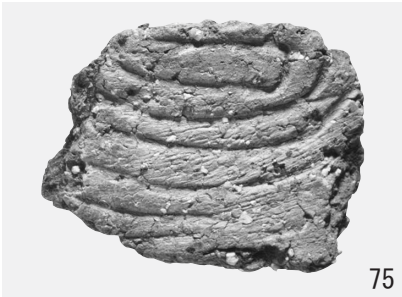
69

70

出土遺物（３）

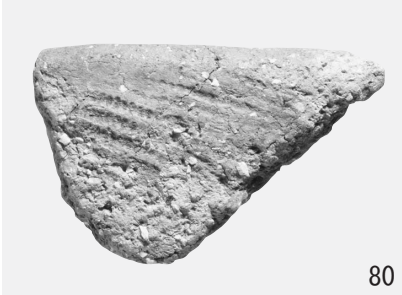
72


74


75

76

79


80

82

83

86

84

85

87

90

92

93

出土遺物（４）

写真図版21

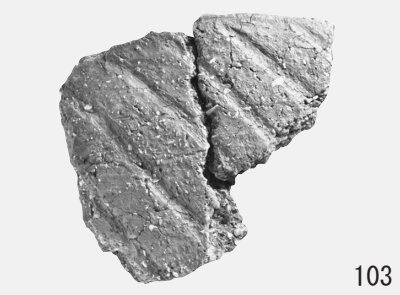
94

95

98

100

101


103

104

105

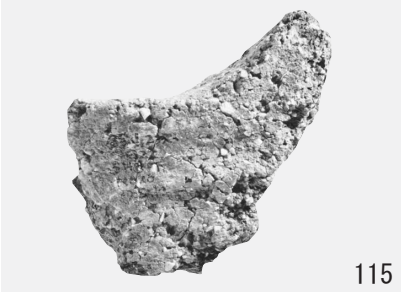
107

108

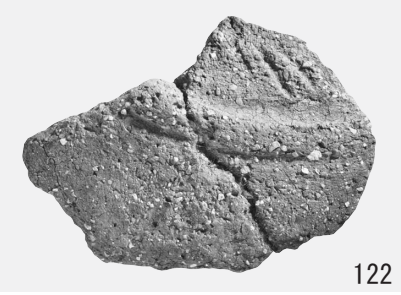
110

111

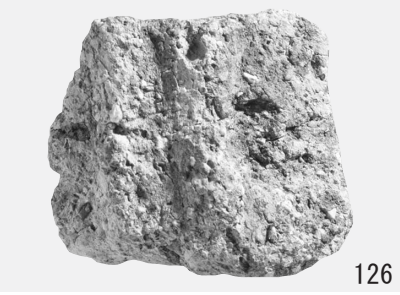
114


115

120


122

123


126

出土遺物（５）

127

128

130

134

136

138

139

140

141

144

146

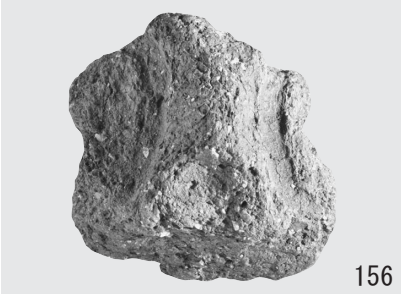
147

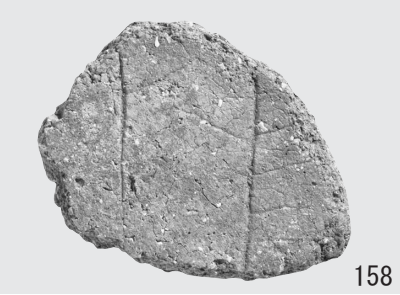
149

150

151

153


156


158

出土遺物（６）

写真図版23

159

160

163

164

165

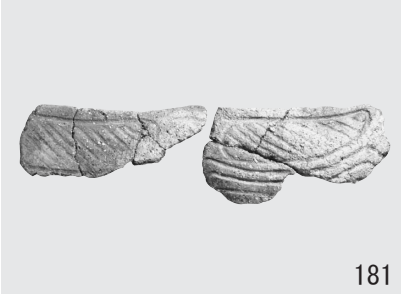
166

172

176

178

179

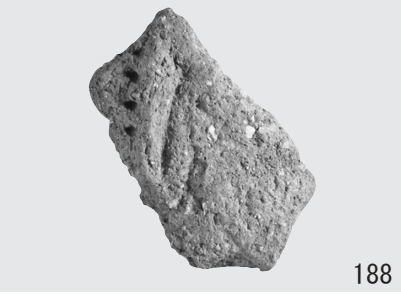

181

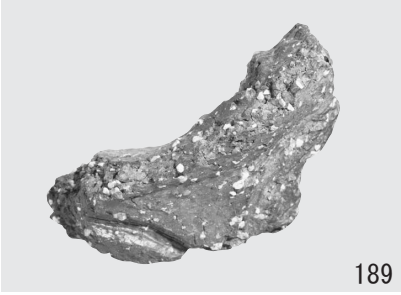
182

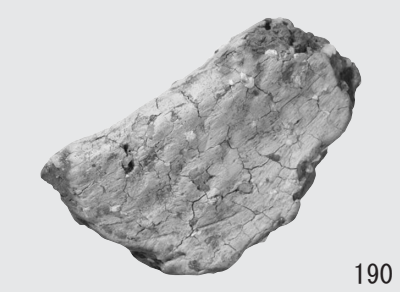
183

186

187


188


189


190

出土遺物（７）

191

194

197

201

203

204

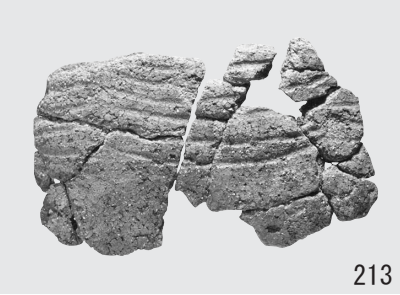
205

208

209

211

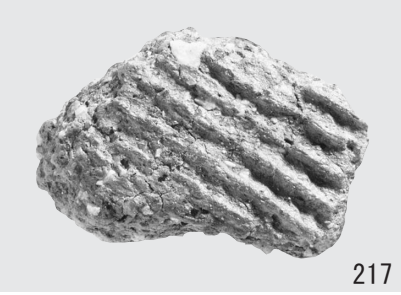
212


213

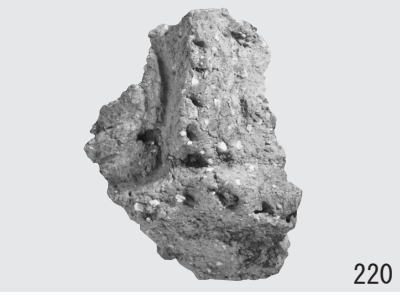
214

215

216

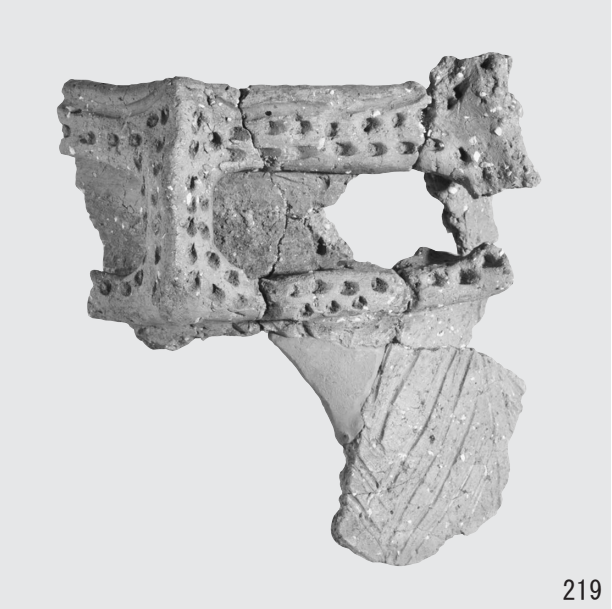

217

218


220

出土遺物（８）

写真図版25


219

219

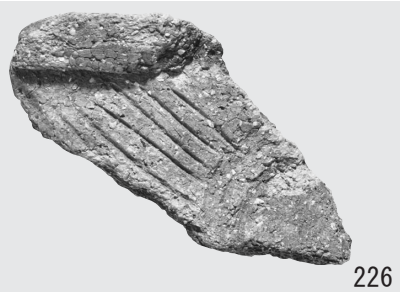
221

222

223

224

225


226

227

229

231

232

233

234

出土遺物（９）

235

239

240

241

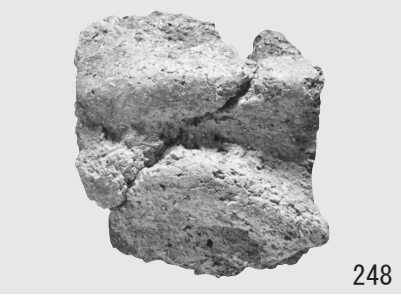
242

243

244

246

247


248

249

250

251

252

253

254

255

257

写真図版27

258

259

260

261

262

264

263

263

266

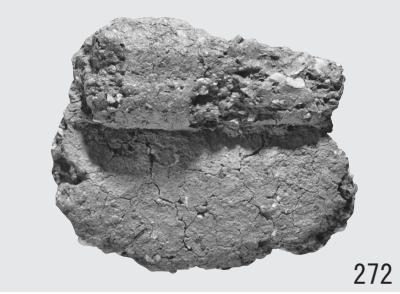
267

268

269

270

271


272

273

274

276

277

279

280

281

282

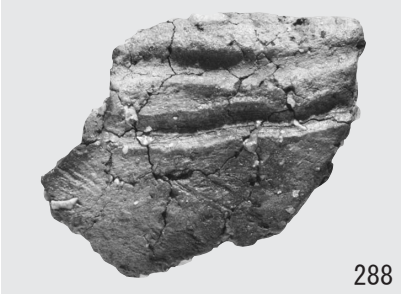
283

284

285

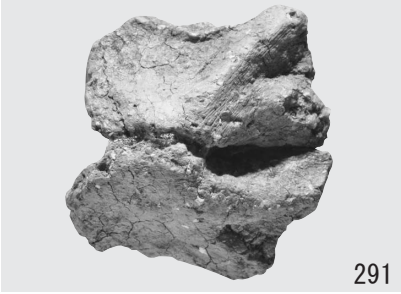
286

287


288

289

290


291

292

293

294

295

写真図版29

296

297

298

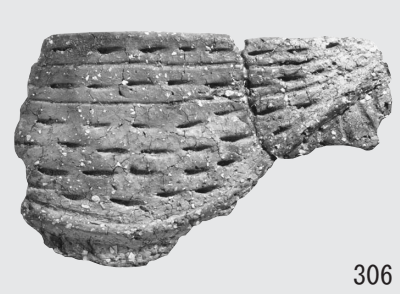
300

302

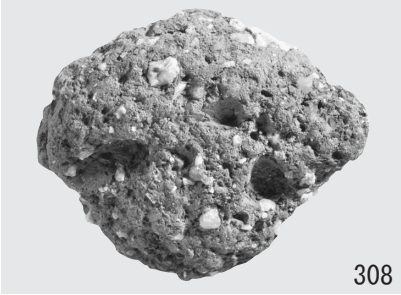
303

304

305


306

307


308

309

311

312

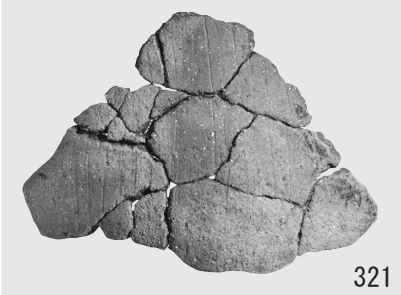
313

314

315

317

320


321

322

323

324

325

326

328

329

331

332

333

334

336

337

339

340

342

写真図版31

343

344

346

348

350

351

354

355

356

358

362

364

366

369

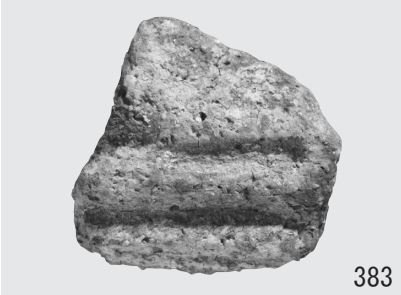
370

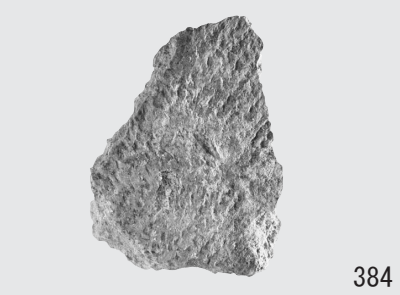
371

379

380

381


383


384

385

386

388

393

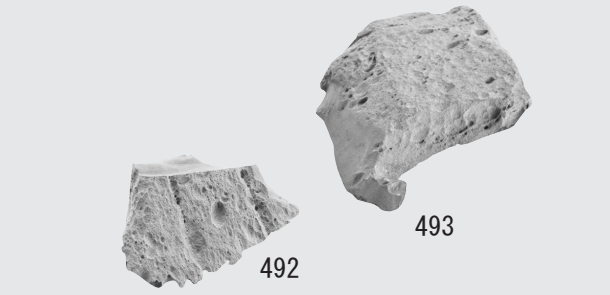
394

395

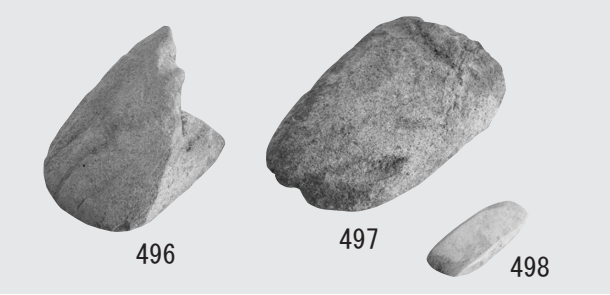
397

398

404


492 493

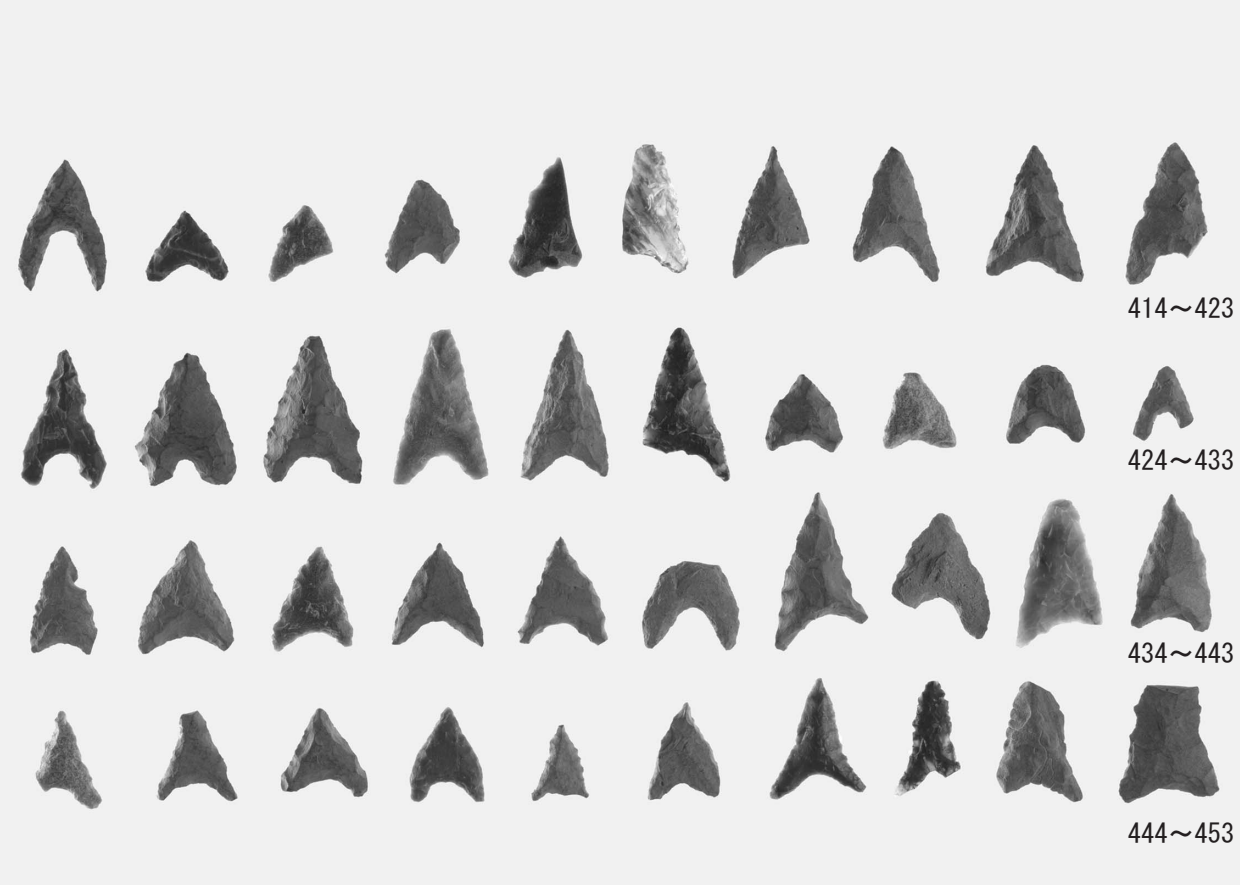
494 495

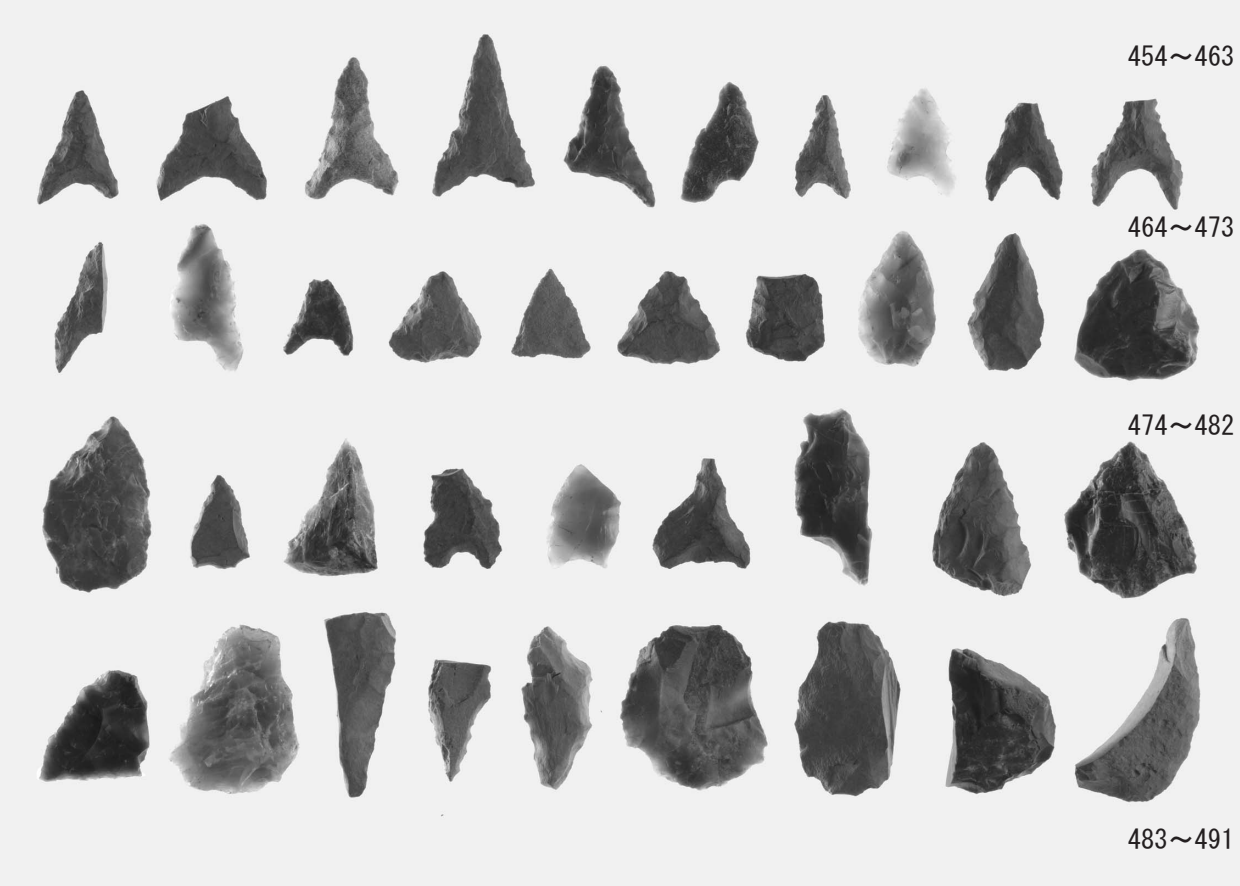

496 497 498

499～516

出土遺物（16）

写真図版33





出土遺物（17）

517

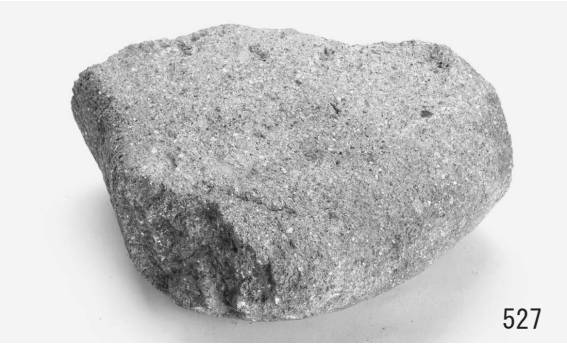
518

519

522

523

526


527

530

533

535

出土遺物（18）

写真図版35

出土遺物（19）

報告書抄録

ふりがな	すずやまいせき（だいに・さんじ）はっくつちょうさほうこく
書名	鈴山遺跡（第２・３次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３２３－１１
編著者名	泉賢治・中村法道・萩原義彦・服部芳人
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	西暦2018（平成30）年12月５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 調査原因	コード 市町村	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
すずやまいせき 鈴山遺跡	みえけん みえぐん 三重県 三重郡 こものちょうおおあざおとわ 菰野町大字音羽	24341	136	35° 01′ 29″	136° 29′ 51″	20150527～ 20151207 20160607～ 20160927	２次 6,256㎡ ３次 1,563㎡ 合計 7,819㎡	近畿自動車道 名古屋神戸線 （四日市JCT～ 亀山西JCT） 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鈴山遺跡	集落跡	縄文時代早期 及び中期	煙道付炉穴と集石土坑 竪穴住居と掘立柱建物	縄文中期後葉の 土器・石器	

要約	縄文時代早期の煙道付炉穴10基と集石炉２基、及び押型文土器片を確認した。また、中期の竪穴住居13棟と掘立柱建物６棟・大型土坑２基・陥穴９基などとともに、中期後葉を中心とした土器及び石器を確認した。中期の掘立柱建物は県内最古例であり、その出現期の様相を考える好例となった。掘立柱建物の他、石囲炉を有する竪穴住居や中期後葉の土器の様相は、美濃など北方からの影響を窺わせ、それらの伝播を考える手がかりとなった。また、石器の石材となる礫を東西の遠隔地から入手し、当地で石器の製作をしていたことがわかった。縄文時代早期及び中期の遺構や遺物の発見は、菰野町を始め北勢地域における縄文時代の様相を知るうえで貴重な成果である。

三重県埋蔵文化財調査報告３２３－１１

鈴山遺跡（第２・３次）発掘調査報告

発行年月日　2018（平成30）年12月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社